ひよりみ法師

六道慧（りくどうけい）

十手小町事件帳

文庫書下ろし◆新感覚時代小説



光文社

光文社文庫

文庫書下ろし／新感覚時代小説

ひよりみ法師

十手小町事件帳

六道慧（りくどうけい）



光文社

光文社文庫

文庫書下ろし／新感覚時代小説

ひよりみ法師

十手小町事件帳

六道慧（りくどうけい）



光文社

この作品は光文社文庫のために書下ろされました。

目次

序章 5

第一章 惚薬（ほれぐすり） 10

第二章 初音（はつね）ノ法 67

第三章 摩多羅神 127

第四章 幕府大学頭（だいがくのかみ） 185

第五章 陰陽封じ（いんようふう） 244

第六章 明星天子（みょうじょうてんし） 303

あとがき 368

序章

「あ……だ、め、やめ、て」

女はせつなげに声を洩らした。出会い茶屋の一室で、危険な秘め事に及んでいる。年は三十一歳、子供をひとり産んだことのある熟女なのだが、この娘に会って以来、彼女との逢瀬を心待ちにするようになっていた。小さくて、やわらかな舌が、首筋を嘗め、鎖骨のあたりを探る。チロチロと蛇のように動いて、乳首を刺激する。

「はぁ〜〜ぁ〜〜〜」

思わず長い吐息が洩れた。今まで一度も嗅いだことのない芳しい薫りが、部屋中に匂い満ちている。芳香の主は自分にのしかかっている娘、華奢な白い手を叢に伸ばしかけるが、まだ触れようとはしない。

「うふふ、あとで、たっぷり」

耳朶を嚙むようにして、囁いた。年は十六、七歳だろうか。ぬきんでた美女ではないが、

男好きするぽってりした唇や、濡れたように光る両眼が、好色者であることを示している。年には不似合いの技巧のせいだろうか。何度か逢瀬を重ねるうちに、忘れられなくなっていた。いや、彼女でなければ感じなくなっていたのである。

「は、早く」

尻を持ちあげて、嘗めてほしいとねだったが、

「あ」

かりっと乳首を嚙まれた。罰のような刺激を受けて、蜜壺がじゅんっと濡れる。乳房が張ってくる。

「まだよ、ふふ、まだまだ」

娘は嗤いながら乳首を口に含み、叢に右掌をあてた。秘密の時を持つようになって以来、手入れには充分、気をつけている。綺麗に整えられた叢付近を、掌で愛撫するように、ゆっくりとまわした。女陰にはまだ触れていない。それなのに、快感を覚えた。見えないなにかが女陰をふんわりと包みこみ、ゆらゆらと揺れているように思える。無数の舌でそっと嘗められているような悦楽に包まれる。

「あぁ〜〜ぁ〜〜〜〜」

再度、長い吐息を洩らしていた。紅梅を思わせる素晴らしい薫りが、部屋中に広がってい

る。芳香を吸いこむ度に、頭がぼんやりしてきた。全身が甘く痺れてくる。娘は身体をさげ、豊かな乳房で女の裸身を愛撫し始めた。双つのふくらみを密着させて、白い腹を撫でては、乳首で叢を探ったりする。開きかけた花弁を、くりくりと乳首で刺激する。細い指を蜜壺に少しだけ挿入させる。

「くっ、くぅっ」

その度に引き攣るような声があがり、尻が持ちあがった。焦らされているお陰で、蜜壺には泉のごとく蜜があふれている。女は自分の両手で太股を摑み、大きく脚を広げて、女陰を曝け出した。おねだりせずにいられない。

「は、や……」

嘆願の途中で、娘があむっと花芯を咥える。

「うふぅっ」

背中を反らせて尻を突きあげた。絹を思わせるなめらかな舌が、巧みに花芯を嘗める。舌先を小刻みに震わせる。小さな手がふたたび乳房に伸びて、揉みしだき始めた。乳首を指先でいじりながら、自在に舌を揺らめかせる。絶頂を促すように速くしたり、逆にゆっくり動かしたりして、翻弄した。絹舌の感覚に、女はただただ酔いしれる。

「あはぁ〜〜、ううぅ〜んぅ〜〜〜」

塾しきった裸身が、桜色に染まっていた。いつの間にか室内には、青い煙のようなものがたなびいていたが気づかない。紅梅に似た薫りも、徐々に濃密さを増してくる。噎せ返るような匂いだったが、吸えば吸うほどに欲望が高まる。蜜壺に豊潤な蜜があふれてくる。それを察知したのかもしれない。娘は右手を蜜壺の入口に移し、細い指をわずかに差し挿れた。

「あぅっ」

奥に挿れたわけではないのに感じてしまう。空中で突っ張った両脚が、だらしなく宙を泳いだ。何度も喉を鳴らしたあと、女はもう一度、自分で両太股を広げる。中途半端な恰好では嘗めにくい。同時に蜜壺も責めてほしくて、尻を持ちあげ気味にする。

「は、早く、はあはあ、お、お願、あひぃ！」

いきなり蜜壺に指が侵入した。花芯に触れる舌を蠕動させつつ、二本の指を操る。蜜壺の肉襞をこすりあげ、奥で息づく壺芯を指の腹で撫であげた。どっと蜜があふれ出し、淫らな音が響き渡る。その濡音が羞恥心を高め、羞恥が高まることによって、快感が高まった。

「うふうっ、ふうふうぅっ、いいっ、いいぃ〜〜〜っ」

もう達くことしか頭にない。愛撫が中断された乳房を、みずから握りしめ、揉みしだいた。呼応するように、娘の舌がいちだんと速くなる。指がしなやかに肉襞をこすりあげる。何度も壺芯を突いて、重い濡音を響かせる。

「あ、あ、あ」

虚ろな目を宙に向け、惚けたように声をあげた。青い煙がたなびき、徐々に顔の形をなしてくる。舌技の奉仕をしている娘に変化して、女の唇に唇を重ねた。素晴らしい薫りをとらえた刹那、唇から胸、そして、蜜壺へと雷光のような衝撃が走る。

「あ――――」

女は深い絶頂に包まれていた。四肢を突っ張り、娘の頭を引き寄せるようにして、ぐっと尻を突きあげる。視野を染める青い光、がくっ、がくがくっと尻を痙攣させ、せつなげに喘いだ。

「んふぅ～～、うううぅ～～～」

紅梅のような薫りが高まる、蜜壺に愛液があふれる。

終わりのない房事は始まったばかりだった。

第一章　惚薬

一

尾けられている。

加納蒼生は先刻から、背後に不穏な気配を感じていた。

享保十三年（一七二八）十一月上旬、霜月の名前どおりに、厳しい寒さを覚えるようになっていた。時刻は暮六つ近くだが、十一月ともなれば日の暮れるのがいちだんと早くなる。ある男のあとを尾けて、浅草橋の近くに来ていたのだが、尾行しているつもりだったのに、尾行されたのでは洒落にもならない。島田風に結いあげた髪と、地味な色合いの木綿の着物で、目立たないようにしていたものを、なぜ、こちらの動きに気づいたのだろう。それとも、まったく関係のない人物が尾行を命じたのか。

あとを尾けられていると感じたのは、今日が初めてじゃない。二、三日前から、だれかに

尾けられているような気配があったわ。いずれにしても、邪魔されると面倒ね。

「真琴」

少し後ろを歩いている相棒に、ちらっと目をくれた。似たような恰好をしている川村真琴は、頼もしい片腕であり、幕府の隠密御用を務める御庭番でもある。気配を察していたにちがいない。小さくうなずき返すと、さりげない足取りで蒼生から離れた。脇道に行くふりをして、尾行者をやり過ごし、尾行者の尾行を始めようとしているのだ。真琴にまかせておけば心配ない。蒼生は素知らぬ顔で、表の商売——仲人かか〈壽屋〉の仕事を続行する。

それにしても、驚いたわ。人は見かけによらないって言うけど本当ね。昔の悪いクセが出たってことなのかしら。

美貌が昏く翳った。信じられない思いをいだきつつも、足を止めた男に倣って、建物の陰に身をひそめる。立ち止まると川風の冷たさが、いっそう身に滲みた。凍えそうになりながら、息をひそめて様子を窺う。

浅草橋は神田川の下流に架かり、柳橋の西にあって、日本橋馬喰町四丁目の広小路から、浅草茅町一丁目に渡っている。神田川開鑿の翌年に架橋され、寛永十三年（一六三六）、南詰に浅草見附が設けられた。奥州街道の浅草への入口であり、千住への往還地でもある。男は船宿や出会い茶屋、料理屋などが軒を連ねる一角に佇んでいた。それにしても、と、何度

目かの吐息が出る。

平岡様に念友がいるとはねえ。ご縁を取り持ったのは、二年も前のこと。ご浪人だった平岡様に、同じくご浪人の娘でいらした花絵様をご紹介したのが始まりだったわ。二年前、念入りに身辺調査をしたけれど、衆道の話なんか、少しも聞かなかった。それが今になって、こんな話が出るなんて。

衆道は言うまでもなく、男同士の関係のことだ。江戸時代の初めには、ごく普通に行われていたことで、義兄弟の契りをかわして念友となり、兄役はときに教育的役割を担ったりする。父親が死の間際、後見役を頼んだりすることも多かった。それだけ社会的に認知されていたわけだが、喧嘩や殺傷事件が相次ぎ、死傷者が数多く出たことから、幕府や藩から危険視され、表向きは禁止されている。九州地方の藩などでは、なかば公然とそういう関係が続いているものの、平岡理兵衛がよもや衆道に関係しているとは……。

「蒼生様」

音もなく真琴が後ろに立った。

「勘づかれたのかもしれませぬ。気配が消えましてございまする」

「素早いわね。この二、三日、だれかに尾けられているような、いやな感じがあったのよ。今日こそは姿を確かめられるかと思ったけど」

今は自分のことよりも、この件に集中しなければならない。平岡理兵衛は料理屋の入口を見張っているようだが、緊張した背中には、人を寄せつけない厳しさが表れていた。三日ほどかけたあらたな身辺調査によって、不吉な推測が浮かんでいる。それだけに胸が痛んだ。

「本気なのかしら、なにもかも捨てちまうつもりなのかしら。お子にはまだ恵まれていないけれど、二年間というもの、花絵様と仲睦まじく暮らしてきたというのに」

言うつもりはなかったのに、つい口にしていた。

「蒼生様のおっしゃるとおり、平岡殿と奥方の花絵殿は、まさに鳳凰于飛、並んで飛ぶ鳳凰のごとく、仲のいいご夫婦でございました。ですが、人の心は移ろいやすいもの、幸せであればあるほど、かつての悪癖が思い出されたのかもしれませぬ。気の迷いや、魔がさして、ということもございまする。もしくは、惚薬でも服まされたか」

奇妙な返事を聞けば、怪訝な視線を返さずにいられない。その話をしたがっているのだとわかっていたが、仕方なく聞いた。

「惚薬？」

「は。御庭番の情報によりますと、ひと月ほど前より、惚薬なるものが流行っているとか。これを服めばたちどころに、嫌いな相手を好きになるという代物でございまする。眉唾ものの話ではございまするが、平岡殿の変貌ぶりを目の当たりにいたしまするると、あながち嘘で

はないのかと思われるふしもございまするな」

ふだんは凛々しい若侍といった姿なので、この口調もぴったりなのだが、今は髪を島田風に結いあげ、ごく普通の町娘を装っている。いささか違和感のある話し方だったが、蒼生は別の事柄が引っかかっていた。

「ずいぶん詳しいじゃない。まさかとは思うけど、おとっつぁんがあたしに服ませようなんてことを、企んでいるんじゃないでしょうね」

質問ではなく、断定の調子を含んでいる。蒼生の『おとっつぁん』は、いろいろと面倒なお人であるがゆえに、政敵から狙われたりもしていた。仲人かかを生業にする蒼生が、二十歳になってもなお縁遠いため、度々よけいなおせっかいをやいている。きつい視線から目を逸らしたのが、真琴の答えだった。

「い、いえ、そのようなことは決して」

あるわけである。

「まったく、おとっつぁんときたら……」

「それよりも、蒼生様。平岡殿のことでございまするが」

文句を言わせまいとして、早口で遮った。話を変えたことに気づいたが、今度も敢えて追及しない。蒼生はかなり鷹揚な女主といえる。

「衆道の他にもまだおかしなことがあるの？」

平岡理兵衛から目を離さないようにして、先を促した。

「薫りでございまする。ご妻女の花絵殿によりまするとと、衆道騒ぎが起きたころより、素晴らしい薫りを漂わせるようになった由。ご存じのように平岡殿は、会輔堂において、手習いの師匠を務める身でございます。生活ぶりには困りませぬが、だからといって、茶道や香道にまで手を伸ばす余裕があるかと申せば、これは少し無理があるのではないかと、まあ、花絵殿が申されまして」

会輔堂は深川の新大橋付近にある学問所だが、平岡理兵衛は師匠をしていた花絵の父の紹介で、この職にありついた。八代将軍吉宗公は積極的に民の教育を励行しているため、会輔堂の創立者、菅野兼山が私塾の設立を出願したとき、土地を貸与するなどして、幕府も援助している。仕官の口はもとより、職にありつくのがむずかしい侍にとっては、願ってもない仕事といえた。理兵衛は花絵との縁組みにより、妻と職を得たわけだが、今回の騒ぎは恩を仇で返すような所業、よりにもよって衆道がらみとは……げんなりしてくる。

「要するに妙な匂いをさせるようになったころに、おかしくなったわけでしょう。移り香じゃないのかしら。密通相手に香道のたしなみがあるのかもしれないわね。匂いで人柄が変わったわけじゃないと思うわ」

「これは手厳しい」
苦笑を滲ませた真琴を、またまたきつい目で睨みつける。
「他になにか理由があるとでも？　薫りを用いる妖術師に心あたりでもあるの？」
問題をかかえる『おとっつぁん』の敵が、あらたな刺客を差し向けたのだろうか。薫りを操る妖術師など、今まで耳にしたことがない。御庭番の意見を求めたが、真琴も首を傾げた。
「さあて、聞いたことはございませぬな。ですが、こうして鼻に意識を集中いたしまると」
目を閉じて、小鼻をひくつかせる。風向きが変わったのかもしれない。両足を広げて立つ理兵衛の方から、ほのかな薫りが流れてきた。
「あら、ほんとだわ。甘い蜜のような薫りね」
「さようでございますか。わたくしには梅のごとき薫りに思えまするが」
「蜜よ、甘い蜜に近い匂いだわ。真琴は鼻が悪いんじゃないの。男よりも女に似合いそうな薫りね。戦乱の世では戦場に赴く際、供香を行った風流な侍がいたらしいけど」
供香は神仏に高価な香を供えることだが、死地に赴く自分自身に供える場合もあった。理兵衛は覚悟を決めて、香を炷きしめてきたのかもしれない。
「……」

二人はどちらかともなく、顔を見合わせる。なにげに呟いた蒼生の言葉が、推測を確信に変えたのだ。

本気で死ぬつもりなのか？　衆道の相手と無理心中しようとしているのか!?

「来たわ」

さっと空気が張りつめた。料理屋の前に駕籠が到着し、中から客が出て来るのを待っている。理兵衛の全身がさらに緊張し、肩の筋肉がぐぐっと膨れあがった。きつく刀の柄を握りしめている。

「わたくしが」

真琴よりも先に、蒼生は走った。忍びやかに理兵衛の背後に近づき、刀の柄を握りしめた手に片手を重ねる。はっとしたように理兵衛が振り返った。

「……壽屋の」

思いつめた目が、不安げに揺らいだ。さては花絵の仕業か、邪魔が入るとは思わなんだわ。やめるべきか、決行するべきか。逡巡を読み取った蒼生は、ことさら静かな口調で話しかけた。

「花絵様がご案じになっておられます。しっかりなさってくださいまし、平岡様。馬鹿な真似をすれば、斬罪は免れませぬ。よくお考えになってくださいまし、花絵様のことを考えて

くださいまし。どこか落ち着いた場所で、ゆっくりお話をいたしましょう。そうすれば、心が鎮まりまする」

強い薫りに、眉をしかめた。離れていたときにはちょうどよかった匂いが、接近すると、噎せ返るほどの芳香に感じられる。良い薫りも度が過ぎると、鼻につくものだ。からみつくような甘い薫りは、衆道の房事を想起させる悩ましげな匂いに思えた。

「お帰りいただきたい」

理兵衛はきっぱりと言いきる。人目を憚る恋のお陰だろうか。中肉中背、年齢は二十七歳。やや優柔不断な感じのする普通の男だったはずなのに、両眼が爛々と輝いている。殺気まじりの瘴気を迸らせていた。

「いいえ、帰りませぬ。このような事態になった場合に、仲介役を務めるのもまた、仲人かかの務めでございまする。お願いでございます、平岡様。一度、家にお戻りくださいまし。花絵様をまじえて……」

「菊之助えっ」

突如、理兵衛は吼えた。蒼生と向き合って話をしていたのに、相手が料理屋から出て来たとたん、それを感知したのである。あっという間に刀を抜き放ち、たたたっと駕籠に走り寄った。暖簾を揺らして姿を見せた若者は、さもつまらなさげに一瞥する。

「理兵衛か」

あわてた風もなく、悠然と立っていた。駕籠を担ぐ人夫たちの方がうろたえて、顔色を変える。理兵衛が刀を振りあげると同時に、真琴の手から石礫（いしつぶて）が飛んだ。片足の膝の内側にあたった一撃で、いきおいよく転倒する。突撃の凄さがそのまま我が身に返り、地面を転がるような激しさになった。

「平岡様っ」

助けようとして駆け寄った蒼生に、鋭い一撃が突き出される。狂った理兵衛が相手も見ずに刃を向けたのだ。いち早く後ろにさがったが、おさまらないのは真琴、女主に鋭い刃を向けられて、かっと怒りが燃えあがる。

「許さぬ！」

簪（かんざし）を引き抜き、理兵衛の喉に向けて攻撃を仕掛けた。あきらかに急所を狙っている。負けじと理兵衛も打ち返して来た。ふうふうと肩で喘ぎながら、二度、三度と真琴の胸もとに刀を叩きつける。血走った異様な眼をしていた。

「やめなさいっ、真琴！　刀をおさめてくださいませっ、平岡様！」

蒼生は焦るが、二人は引こうとしない。見物人が集まって来てしまい、大騒ぎになりそうだった。役人が来たら面倒なことになる。

「真琴っ」

この薫り。

ふと別の匂いに気づいた。興奮する理兵衛の身体から発せられる薫りとは、異なる芳香だ。騒ぎの張本人である菊之助の方から漂っていたが、若衆は薄く笑い、さっさと駕籠に乗りこむ。色白の肌は透けるように美しく、整った顔立ちは魔物のように妖しかった。理兵衛が狂うのも無理はないと、妙に納得しそうになる。

「あっ、お待ちください」

駕籠に手を伸ばした刹那、空気を切り裂く異音が響いた。

二

「くっ」

間一髪、蒼生は横にすっとんで避ける。手裏剣らしき飛び道具が、今まで立っていた地面に突き立った。暗くて手裏剣かどうかまでは確認できない。

「蒼生様!?」

目のいい真琴は、すぐさま異変を感じ取る。が、イノシシのように突進して来る理兵衛の相手をするのがせいいっぱいだ。動くに動けず、声だけ必死にはりあげるが、その間も手裏

剣らしき飛び道具が正確に伸びて来る。蒼生は避けながら方角を読んだ。突き立った飛び道具を引き抜くと、持ち主に向かって投げつける。やられたことはしっかりお返しするのが、加納家の家訓。料理屋の向かいに建つ船宿の屋根から、黒い人影が離れて行った。

「お待ち！」

躊躇することなく、追いかけた。狙ったのは蒼生ひとり、真琴でもなければ、理兵衛でもない。

「深追いはなりませぬっ、蒼生様っ」

背後で響く叫び声を無視して、人影の気配を探った。並外れた感覚が、姿の見えない相手の行方を教えてくれる。あたりはすでに闇の世界、新月から二日目の二日月とあって、明かりがなければまともに歩けない暗さだったが、蒼生は転ぶことも迷うこともなく、まっすぐ相手を追走した。満月ならもっと鮮明に視えるのだが、それでも常人よりは夜目が利く。船に乗って逃げるつもりなのだろうか。強い思念波は、浅草橋の河岸をめざしていた。

匂いは……しないわ。薫りを操る妖術師なんて、考えすぎだったようね。きっと船で逃げるつもり……。

「蒼生様!?」

大声が響き渡った瞬間、再度、手裏剣の飛来音が起きた。避ける暇はない、隠れる場所も

ない。が、蒼生を守るように、いきなり足もとから木が生える。ある程度の厚みを持った板状の盾が出現した。頭上で湾曲して、すっぽりと蒼生を覆ってくれる。数本の手裏剣が、にわか造りの盾に突き立った。

「お怪我はございませぬか、蒼生様」

盾状の木の表面に、両目が浮かびあがる。蒼生に仕える三妖娘のひとり、乙葉だ。木の性を持つ花娘だが、動きは速いものの、喋るのは遅い。のんびり屋で、マイペースの妖怪だった。

「ありがとう、乙葉。危ないところだったわ」

慎重に周囲の様子を窺った。浅草橋の河岸がすぐそこなので、さっきの場所よりもよけいに寒さを感じる。冷たい川風をこらえて顔を覗かせると、突き刺さるような風が頬をなぶった。次の攻撃を仕掛けてくるのではないかと思い、挿していた簪を強張った手で握りしめる。

だれかいる。だれなの？

うずくまっている人影を発見し、さらに緊張が高まった。墨を流したような暗黒世界だったが、地面に丸くなるような形でだれかがいる。手裏剣を投じた相手だろうか。怪我でもして動けなくなっているのか。あるいは思わぬ方向に飛んだ手裏剣が、たまたま河岸にいた人間にあたったのか。

「どなたですか、お怪我をしたのですか」

巻きこまれたのであれば助ける義務がある。安全地帯から出ようとした蒼生の手を、乙葉が摑んだ。

「危のうございます。わたくしがお守りしながら移動いたします」

「大丈夫よ」

花娘の異常な姿を見たら怯えてしまう可能性もある。主の思いを読み取って、すぐさま少女の姿に変身した。まさに若木のごとく、しなやかで美しい裸体だったが、盾状の姿同様、驚かれるのは間違いない。後ろに退がっていろと手で示して、うずくまる人影にそろそろと近づいて行った。

「もし、具合でもお悪いのですか？」

罠かもしれない、怪我をしたふりをしているだけかもしれない。刺客に変貌する危険もある。簪を握りしめる蒼生の後ろで、裸体の乙葉は両手を鋭く尖らせた。身体は伸縮自在であるうえに、手足を鋭利な刃に変えることもできる。殺気はないが、油断はできない。背後に乙葉の守りを受けて、不審人物に忍び寄った。

「お初にお目もじいたしまする」

不意に丁重な挨拶が流れる。反射的に蒼生は後退したが、相変わらず邪気はとらえられな

い。押し隠しているのだとすれば、逆に相当な手練れということになる。罠を仕掛けているのかもしれないと思い、あたりに気を配った。

「だれ？」

かすれた声で問いかける。蒼生は冷や汗を滲ませているのに、相手は落ち着き払っていた。

「拙者は〈忍非人衆〉の忍者、〈日和見法師〉の異名を持つ月影と申しまする。この度、わけあって貴公と戦うことになり申したが、ご挨拶をと思いまして、参上つかまつりました次第。以後、お見知りおきいただきますよう、お願い申しあげまする」

「は？」

ふざけた言葉に、蒼生は当惑した。乙葉が袖を引っ張り、無言で首を振る。近づいてはなりませぬ、今のうちに逃げましょう、これはきっと罠でございまする。言いたいことはわかっていたが、奇妙な男に好奇心をいだいていた。

「わたしに挨拶をするために、わざわざ姿を見せたと？」

「さよう」

月影と名乗った男は、堂々と顔をあげる。忍び装束を着ているようだが、さすがに暗すぎて顔立ちまではよくわからない。それを感知したように、人魂を思わせる妖火が、顔の左右にひとつずつ灯った。ゆらゆらと揺れる火が、鋭い眼光を持つ初老の男の顔を照らし出して

いる。美男子ではないが、長い年月を刻みつけた味わいのある顔立ちだった。

「申しあげましたように、ゆえあって貴公と戦わねばならぬ身。戦場において侍が戦う場合、互いに名乗りをあげるのが常でございまする。古式に則って、姿を現した次第、たとえ命を落とすことになりましょうとも、後悔はございませぬ。十手小町に正々堂々と戦いをいどむ所存、貴公もお覚悟めされよ」

「はぁ」

蒼生は気の抜けた返事をする。〈忍非人衆〉は『おとっつぁん』に敵対する大名家が、金主（スポンサー）になっていると思われる一味だ。狙いは八代将軍吉宗公の命であり、今までにも二人、刺客が放れたが、素顔を曝して戦いをいどむ相手などいなかった。いや、おそらくこれからもいないだろう。忍びは秘術を知られるのと同じぐらいに、素顔を知られるのを嫌うからだ。

「ご丁寧なご挨拶、いたみいります。こちらも覚悟を決め、きゃあっ」

ずぼっと両足が地面に沈む。小石が転がる河岸に立っていたはずなのに、地面が泥土と化していた。乙葉も腰のあたりまで一気に引きずりこまれる。

「あ、蒼生様っ」

「乙葉!?」

手を伸ばしたが届かない。泥が生き物のように動き、肌の上を這いまわっていた。着物の

裾を割って、白い両脚の上をゆるゆると滑っている。肌を這う感覚はゆるやかだが、地中に引きずりこむ力は凄かった。二人は早くも胸まで沈みこんでいる。

「ご油断あそばしましたな、蒼生殿。拙者は忠告いたしたはず、すでに戦いは始まっているのでござるよ」

冷ややかな眼で、月影が見おろしていた。妖火が愚かさを嗤うように揺れている。礼を重んじるような挨拶は、すべて罠。固く凍てついた忍びの表情を、妖火が克明に浮かびあがらせていた。

「くっ、あ、くぅっ」

蒼生はけんめいにもがいたが、動けば動くほど沈んでしまう。喉までどっぷり泥に浸かりながらも、両手で固い地面を探した。しかし、虚しく泥を摑むばかり、まったく手応えがない。

「うぶっ」

と、口までもぐった。顎をあげて、鼻だけでも泥の上に突き出そうとする。同じような状態の乙葉は花娘の本領発揮、すみやかに両腕を長く伸ばして、近くにある木を摑みかけた。

「む」

そうはさせじと、月影が忍び刀で切り捨てる。乙葉はすぐさま思いきった反撃に出た。立

っている月影の身体を両手で摑んだのである。まさか自分の肉体を犠牲にするわけがない、沈むまいとして足を踏んばるだろう。とっさにそう判断したのだろうが、あにはからんや、初老の忍びは不気味に嗤っている。

「くく、くくくく、よかろう。共にまいろうぞ」

なんと、みずから地面に沈み始めた。ずずずず、と、痩せた身体が泥に埋もれていく。蒼生はもう鼻を突き出していることもできない。

「ぐぅ」

ひと声、発したあと、地中に沈みこんだ。やわらかな泥が鼻や口に流れこむ。真っ暗でなにも見えない。息が苦しくなる、呼吸ができない。

これは眩惑（めくらまし）、騙されてはだめ、あたしがいるのは浅草橋近くの河岸、妖術を打ち破るのよ！

頭ではわかっているのに、集中できなかった。おそらく妖火を見た時点で、月影の術に陥ちていたのだろう。眩惑は強力な催眠術のようなもの、精神が死ねば、肉体も死ぬ。もがいて手を伸ばすが、相変わらず泥土の感触しか伝わってこない。苦痛が頂点に達したときである。

——月を。

蒼生の裡にひそむ存在が目覚めた。

——思い浮かべるのだ、満月を。我が身の化身、不滅の象徴。満月を頭に広げよ！

二度目の〈声〉で、円い月が脳裏に浮かんだ。青白い輝きが苦しみをやわらげ、呼吸が楽になる。そのまま鮮明な姿を意識に広げようとしたが……。

え？

一瞬、満月が消えた。蒼生はあわてて、その幻像を引き寄せる。ふたたび円い月と美しい光輝が、脳裏いっぱいに広がった。あたたかな光を感じて、強張った手足がゆるんでくる。すみやかに泥土が消え失せる。

「蒼生様っ」

乙葉の手が、蒼生の手を握りしめた。二人の身体は当然のことながら濡れていない。かろうじて泥地獄から生還したのだった。

「だ、大丈夫、よ」

ゆっくり深呼吸を繰り返して、周囲を見た。月影も妖火も、とうの昔に消え失せている。凍りつくような川風が、このときばかりは嬉しかった。生きている証のように思えたからである。

日和見法師。

怖ろしい刺客の宣戦布告であった。

三

「だから深追いはならぬと申しあげたのです」

船宿の廊下で、真琴の文句が噴出する。

「乙葉も乙葉でございますな。あれは花娘、木とくれば土、泥土の類を扱うのは得意であるはずなのに、なぜ、すぐさまお救いできなかったのか。まったく頼りになりませぬ。なんのための護衛なのでありましょうや」

「その話はあとにしましょう」

蒼生は早口で遮った。平岡理兵衛ともども、先刻の若者が出て来た料理屋に腰を落ち着けている。真琴が理兵衛に当て身をくらわせて、とりあえず、おとなしくさせたのだ。話を聞くためと情報収集をするために、この料理屋に席を設けたのだが、思うような結果が出るかどうか。

「とにかく、花絵様がおいでになる前に、平岡様のお気持ちを、確かめておかなくちゃならないわ。あんたは衆道の相手について、この見世の主から話を聞いておいてちょうだい。あの若衆がどこのだれだったのか、だれと会っていたのか、いちおう調べておいた方がいいと

思うのよ」

乙葉は妻女を迎えに行っているのでいない。平岡の妻は典型的な江戸女、悪い人間ではないのだが、相当にきつい性格の持ち主だ。仲人かかとしては、大騒ぎが起こる前に、必要な事柄を聞いておきたい。が、真琴は不満げだった。

「別に相手のことなど、どうでもいいのではございませぬか。あの様子では、さほど入れこんでいないように見えました。のぼせているのは平岡殿の方でございましょう。おそらくは今日の騒ぎで、きれいさっぱりと切れるのではございませぬか」

「しっ」

部屋の中から呻き声が聞こえた。噂の主が目覚めたのかもしれない。

「平岡様、お気づきになられましたか」

少しだけ開けておいた障子戸から、蒼生は中を覗きこむ。理兵衛が上半身を起こして、虚ろな目を彷徨(さまよ)わせていた。

「ここ、は？」

ぼんやりとした表情は、悪夢から醒めたばかりという感じがする。本当に醒めていてくれることを祈るしかない。

「浅草橋近くの料理屋でございます。お加減はいかがでございますか。騒ぎを大きくしない

ためとはいえ、わたくしの手の者が失礼な真似をいたしました。申しわけありませぬ。どこか痛みますか」

入って来ようとした真琴に、再度、情報収集をするように小声で命じた。

「あの若者について、頼んだわよ」

「は、い」

なんとなく物足りない様子だった。腕も立つし、そつなく役目をこなす片腕ではあるが、たったひとつ、無類の酒好きという欠点がある。話を聞くついでに酒を注文するつもりだったのはあきらかだ。それを諫めるように、後ろ手にぴしゃりと障子戸を閉めてから、蒼生は理兵衛の前に座る。

「どうでございますか。お腹など痛みませぬか」

なにも答えないので、再度、尋ねた。

「いや、別に」

もごもごと口ごもり、目を合わせまいとしている。謹厳実直で朴訥(ぼくとつ)、口下手で冴えない風貌という、いつもの理兵衛になっていた。先刻まで立ちのぼっていた甘く濃厚な薫りが、かなり弱まっている。

まさか、ね。

惚薬のことが頭をよぎったが、頭の隅に追いやった。

「率直にお尋ねいたします。お相手の若衆とは、平岡様が手習いを教えていらっしゃる会輔堂の向かい側にある蕎麦屋で、知り合われたとか。ふた月ほど前からのお付き合いだそうでございますね。いったい、どこのどなた様なのでございましょう。お小姓のような雰囲気の方でございましたが」

「ははぁ、なるほど。拙者は蕎麦屋で知り合ったのでござるか」

理兵衛は他人事のようにつぶやいた。とぼけた返事を聞いて、いささか腹が立ってくる。真琴であれば、すぐさま怒鳴りつけて、一撃を叩きつけていたかもしれない。蒼生も大嫌いな衆道騒ぎで、導火線に火が点きかねない状態だ。必死に心を抑えて、問いかける。

「覚えておいでにならないのでございますか」

「はあ。かすかに覚えているような、いないような……壽屋さん。信じていただけぬかもしれませぬが、拙者は男に興味はござらぬ。生まれてこのかた衆道を経験したことはござらぬ。考えるだけでもおぞましい事柄、我が身がそのような浅ましい真似をしたとは、拙者自身、信じられぬのでござるよ」

真顔で告げられてしまい、当惑する。簡単に嘘と片づけられない雰囲気だった。では、なんのための密会だったのか。

「ですが、平岡様。様子がおかしいと感じた花絵様が、あとを尾けられまして、芳町の出会い茶屋に入る貴方様の姿を確認しているのです。ご存じのように芳町は、衆道専門の船宿や出会い茶屋が立ち並ぶ町、衆道をさす言葉にもなっている町です。そこにある出会い茶屋に入り、出て来たときには美貌の若衆と一緒だったとなれば……」

「壽屋さん、仏壇の観音扉が閉じるのでござるよ」

「は？」

二度目の言葉は、さらに意表を衝くものだった。大丈夫かしら、この人。若衆の毒気にあてられて、頭がおかしくなっているんじゃないかしら。なにか言おうとするのだが、うまい言葉が見つからない。

「仏壇だけではござらぬ。神棚もよく落ちているのでござるよ。わけがわからぬ」

理兵衛は腕を組み、うーんと唸った。蒼生は呆れて、返す言葉がない。

「……」

あたしの方こそ、わけがわからないわよ。馬鹿にしてるんじゃないの。適当なことを言って、ごまかすつもりじゃないでしょうね。その手はくわないわ。

「では、仏壇や神棚に起きた異変を見て、衆道に走ったとおっしゃるのですか」

ことさら衆道の部分に力を入れた。

「うぅーむ、さきほども言うたように、衆道というのは信じられぬ話よ。花絵に責められたときも、なんのことやら、ようわからなんだ。女子とは多少、付き合うたことがあるものの、男衆と乳繰り合うたことはござらぬ。信じていただけぬか。そういった趣味はないのでござるよ。仏壇や神棚の変事は、ご先祖様が拙者に対して、なんらかの警告を発したのではないかと、まあ、このように考えているわけでして」

どこまで真面目なのか、すべてが偽りなのか。話しているうちに、この理兵衛は、狐なのではないかと思えてきた。

「平岡様、わたくしは真剣でございます。貴方様は先刻の若衆と、道ならぬ恋に落ちました。花絵様がその事実を確認したからこそ、わたくしどもに調査の依頼が来たのです。正直におっしゃってくださいませ。さっきは心中せんばかりのご様子だったではありませんか。刀を抜いて襲いかかるつもりだったのでございましょう？　わたくしたちが止めなければ、いったい、どうなっていたことか」

「まさに然り、危ないところでござった。礼を申す」

深々と頭をさげられてしまい、またしても困惑と当惑に包まれる。半信半疑だったが、念のためと思い確認した。

「まさか、惚薬などという代物を服んだりしてはいませんよね？」

「ほう、惚薬」

顔をあげた理兵衛の目が、愉しげに笑う。

「そのような薬があるのなら、吉原の花魁を陥とすのも楽でござるな。通う手間が省けて助かる。しかし、拙者は聞いた覚えがござらぬ。服んだ覚えもござらぬ」

きっぱりと答える顔を、ついしみじみ眺めていた。さっきのあれはなんだったのだろう。妙な雑霊でも憑いているのではなかろうか。殺気立ち、目を血走らせていた男と、本当に同一人物なのか。甘やかに匂い立っていた薫りは、ほとんど感知できなくなっていた。蒼生は聞かずにいられない。

「では、平岡様。茶道、あるいは香道などの会に出席されたことは……」

「理兵衛殿っ」

荒々しく障子戸が開いた。平岡花絵が先刻の理兵衛同様、血相を変えている。年は二十二歳、なかなかの美人だけに、怒ると迫力があった。理兵衛は目をみひらいて、膝でずるようにさがって行く。

「は、花絵、待て、お、落ち着け、話せばわかるっ、は、話せばわか、うわっ」

座布団を投げつけたのを横目で見ながら、蒼生は廊下に出た。乙葉が心配そうな目を、障子戸に向ける。閉められた戸の向こうで、激しい言い合いが始まった。

「落ち着け、花絵。何度も言うたようにだな、わたしは覚えておらぬのだ。衆道など知らぬ。密通などしておらぬ」

「ええいっ、知らぬ存ぜぬと往生際の悪いお方でございますな。事ここに至っては、言い訳できますまい。壽屋さんも目撃者、乙葉さんのお話によれば、間違いなく若衆を見たとのことでした。動かぬ証拠でございます！」

「だから、知らぬのだ。わからぬのよ。狐に化かされたとしか言えぬわ」

「まだそのようなことを！」

蹴りとばしたのかもしれない。くぐもった理兵衛の声を耳にして、乙葉は遠慮がちな意見を述べた。

「あの、お止めしなくても宜しいのでございますか」

「少しの間、花絵様の好きにさせてあげましょう。今までも我慢していたはず、たまには派手な夫婦喧嘩も必要なのよ」

「蒼生様」

情報収集役の真琴が戻って来た。騒ぎが続いている部屋に、ちらっと目を走らせたが、蒼生と同意見だったのだろう。よけいなことは言わなかった。

「どうだった？」

「だめでございますな。侍と思われる二人の男と会っていたようでございますが、浪人なのか、藩士なのか、わかりかねると申しておりました。男たちも若衆も、初めての客だそうにございます。このあたりでは、見かけない顔だとも言っておりました」

「そう」

あの若者が引っかかる。いや、あの薫りがというべきかもしれない。理兵衛が放っていた甘い芳香とは異なる匂い、二人とも強い薫りを漂わせていたのが気になっていた。

「乙葉、あんたは駕籠屋を調べてちょうだい。侍らしき二人連れは、歩いて帰ったのかもしれないけど、あの若衆は駕籠を使っている。行方がわかるかもしれないわ」

「畏(かしこ)まりました」

すぐさま動こうとした乙葉を、真琴がしばし止める。

「なぜ、そこまであの若衆を気になさるのでございますか。理兵衛殿の密通相手に、なにかご不審でもございましたか」

「薫りよ」

蒼生は自分の鼻を指で軽く弾いた。

「若衆も独特の薫りを漂わせていたわ。これはあたしの想像だけど、理兵衛様はその匂いを即座に察知したんだと思うの。若衆が出て来る直前まで、あたしと向かい合って話をしてい

たのに、いきなり『菊之助ぇっ』と叫んで襲いかかったでしょ。もしかしたら、薫りをとらえたんじゃないかってね。思ったのよ。たいしたことじゃないかもしれないけど……ああ、そうだわ。裏の臨時職を頼んでいる二人にも、知らせておかなきゃいけなかったわね」

乙葉に向けて、もうひとつの命令を発した。

「駕籠屋をあたる前に、お銀と美弥に繋ぎをつけてちょうだい。妖術師が挨拶に行くかもしれない、とね。二人がいる場所にやつが現れたら、大変な事態になるわ。くれぐれも用心するようにと伝えて」

「わかりました」

軽やかな足どりで、乙葉は料理屋の庭に降りる。手入れの行き届いた庭を見まわしたあと、一本の立派な松を選んだ。木の幹に片手をあてて、離れた場所にいる妖娘たちに話しかける。

「お銀、美弥、わたくしよ、乙葉よ。聴こえまして？」

四

（乙葉よ、お銀。〈声〉が聴こえるかしら、美弥）

どこからともなく、乙葉の声が流れてくる。お銀は耳をすまして、〈声〉の出所を探ったが、どこかで土でも掘り返したのだろうか。土臭さが漂っている。

なんだろう。雨が降ったあとでもないのに、どうして、こんなに土の臭いがするのかな。近くに田圃はないはずだけど。

不可解な臭いを吸いこんだとたん、融けるように消え失せていた。鼻をひくつかせたが、妙な土の臭いはとらえられない。

（お銀、美弥？）

自分たちを呼ぶ声に、ふたたび集中した。お銀は三妖娘の中では頭格、すらりとした肢体を持つ中性的な美貌の持ち主で、ふだんは着流し姿が多いのだが、今夜は黒っぽい忍び装束に身を包んでいる。尖った耳がひくついて、乙葉の〈声〉を感知した。江戸城の厩舎近くに生えている松の木に耳を付ける。

「聴こえるよ。なんだい？」

男っぽい態度や言葉づかいが、よけい性をわかりにくくさせていた。歌舞伎役者に負けないほど、妖艶な美を放っている。

（蒼生様からのご伝言を伝えます。月影と名乗る妖術師が現れましたの。〈日和見法師〉の異名を持っている由。充分に気をつけるようにという、ありがたいお言葉を蒼生様より賜りました。そちらの様子はいかがですの。手がかりはありまして？）

木の幹に目鼻が浮かびあがり、くりくりと眸を輝かせている。乙葉は生えている花木を用

いて、心話を伝えることができた。飛脚しかない時代においては、非常に便利な通信法といえる。

「だめだね。美弥に探らせているけどさ。今のところ、これといった手がかりは得られていないよ。なんとか、がんばってみるけどね」

油断なく周囲に目を向けていた。両の眸が闇の中で、銀色に光っている。お銀は水の性を持つ竜娘、澄みきった水を用いれば、乙葉と同じように心話を使えたが、今は相手の方法に合わせている。

（適当なところで切りあげていいと、蒼生様はおっしゃっております。言うなれば今回の依頼は、裏の裏とも言うべき臨時職、本当に内密のお役目ですからね。無理をしてはならぬとの仰せ、わたくしたちの身を案じてくださっているのです。ありがたいことですわ）

とにかく喋るのが遅いので、お銀は厩舎を軽く五周ほどできた。いい運動にはなるが、短気な江戸っ子気質の竜娘にとっては、精神的に辛いものがある。

「わかった。蒼生様のご命令どおりに動くよ。それじゃ、またあとで」

足踏みしながら手短に切りあげて、厩舎の方に戻って行った。蒼生は表稼業の他に、〈妖堂〉なる屋号を用いて、捜屋を営んでいる。要するに裏稼業なのだが、今回の依頼はその中でも極秘中の極秘、ごくごく身近なところから発せられたものであるだけに、蒼生はあま

り気乗りしないのだろう。適当なところという部分に、正直な気持ちが表れていた。

「蒼生様のお気持ちはありがたいけどさ。いいかげんな仕事はしないのが、あたしの信条なんだよね」

首をすくめて、静まり返っている厩舎に入った。上様やご嫡男用の馬が、柵の向こうで休んでいる。胴長短足の実用的な馬体ではあるものの、国の中でも指おりの名馬が揃っていた。

「美弥」

馬を驚かせないように、小声で仲間を呼んだが返事はない。ははーん、と、すぐに理由を知った。人間にはとらえられないような音まで、お銀は聴くことができる。そろそろと足音を忍ばせて、一頭の馬が休んでいる柵をくぐり抜けた。乾いた藁が敷きつめられた厩舎は、寒風が吹きすさぶ外に比べれば、実に居心地のいい場所である。

まったく、もう、ちょっと目を離すとこれだよ。

腹立たしげに腕組みして、見おろした。猫のように丸まって、美弥が気持ちよさげに眠っている。お銀は鋭い聴覚を使い、仲間のかすかな寝息を聞いたのだ。

「おい、美弥」

耳を引っ張ってみたが、

「うにゃぁ〜〜」

うるさげに手で振り払う。

「この！」

お銀は乱暴に耳と腕をひっつかみ、柵の外に引っ張り出した。外ほどではないが、通路はかなり寒い。美弥はもっと身体を丸めて、眠りを貪ろうとする。水でもぶっかけてやろうかと思ったが、さすがに思い留まった。

「美弥っ、起きろっ」

耳もとで絶叫する。

「にゃ？」

ようやく半分ぐらい目を開けたが、睨みつけるお銀に気づき、不意に毛づくろいの仕草を始めた。名前と動きでわかるように、美弥は猫娘、切れ長の目を持つ蠱惑的な美少女だ。お銀や乙葉に比べると、かなりふっくらした体型だが、男衆の気をそそるらしく、ひそかに恋文なども届いたりする。なんといっても化け猫なのだから、眠るのが好きなのも無理はない。半眼のまま、とろとろと、また眠りに落ちかける。

「こいつ」

そうはさせじとお銀は、猫を持ちあげるように、首の後ろを摑みあげた。

「ふ、ふにゃ、ふにゃにゃぁ〜〜」

「ほら、起きるんだよっ、早く行方不明になった上様の愛馬を探すんだ！　見つけるまで戻って来るなと、蒼生様はおっしゃっている。おまえのこの鼻に」

可愛らしい鼻を指先でつまむ。

「すべてはかかっているんだからね。しっかりしてもらわないと困るんだよ！」

「ふぎ、ふがが、い、だだだだ、いだい、ば、ばな、ば、ばなしてよぉ～～」

つまみあげられているせいで、濁音まじりの訴えとなった。鼻をつまむのはやめたが、首根っ子を持ったまま、一ヵ所だけ空いている柵の中に入る。ここは吉宗公の愛馬、亘（わたる）がいた場所。藁（わら）や厩舎の隅に、美弥の鼻をぐいぐいと押しつけた。

「おまえは猫娘、あたしや乙葉よりも鼻がずっと利く。だからこそ、蒼生様はおまえをここに来させたんだ。馬がどこに消えたのか、道筋を探るぐらいできるだろ。臭いを辿れば、馬泥棒の居所がわかるはずだ。さっさとお役目を……」

「ファ、ファ、ファックショーンッ」

藁を飛び散らせて、派手なくしゃみをする。鼻水のくっついた藁が顔に飛び散り、お銀は黙りこんだ。

「……」

「ごめんね。藁が鼻に入っちゃったの」

鼻水をすすりあげ、また毛づくろいを始めかけたが、怠け者の猫娘に主導権を取らせてはならない。

「ふん、おまえは怪力と嗅覚ぐらいしか取り柄がないってのにさ。嗅ぎあてるのも駄目となりゃ、本当に役立たずってことになる。できないならできないと、正直にお言いよ。蒼生様に報告するからさ」

わざと挑発してやった。横目で様子を見ると、湯気をあげんばかりに怒っている。髪の毛が逆立つので、すぐにそれとわかるのだ。

「できないなんて言ってないでしょ！」

両の眸が緑色に煌めいた。やっと目覚めたらしく、大きく伸びをしてから、気合いを入れて、厩舎を探り始める。ふう、やれやれ、気まぐれな美弥を使うのは大変だよ。頭格のお銀は気の休まる暇がない。また居眠りをしないように、見張りがてら、一緒に探った。

「どうでもいいけどさ。なんで、大きな馬が音もなく消えちまったんだろ。見張り役の男は、おまえと同じように居眠りをしていたのかもしれないね。足音ぐらい聞いただろうに、いったい、どこに行っちまったんだか」

「あっ」

美弥の小さな声で、気持ちが高ぶる。

「見つかったかい、馬の臭いがしたかい？」
期待をこめて問いかけたのに、返ってきたのはまたもや落胆の言葉。
「うふふ、ネズミの穴」
厩舎の片隅に開いた穴を見て、美弥の両眼が細くすぼまっている。お銀とは別の意味で期待がふくらみ、尻を振り立てていた。ネズミが飛び出して来たら即、喰らうつもりなのだろう。
「……」
お銀はまたまた黙りこむしかない。こいつときたら、またこの穴に鼻面を突っこんでるよ。寝てるか、食べてるか、ネズミの穴にひっついてるかのどれかじゃないか。しょせんは猫娘、期待する方が馬鹿なのかもしれないけど。
「それで、馬の臭いはどうしたのさ」
気を取り直して質問する。
「馬？」
言われてみて、お役目を思い出したようだ。一瞬、綺麗に忘れ去っていたことが、表情にちゃんと浮かびあがっている。
「あ、そっか、そうだよね。ネズミを捕まえるんじゃなかったっけ。上様の愛馬を探してい

たんだよね。はいはい、わかりましたよ。言われたとおりにいたします」

と答えたくせに、性懲りもなくネズミの穴にへばりついている。今まで何度これを繰り返したことか。決して忍耐強くないお銀は、とうとう堪忍袋の緒が切れた。

「美弥ぁ〜〜〜〜っ」

尻を蹴飛ばそうとしたとき、

「待てまて、その大声はお銀じゃな」

厩舎の入口から声が響いた。提灯が二個、揺れている。夜目の利くお銀は、その明かりだけで充分、訪問者を識別できた。

「これは加納様」

素早く駆け寄り、入口に跪く。敢えて呼びかけはしなかったが、やや遅れて美弥も隣に来た。ネズミの穴が気になるのか、そわそわして、どうも落ち着かない。座っているように手で示し、丁重に言上した。

「このような夜更けに、わざわざお越しいただきまして、申しわけございませぬ。ですが、いまだに行方がつかめませぬ。臭いを辿ろうとしているのですが、なんと申しますか、その、美弥の調子が今ひとつでございまして」

「ふむ、そうか」

加納久通、通称、覚兵衛はお供の者から提灯を受け取って、厩舎の中に足を踏み入れる。名字でわかるように、彼は蒼生の養父であり、公儀御庭番の頭役でもあった。年齢は五十代後半で、表向きの役職は御側御取次役だが、裏では諸役人の風聞や、世間の雑説などを調べる内密御用も務めている。調査地域によって、「遠国（他所）御用」と「地廻り御用」の区別があり、蒼生の裏稼業とも密接な繋がりを持っていた。

また吉宗は将軍職を継ぐにあたって、二百名あまりの紀州藩士を幕臣団に編入、側近役の大半と、御庭番の全員を、旧紀州藩士で固めたうえ、「御庭番家筋」については、全員、旧紀州藩士の世襲とさだめている。他の忍びを排斥するこのやり方が、〈忍非人衆〉の怒りを買い、水面下の戦いが始まったのだった。

「加納様、足もとにお気をつけくださいませ。暗くて、危のうございます」

乙葉から伝えられた蒼生の警告が、お銀の頭にちらついていた。〈忍非人衆〉の妖術師が動き出したとなれば、このような場所に長居するべきではない。内心、気が気ではなかったが、覚兵衛はおっとりかまえている。

「美弥の鼻でも、亘の居所はわからぬか。はてさて、困ったことよのう。近々流鏑馬が行われるというに、愛馬が戻らぬとなれば、上様はさぞかし落胆なさるであろう。どうしたものか」

不自然に空いた一頭分の空間に、提灯をかざして、覗きこむ。あらためて、お銀は尋ねた。

「上様の愛馬は本当に突然、消えてしまったのでございますか。賊が忍びこんだ気配などはなかったのでございますか」

三日前の朝、忽然と姿を消した愛馬の亘。泊まり番の者がいただろうに、気づかなかったのが信じられない。巨体の馬が厩舎を出て行けば、大きな足音が響いたはず、それなのに、どうして、わからなかったのか。

「わしも信じられぬのじゃが、気づいたときにはもうおらなんだと、まあ、このように言うての。居眠りでもしておったのかもしれぬ。厩舎は静かであるゆえ、寝るには良い場所であろうよ」

お銀と同意見の覚兵衛は、ちらっと美弥を見やる。性懲りもなく船を漕ぎ始めていた。思いきり蹴飛ばしてやりたかったが、肘で突つき、優しく目覚めさせる。

「にゃ、にゃに？」

と寝ぼけ眼をあげた瞬間、

「あぎゃぁっ」

いきなり美弥が地面に吸いこまれた。

五

「美弥っ」

あわてて手を伸ばしたが、足もとが急にやわらかな泥土に変化する。美弥は早くも腰までもぐり、猫娘に変わりかけていた。危険や強い邪気を察知すると、妖娘たちは本性があらわになる。尖った耳や髭が生えて、三色の毛が手や顔にうっすら浮かびあがった。

「な、なんじゃ!?」

体勢をくずした覚兵衛を、お銀は軽々と抱きあげて走った。安全地帯に避難させたあとでなければ、仲間を助けることはできない。が、逃げる二人を追いかけるようにして、通路の地面がやわらかくなっていく。立ち止まったら即、美弥と同じ運命だ。

「加納様っ」

「何事でございまするか!?」

厩舎の外で待っていたお供の御庭番たちは、すぐには状況が呑みこめない。提灯を掲げて突っ立っている。月のない闇夜ゆえ、人間には生き物のように変化する地面の様子が視えないのだ。

「逃げろっ、走るんだよっ」

ふだんは敬語を使うのだが、もはや、そんな余裕はなかった。お銀は覚兵衛を抱きかかえたまま、全速力で突っ走る。二人の御庭番も、とりあえずは従った。特異な能力で迫りくる危険を感じ取ったのかもしれない。三人は御城の広大な庭を、風のように疾駆する。

「お、お銀、み、美弥は、どう、どうした？」

舌を噛みそうになりながらも、覚兵衛がどうにか声を発した。さすがは蒼生の養父、こんなときでも下僕の身を案じている。

「わかりませぬ。今は覚兵衛様のお身体が第一、なにかありましたら、蒼生様が哀しまれますゆえ」

答えつつ、お銀は生えている木に目を向けていた。厩舎の周囲には巨木が生い茂り、鬱蒼とした森林地帯のような区域になっている。この巨木群がまったく揺れていないことに、お銀は気づいていた。本物の地震や土砂崩れであれば、生えている木も傾いだり、震動していなければならない。それなのに微動もしていなかった。両手を広げた巨人のような姿で、不動の姿勢を保っている。

これは眩惑（めくらまし）だ。いつの間にかけられたのか。

覚兵衛たちも真っ青になって、同じ恐怖を味わっている。つまり、かれらも眩惑に陥ちているわけだ。術を打ち破らなければ、命を失うのは間違いない。

「覚兵衛様。少しの間、我慢してくださいませ」

お銀は竜体になるや、一本の巨木にするするとのぼった。銀色の鱗が身体中に浮かびあがり、額には二本の触角が現れている。覚兵衛を高い場所に避難させ、地面の様子を見た。御庭番たちも右に倣えとばかりに、近くの木にのぼっている。三妖娘の正体を知っている男たちであるため、無意味に騒いだりはしない。竜体に変化したお陰で、さらに夜目が利くようになっていた。

「美弥はおらぬか。視えぬか、お銀」

声も身体も震わせて、覚兵衛は必死にしがみついている。地面は波のようにうねっているが、あくまでもそう視えるだけのこと、落ちたら固い地面に激突するのは間違いない。お銀は竜体を覚兵衛に絡めるようにして、落下しないように支えていた。むろん、美弥を探すのも忘れていない。

「どこにいるのかわかりませぬ。視えるのは流れる泥だけで……」

濁流のように流れる泥土の上に、ほんの一瞬、小さな猫手が浮かびあがる。

「美弥っ、美弥ぁっ」

お銀の叫びは届かない。

猫手は助けを求めるように揺らめいて、沈んだ。

樹上から見た様子は、いかにも苦しげだったが――。

「うにゃにゃぁ～～ン、気持ちいぃ～～、あったかぁ～～ぃ」

当の本猫はゴロゴロと喉を鳴らしかねない状態で、右に左に転がっている。ゆるやかに流れる泥は、ちょうど体温ぐらいの心地良さ、泥風呂に浸かっているような感じだった。邪魔な着物はとうの昔に脱ぎ捨て、みずから裸身を曝している。しかし、流れているように思える泥土はすべて眩惑、地面の上を転がっているだけなのだが、そんなことは知る由もない。

「うふぅ～～、いいぃ～～～」

切れ長の目を、うっとり細めた。あたたかくて、やわらかい泥は、裸身を撫でさするように動き、刺激する。尖った耳が後ろに倒れ、身体には三色の毛が生えていた。完全な猫体ではないが、長い尻尾も悩ましげにうねっている。半人半獣であるだけに、よけい淫靡かもしれない。張りつめた乳房には白い毛が現れて、肉色の乳首が尖っている。腹や恥骨も白と茶色の毛で覆われていたが、女陰だけは存在を示すように、薄桃色の蕾を剝き出していた。蠢く泥は首筋や腕、脇腹などは刺激するが、肝心の部分にはふれようとしない。

「ふぅぅぅ～～ン、ね、ねえ、は、早くぅ～～」

焦れて両脚を広げたが、返ってきたのは愛撫ではなかった。

「美弥よ」
泥の一部が男の顔になって喋る。
「あーい」
反射的に答えたそれが、下僕への第一歩、素直に応じてはいけないのだが、よく言えばおおらか、悪く言えばおおざっぱな性格であるゆえに、細かいことは考えない。呼ばれたから応じただけのこと、続けて男は聞いた。
「答えよ、加納蒼生は何者なのか。死者を甦らせると聞いたが真実か。満月の日には不死身の妖魅になるというのは本当のことなのか。変化した場合は、どのような霊力を発揮するのか」
「そ……」
つい答えそうになってしまい、猫手で口を押さえる。蒼生の秘密に関しては、殺されても教えられない。口が軽そうな印象を受けるが、この事柄だけは強い制止がかかるのだ。苛立ちを覚えたのか、泥の温度が急に高くなる。男の顔が威嚇するように、ぐぐっと美弥の眼前に迫った。
「う」
「目が蒼くなるゆえに、蒼生の名前を持つとも聞いた。とうてい信じられぬことだが、髪に

いたっては金色になる由。その姿になったとき、妖魅じみた霊力を使うとか。また八代将軍吉宗公の落とし胤という噂の真偽やいかに！」

空間から両手が出現し、美弥の首を軽く絞めた。

「くっ、くうぅ」

背中や尻を這いまわる泥も、ぎゅっと締めつけるような動きを見せる。全身が窮屈になって、息苦しさを覚えた。狭い泥の棺桶に閉じこめられたような圧迫感がある。

「し、知らないっ、あ、あたしはなにも知らないんだってば、ほんとよ、本当に知らないんだって、あにゃぁっ」

裸身をきつく呪縛された。圧迫感が増して、さらに呼吸が苦しくなる。これといった取り柄のない猫娘だが、怪力だけは他の二人に負けない。ふんっと気合いをこめて、泥の呪縛をはねのけた。

「む!?」

一瞬、怯んだように思えたが、なんといっても相手は変幻自在の泥。再度、美弥の裸身にからみつき、皮膚の上をゆるやかに這いまわる。今度は締めあげたりせずに、優しく撫でさするような動きをみせた。思ったよりも口が堅いと知り、甘い責めに切り替えたのであろう。しかつめらしい男の顔が消え失せ、代わりに十五、六歳の美少女が現れる。

「美弥」

泥ではなく、生身の娘そのものだった。輝くような白い裸身を曝して宙に浮かび、美弥を見おろしている。不思議なことに二人の間には泥土がない。背中や尻には相変わらず泥の感触があるのに、裸身の前面には泥がないのだ。

「あんたは……だれ？」

覚えのある薫りが、鼻腔をくすぐる。そう、昼間、厩舎を探っていたときに感じた匂いだ。爽やかな蓮の花を思わせる素晴らしい芳香を、無意識のうちに吸いこんでしまう。泥の湯をたゆたっているような状態で、美弥は少女に抱きしめられた。仰向けに横たわったまま、動こうにも動けない。覆い被さってきた娘の唇を、いやおうなく受け止める形になった。

「むぐぅ～、んぐぐぅ、むぐむぐぅ～～」

それでも唇を嚙みしめて、舌を入れさせまいとする。これは蒼生の秘密を知るための罠、快楽の虜にして、話を引き出すつもりにちがいない。愛撫しようとする手を握りしめ、必死に押しのける。

「あたしは『初音』のお夏」

少女は唇を離して、囁いた。

「あんたが好きなんだよ、美弥。いい思いをさせたげるからさ。素直に心を開いておくれよ、

ね？」

花のような唇から、いちだんと強い薫りが流れる。吸うまいとしても、とうてい無理だった。どんどん薫りが満ちてくる、頭がぼんやりしてくる。

「……す、き？」

虚ろな問いかけに、返ってきたのは熱い接吻。美弥はみずから唇を開き、差し入れられた舌に舌をからめていた。娘の手が乳房に伸びて、やわやわと揉みしだき始める。尖った乳首をいじりながら、濃厚な接吻を続けた。

「んむむぅ～、むふうふうぅ～～」

荒い呼吸をする度に、蓮花の薫りが高まってくる。背中や尻を流れる泥が、生き物のように動いた。美弥は尻尾をぴんとあげて、後ろの菊花をあらわにする。要望を察知して、泥が濃(こま)やかに蠕動した。ふるふると菊花を刺激し、蜜壺の入口にもそれが広がる。快感を示すように尻尾がくねくねとうねった。

「はあぁ～～～ぁ～～～」

唇を離して、美弥は喘いだ。なぜか脳裏に赤い炎の幻影(ヴィジョン)が浮かんでいる。泥があたたかいせいだろうか。薫りとともに鮮明になる炎の幻が、完全に抵抗力を失わせた。娘はにやりと薄く嗤い、両の乳房を愛撫する。片方の乳首を唇に含み、舌を揺らめかせた。美弥は両脚

を大きく広げておねだりする。

「は、早くぅ、はあはあ、な、嘗め、てぇ〜〜」

猫手で両太股を抱えたが、娘は身体をさげようとしない。両の乳首を交互に含み、乳房を揉みあげる。焦れったげに美弥は耳をひくつかせ、尻尾で娘の尻を叩く真似をする。蓮花の豊潤な薫りに包まれて、なにも考えられなくなっていた。

六

「あぅ〜〜ぅ〜ン」

仰向けに横たわった姿勢で、美弥は奉仕されるときを待っている。首筋や背中、腰から尻にかけて、ゆるゆると泥が這いまわった。女陰と菊花にふれるか、ふれないかの動きで、舌状になった泥が伸びる。

「むぅっ」

と、呻いた。わずかな刺激にも敏感に反応してしまう。少女は固く尖った乳首に両手を残して、とうとう身体をさげた。毛が生えている腹を嘗め、女陰に顔を近づける。焦らされたせいで花弁が開き、薄桃色の花芯があらわになっていた。花弁ぎりぎりまで白い毛が生えているため、震える花芯がことさら鮮明に見える。

「はぁ、はあはあ、は、早くぅ」

尻と尻尾をくねらせて、二度目のおねだりを口にした。背中を這いまわる泥のあちこちに、疑似唇が出現し、脇の下や尻の割れ目、脇腹といった微妙な快感部位を責めている。いまや花芯は痛いほど勃ち、ぴくぴくと揺れていた。美弥はもう我慢できない。

「は、は、早、くぅ！」

くぅの部分で娘の頭を抱えこむや、花芯を押しあてた。泥の呪縛を怪力によって打ち破り、上半身を起こしたのである。が、それは禁じられた行動、すぐさま泥が手の形となって伸び、後ろから乳房を鷲摑みにした。びしゃっと重い音をたてて、美弥はもとの姿勢に戻される。けんめいに両脚で挟み、娘の顔が動かないように押さえつけた。努力の甲斐あって、舌がなめらかに揺らめき始める。いきりたつ花芯をなだめるように、小刻みに蠕動し、嘗めあげた。

「んふぅ〜〜ン、あにゃにゃぁ〜〜〜ン」

待ち望んだ至福の時、美弥はこれ以上、開かないほど両脚を広げる。後ろの菊花にも疑似唇が貼りつき、舌先でやわやわと刺激し始めた。乳房も後ろから伸びた泥手によって、揉みしだかれている。尖って迫り出した乳首を、くりくりといじった。蜜壺が潤み、愛液があふれてくる。

「ふふ、ふふふ、もうこんなに」

娘は喘いながら、蜜壺の入口を開き、ほんの少しだけ指を差し挿れる。まだ深く挿れたりはしない。花芯への刺激だけで達かせようとしていた。蜜壺がくちゅぴちゅと淫靡な音を奏でる度に、ぐぅーっと快感が高まる。

「んふうっ、ふうふうっ」

鼻息も荒く、美弥は身悶えた。乳房を愛撫する泥手に自分の手を重ねて、しきりに尻尾をくねらせる。本当は尻を動かしたいのだが、そうすると舌が離れてしまうと思い、美弥なりにこらえていた。背中が反り返り、乳房がひとまわり大きくなる。乳首をいじる指の動きが速くなった。花芯の舌も連動して揺れる。蜜壺の濡音が次第に激しくなる。両耳がぴんと尖った刹那、

「くぅ――――」

だめ、達っちゃうぅ！

「うにゃうっ、にゃふうぅ～～っ、にゃにゃうぅぅ～～～～っ」

美弥は絶頂を迎えていた。四肢が突っ張り、尻尾がまっすぐに硬直する。やがて、尻が痙攣し、その震えが全身に広がっていった。余韻に浸って思わず力をぬいたとき、娘の指がじゅぶっと蜜壺に挿入された。

「にゃひっ」

ふたたび手脚を引き攣らせる。だが、力を入れていると、奥深くまで指が入らない。即座にだらりと弛緩させ、娘の舌と指の動きにゆだねた。じゅぶっ、ぢゅぶじゅぶっと、濡音がさらに大きくなる。蜜壺の奥では壺芯がふくらんだり、縮んだりしていた。指で突かれると膨張し、指を引くと縮んで、肉襞が指を締めあげる。蓮花を思わせる薫りも、いちだんと強くなって、裸身を染めあげるような感じだった。背中や尻を這いまわる泥からも同じ芳香が立ちのぼっている。

「んんんぅ〜〜、あ、にゃ、にゃうぅ〜〜〜〜」

もはや抵抗できない。全神経を下半身に集めて、次の絶頂を引き寄せようとする。娘は期待を裏切らない。花芯を嘗めながら、指で蜜壺を責める。肉襞をこすりあげて、奥の壺芯を突く。

「ぁはあっ」

思わず、のけぞった。もっと突いて、速く嘗めて、奥を指でこすって、ちょっとだけ強く嘗めて。娘は願いをかなえるべく、舌と指の動きを速めたが、

「あ」

突然、愛撫を中断させた。

「加納蒼生について答えるがよい。さすれば、何度でも極楽を味わわせてやろうぞ。やつの

正体は？　不死身なのか？　本当に死人を生き返らせるのか？　蒼い目と金色の髪なのか？　吉宗公の落とし胤なのか？」

矢継ぎ早の質問は、背中の泥全体から響いていた。喋る度に熱い刺激が走る。全身が甘い痺れに包まれる。

「し、知らないよぉ～～、あはあぁ～～～、あた、しは、なにも、んふうんぅ～～～」

泥は揺動（ヴァイブ）し続けていた。娘も舌技と指技を再開して、美弥の花芯と蜜壺を責める。後ろの菊花にも疑似舌がにゅるりと侵入した。菊穴が埋まったため、蜜壺の中が狭くなる。肉襞や壺芯に対する指のあたりが、よけい強くなった。きゅっと尖った花芯に舌をそよがせる。舌先を妖しくゆらめかせる。

「んぅっ、んんんんん！」

あ、もう。

快感の波に呑みこまれかけたのに、

「あ……」

無情にも途中で愛撫が止まる。二度目となれば、美弥も怒る。ふんむっと前以上のいきおいで起きあがり、娘の顔に跨（またが）ろうとした。が、敵もさるもの、いち早く泥にもぐって逃げる。手を摑もうとしたが間に合わない。美弥も重い音をあげて、泥の中に沈みこんだ。

「にゃぅっ」

乳房のあたりまで、なまあたたかい泥に浸かる。女陰に素早く疑似舌が貼りつき、蜜壺の入口や菊花にも舌が伸びた。泥全体も揺れ動いて、乳房や他の性感帯をくすぐっている。何度目かの陶酔状態となり、目を細めた。

「ぅにゃぁ〜〜ン、いいぃ〜〜、にゃふぅ、や、やめないでぇ〜〜」

かすれた声でお願いしたが、達きそうになると愛撫が止まる。絶頂に包まれかけると、疑似舌や泥の揺れがぴたりと制止してしまう。一度、達っているだけに辛くてならない。もっと深い快感を味わいたい。

「んんぅ、は、早くっ、早くぅっ」

少しでも感じようとして尻を振るが、泥は微動もしなかった。快感が醒めかけると、それを読んで前戯が再開される。焦らされて、狂いそうだ。あの娘、今度現れたら引っ掻いてやる！

「うふふ、そんなに怒らないで」

まさに心を読んで、娘が泥から浮かびあがってきた。雪白の裸身が泥で汚れていないのを、普通であれば不思議に思うが、美弥の心を占めているのはたったひとつの欲望だけ、まったく気にしていない。それよりも娘が持っている秘具に目を吸い寄せられていた。二つの張り

形を根元でくっつけた両首と呼ばれる大人の玩具だ。向かい合わせの座位や、正常位といった体位で、二人同時に楽しめる代物である。

「……」

あれ、ほしい。

美弥はごくりと唾を呑む。娘は宙に浮かびあがって、座る姿勢を取り、両脚を大きく広げた。ほとんど無毛の女陰は、花弁がわずかに開いている。さほど経験が多いとは思えない蜜壺の入口に、両首の片方をあてがった。くちゅくちゅと張り形の尖端部で入口を広げ、あふれ出た蜜で濡らし始める。

「あぁ〜〜、早くぅ〜、挿れてぇ〜〜」

娘はわざとらしく声をあげて、美弥の欲望を刺激した。空いている方の張り形が、頼りなく揺らめき、誘うように動いている。根元だけはくっついているが、色々な体位に対応できるよう、仕掛けが施されているのだろう。二度、三度と、美弥の喉が鳴った。欲望を察知して、泥が活発化する。乳首を唇で挟みあげ、指でいじり、花芯を舌で濃やかに嘗めあげる。菊花や蜜壺の入口にも、やわらかな舌がふれた。むろん、これらの舌や指は本物ではない。泥が変形してそれらの形をとり、艶めかしい愛撫を与えているのだった。

「い、いや、はあぁ〜〜、ああぁ〜〜んぅ〜〜〜〜」

感じたいのだが、達きそうになると、愛撫を止められる。では感じないふりをすればいいと、考えたりもするのだが、良くも悪くも正直者の美弥にそのような芸当ができるはずもない。泥の中でせつなげに悶えるばかり、蜜壺が熱く火照ってくる。代わりにということなのか。

「ああっ」

と、娘は自分の蜜壺に張り形を挿入させる。思っていたよりずっと濡れていたのかもしれない。意外なほど大きな濡音とともに、白い尻がはねあがった。その動きにつれて、使われていない張り形もはねあがる。ぶらぶらと揺れるそれは、まさに猫に鰹節。ふうふうと息を荒げて、美弥は手を伸ばした。

「ほ、しいぃ〜〜、うふうふぅ、ちょうだいぃ〜〜〜〜」

泥の責めは続いている。花芯がふくらみ、達きかけたが、望みをかなえてくれるはずもない。苛立ち、焦れて、美弥は尻尾を振りたてた。娘は右手の細い指で花芯をいじりながら、左手で両首の片方を操っている。狭そうな蜜壺であるのに、大きな張り形が根元まで、すっぽり吸いこまれていた。じゅぼっ、ちゅぼじゅぼっと濡音を響かせて、思う存分、張り形を味わっている。

「ううっ、いいぃっ」

短い言葉しか発せられないのは、それだけ深い快感を覚えているからだろう。

「あ、あたしもっ、はあはあ、あたしもぉ〜〜っ」

美弥が悲痛な叫びをあげたとたん、泥から裸身が飛び出していた。猫まっしぐら、他のものは目に入らない。宙に浮かんでいる娘に跨るような恰好で、張り形の片方を蜜壺の入口にあてがう。ずんっと思いきり挿れた。

「はうっ」

あまりの気持ちよさに失神しかける。ほしくてほしくてたまらなかったものを、やっと手に入れて、いや、蜜壺に入れてだろうか。夢中で腰を動かした。上下に、あるいは前後に、豊かな尻を揺さぶる。花芯をこすりつけるようにして快感を貪る。長い尻尾は硬直したまま、垂れさがらない。三色の体毛も逆立って、激しい興奮状態を示している。

「んむぅっ、うふむぅ〜〜っ、むむむぅ〜〜〜〜〜っ」

目を剝きかねない有様で、ひたすら尻を動かした。張り形が肉襞をこすりあげる、奥の壺芯に激突する。

「ふぅ――――」

猫が威嚇するときのような声をあげ、美弥は失神しそうになった。またしても炎の幻像が脳裏に浮かぶ。身体が燃えそうに熱くなる。硬直した裸身を、娘が抱きしめて、囁きかけた。

「加納蒼生の正体は？」
「そ……」
「美弥っ、しっかりするんだよ！」
間一髪、お銀が泥の呪縛を打ち破った。どこからともなく伸びて来た長い木の枝を、娘は舌打ちして、避ける。次の瞬間、美弥は地面の上に座りこんでいた。
「ほ、のお、が」
身体を焼きつくさんばかりの炎を視ていたはずなのに……。
「フェッ、フェックショーンッ」
寒風に曝されて、くしゃみを連発する。お銀が呆れ顔で、見おろしていた。

第二章　初音ノ法

一

「猫娘が風邪をひくとはねえ」

二日後、蒼生は深川の家で、風邪薬を煎じていた。通りに面した窓には、洒落た黒格子があしらわれており、深川近辺ではかなり目を引く平屋の建物である。ここは〈壽屋〉の相談所を兼ねた住まいで、玄関先には万年青や橘などの鉢植えが飾られている。冷えこんだ昨日までとは違い、やわらかな陽ざしが射す小春日和なのに、家の中には薬の臭いが立ちこめ、美弥の苦しげな咳が響き渡っていた。

「さあ、できた。妖怪にも効けばいいんだけどね」

土瓶を持って台所を出、廊下にあがる。

「蒼生様はだめでございます」

待ちかまえていた乙葉が、土瓶を奪うようにして取った。
「風邪が伝染りでもいたしましたら大変でございます。美弥の世話はわたくしとお銀がいたしますゆえ、どうぞ部屋には入らないでくださいまし。こうして、お薬を煎じていただけるだけでも、ありがたいこと。妖怪にとりましては、身に余る光栄でございまする」
「たかが煎じ薬じゃないの。大袈裟なことを言わないでちょうだい。それよりも、美弥の調子はどうなの。お医師を呼ばなくても大丈夫かしら」
「お医師など、とんでもございませぬ」
眉をしかめて、大きく頭を振った。
「妖怪のくせに風邪をひくなど言語道断、ありえないことが起きてしまい、わたくしどもも困っております。人間の世界に長くいるためでしょうか。猫は風邪をひくかもしれませんが、わたくしどもは絶対に病気にはなりませんものを」
咳のする部屋を振り返り、不安げな顔になる。お銀は平岡理兵衛の密通相手――浅草橋の料理屋の前で出くわした若衆のことで、駕籠屋を調査しているのでいない。乙葉もあの夜、明け方まで調べたのだが、結局、若衆が利用した駕籠屋を突き止めることができなかったのだ。
「きっと厩舎が寒かったんだわ。猫は寒さに弱いもの。たまには風邪ぐらいひくでしょう

よ」

「いいえ」

乙葉はきっぱり否定する。

「繰り返しになりますが、わたくしたちは病気になりませぬ。呪いでもかけられれば別ですが、寒さぐらいで風邪をひくなど、あってはならぬことなのです。それが少し気になりまして」

「つまり、妖術師になにかされたと思っているわけね」

「ええ、熱もひどく高いのです。赤い炎がどうのこうのと、わけのわからないうわごとを呟いておりますが、炎の幻像を視ているのでしょうか。それで熱が出ているのでしょうか」

「あたしに聞かれてもわからないわよ。だからお医師を呼んだ方がいいんじゃないかって、あ、真琴」

付き添っていた真琴が、美弥のいる部屋から出て来た。いつものように着物と袴姿だが、浮かない顔をしている。入れ替わりに乙葉が、煎じ薬を持ち、部屋に入って行った。

「具合はどう？　熱はさがった？」

部屋に近づこうとした蒼生を、真琴は身体で遮る。乙葉同様、伝染りでもしたらいけないと考えているのだろう。

「熱はさがっておりませぬ。赤い顔でふうふう喘いでおりまするが……蒼生様。決して、よろしいですか、決して近づいてはなりませぬぞ。質の悪い流行風邪かもしれませぬからな。それにしても、妖怪が病に罹るとは前代未聞のことでありましょう。美弥は仲間うちで有名になるかもしれませぬ」

「そんなことで有名になっても、美弥は嬉しくないでしょうよ。それよりも、なにか言っていなかったの。やはり、妖術師に呪いをかけられたのかしら。相手の姿を見たのかしらね」

「はい。かなり悩ましい技を仕掛けられましたようで、『初音』のお夏と名乗っていたとか。十五、六歳の少女だったそうにございます」

「初音のお夏」

どこかで聞いたことのある名前のように思えた。どこ、だったろう。だれかの名前だったろうか。初音もお夏も、女名のようだが、初音の方が引っかかる。

「初音」

真琴も同じことを感じたらしく、首をひねっていた。互いの眸を探り合うようにして、答えを得ようとするが、どうしても思い出せない。

「その少女は妖術師の傀儡なんでしょうね。もしくは幻なのか。あるいは木偶人形でも操っているのか」

物言いたげな視線を感じて、蒼生は目をあげた。
「他にもなにか言っていたの？」
「は。薫りのことを申しておりました。厩舎を探っていたときも、術にかけられたときも、蓮の花を思わせる爽やかな薫りが漂っていた由。少女の身体全体からも、立ちのぼっていたそうにございます」
薫りと聞けば、一昨日の騒ぎを思い浮かべずにいられない。あわやの刃傷（にんじょう）沙汰を止めたときのことが甦った。
「そういえば、平岡様の身体からも、蜜のような甘い薫りが流れていたわね」
ひとりごとのような呟きに、すぐさま反論があがる。
「蒼生様は蜜のようなとおっしゃいましたが、わたくしは梅花の薫りに近かったように思いまする。それも紅梅に似た実に良い薫りでございました。今時、梅などがどこかに咲いているのだろうかと、あのあたりを探したほどでございます」
「あんたも頑固ね。あたしは蜜の匂いだと思ったのよ」
「いえ、わたくしは紅梅の薫りだと思いました。間違いございませぬ」
「だから、ああ、もう、やめましょうよ。つまらないことで言い争うのはいやだわ。で、肝心のことについてはわからなかったわけね」

足音どころか、足跡さえも残さずに消え去った吉宗公の愛馬。不可解な出来事は〈妖堂〉に探らせるのが一番と、極秘裏に依頼されたのだが、美弥の具合が悪くなってしまい、蒼生は後悔している。引き受けなければよかった、そうすれば美弥はこんな目に遭わなかっただろうに。蒼生の心を知ってか知らずか、真琴は推論をまじえて述べた。

「そのようでございます。お銀から簡単に話を聞いただけですので、細かいことはわかりませぬが、加納様も危なかったようでございました。もしかすると、愛馬がいなくなったのも、妖術師の仕業かもしれませぬ。〈妖堂〉が動くように仕向けて、罠を張っていた可能性もありまするな」

悪くない推理だ。酒さえ入らなければ、実に有能な片腕といえる。

「あんたの言うとおりかもしれないわ。あたしを仕留めることはできなくても、妖娘たちのひとりでも倒せればと考えたのかもしれない。うまうまと敵の罠にはまっちまって」

悔しくてならないが、終わったことでいつまでも悩んでいられない。引っかかっている疑問点を提示した。

「いくつか気になっていることがあるのよ。ひとつはお銀がどうやって妖術師の呪縛を解いたのか。竜体に変化していたからだとは思うんだけど、詳しい話を知りたいのよ。お銀から話を聞いている？」

「まだでございます。駕籠屋の件で出かける直前でございましたからな。急いでおりましたので、確認しておりません。その他の気になっている事柄とは、なんでございますか」

「馬泥棒のことよ。何度、考えてもわからないのよね。どうやって運んだのかしら。馬を一頭、連れ去るのは大変よ。それに〈日和見法師〉の仕業だとしたら、なにが目的なのかしらね。上様の愛馬を盗んで、いったい、なにをしようとしているのかしら」

「さあて、目的はわかりかねますが、加納様に伺いましたところ、上様は近々、盛大に流鏑馬を執り行うご予定とか。そのあたりのことに関係があるのかもしれませぬが、わけのわからぬ事件であるのは確かでございますな」

流鏑馬は、平安時代から行われていた武術で、馬に乗り直線の馬場を馳せながら、鏑矢（かぶらや）で的を射る弓技のことだ。鷹狩りを復活させたのも吉宗だが、古式ゆかしい流鏑馬にも、相当、肩入れしている。愛馬がいないとなれば、毎日、大騒ぎしているにちがいない。覚兵衛たちの心痛を慮（おもんぱか）って、つい文句が出る。

「着物や食べ物のことには無頓着なくせに、武術となると目の色が変わるんだもの。いやになっちまうわ。迷惑するのは家臣たちよ。流鏑馬なんか行えば、刺客に狙われやすくなるってことがわからないのかしら」

率直な言葉に、真琴は苦笑いする。

「しかし、武術を励行するのは悪いことではありますまい。腑抜けの家臣が多くなっておりますゆえ、上様は歯がゆくてならないのでございましょう。少しでも士気を高めるべく、鷹狩りや武術大会などを催しておられるのです。狙われやすいと申されますが、どこにいてもさほど変わりはございませぬ。たとえ御城の中といえども、万全とは言えませぬからな」

「それはそうだけど……いずれにしても、馬泥棒について、〈妖堂〉は手を引くわよ。正式な依頼ではないし、お銀や乙葉まで病に罹るのは困りますからね。その旨、上様にしっかりお伝えくださいな」

上様の部分で、きっと睨みつける。真琴は急に真面目な顔になり、深々と頭をさげた。

「畏まりましてございまする」

「〈日和見法師〉の異名を持つ月影についてはどうかしら。御庭番の方から情報を得られるかしらね」

なにげない口調で聞いたが、もっとも知りたいことのひとつだった。挨拶と宣戦布告をするために現れた男、蒼生はとらえどころのない不気味さを覚えている。真琴の眸もくもった。

「さっそく加納様に連絡をいたしまして、調べていただいているところでございます。急ぎの事柄と申し伝えましたので、二、三日中には返事がまいりますでしょう。今しばらくお待

ちくださいませ」

日和見というのは暦と天気を知る能力のことであり、武士や上農はこの力を身につけておく必要があった。戦時の際にも、作物の出来にも、暦と天気は大きな影響を与えるからだ。それを正確に読める者ほど、生き残る確率が高まるわけだが、〈日和見法師〉の異名を持つ男の能力については、よくわからない。まさか、暦や天気を操るわけではないと思うのだが……。

「あたしのあとを尾けていたのも、あのふざけた老忍者だったんでしょうね。ご挨拶の機会を窺っていたんだわ。まったく馬鹿にしてるったら」

きつく唇を噛みしめる。無意識のうちに老忍者と言っていた。相手は年寄り、負けるわけがないと、自分を納得させたかったのかもしれない。弱気になっているのには理由があった。

あのとき。

蒼生の胸には黒い不安がざわめいている。

月影の術に陥ちかけたとき、裡にひそむ存在が発した警告によって、無事に生還できた。脳裏に満月の幻影を広げると、簡単な術ぐらいは破ることができる。眩惑などには優れた効果を発揮するのだが、ほんの一瞬ではあるものの、煌々と輝く満月が消え失せてしまった。

はっきりとヴィジョンを広げたはずなのに、ふっと途切れたあれが、どうにも気になってならない。

予知ではないのか。もしかしたら、月影に破れてしまうのではないか。不吉な胸騒ぎはいっかな鎮まらず、強くなるばかりだった。

「どうかなさいましたか」

黙りこんだ蒼生の顔を、真琴が覗きこむ。

「あ、い、いえ、別になんでもないわ。馬泥棒の件はもうお終い、今夜は〈妖堂〉の方で動かないとね」

わざと明るい声で告げる。

「いつもの料理屋には連絡してあるわね」

「はい、お銀に命じておきました。駕籠屋を探すついでに寄ってくれと、言っておきましたので心配ありませぬ」

「それじゃ、あたしは美弥の様子を見て……」

「ごめんくださいませ」

覚えのある女の声が、玄関先で響いた。一昨日の夜の続きであろうか。二人は一瞬ためらったが、居留守を使うわけにはいかない。仕方なく玄関に行った。

二

「先日は本当に申しわけございませんでした」

平岡花絵がはにかんだような笑みを浮かべている。一緒にいる夫の理兵衛は、妙にすっきりした顔をしていた。一昨日とはうってかわった様子に、ほっとする。

どうやら夫婦喧嘩の続きをしに来たわけではなさそうね。

「こんなところではなんですから、どうぞ、おあがりくださいまし。ささ、お二人とも奥にどうぞ。真琴、お茶をお願いね」

「ははっ」

仲直りしたのであれば、言うことなしだ。苦労した甲斐があるというもの、蒼生は客間にかれらを案内する。簡単に挨拶をかわしたあと、差し出された手土産の和菓子を受け取った。

「このようなお気遣いをいただかなくても」

「いえいえ、壽屋さんにはご迷惑をおかけいたしまして、合わせる顔もございませぬ。こうやって恥を曝しにまいりましたのは」

と、花絵は隣に座っている理兵衛を見やった。お前様から言ってくださいましな、わたくしの口からは申せませぬ。そんな視線を受けて、今度は理兵衛が口を開いた。

「実は……惚薬でございましてな」
「は？」
蒼生は話の展開についていけない。このあいだの夜も、仏壇がどうの、神棚が落ちたのと、意味不明の話を唐突に始めたが、これもその類なのだろうか。どうにも理解できない。当惑を見て取ったのだろう。理兵衛が言葉を継いだ。
「このあいだ、壽屋さんが拙者に申されたではありませんか。まさか惚薬でも服んだのではないでしょうねと」
「ああ、そう、でしたね。確かにそう申しました。ですが、平岡様。あれはほんの冗談でございます。巷で惚薬なるものが流行っているという話を、たまたま聞いたものですから」
惚薬の部分が耳に入ったらしく、茶を運んで来た真琴が、好奇心に目を光らせる。口を挟みたそうだったが、黙っていろと目で示した。噂話ばかりされると、肝心の話ができなくなる。
「惚薬がどうかしたのでございますか」
穏やかに先を促した。
「はあ、それが」
理兵衛はちらっと花絵に視線を向け、言っていいものやらという顔をしたが、妻がうなず

いたのを見て、ようやく意を決したようである。
「実はその、花絵がそれを買い求めたらしいのです。そして、拙者に服ませたと、まあ、こう申しておるわけでして」
「あの、それというのは、もしや、惚薬のことですか？」
答えはわかっていたが確認せずにいられない。惚薬などヨタ話ではないか。それが例の衆道騒ぎと、どこでどう繋がるのか。人の意表を衝く話をするのが、理兵衛の趣味なのではないだろうか。蒼生の頭は混乱しきっているのに、当人たちは真剣そのもの。
「さよう」
「そのとおりでございます」
同意した花絵が、ためらいつつも白状する。
「なぜ、そのようなものをと思われているのでございましょう。お恥ずかしいのですが、あの、その、理兵衛殿が最近、少し冷たくなったように思えたのでございます。むろん衆道騒ぎが起きる前のことでございますが、なんとなく素っ気なくなられた感じがいたしまして」
なぜか頬をぽっと染めた。
「はあ」
間の抜けた返事をする蒼生の後ろから、真琴がずいっと膝でにじり出る。

「なるほど、合点がいきました。惚薬を服ませれば、理兵衛殿のお心が、ついでに言うならお身体も、以前のようになるかもしれぬと思われたわけですね」

この説明で、ようやく「あっ」と手を打った。惚薬なる代物は、回春剤のような役目を果たすにちがいない。冷たいだの、素っ気ないだのという表現はすなわち、房事の回数が減ったことをさしているわけだ。

「そ、そうだったんですか」

またまた間の抜けた返事になった。難事件や怪事件の解決には、素晴らしい活躍を見せる蒼生も、夫婦生活のことになると、照れが先に立って言葉が出なくなる。次に浮かんだのは入手方法だった。

「いったい、どこの薬屋でお求めになられたのですか」

「薬屋ではございませぬ。行商人でございます。三十歳ぐらいの女だったものですから、わたくしもつい気を許しまして、聞かれるままに答えたのでございます。それならばと取り出したのが、惚薬とやらでございました。疲れが取れると嘘をつき、理兵衛殿に服ませたのでございます」

つらつら思い出してみればと、花絵は続けた。怪しげな惚薬を服ませたあたりから、理兵衛の様子がおかしくなった。妙な薫りを漂わせるようになり、会輔堂の仕事が終わったあと

も、家には戻って来ない。夜中遅くに帰って来たときは、いっそう強い芳香を迸らせている。

「昨夜、理兵衛殿と話しておりましたときに、ふと惚薬の話が出たのでございます。それで『もしや』と思いました。さだかではございませぬが、理兵衛殿の様子がおかしくなった時期を考えますると、やはり、そうなのかもしれぬと」

「そう、でしたか」

三度目の相槌もまた、どこか間が抜けていた。対する真琴は眸を輝かせて、じりじりっと前に出る。

「効き目はあったものの、理兵衛殿は花絵殿ではなく、若衆に心を奪われてしまったのでございますね。異常な行動の原因は惚薬、理兵衛殿のお心は、お変わりないようなので安心いたしました。これにて一件落着、めでたし、めでたしでございます。まことによろしゅうございました」

満面の笑みを浮かべて、勝手に締めくくろうとした。蒼生は思わず反論する。

「ちょいと待ってくださいな。それじゃ、仏壇の観音扉が閉まっていたとか、神棚が落ちたとかって話はどうなるんですか。惚薬を服んだせいで、そういう不思議なことが起きたんですか」

「う」

「それは」

理兵衛と花絵は口ごもり、困ったように顔を見合わせる。どうやら本当に仏壇と神棚の異変は起きていたようだ。理兵衛の作り話ではないとわかっただけでも聞いた価値がある。それではこのへんでと、座を切りあげた真琴に、今度は感謝した。挨拶をして帰って行く二人を、蒼生は姿が見えなくなるまで見送る。

「本当に一件落着なのかしらねえ。これで終わってくれれば万々歳だけど」

「また蒼生様はそのようなことを、おや？」

玄関を振り返った真琴が、あわてて駆け戻った。玄関脇に鉢植えや風呂敷包みが置かれている。どれもこの家の品物ではない。

「なによ、これは」

「もしかすると、美弥への見舞いかもしれませぬな。風邪をひいたと聞いた男衆が、そっと置いて行ったのでございましょう」

「美弥は人気があるのね。でも、魚の方がよかったと、文句を言いそうだわ」

玄関の上がり框に、鉢植えと風呂敷包みを運ぶ。臭いから推測する限り、魚類ではなさそうだ。

「蒼生様、ただいま戻りました。手間取ってしまいましたが……この荷物はなんでございま

すか」

戻って来たお銀の声が、嬉しげに弾んでいる。若衆の居所がわかったのかもしれない。三妖娘は人間のように嘘をつけないし、自分の感情を隠すのが苦手だった。声にも表情にも、正直に心が表れる。

「美弥への病気見舞いらしいのよ。あんたは若い娘に人気があるけど、美弥は男衆、それも陰でこっそり熱をあげるようなタイプが多いみたいね。どうせなら堂々とお見舞いにくればいいのに」

「そんなことよりも、蒼生様」

お銀は手柄を報告したくてたまらない。部屋に行くのも待てないらしく、廊下で耳もとに囁いた。

「芳町の駕籠屋をあたってみたんです。あそこは衆道のたまり場、利用するとしたら、あのあたりの駕籠屋じゃないかと思いまして。そうしたら、ずばり的中でした。一昨日の夜、あいつを乗せた男たちに話を聞くことができました」

若衆の名前は澤井菊之助、年齢は十八歳、渡り小姓をしている若者だった。妖しいほどの美貌が浮かび、蒼生は納得する。

「やはり、ね。いかにもという雰囲気の若者だったわ。あれだけの器量があれば、引っ張り

だこでしょうよ」

小々将中器量能者をは何程にても召抱申。

（器量よしの児小姓なら金に糸目をつけず採用しよう）

どこの大名家でも、美形の男は人気があった。渡り小姓はその呼び名どおり、金で雇われる臨時雇いの小姓で、一定期間務めると、条件のいい大名家にまた移る。若くて綺麗なときしか通用しないのは言うまでもない。目はしのきく者であれば、しっかり貯めこみ、いずれ商いでもと考えるだろうが、江戸は金のかかる町、思うようにはならないのが世のさだめ、容貌の衰えとともに勤め口を失い、惨めな生活をするさまが容易に想像できた。

「で、今はどこの大名家に仕えているの？」

「これがちょいと驚きなんですが」

お銀が告げたのは、幕府大学頭林家。お固い家柄と思っていたので、蒼生もいささかびっくりした。美弥への贈り物を奥に運んでいた真琴も、足を止めて耳を傾けている。

「へえぇ、大学頭のお屋敷に」

「はい。何度も乗せたらしいので、間違いないと思います。もちろん、あとで大学頭の屋敷を調べ、真偽のほどを確かめてきますが、とりあえず、わかったことだけでもお知らせしなければと思いまして」

「ご苦労さま、あんたは頼りになるわね。お腹が空いたでしょう。遅めの朝餉になったけれど、台所に仕度をしてあるわ。ゆっくり食べて、少し休んでいきなさいな」

「では、お言葉に甘えさせていただきます」

「あ、待って」

先刻の疑問点を思い出し、言葉を投げた。

「御城で出会った妖術師のことだけどね。あんたはどうやって、やつの呪縛を解いたの？どうやって美弥を助け出したの？」

「木です。眩惑に陥ちたとき、地面が泥土のようになって、流れるような感じに視えていたのですが、近くに生えている巨木の林は、まったく揺れていませんでした。それで試しに枝を折り、地面に向かって投げてみたのです。運良く呪縛が解けましたが、あとで考えて、ぞっとしました。下手をすると、美弥に突き刺さっていたかもしれませんから」

助けたことを鼻にかけず、反省点を述べるところなどは称賛に値する。蒼生は満足げにうなずいて、さらに聞いた。

「あとひとつだけ教えてちょうだい。眩惑に落ちる前、妙な匂いを感じなかったかしら。美弥は蓮の花のような薫りを感じたと言っているの。馬泥棒には関係ないかもしれないけれど、なんとなく気になってね。あんたはなにか匂いを感じた？」

「匂い」

一昨日の出来事を反芻するように遠い目をした。思いあたらなかったのかもしれない。首をひねりつつ答える。

「さあ、わたくしはこれといって……ああ、そうでした。強い土の臭いを感じたのを覚えています。雨あがりでもないのに、やけに土臭くて、だれかが地面を掘り返したんだろうか、なんて考えました」

「土」

臭いと言えなくもないが、薫りとは呼べないように思える。それぞれが異なる薫りを感じたのではないかと思ったのだが、考えすぎだったのかもしれない。

「わかったわ。足を止めさせちまって悪かったわね。もういいわよ」

「はい。では」

「あのぅ」

玄関先で遠慮がちな声が響いた。質素ではあるが、きちんとした身なりの侍らしき若者が立っている。一尺（約三十センチ）ほどにしか育っていない小さな寒椿の鉢植えを、大切そうに抱えていた。おそらく見舞いの品であろう。

あら、珍しい。美弥の信奉者の中にはお侍もいるのね。

「どうぞ、おあがりくださいましな。伝染るといけませんので、廊下から見舞ってやってください。美弥も喜びますので」
「い、いや、せ、拙者は」
「ご遠慮なさらずに、さあ、どうぞ」
「蒼生殿！」
突然、若侍はその場にひれ伏した。
「ひ、ひと目、貴女を見たときから、わ、忘れられなくなり申した。お願いでござるっ、拙者の妻になってくだされ！」
それは小春日和の求婚。おずおずと差し出された寒椿の蕾が、やわらかな陽ざしを受けて今にも咲きそうだ。
「……」
蒼生は絶句して、立ちつくしている。はっとして後ろを見たが、すでに真琴の姿はない。この話が雷光のような速さで、御城に伝わるのは間違いない。
ああ、おとっつぁんが大騒ぎしそう。
どんな難事件よりも、むずかしい事件になりそうだった。

三

壽屋の女主に求婚者、現る。

「な、な、なんだとぉっ!?」

蒼生のおとっつぁん——八代将軍徳川吉宗は驚きのあまり、昼餉の麦飯を危うく喉に詰まらせかけた。

「ぐっ、むぐぐぅっ」

「う、上様っ」

覚兵衛はあわてふためいて、白湯を飲ませる。咳こむ吉宗の背中をさすって、けんめいに落ち着かせようとする。ほどなく、大きく息を吐き、かすれた声を絞り出した。

「し、して、その無謀な、あ、いや、勇気のある男は、どこの、だれじゃ」

「ええと、その点につきましては」

配下の御庭番から渡された文を、あらためて見直した。あと少しで還暦という覚兵衛は、近頃、とんと目が悪くなり、小さな文字を読むのに苦労する。老眼鏡を買えない経済状態ではないのだが、見栄を張って、眼鏡を買おうとしなかった。やっとの思いで読み取り、説明する。

「真琴からの第一報には、名前や役職などは書かれておりませぬ。若侍と記してありますので、どこかの藩士かもしれませぬな。あるいは浪人ということも考えられまする」

「藩士であればよいが、浪人というのはちと困るのう」

苛立たしげに脇息を指で叩き、油断なく目を走らせている。御城脱出の口実を考えているのが、手に取るようにわかった。それを未然に防ぐのもまた覚兵衛の役目、中断した昼餉の膳を、さりげなく勧める。が、大食漢の吉宗にしては珍しく、見向きもしない。

「ううむ、そう、浪人は困る。それはまずいぞ」

ひとりごとのようにぶつぶつと呟いていた。

「蒼生はあれだけの器量良し、どんな男も嫁にと望むであろうに、どこの青二才ともわからぬ輩にくれてやるのは腹が立つ。ええい、早う知らせてこぬか。真琴はなにをしておるのじゃ！」

「おっつけ、第二報がまいりましょう。それにしても、目出度きこと。その男と夫婦になるかならぬかは縁でございますが、結婚話が出るようになったのは良い兆しでございまする。先を越されたと思うた連中が、我も我もと名乗りでるかもしれませぬ。蒼生様に関しましては、さまざまな噂が流れておりますゆえ、他の者たちもなんとなく気後れしていたのかもしれませぬからな」

「う、む。そうであってくれれば、わしも嬉しいのじゃが」

吉宗が蒼生を姫君として公にしない理由はよくわからない。いまだに名前すらあきらかにしない母親が原因なのではないかと、覚兵衛は内心、推理している。母親は妖怪なのではないかという説や、さる高貴なお方の娘なのだという説が、まことしやかに流れているのが現状だ。おまけに『もののけ姫』なる奇怪な渾名(あだな)まで出るにいたっては、縁遠くなるのも無理からぬことかもしれない。吉宗は名乗らせてやれないことをひどく気にしており、それだけに可愛いのである。ふだんは「だれでもよいから嫁にもらってくれぬかのう」と口癖のように言っていたのだが、いざ求婚話が出ると、とたんに点が辛くなる。親馬鹿丸出しなのだった。

「こうしてはおられぬ」

落ち着かない素振りで、立ちあがりかける。

「のんびり城になどおられぬわ。蒼生の相手をこの目で見ないことには、死んでも死にきれぬ。覚兵衛っ、馬を引けい！」

いきおいで突破しようと企んだが、

「上様の愛馬は行方不明にございまする」

きっぱりと現実を突きつけられた。

「そう、であったな」

腰がくだけるように座りこむ。他の馬に乗って行こうとまでは思わない、いや、思えないのだろう。それほどに愛馬、亘を可愛がっていた。

「どこに行ったのやら、ひどい目に遭うてなければよいがな。蒼生たちでも見つけられぬとなれば、もはや探し出すのは無理かもしれぬ。流鏑馬もどうするか。中止するべきかもしれぬのう」

とたんにしゅんとなってしまった。忙しく慰めの言葉を探すが、口をついて出たのは類似事件のことだった。

「関係あるのかどうかわかりませぬが、可愛がっている犬や猫が行方不明になる事件が、家臣たちの屋敷でも起きているとか。盗み出してなにをするのか、皆目、見当がつきませぬ。金持ちの大商人にでも売るのでありましょうか」

大名家で飼われている動物は、ちゃんと世話をされているので、健康状態も栄養状態もいい。唐や朝鮮から手に入れた珍しい犬猫を飼っている大名家も少なくない。金と暇を持て余している大商人であれば、大金を積む可能性があった。

「どこぞの金持ちが亘を手に入れて悦にいっていると申すか」

「御意。上様の愛馬となれば、自慢できましょう。どこからか、そのような噂話が洩れ出る

やもしれませぬ。引き続き配下の者に探らせますゆえ、あっ、ああっ、う、上様っ、ネズミが！」

手を付けない膳に、白いネズミが載っていた。覚兵衛は急いで追い払おうとしたが、吉宗は鷹揚に告げる。

「よい、捨ておけ」

「ですが、上様の御膳を食べちらかしておりまする。このところ、よく見かけるネズミでございますが、だれかに飼われておったのでございましょうか。人慣れしているように思えまする」

「チュー助のことは放っておけ。わしの飯が気に入っているのなら、気のすむだけ食うがよいわ。それよりも」

と、またまた企みの顔つきになる。機先を制して言った。

「他にもご報告がございまする。上野の寛永寺でなにか異変が起きている由。どんな事柄であるのかはわかりませぬので、わたくしが近々出向いてみるつもりでございまする。寛永寺は天台宗、天海殿がしっかり目を光らせていると思いましたが、どんなことが起きているのでございましょうか」

天台宗の宗祖は最澄で、天台学を志した最澄が唐で受学し、帰国後開宗した宗派である。

天台学・密教・禅・戒律の四種相承を特色としたが、次第に密教が重視され、真言密教の東密に対して、台密と称された。江戸初期の有名な僧、天海も天台宗の僧だが、吉宗の心は別のことに向いている。

「寛永寺に参拝するのも悪くないのう。今日は春のようなあたたかさ、絶好の参拝日和よ。散歩がてら五代将軍綱吉公にご挨拶するというのはどうであろうか。ついでにその異変とやらの話を聞くのも……」

「他にもまだまだご報告がございまする」

最後まで喋らせない。

「大坂に朝鮮船が漂着したとの報告を受けておりまする。これはいかがいたしましょうや。いつものように長崎に回漕させ、長崎奉行の取り調べを受けさせたうえで対馬藩に送還いたしまするか」

「なぜ、そのような事柄をわざわざ余に確かめるのじゃ。なにか気になることでもあるのか？」

わしが余に変わり、眼光が鋭くなった。さすがは上様、考えておられるのは御城脱出のことだけではない。例の件についても、ちゃんとご記憶しておられるわ。覚兵衛は平伏する。

「は、いささか」

「気のすむようにせよ。漂着船ごと江戸に呼び寄せ、心ゆくまで調べるがよい。その件はそちにまかせる」

「御意」

ほっとしたのも束の間、

「それでじゃな、覚兵衛。さっきの続きだが」

「今宵、蒼生様は〈妖堂〉のご依頼がございまする」

今度も途中で遮った。

「深川の家を訪ねたところで、お留守でありましょう。求婚者の件につきましては、明日にでもこの爺が、直接、お話を伺ってまいりますゆえ、上様は少しの間、ご辛抱くださりますようお願い申しあげまする」

公儀御庭番の頭を務める覚兵衛は、配下の者たちが集めて来る情報の中から、〈妖堂〉の仕事になりそうな内容を選出したうえで、吉宗に差し出している。だが、多忙な上様はいちいち覚えていない。

「はて、今宵の相談相手はだれだったか」

「わたくしの記憶が確かであれば、対馬藩の御留守居役であると思われます」

「対馬藩」

ぽんと膝と打つ。覚兵衛はにんまりした。

よしよし、わかっておられるようじゃ。今回の依頼はいささか込み入った事情がある。だからこそ、何度もご相談申しあげたのじゃが、上様は時々綺麗に忘れてしまわれるからのう。しかし、まあ、このご様子であれば大丈夫。

と思ったのだが、次に出た言葉はいかにも吉宗らしいものだった。

「対馬藩の江戸家老に申し伝えるがよい。唐国の馬を朝鮮国から所望すれば、調達することができよう。我が国の馬は胴長短足で、見映えがよくない。美しくて足も速い丈夫な馬がほしいのじゃ。常式の遣い馬ではなく、軍馬じゃ。さらに去勢した馬は要らぬ。御馬預かりの者も呼べ。取り急ぎ申し伝えよ」

「上様」

がっくり力がぬけた。ああぁ、なにもわかっておられぬ。あれだけご説明したのは、いったい、なんだったのか。

「その件につきましては、二年前にも無理だと申しあげたはずでございまする。軍用馬はどの国にとりましても、もっとも重要な機密事項、他国に渡すはずがありませぬ。しかも去勢していない馬などを素直に差し出しましょうや。唐や朝鮮国がそのような要求に応じるわけがありませぬ」

辛抱強く説明したが、とぼけているのか、本当に忘れているのか。覚兵衛は前者の可能性が高いと思っている。吉宗は油断のならない切れ者、御側衆のひとりとしては、常に気をぬけない。

「馬はだめか。では……」

三度目は聞こえないふりをして続けた。

「対馬藩の相談内容は、菩薩像を探してほしいとの依頼でございますが……はて、寺に関係する内容でございますな。寛永寺の異変と関係あるのでございましょうか」

「それゆえ、わしが出向いてだな」

四度目の挑戦も、聞こえないふりをする。

「失礼いたしました。寛永寺の件と、対馬藩の依頼を結びつけるのは早計すぎましたな。ええと、なになに、対馬藩の仏像は、大きさが二尺程度であるとか。小さいながらも由緒のある家宝だそうにございまするが、これはあきらかに盗人の仕業。〈妖堂〉のような名前そのままに妖しげな、あ、こ、これは失礼をいたしました。まあ、その、なんと申しまするか、公にできないところに頼むのは、相当に大切な品である証。そもそも大名家が〈妖堂〉に依頼をするのは、めったにないことでございまする。蒼生様がその気になれば、すぐさま見つかりましょう。楽な仕事でございまするな」

「楽すぎて、勘ぐるかもしれぬ」
「そうかもしれませぬ」
狐と狸が目を合わせて、くくっと含み笑う。依頼の裏には事件あり、覚兵衛が立ちあがろうとしたとき、待ち望んでいた第二報が届いた。
「川村真琴からの文でございます」
「おおっ、待ちかねたぞ」
吉宗は腰を浮かせて、文を取りに行きかねない様子だった。蒼生に求婚した勇気ある若者は、いったい、どこのだれなのか。御城の中奥は妙な熱気に包まれている。

四

「拙者は池田半九郎、二十八歳。対馬藩の江戸屋敷で、右筆のお役目に就いております」
蒼生は神田に向かう屋根船の上で、求婚者の話を反芻していた。漕ぎ手はお銀で、真琴も同船している。時刻は六つ半（午後七時前後）、闇に覆われた川には、屋根船や屋形船の灯が点在していた。船の灯が川面に映って、ゆらゆらと揺れるさまが、幻想的で美しい。
「そろそろ嫁を娶った方がよかろうという話になりましたが、仲間うちや他の頭の娘などにも、ちょうど良い年頃の相手がおりません。江戸ではむずかしいのかもしれぬと、諦めかけ

ておりましたとき、あるお方が〈壽屋〉のことを教えてくださったのです。町人の仲人などと、初めは気乗りいたしませんでしたが、試しに足を運んでみるかと訪れましたときに」

半九郎は澄んだ眸を、じっと向けた。

「蒼生殿をお見かけしたのです。それ以来、寝ても醒めても、浮かぶのは貴女の顔ばかり、ここ何日かはあとを尾けるような真似をしてしまいました。申しわけありませぬ」

なんと尾行の気配をさせた犯人は、彼だったのである。座敷に通したものの、真琴は姿を消してしまい、心細い気持ちになっていた。他人の仲人は何度も経験しているが、自分のことはまったくの初めて、とまどいと恥じらい、嬉しさと不安がないまぜになっている。黙っているのを照れていると思ったのか。

「どなたか仲人をお願いするべきと思いましたが、蒼生殿はその仲人。どうするべきか考えあぐねているうちに、『ええい、ままよ！』と腹をくくった次第にございまする。すぐにでもお返事をいただきたいと、申しあげたいところですが、本日が初顔合わせ、無理は申しませぬ。存分にお考えになられたあと、お返事をいただけますまいか」

以上の言葉を残して、半九郎は帰って行った。青天の霹靂（へきれき）とはまさにこのこと、蒼生は今も気持ちが高ぶっているが、疑問も浮かんでいた。

偶然なのかしら。今宵の依頼は池田様が仕える対馬藩、なんらかの意図があって、近づい

て来たのではないかしら。まさか、あたしたちが裏の仕事をしていることに気づいているわけじゃないわよね？

「どうなさいました。ずっと黙りこんでおられますな」

真琴が静かに語りかけてきた。求婚者の想いに影響されたわけではなかろうが、今日は夜になっても春のようなあたたかさが広がっている。いつもは冷たい川風が吹きつけてくるのに、頭巾や肩掛けなども必要なかった。

「あんたはどう思う？」

短い質問には、さまざまな思いがこめられている。池田半九郎自身のこと、対馬藩のこと、今夜の依頼のこと。またそれらは関係あるのか否か。

「池田殿についてでしたら、わたくしは好人物であろうと思いまする。なかなかの男前でございますし、上背もあって、がっしりした体軀をしておられる。剣の達人ではないかもしれませぬが、武術の心得もおありのように見受けられました。ご右筆というお役目も、悪くない職でございます」

右筆は書記役のようなもので、むろん、字が上手くなければ役には就けない。文武両道の雰囲気を感じ取り、真琴は手放しで褒めた。

「池田殿は書にも通じておられるのでありましょう。剣と書は通じるものがございますゆえ、

これからもさらに精進なされば……」

「罠だとは思わない？」

遮らずにいられなかった。半九郎に対する個人的な感想はどうでもいい。因果な裏稼業と、厄介な父親を持っているお陰で、まともな結婚は無理であると、はなから決めてかかっていた。まず疑ってしまう。信じることができない。

「わかりませぬ」

真琴は正直に答える。

「すぐに身辺調査をいたしまするが、池田殿の真意を知るのは池田殿ひとり、わたくしは本気であるように感じました。蒼生様に対する想いに偽りはないように思いました。仮にだれかの命令で動いているのだとしても、蒼生様を見たとたん、恋に陥ちたという言葉は真実であるように思うのです。そうでなければ寒椿の鉢植えを抱えて、夫婦になりたいなどと言いますまい。真剣な眸でございました」

「ええ、そうね」

できるものなら信じたい。半九郎の言葉は、すべて本当の言葉、嘘など隠されていない。対馬藩の依頼とは無関係にちがいない。

「でも」

ぐるぐるとまわって、また同じ疑問に戻る。普通の娘のように、無邪気に付き合えたらどんなに幸せだろう。しかし……。

「付き合ってごらんになればよろしいではありませんか」

真琴の言葉に、むっとする。ずいぶん無責任に思えた。

「他人事だと思って、気楽に言ってくれるわね。もうひとりの存在についてはどうするのよ。満月の変化を知れば、池田様だって、すぐに逃げ出すわ。噂が広まったらどうするの。夜逃げして、こそこそ暮らせって言うの」

「蒼生様、初めからすべてを曝け出す男女はおりません。好きな相手に良い印象を与えたいと、みんな思うのではないでしょうか。だれしも飾ってみせるものです。まずは加納蒼生として、お付き合いをしたうえで、少しずつ知らせればよいではありませんか。たいせつなのはお互いの気持ち、少なくとも池田殿は真剣に思えまする。あとは蒼生様がどう思うかでございましょう。好きか、嫌いか。逢いたいか、逢いたくないか。一緒に暮らしてみたいか、暮らしたくないか。単純なことでございます」

次の提言は素直に受け止められた。さほど恋の経験が多いとは思えないのだが、こういうとき、真琴はかなり的確な忠告を与えてくれる。

「参考にさせてもらうわ。ただ……池田様には悪いけど、やはり、調べる必要があると思う

の。いつもより慎重に身辺を探ってちょうだい」

「承知いたしました」

話している間に、屋根船は神田の料理屋『大角』裏手の船着き場に着いていた。裏口で待っていた女将が気づき、提灯を持って階段を降りて来る。この見世を営んでいるのは元御庭番で、夫婦ともども覚兵衛の配下として働いていた。隠退後、料理屋を開いたわけだが、蒼生と依頼人を繋ぐ中継地点の役割を果たしている。現職の御庭番も利用することが多いため、市中の噂話などが耳に入りやすくなるので、蒼生たちは定期的に訪れていた。

「別室で、すでにお待ちでございます」

短い挨拶のあと、女将が告げる。

「わかりました。先に部屋に行っています」

足もとを照らす提灯に導かれて、蒼生と真琴は勝手口から見世に入る。そのとたん、大きな声が聞こえてきた。

「お願いですっ、紹介してくださいっ」

年若い男子の声だった。声変わり前の独特な甲高さがある。

「ここに来れば探してもらえると、ある人に聞いたんです。お願いです、お金はお払いします。おっかさんを探してください！」

最後のひと声が、蒼生の心を鷲摑みにした。いまだに所在はおろか、名前すらわからない母親のことを考えずにいられない。無視できなくて、女将に訊ねる。

「あれは？」

「室町二丁目の蠟燭問屋『辻屋』さんのひとり息子です。調べましたので、身元は間違いございません。十歳ぐらいの子供なのですが、どこで話を聞いたのか、〈妖堂〉に引き合わせてほしいと申しまして。今日で、そう、かれこれ三日目になりますか。毎日、訪ねて来るものですから、困っているのでございます」

「どうして、知らせなかったの？」

つい責めるような口調になった。真琴がやんわりとたしなめる。

「相手は子供、取り合わないのが普通でございます。確かな依頼でなければ受けないのが定め、女将たちの対応に落ち度はありませぬ」

「わかってるわよ」

もっともな意見だったが、割り切れない気持ちが残る。離れに行かなければならないのに、足は玄関に向かっていた。真琴が早足で追いかけて来る。

「どうなさるおつもりなのですか」

「ちょいと様子を見るだけよ」

顔を見られないように注意しながら、そっと様子を窺った。玄関先で見世の主と問題の男子がまだ言い争っている。元服前の前髪に、上物の木綿の着物と袴姿だった。蠟燭問屋というだけあって、手代らしきお供がついている。

「どうかお帰りください。何度も申しあげましたとおり、こちらではそのような話は受けていないのです。捜屋などと言われましても、まったく心あたりがございませぬ。お引き取りくださいませ」

主は相手が子供だからと馬鹿にすることなく、丁重に応対していた。男子は引きさがらない。

「いいえ、確かに聞きました。こちらに来ればどんな人でも、捜し出してくれると、捜屋さんに連絡できると伺ったのです。たとえ死人であろうと見つけ出せると……」

「倉太郎様」

あわて気味にお供の男が止める。怖いほど真剣な倉太郎とは反対に、あたりを憚るような表情をしていた。捜してほしいのは死人なのだろうか。二人の態度がちょっと引っかかる。

蒼生はわざと咳をして、主に自分の存在を知らせた。

「失礼いたします。すぐに戻りますので、お待ちくださいませ」

意図を察して主が廊下にあがって来る。

「話だけ聞くと伝えてちょうだい。受けるかどうかはわからないけれど、とにかく話を聞いてみましょう」
「え、よろしいのでございますか」
「蒼生様」
真琴が渋面になる。蠟燭屋のお供も同じ気持ちだったらしい。
「帰りましょう、倉太郎様」
抱きかかえるようにして声をはりあげた。
「玄関先で騒ぎを起こしまして、申しわけございませぬ。わたくしどもは帰ります。つまらないことを申しましたが、子供のたわごととお聞き流しくださいませ」
「たわごとじゃないっ、わたしは本当に見たんだっ、おっかさんを見たんだよっ。おっかさんは死んでなんかいな、むぐぅっ」
お供に口を塞がれて、引きずるように連れ出される。後ろで話を聞いていたお銀が申し出た。
「蒼生様、わたくしにおまかせください。どんな話なのか聞いてまいります」
「頼むわ。ついでに確かめてほしいことがあるのよ」
耳もとに囁いて、お銀の背中を押した。相変わらず真琴は気に入らないようだが、よけい

な口出しはしない。軽やかな足どりで、お銀が二人を追いかける。

五

「離せっ、もう一度、あの見世に行って……」

駆け戻ろうとする倉太郎の前に、お銀は立ち塞がった。二人はびっくりしたような顔で、見つめ返している。男か女かわかりにくいうえに、素性も怪しげな若衆が現れたのだから無理もない。

「おっと、心配しないでおくれよ。取って食おうってんじゃないんだからさ。実は先刻の騒ぎが耳に入ってね。それで追いかけて来たってわけなんだよ」

男のふりをして、エサを投げた。

「坊ちゃんの言っている捜屋に、つてがなくはないんだ。よければ話ぐらいは伝えられるよ」

小声で言い、二人の顔を交互に見る。

「えっ、本当ですか」

「帰りましょう、倉太郎様」

倉太郎は喜んだが、お供の男は乗り気ではないようだ。〈妖堂〉としては、別にかかわら

なくてもいい相手なのだが、蒼生の命令なので仕方がない。「おっかさん」の叫びに心を動かされたのが、鋭いお銀にはわかっていた。

「あんたも話のわからない男だね。話をするぐらい、いいじゃないか。それで金を取ろうなんていう了見の狭いことは考えちゃいないよ。いやなら、あんたは離れていりゃいいだろ。おいらは坊ちゃんとだけ話をするさ」

開き直ると、男は不承不承という感じで説明し始めた。

「すでにご存じかもしれませんが、坊ちゃんは室町二丁目にある蠟燭問屋『辻屋』の跡取り息子でございます。わたくしはそこの手代を務めておりますが、二ヵ月前に女将さんが突然、亡くなりました。棺桶に入れて、墓に埋葬するところを、旦那様はもちろんのこと、坊ちゃんも使用人たちも見ております。間違いなく女将さんは亡くなっているのです。それなのに」

ちらっと目を向けたのを、倉太郎が受ける。

「見たんです。間違いなく、おっかさんでした。十日ほど前のことです。わたしが通う会輔堂の外で、おっかさんを見たんです」

「会輔堂？」

衆道騒ぎを起こした平岡理兵衛は、会輔堂の師匠をしている。お銀は蒼生と理兵衛たちの

会話を聞いていないのだが、妙な符合だと思った。頭の隅に引っかけて、いちおう確認する。

「坊ちゃんは深川の会輔堂に通っているのかい」

「そうです」

「それで、死んだはずのおっかさんが学問所の外にいた、と」

「はい、わたしを待っていたのかもしれません。目が合ったとたんに、走り去ってしまいましたが、おっかさんでした」

まともに話を聞いてもらえるのが嬉しくてならないのだろう。目が輝き、頬が紅潮していた。しかし、まともではない話もしなくてはならない。

「妙なことを聞くけどさ。おっかさんの墓は見たかい。死人が甦ったような跡はなかったかい」

「え……」

とまどったように、倉太郎は手代の男を見た。〈妖堂〉の女主は、もうひとつの顔を持っている。ありえないことが現実に起こる場合が少なくなかった。真顔のお銀に当惑しながらも、手代の男が代わりに答える。

「墓は葬式のときのままです。坊ちゃんが生き返ったのかもしれないと何度もおっしゃるの

で、墓参りかたがた一緒に見に行きました。他人の空似であろうと、わたくしは思っております。世の中には自分に似た人間が、三人はいるとか。死んだ人間が生き返るはずがございません」

「ちがう。あれはわたしのおっかさんだった。間違えるわけがないよ。わたしのおっかさんなんだもの」

「でも、坊ちゃん」

まあまあ、と、お銀が割って入る。

「あんたたちの口喧嘩を聞いているほど暇じゃないんだ。さっき女将さんは突然、亡くなったと言ったけどさ。心ノ臓でも悪かったのかい」

「いえ、女将さんは丈夫な方で、ほとんど医者に罹ったこともありませんでした。本当に突然のことだったんです。早起きの女将さんが起きないのを、旦那様が不審に思われて、布団を見たときにはもう」

「きっと死んでいなかったんです」

倉太郎は必死だった。

「墓の中で生き返って、それで、だから」

語尾が弱々しく消える。墓のことを聞いたときに、すぐ答えなかったのは、墓に異状がな

かったからなのだ。仮死状態で埋葬され、息を吹き返したという話は考えにくい。お銀は別の疑問を投げる。

「これも奇妙な話なんだけどさ。まあ、怒らないで聞いておくれよ。女将さんは亡くなる前に、惚薬のようなものを服んではいなかったかい」

蒼生に囁かれた質問のひとつめを口にした。

「惚薬」

きょとんとして、首を傾げる。手代も同様だった。それではと、二つ目のことを聞いてみる。

「それじゃ、女将さんは亡くなる前に、身体中から、こう、なんというのか、良い薫りを漂わせたりはしていなかったかい。香でもたきしめているんじゃないかというような、素晴らしい芳香を立ちのぼらせてはいなかったかい」

「ああ、そういえば」

薫りを思い出すように、倉太郎が目を細めた。匂いは人の記憶を強く刺激する。四季の気配を知らせる木々の匂い、あるいは幼い日を呼び覚ます夕餉の匂い、そういった独特の匂いが、過去の記憶に結びつき、思わぬ光景を甦らせたりもする。倉太郎の表情はまさにそれだった。

「おっかさんは凄くいい匂いをさせてました。梅の花、それも紅梅を思わせる独特の薫りです。近づいて来ると、後ろを見なくてもわかるぐらいに強く匂い立って」

「ふうん、女将さんは香を炷く趣味があったのかい」

季節外れの薫りを漂わせるには、高価なお香を炷くしかない。あるいは常日頃から香道に親しんでいるか。貧乏長屋のおかみさんには無理だが、蠟燭問屋の御内儀であれば、できない習い事ではなかった。

「いいえ。そういう趣味はなかったと思います。鬢付け油でも変えたのかと思っていました。それがなにか関係あるのですか」

倉太郎の率直な問いかけに、お銀は曖昧な笑みを浮かべる。

「あるような、ないようなってとこだね。ま、これでだいたい話はわかったよ。捜屋に伝えてみるけどさ。動いてくれるかどうかまでは約束できない。もし、動きがあれば、見世に行くよ」

「あなたに連絡を取りたいときは、どうすればいいのですか」

「それは」

壽屋のことを教えていいものかどうか、お銀は一瞬、躊躇する。が、これも素早く答えを考えた。

「おいらに繋ぎを取りたいときは、深川にある〈壽屋〉という仲人かかを訪ねてくれないか。ふだんはそこで下働きをしているんだよ。ただし、見世の主は捜屋とはまったく関係ない。この件については他言無用だよ」

「わかりました」

「それじゃ」

踵を返したお銀の背に、倉太郎が叫びにも似た声をあげる。

「室町二丁目です、蠟燭問屋の『辻屋』です。おっかさんを見つけてくださったときには、必ずお礼をいたしますので」

おっかさん。

蒼生の胸で何度も響いているであろう言葉を、お銀は心の中で噛みしめた。『大角』ではそろそろ本当の依頼が始まっている。やけになまあたたかい風を受けて、お銀は駆け戻って行った。

六

「今宵の依頼主は対馬府中藩でございます」

真琴が草紙（メモ）に目を落として、依頼人が来るまでの間に内容を再確認する。二人の姿は目隠

し代わりの大きな衝立に隠されているので部屋を訪れた者からは見えない。意匠の一部に覗き穴がしつらえられており、蒼生たちの方からは室内が覗けるようになっていた。念のために頭巾を被って、万全を期している。

「盗まれた菩薩像を探してほしいとのことでございまする。対馬藩の藩主、宗家に代々伝わる家宝とか。盗まれたことに気づいたのは、ひと月ほど前のようですが、おそらくは自分たちでも探したのでございましょう。思い悩んだ挙げ句、という感じでございますな。おいでになっているのは留守居役だそうにございます」

留守居役は江戸藩邸にあって、幕府や諸藩との折衝を行う外交官のような役職だ。対馬藩は唐や朝鮮国との外交役を職務にしている特殊な藩、さぞかし老練な男が来るにちがいない。家老が出向くほどの事柄ではないと判断したのだろうが、蒼生はなんとなく気に入らなかった。

「ずいぶん、まっとうな依頼だこと」

不機嫌そうに呟いた。〈妖堂〉に来る仕事は、特別なものが多い。行方不明者、失せ物はごくあたりまえの部類で、引き受けないわけではないが、大名家、それも対馬藩というのが面白くなかった。求婚者である池田半九郎の顔が、脳裏にちらついている。

「なにがお気に召さないのでございますか。たまには楽に稼がせてやろうと、上様はお考え

になられたのでございましょう。ですが、簡単に菩薩像が見つかるかと申せば、そうはいかないかもしれませぬ。盗人を調べるのは骨の折れる仕事、うまくいきますかどうか」

「菩薩像だけじゃ、捜しようがないわよ。だれの作品とか、菩薩像を描いた絵があるとか。特徴については記されていないの」

「これにはなにもございませぬ。二尺程度の大きさの菩薩像というだけでございますな」

「おいでになりました」

主の声で、さっと緊張する。静かに障子戸が開き、頭巾を被った男が入って来た。侍ゆえ向こうも顔を見られたくないのだろう。

「自己紹介は省きまする」

短気な性格らしく、座るのもそこそこに口を開いた。

「あるお方より〈妖堂〉のことを聞き、ご相談にあがった次第。盗まれた菩薩像を取り戻していただきたい」

よけいなことはいっさい言わない。詮索されるのを警戒している雰囲気があった。ちなみに「あるお方」というのは覚兵衛配下の御庭番であり、市中を見廻っているかれらが、噂になっている家、今回の場合は大名屋敷だが、そこに行商人のふりをして訪ね、中継地点である『大角』の存在を耳うちするのだ。依頼人は悩んだ挙げ句、ここに来て〈妖堂〉の存在を

知る。つまらない相手との密談は、できるだけ早く終わらせたいと、暗にほのめかされているように感じて、蒼生はよけいに気分が悪くなった。

「どのような菩薩像でございましょうか」

それでも情報収集に取りかかる。女とわかって頭巾から覗く両眼に、侮蔑のようなものが一瞬、走った。

ああ、もう、断りたい。

ますますいやになったが、ここで放棄すれば、なにを言われるかわからない。やはり女だから駄目なのだと、平気で口にしそうな男だった。我慢して返事を待つ。

「木彫りの菩薩像でございます。大きさは二尺程度で、代々の藩主がそれはそれは大切にしておりました」

またしても短い答えで終わってしまった。草紙に書かれた程度の内容でしかない。苛立ちを抑えて、質問する。

「お江戸は広うございまする。それだけではなかなかむずかしいのではないかと存じます。他になにか特徴のようなものはないのでしょうか。たとえばだれかの作であるとか、その銘が彫られているとか。もしくは藩主である宗家の紋所が彫ってあるとか」

「これはおかしなことを申される。噂によると〈妖堂〉の主は、不可思議な力を持っている

由。死人であろうとも居所を捜しあてると聞きましたが、やはり、噂は噂にすぎぬということであろうか」

ふん、と、あきらかに鼻を鳴らした。挑発しているようにも感じたが、侍は居丈高な態度を取る輩が多い。

「どこでお聞きになられたのか存じませぬが、わたくしどもは不可思議な力など持っておりませぬ。依頼主からできるだけ詳しい話を伺いまして、地道に捜すだけのこと。ご協力いただけないのであれば、この話はなかったことに……」

「あいや、待たれい」

早口で制した。

「失礼つかまつった。こちらといたしましては、得体の知れない霊力とやらを持ち出されるのを懸念しておりました次第。屋号どおりに妖しい輩ではないのかと、案じていたのでござる。今までのご無礼、平にお許しいただきたい」

急に態度を軟化させ、畳に額をこすりつけんばかりに陳謝する。ふたたび姿勢をただして座り直した。

「重要な手がかりをお教えいたそう。盗まれた菩薩像は左甚五郎（ひだりじんごろう）の作、像の底に銘が入っておりまする」

立ち去る気配を感じたのだろう。声が逼迫した。

「藩主は家宝が盗まれたことを、いまだ知りませぬ。露見した暁には、われら一同、責任を取って切腹いたす所存。すべては〈妖堂〉の働きにかかっておるのです。お願いでござる。どうかお引き受けいただきたい」

覗き穴から見ると、今度こそ畳に額をこすりつけていた。ここまで必死になるのは、本当だからなのかもしれない。腹を切りたければ勝手に切ればいいと、内心、思っていたが、渋々答えた。

「……わかりました」

「おお、これはありがたい。それでは前金として十両、置いていきまする。菩薩像を取り戻せたときには、残りの半金にお礼を加えまするゆえ……どうか、どうか重ねてお願い申しあげまする」

再度、額をこすりつけて嘆願した。どこにあるのか、左甚五郎作の菩薩像。引き受けたあとも、わけのわからない不安が蒼生の胸にあった。

対馬藩、ご右筆、池田半九郎様。

心が揺れている。

七

不安げな加納蒼生の顔。

ゆらゆらとたなびく香の煙が、蒼生の美貌を形造っていた。赤、青、白、黄色、そして黒と、五色の煙が空間に〝絵〟を描いている。白と黄色の煙が混ざり合い、顔の形に広がって、そこに髪と眉毛が黒、唇は赤、そして、なぜか眸は蒼で表現されていた。三日月のあえかな光に照らし出されて、空間に浮かびあがる煙絵を、ひとりの忍びが凝視めている。

「美しい」

月影は嘆息まじりの声を洩らした。忍び装束をまとっているが、堂々と素顔を曝している。座しているのはさる大名家の下屋敷、森のような一角に緋毛氈を敷きつめて、野点のような趣のある空間を造り出していた。

「いつもながらに風雅な趣味よ」

まったく気配を感じさせずに、〈忍非人衆〉の頭、藤林長門が現れる。一説によると彼は、天正九年（一五八一）に起きた伊賀の乱の折りに消息を絶った上忍、百地丹波ではないかと言われている。真実であれば長門は化け物ということになるが、そう思わせる空気を発していた。超人的な技を使うという話も嘘ではあるまい。

「まさか」

真琴が思わず小さな声をあげる。左甚五郎は江戸初期の宮大工で、根来寺再建や方広寺鐘楼建立に従事した。また日光東照宮の『眠り猫』、上野寛永寺鐘楼の『登り竜』といった彫り物が有名である。名前は知っていたが、彼の手による菩薩像があったという話は聞いたことがない。

「それは初耳でございます」

蒼生は率直に言った。

「お恥ずかしい話でございますが、左甚五郎が菩薩像を残していたとは、まったく知りませんでした。本物なのでしょうか」

蒼生様、それは言いすぎでございます。真琴が袖を引っ張ったが、相手の態度に合わせただけだ。いちおう謝ったが、相変わらず見くだすような目をしている。引き受けたくないという思いが強くなっていた。

「信じていただけぬのも無理からぬこと。その菩薩像は密貿易で一度、我が国から朝鮮に渡ったのでござる。外国にも目利きがいたのでござろう。ゆえに我が国ではあまり知られておりませぬが、ご存じのように対馬藩は、朝鮮との貿易によって成り立っている藩。記録によれば元禄時代の初めごろ、運ばれて来た品物の中に、たまたまその菩薩像を見つけたとか。

すぐさま藩主が買い求め、宗家の家宝にしたというのが、経緯でございまする」

なるほどと、相槌をうちたくなる答えだった。事実、真琴は大きくうなずいている。が、蒼生は疑いが消えない。

「それだけの家宝であれば、描いた絵があるのではございませぬか。さきほども申しあげましたとおり、わたくしどもはただの捜屋、遠見を行うわけではありませぬ。少しでも手がかりがほしいのでございます」

「自信がないと」

二度目の「ふん」は、よりはっきりして、大きかった。引き受ければよいではありませぬか。なぜ、執拗にからむのです。蒼生様らしくありませぬぞ。頭巾を外した真琴が、唇だけ動かして告げる。

「はい、自信がございませぬ」

蒼生は引きさがらない。

「それに気乗りしないのでございまする。霊能力もなければ、遠見もできませぬが、わたくしは自分の勘を信じております。申しわけありませぬが、このお話はなかったことにしていただきとう存じます」

「お待ちをっ、お待ちくだされ！」

付記すると、天正伊賀の乱は、織田信長が伊賀・甲賀を壊滅させるべく攻めた戦のことだ。甲賀攻めは徳川家康のとりなしで中止したが、伊賀攻めは容赦なく苛烈に仕掛けられた。女子供まで殺すという残虐ぶりを見せた信長に、最後まで徹底的に抵抗したのが、百地丹波であると言われている。全織田軍を迎えて奮戦すること一ヵ月、その後、百地丹波は行方不明となった。

人間ばなれした噂話を持つお頭であるが、対する月影も妖魅じみた忍者。

「『六国五味』と申しまして、香木は六種類に分類され、五つの味わいで表現されまする。また色も香の五色がございますが、これは陰陽の五色に見出したもの。シャコウハンは青、羅国は黄、伽羅は黒、真南蛮は赤、シャセツが白となっております。仲間たちが揃うまでの間、加納蒼生の様子を探っておりました」

臆することなく淡々と報告する。神田の『大角』に月影が操る土人形のひとりを忍びこませていた。その眼を通して、遠隔地の様子を視、聴いているのだ。

「首尾は？」

向かい合わせに座った長門の眼前に、蒼生の煙絵がまだ浮かんでいる。月影は抑揚のない声で答えた。

「上々にございまする。〈妖堂〉の五人それぞれに、五種類の薫りを仕込みましてございま

する。壽屋に忍びこみ、娘たちが眠っている部屋に、拙者が調合した香を炷きしめたのでござまする。忍びこまれたことには、むろん、気づいておりませぬ。また仕込まれた薫りに反応してしまうことにも、気づいておらぬはず。罠はほとんど仕掛け終わり、あとはもうひとり、土人形を誕生させるのみ、もっとも適した人間を見つけましてございまする。仕上げをご覧じろ」

「春を思わせるこの陽気も、おぬしのせいか」

「御意」

話している間に、ひとり、二人と忍び装束に身を包んだ人影が姿を見せる。緋毛氈の真ん中に座っている長門を取り囲むようにして、円陣を組んでいったが、だれも音をたてず、気配も感じさせない。木々を揺らす風の音だけが聞こえていた。

「日和見法師じゃ」

「お頭の右腕が出陣とは」

集まった忍びは長門と月影を含めて六人、平然と素顔を見せている月影に、だれもが畏敬の念をいだいている。お頭同様、忍びの中ではその名を知らぬ者がいないほど有名だった。が、今までは黒覆面で顔を覆っていたため、月影が加わっていたことに気づかなかった仲間もいる。

「月翁（つきのおきな）がいるとは知らなんだわ」
「おう、おれもじゃ。日和見法師、月翁と、いくつか呼び名はあるがな。まさか、〈忍非人衆〉に加わっているとは思わなんだ」
「お頭。相手はたかが小娘、彼ほどの忍びを差し向ける必要はあるまい。われらのうちのだれかを……」
「すでに二人、死んだ」
長門は冷たく制した。
「おまえたちがたかが小娘と言う相手に殺（や）られたのだ。これ以上、犠牲は出せぬ。時間もかけられぬ。御庭番の動きが、うるさくなってきたゆえ、な」
「……」
言った本人は黙りこんだが、別の男が反論する。
「しかし、〈日和見法師〉はすでに顔を知られてしもうた。たやすく見つけられてしまうではないか。仕事がやりにくくなるは必至、自信があるのはわかるが、なにも敵にまで素顔を曝す必要はなかったように思うがな」
畏敬の念だけでなく、派手な演出と優れた秘術に、嫉妬を覚える者もいた。また年老いた忍びをなめてかかってもいる。わざわざ敵に挨拶をするなど、愚かなことこのうえない。月

影は老いたのではないか。出番はわれらにまわして、おとなしく香でも炷いておればよいのだ。口には出さなかったが、不満が覆面から覗く目に表れている。

「拙者には四人の傀儡がおる。それ、貴公の後ろにもひとり」

「なに？」

振り向いた男の喉に、にゅっと両手が伸びる。緋毛氈に映し出された自分の影から、女が上半身を迫り出していた。地面から上半身が生えているように見える。喉を摑まれかけて、男は後ろに飛びすさった。

「くっ」

忍び刀を抜こうとしたが、片手をあげて長門が止める。

「よせ。それは月影が操る土人形よ。斬り捨てたところで死なぬわ」

「む」

不満げではあったが、お頭に逆らうような真似はしない。他の仲間たちの影からも、ひとりずつ土人形が迫り出してくる。

「おお、おれの影からは娘が」

「こっちは若衆じゃ」

「おれの方は……なんじゃ。顔がないぞ」

最後の男の影からは、のっぺらぼうの土人形が立ちあがった。土くれを練りあげて、人間の大きさにしたような感じである。目鼻ばかりか、胸や下半身も造られておらず、それゆえ男か女かもわからない。

「〈初音ノ法〉でござる」

月影は相変わらず表情を変えないが、長門以外の忍びには、初音にこめられた意味が理解できない。

「初音とな？」

「はて、どこぞで聞いた覚えがあるような」

四人は互いに視線で問いかけ合っている。初音というのは女の名前であろう。傀儡にしている二人のうち、どちらかの女の名を取って、秘術の名にしたのではないか。みなわからないらしく、しきりに首を傾げていた。

「薫りが移るように」

ぼそっと初老の忍びが声を発する。だから、どうなのか。重要な部分は口にしないまま、口をつぐんだ。

「吉宗公の方は？」

長門の確認に、今度は力強くうなずき返した。

「すでに呪死術を施しておりますれば、これもあとは仕上げるのみ、たとえ加納蒼生が噂どおりの霊力を持っていたとしても、最後の最後まで見破ることはできませぬ。気づいたときには……」

吉宗公は死ぬ。

風の音のような囁きで、煙絵の蒼生が掻き消える。五色の煙がたなびき、暗闇に吸いこまれていった。

六人の姿はすでにない。

地面から生えるようにして、佇んでいた四体の土人形も、ひとつずつ地中に消えていく。若衆がもぐり、女がいなくなり、顔のない土人形が消え去ったあと、最後に残っていた娘が、静かに消滅した。かすかに残っていた五色の煙も、薫りだけを残して、完全に色が見えなくなる。

なまあたたかい風が、渦巻いている。

菊の芳香がひときわ強く匂い立っていた。

第三章　摩多羅神

一

なまあたたかい風に乗って、白い煙が部屋に入ってきた。次いで漂ったのは芳しい菊の芳香。

「あ」

乙葉が目を開けたときには、裸の美しい若衆がのしかかっていた。眠るつもりはなかったのに、春のような陽気のせいで、ついうたた寝していたのかもしれない。今は……真夜中なのだろうか。ここは深川の家なのか。あたりに満ちているのは深い闇ばかり、なにも見えない。

「あなたは、もしや？」

平岡理兵衛様のお相手だった菊之助という方ではないのでしょうか。乙葉なりに早口で問

いかけようとしたが、その唇は相手の唇で塞がれた。先刻、覚えた菊の薫りが、いちだんと強く匂い立つ。唇を塞がれているので、いやおうなく鼻から吸いこんでしまった。刹那、じぃんと甘く身体が痺れる。

「あぁ」

自然に開いた唇の中に、若衆の舌が差し入れられる。乙葉は自分から舌をからめ、やわらかく吸いあげた。接吻しながら、素早く帯と着物を脱がされる。ほっそりした裸身と、贅肉のない引き締まった裸体がぴたりと密着した。

「乙葉様、お逢いしとうございました」

想いをこめた囁きに、乙葉の胸は熱くなる。蜜壺も火照ってくる。それでも淫らに脚を広げたりはしない。もじもじと尻を動かして、せいいっぱい訴えた。若衆は首筋に舌を這わせて、乳房を優しく揉みあげる。埋もれるように隠れていた両の乳首が、くりっと迫り出した。焦らしたりはしない。少しだけ固くなった乳首を、指先でいじり、身体をさげていく。乳房に両手を残したまま、腹や脇腹に唇を這わせた。

「あはぁ〜〜〜ぁ〜〜〜〜」

乙葉はせつなげに悶える。本当は思いきり両脚を広げて、おねだりしたいのだが、恥ずかしくてそれができない。けんめいに両膝をつけて、抵抗する姿勢を取っていた。若衆はなだ

らかな恥骨に唇と舌を移動させる。ほとんど無毛と言っていい秘部を、あらわにさせようとして、恥骨や太股の付け根を嘗める。乳首をつまみあげ、くりくりといじり、巧みに乳房を揉みしだいた。

「見せてくださりませ」

脚を開こうとしない乙葉に、熱っぽく嘆願する。

「乙葉様のここが見たいのです。嘗めて、気持ちよくさせてあげたいのです。さあ、脚を開いてくださりませ」

促すように再度、菊の芳香が立ちのぼった。たゆたっていた白い煙が、手のような形になり、乙葉の両足首を摑む。ほんの少し開かれただけなのに、思いきり大きく両脚を開いていた。

「あ、いや」

羞恥に頬を染め、両手で顔を覆った。若衆は脚を閉じさせまいとして、さらに身体をさげる。剝き出された女陰を覗きこむような恰好で顔を寄せた。

「花の蕾が」

ほぅっと小さな吐息が洩れる。乙葉の女陰はまるで花の蕾だった。幾重にも花弁が折り重なり、芙蓉に似た蕾が貼りついている。それが固く、固く閉じていて、開く気配はまったく

なかった。若衆は花弁に舌をそよがせる。

「くぅ、うぅ〜〜〜ン」

下半身をくねらせたが、花蕾は開かない。しかし、すでに秘密を知っていたのだろう。乙葉の脚を高くあげて、赤児のオムツを取り替えるような恰好にさせた。後ろの菊花をあらわにするや、にゅるりと舌先をもぐりこませる。

「ひ！」

と、くの字の姿勢で裸身を引き攣らせる。女陰同様、最初はすぼまっていた菊花がほころび、わずかにゆるむ。すかさず舌先を菊穴（アヌス）に差し入れると、えもいわれぬ薫りがあたりに広がった。ほんのりと甘やかな、花の芳香である。

「ああぁ〜〜〜」

だらしなく両脚がゆるみ、女陰を広げる。固かった蕾が開き始めていた。一枚、また一枚と、花弁がゆっくり咲いていく。若衆は薫りにそそられてしまい、満開になるのが待てない。咲くのを手伝うように、花弁に舌をゆらめかせた。乳房の愛撫も再開し、両掌で揉みあげる。前よりも大きくふくらんだ乳首を指先で刺激する。

「だ、だめっ、はぁっ、うふぅ〜〜ぅ〜〜」

乙葉は尻をよじり、頬を染めて、喘いだ。花蕾は舌の動きに助けられて、早くも満開に咲

き誇る。中心部にそそり立つ花芯が肉色に色づいていた。舌を小刻みに蠕動させて、屹立(きつりつ)するそれを嘗める。早く達かせたかったのだろうが、決して焦りはしない。乙葉の性格に合わせて、あくまでも優しく、なよやかに舌を動かした。

「うっ、うぅ〜〜、あ、いい、いいぃ〜〜〜〜」

もう絶頂にしか気持ちは向いていない。これ以上、広げられないほど両脚を開き、若衆の頭をかかえるようにしている。花芯を愛撫されるにつれて、閉じていた蜜壺もゆるみ、さっきよりも強い薫りが流れた。あふれ出した蜜を使って、若衆は二本の指を挿入させる。くちゅっという淫らな音があがった。

「ぅふうっ」

魚が跳ねるように、白い両脚がぴんと伸びる。愛撫の手も舌も止まらない。左手で乳房を揉みしだき、花芯を熱心に嘗め、二本の指で蜜壺の肉襞をこすりあげた。奥の壺芯がふくらんでいる。さわってほしくて、ひくついている。が、ここで初めて焦らした。肉襞は撫でこするものの、奥まで指を挿れようとはしない。

「は、はあぁっ、も、もっとぉっ」

両膝が乳房にくっつくほどの屈曲位を取っている。奥まで挿れてほしくて、蜜壺をも広げんばかりに恥ずかしい姿態を曝していた。くちゅぴちゅという濡音は、重めの濡音に変わり、

芳しい蜜が若衆の指を濡らしていた。指の動きに合わせるように、白い尻が小さく震える。むろん、激しく揺らしたりはしない。花芯から舌が外れないようにしながら、蜜壺の奥に指を誘っている。

「お、ね、がい、ふうふうぅ〜〜、も、もっと奥、あひぃっ」

とうとう指が壺芯を突いた。なめらかに、しなやかに、張りつめた奥のふくらみを撫であげる。花芯を嘗める舌の動きも速くなる。淫らな音が大きくなり、独特の芳香が立ちのぼる。もっと速く、ああ、舌と指を動かして、そう、ああ、そう、奥を突いて。願いをかなえるように、若衆は指先を震わせて壺芯をこすった。指先が揺動（ヴァイブ）している、舌は花芯に吸いついて離れない。

「あ、あ、あ」

もう。

「ぅくうっ、達くう〜〜っ、い、達きまするぅ〜〜〜〜っ」

ぴんと四肢を突っ張って、絶頂に包まれた。眩（まばゆ）い白光が視野を染め、一瞬、失神しかける。右の乳房を愛撫していた若衆の左手が、きつく握りしめられる。快感を共有するような、この仕草が嬉しくて、尻の痙攣が激しくなる。

「ううううぅ〜〜ぅ〜〜〜」

ぶるっ、ぶるぶるっと尻が揺れたとき、頭にぽんっと花が咲いた。乙葉は絶頂を迎える度に花が咲くのだが、いつもは芙蓉そっくりの花であるものを、今回はなんと純白の菊。真綿のような色合いでありながら、金属のように硬質的な光を放つ菊の花であった。乙葉の蜜から放たれている薫りも、微妙に変化していたが、本人はまったく気づいていない。

「今度はわたくしの番でございまする」

若衆は立ちあがり、乙葉の顔に跨るようにして、逸物を唇に押しあてる。すでに完全な勃起状態、菊の芳香がふんわりと鼻腔をくすぐった。

「は、はい」

目元を赤く染めた乙葉は、もはや言いなりだ。可愛らしい唇を開き、隆々といきりたつ男根を口に含む。亀頭に舌を這わせ、両手を側面部に添える。力を入れないようにして、しごきながら、奉仕した。乙葉の乳房や女陰には、だれも触れていないはずなのだが、闇の中から白い菊が伸びている。快感部位に貼りつき、踊るように茎をくねらせていた。中心部に淫靡な舌を持つ異形の花だ。

「あぁ、お、乙葉様」

若衆は吐息のような声をあげる。動かすまいとしても尻が揺れてしまうのだろう。ひくひくと前後に揺れている。乙葉は横たわったまま、熱心に尺八を続けた。小さな口をできるだ

け大きく開いて、喉の奥まで呑みこむ。ちゅーっと唇をすぼめるようにして、尖端部に舌を戻した。円を描くように舌をまわしたり、震わせたりする。

「ふうっ、いいっ、うふうふうっ」

いっそう喘ぎ声が大きくなった。自分の愛撫で悶えるさまに、乙葉も刺激される。高まった気持ちを察したにちがいない。花芯に貼りついている菊が、疑似舌を巧みに揺らめかせた。蜜壺係の菊は、疑似男根に変化して、ぐっと蜜壺に侵入する。

「むぐぅっ」

思わず歯をたてそうになったが、こらえた。たおやかな肢体に真っ白な菊がへばりつくさまは、春画など問題にならないほどの艶(なまめ)かしさ、闇の中に若い二人の裸身がひときわ美しく浮かびあがっている。

「んぅっ、うふうっ、ふうふぅ〜〜っ」

若衆の腰の動きが、速くなった。欲望に応えて、乙葉は舌を震わせる。指で男根の側面部をしごきあげる。乳房と花芯に貼りついている白菊も、呼応するように疑似舌や男根を操った。二度目の絶頂が訪れようとした瞬間、

「ぐ!」

唇を噛みしめて、若衆は男根を口から引きぬいた。

「あ……」

落胆する乙葉の蜜壺を、思いきりつらぬく。

二

「あはあぁっ」

落胆は最高の悦楽に変わる。子宮をずんっと突かれて、とけるように全身が痺れた。若衆は逸物を挿入させたまま、乙葉を抱き起こして向かい合わせの座位になる。

「お、乙葉様の蜜壺に、はあはあ、出したかったのでございます」

だから尺八に耐えたのだと告げていた。

「嬉しゅうございまするぅっ」

じゅんっと心も下半身も燃えあがる。荒馬を乗りこなすように、乙葉は尻を沈めたり引いたりした。あるいは花芯をこすりつけるようにして、前後に振ったりもする。じゅぶっ、ちゅぶじゅぶっという、はしたない濡音があがり、水飛沫ならぬ蜜飛沫が飛びそうだった。若衆も負けじと腰を突きあげる。

「ふうっ、うくうぅっ」

吐精を一度、こらえている。そのため、男根は蜜壺内でぱんぱんに張りつめていた。乙葉

は肉襞で充分すぎるほどそれを味わい、ぐっと深く腰を沈める。硬くて逞しい逸物が、壺芯をもろに突いた。

「ぐぅっ」

獣のような呻き声が洩れ、背中が綺麗に反り返る。迫り出す恰好になった乳房に、若衆はむしゃぶりついた。尖った乳首を軽く咬み、きつく吸いあげる。そうしながら、後ろの菊花にも指を這わせた。飛び散らんばかりの蜜飛沫が、尻の方まで流れている。それを指にからめて、菊穴をむにゅっと押し開いた。

「おう！」

乙葉らしからぬ大声があがった。また達きそうになる、すぐそこに絶頂が迫っている。二人は胸をくっつけ、蜜壺と男根を密着させる。若衆の指が少しだけ菊穴に侵入した。いちだんと蜜壺が狭くなる。

「あ――――」

震えるような乙葉の歓喜声に、押し殺した声が重なった。

「ぅぐぅ！」

どっと精があふれ出し、蜜壺内が灼熱する。乙葉は恍惚状態、またしても視野が白光に染まって動けない。抱きしめられて、失神しかけていた。二人はまるで一匹の獣のように繋が

っている。同時に硬直し、同時に痙攣し始めた。

「ううぅ〜〜〜ぅ〜〜〜〜」

歯の隙間から声を振り絞り、乙葉は虚ろな目を彷徨わせる。ゆっくり横たわるその頭で、二輪目の白菊が音をたてて咲いた。若衆は名残惜しげではあったが、男根を抜き、躊躇することなく女陰に唇を寄せる。濡れそぼり、開ききっている花弁を愛おしげに嘗める。

「あぅ」

達ったばかりの淫らな姿で、小さく呻いた。両手は若衆の背中にまわした形で宙に浮き、両脚はカエルのように広げたままである。蜜と精で濡れているのに、かまわず嘗めてくれるのが嬉しかった。

「うふぅ〜〜、あぁ〜〜、いいぃ〜〜〜〜」

蜜壺から流れる愛液は、いまや完全に菊の薫りになっている。乙葉はむろん気づくはずもなく、ひたすら快感に浸っていた。暗闇から伸びた二輪の白菊が、仰向けに横たわる乙葉の両腕を摑む。起きる意思はないのに起きあがって、若衆の顔に跨っていた。

「あ……なりま、せぬ。お、お顔が」

汚れまする。

はっと正気づいて腰を引きかけたが、強く花芯を吸われた。

「ひぅ！」

背中を反らせて、硬直する。若衆はがっちり乙葉の尻をかかえこみ、逃がさない。くぐもった声で告げる。

「存分に」

達けと言っていた。顔が濡れてもいいのだと言っていた。情のある房事のせいで、慣れ親しんだ若夫婦のような感覚になっている。そんなものは錯覚にすぎないのだが、乙葉は夢心地だ。

「はあぁ〜〜、き、菊様ぁ〜〜〜〜」

勝手に名前を呟き、跨った姿勢でうっとり頬を染める。若衆の舌は花芯をなだめるような、優しい嘗め方になっていた。右手の指で蜜壺を探り、左手の指で後ろの菊花を撫でている。ゆるやかな快感の中を漂っていたが、徐々に花芯が硬く勃ってくる。乙葉は自分の両手で乳房を握りしめ、やわらかく揉みあげた。

「んむぅ〜〜〜〜、ふうぅ〜〜〜ぅ〜〜〜」

先刻の恥じらいはどこへやら、今は若衆の美しい顔をあふれ出る蜜で濡らしている。舌技が強すぎると尻をあげ、弱くなって不満だと花芯を唇に近づけた。自在に調節しながら、快感の狭間を漂っている。頭に咲いた二輪の白菊が、動きを表すように揺れている。不意に舌

の動きが速くなった。

「んん、んぅ〜〜、だ、だめ」

尻をあげようとしたが、そうはさせじと若衆がかかえこむ。二度も達った身にとっては、強いぐらいの舌技の方が感じやすくなる。女体を知りつくした者であるがゆえの、やや強めの愛撫だった。多少、舌を強く押しあてているが、苦痛を覚えさせたりはしない。舌先をゆらめかせ、小さく震わせる。ときおり吸いあげながら花芯を刺激する。

「あっ、ああっ、あぁぁ〜〜〜っ」

乙葉は動こうにも動けない。尻をかかえこまれて、弓なりに反り返る。ひとまわり大きくなった乳房をぎゅっと握りしめると同時に、

「ぅくうぅ」

また。

「い、い、達き、達きまするぅぅ〜〜〜〜〜っ」

ふうふうと喘いで、歓喜声を発していた。乳房に指がくいこみ、乳首が迫り出している。一瞬、裸身が強張ったものの、すぐさま尻が激しく震えた。ぶるぶるっ、ぶるぶるっと痙攣し、全身に広がっていく。何度目かの白光が脳裏を染めあげたとき、ぽんっと音をあげて、三輪目の白菊が開いた。芳しい薫りがふわーっと立ちのぼる。

「お、乙葉様っ」

感極まったように、若衆が身体を起こした。乙葉の後ろにまわると、洪水状態の蜜壺めがけて男根を挿し入れる。後背位で一気に奥までつらぬいた。

「ふん！」

「あふぅっ」

尻を高く掲げて、乙葉は声をあげる。達ったばかりなのに、また感じてくる。絶頂に包まれそうになる。それを察したらしく、男根で巧みに蜜壺内を責めた。肉襞をこすりあげては、奥の壺芯をちょちょんと突いたりする。ぐるりとまわすように動かしては、ずんっと突く。蜜壺の肉襞と壺芯が、男根を締めつけるように狭まったり、やわやわと蠢いたりした。お互いの快感度を察するほどに、悦楽が深まり、燃えあがる。

「あひぅっ、あうぅっ」

髪を振り乱す乙葉同様、若衆も声をはりあげた。

「おぉっ〜〜っ、おうううぅ〜〜〜っ」

尻の肉を摑んで、腰を突きあげる。蜜壺奥の壺芯が、亀頭を包みこむように広がっては、小刻みに震えた。内部に別の生き物がひそんでいるかのよう、若衆は夢中で腰を使う。ひくついている乙葉の菊花に気づき、再度、蜜をからめて指を挿入させた。

「くうっ」

乙葉は顎をあげて、のけぞる。感じすぎてしまい、花芯が痺れたようになっていた。達きたいのに、なかなか達けない。より強烈な刺激を求め、細い指で手淫（オナニー）を始めた。自分が感じることによって、若衆の快感がより高まる。相手を思うがゆえの指戯だった。後背位で責められながら、ふくらみきった花芯を自分で愛（め）でる。細い指を濃やかに動かして、ともに達こうとする。

「き、菊様ぁ〜〜っ、はあはあ、い、一緒に、一緒にぃ〜〜〜っ」

悲鳴のような嘆願だった。花芯はぷっくりふくらみ、かなり太めのメシベになっている。必死に細い指を震わせて、絶頂を引き寄せた。

「あっ、あっ、あっ」

だめ、でございまするぅ。

「お、乙葉様！」

二人同時に達っていた。乙葉はもう声にならない。喉のあたりで詰まった歓喜声を発している。

「――――」

白光が脳裏に広がり、菊の薫りが濃密さを増した。蜜壺内にあふれ出た精で、尻が大きく

震える。音をたてて咲いた白菊は、これで四輪目。

「うふうううぅ～～～～～ぅ～～～～～～」

深呼吸するように、長い喘ぎ声を洩らした。白光は消えない。脳裏に刻みつけるように、眩く輝いている。

「も、もっとっ、もっとぉっ」

乙葉の身体からは、菊の強烈な芳香が立ちのぼっていた。

三

菊の薫り。

蒼生はふと乙葉を見やった。二人は下谷にある対馬藩の上屋敷に忍びこんでいる。時刻は昼間の八つ時（午後二時前後）、依頼主の対馬藩御留守居役が『大角』を訪れてから、三日が過ぎていた。極秘行動であるため、当然のことながら座敷にいるわけではない。黒装束に身を包み、天井裏に忍びこんで、屋敷内の様子を探っていた。

「あら、おかしいわね」

鼻をひくつかせるが、菊の匂いは消えている。代わりに感じたのは、甘い蜜のような薫りだった。乙葉の体臭とはまた異なる匂いである。

「蒼生様、どうかなさいましたか」

囁き声で言い、蒼生の眸を覗きこむ。これらの会話はほとんど聞き取れないほどの声で行われている。午後になってから、藩邸は人の出入りが激しくなっていた。気取られてはならない。

「なんでもないわ。菊の匂いを感じたように思ったのだけれど」

「菊」

と、乙葉は考えこむ。先を促さないと、明日の朝まで同じことをやりかねない。蒼生は小声で聞いた。

「なにか気になることでもあるの」

「あ、はい。先日、そう、平岡理兵衛様のあとを尾けていたときのことでございます。わたくしは姿を見せないようにして、蒼生様の警護をいたしておりました。あのとき、菊の薫りを感じたように思うのです。それ以外にも、どこかで同じ薫りを嗅ぎ……白い光と白菊を見たように思うのですが」

そこでまた自分の世界に突入する。真似るわけではないが、蒼生も理兵衛を尾行したときのことを思い出していた。

あたしは甘い蜜の薫り、でも、真琴は紅梅のような薫りだと言っていた。場所は違うけど、

同じ日に美弥は御城の厩舎近くで蓮の花を思わせる芳香を感じている。そうそう、赤い炎の幻像を視たとも話していたっけ。お銀は土の臭いだと言っていたから関係ないにしても、乙葉は菊の薫りをとらえていた。それぞれ匂いが異なるのは、どういうことなのかしら。気になるわね。

「初音のお夏」

さっきの乙葉のように、考えこんでいた。ふと思い出したように花娘が意見を述べる。

「このあいだから、よく初音という言葉を耳にいたしますが、その初音と申しますのは、もしや、香の名前ではないのでしょうか。確か細川家に伝わる名香に、そのような名を持つ香があったような」

「あっ」

思わず大きな声をあげそうになった。そうだ、香の名前だ。どこかで聞いた覚えがあると思ったのは、香道を習ったときに聞いた名前だからにちがいない。蒼生は武家娘のたしなみとして、茶道や華道、三味線、踊り、剣技の他に、香道なども無理やり習わされていた。あまり熱心な生徒ではなかったのは言うまでもない。思い出せなかったことに、それが表れている。

「よく覚えていないけど、初音というのは一番有名な香の銘で、他にもいくつかの名前があ

ったような気がするの。つまり、敵は薫りを操るか、もしくは、薫りに関係した術を使うってことかしら。初音のお夏は大勢の中のひとり、他にも傀儡がいる可能性が高いわね。あんたもそいつに術をかけられちまったんじゃないの？」

頭巾越しではあるが、乙葉の額に手をあててみる。美弥はようやく熱がさがり、元気になっているが、大事を取って壽屋の留守番役だ。これ以上、仲間たちの具合が悪くなるのは困る。

「熱はなさそうだけど」

「わたくしは大丈夫でございます。夢で若衆に出逢うたような感じもするのですが、それは、それは、いい夢でございましたので」

陶酔したように目元を染め、眸を煌めかせた。本当に大丈夫なのだろうか。これといった症状が出ないのが、逆に不気味でもあった。

「油断しちゃだめよ。充分、注意してちょうだい。最初に三妖娘を狙ったのだとすれば、次はお銀。あの娘は霊力が強いから、心配ないとは思うけど」

お銀は真琴とともに、対馬藩から依頼のあった菩薩像について、盗人横丁や闇市などをあたっている。加えて、平岡理兵衛と衆道関係にあった若衆のことも調べていた。真琴はさほど気にかけていないが、蒼生は渡り小姓である若衆の仕官先、幕府大学頭林家の存在が引っ

かかっている。

「人手が足りないわね。壽屋は臨時休業にして、美弥も駆り出さないと」

「蒼生様」

乙葉に手招きされて、探索用の覗き穴のひとつに進んだ。重要な部屋の天井に、節穴を利用して、できるだけ目立たないように覗き穴を造ってある。乙葉が示したのは、藩士たちが詰めている部屋だった。

「ご覧くださいませ。おいでになりました」

目当ての人物が現れたのだろうと思い、覗きこんだが、想像していた男はいない。

「どこよ」

「あそこでございます。雪隠（せっちん）にでも行っておられたのでしょうか。さきほどまではいらっしゃらなかったのに、ほら、池田半九郎様があそこに座っておられます」

「ば、馬鹿っ」

かっと耳まで赤くなる。乙葉は怪訝そうに首を傾げた。

「ちがうのでございますか」

「あ、あたりまえでしょ。あたしが待っていたのは、このあいだ依頼に来た留守居役の男よ。あの男の言葉が、どうにも信用できないんで、事実かどうか確認しようと思って、ここに来

たのよ。半九郎様のことは関係ないの。知りたいのは菩薩像が本当に盗まれたかどうかであって」

本当にそうなの。それだけのために忍びこんだの？

自問が湧いた。

依頼のことを調べるためと、自分に言い訳しているのではなくて？　半九郎様の顔が見たくて忍びこんだんじゃないの？　半九郎様の求婚が、本当なのか偽りなのか、知りたくて来たんじゃないの？

それもあるわ。

否定できなかった。半九郎はあの留守居役に命じられて、壽屋を訪れたのかもしれない。自分たちの捜査を攪乱するために、わざと求婚したのかもしれない。そうだとすれば、目的は半分ほど達せられたことになる。なぜならば、蒼生の胸は掻き乱されて、半九郎のことばかり考えているからだ。

ひと目、見たときから忘れられなくなり申した。拙者の妻になってくだされ。

響くのは求婚の言葉ばかり、ちらつくのは半九郎の顔ばかり。それらを振り切るように、蒼生は小さく頭を振った。

「とにかく、あたしはね。あの依頼人がなんとなく怪しいと……」

この声。

あわてて穴を覗きこむ。池田半九郎たちが詰めている部屋に、痩身の中年男が現れていた。声と鋭い眼光に覚えがある。今回の依頼人だ。

「これは小菅殿」

藩士たちがざわめき、深々と頭をさげる。留守居役は江戸家老と直に接する役目であるが、藩内では相当な権力を持っているのかもしれない。頼りない留守居役もいれば、やり手もいる。小菅玄蕃は後者のようだった。ひとり、ひとりに目をあてて、短い言葉をかけていたが、半九郎の前で足を止める。

「聞いたぞ、池田」

かがみこんで、囁いた。小声ではあるものの、どうにか聞こえる。蒼生は全神経を耳に集中した。

「いい相手を見つけたそうではないか。仲人かかに行ってみればよかろうと申したのが、確か半月ほど前のこと。女子は苦手のように思えたが、なかなかどうして、貴公も隅におけぬな」

なるほど、そういうことなの。壽屋を薦めたのは、直接の上司ではなく、小菅玄蕃だったわけね。これはますます怪しくなってきたわ。

半九郎は右筆のお役目に就いている。上司は言うまでもなく右筆頭だ。しかし、壽屋の情報を吹きこんだのは、あの男。疑惑は強くなったが、半九郎は真っ赤になっている。先刻の自分を見ているようで、蒼生もまた頬を染めた。

「あ、い、いいえ、まだそのような話にはなっておりませぬ。おかしいですな。だれにも話しておりませぬものを、どこから洩れましたのか」

しきりに首をひねっている。玄蕃は嗤って、告げた。

「字が乱れておる」

短く言い、続ける。

「それにこのところの様子を見ておれば、だれでもわかるわ。落ち着きがないことこのうえない。おまけに心ここにあらずといった様子でもあるとか。書き損じも少なくないと聞いた。字の乱れはともかくも、書き損じはまずいぞ。貴重な紙が無駄になるゆえな」

「ははっ、お、おそれいりましてございまする」

たかが女のことで、お役目に支障をきたすとは言語道断。とばかりに平伏する半九郎を、玄蕃は鷹揚に慰めた。

「気にするな。貴公も男だったのだと、しみじみ思っただけよ。女子に興味はないのであろうと、妙な勘ぐりをする連中もおったからな。安堵いたしたわ」

肩を叩いて申し出る。

「早う話をまとめるがよい。仲人はご家老様が引き受けてくださる。近いうちに結納だけでもかわしてはどうだ」

「えっ、まことでございますか？」

表情が明るく輝いた。それを見て、蒼生はほっとする。半九郎は無関係だ。小菅玄蕃から壽屋を薦められて来たにすぎない。自分に対する気持ちや求婚は偽りではなかった。だが……玄蕃に対する疑惑は消えない。

「おお、貴公がその気であれば、いつでも壽屋に同道しようぞ。上司として付添役になろうではないか」

「ありがたき幸せ、そのせつは宜しくお願いいたしまする」

座がなごんで、さらにざわめく部屋から、玄蕃はそっと出て行く。蒼生たちはあとを追って、天井裏を移動した。

四

玄蕃は江戸家老の居室に入る。人が来ないのを慎重すぎるほど確かめたうえで、障子戸をゆっくりと閉めた。

「どうだ？」

待ちかねていたように、家老が訊ねる。留守居役は諸藩との交渉を行う外交官だが、藩士たちは組頭などの上級藩士が束ね、江戸家老は留守居役や上級藩士らの報告を統括して江戸屋敷を代表し、国元との連絡にあたるのが役目。半九郎の様子を聞いたのか、他の事柄なのか、曖昧な質問だった。

「は。すべてつつがなく進んでおりまする。菩薩像を見つけ出すのは至難の業、しばらくは時間稼ぎができましょう。危険な賭ではございますが、この件さえ丸くおさまれば、あとはいつもどおり、我が藩にはなんのお咎めもございませぬ。少しの間ご辛抱くださいませ」

「ふぅむ」

重い吐息に、すべての答えが示されていた。玄蕃はじりっとにじり寄って、できるだけ会話が外に洩れないようにする。

「仕方ございませぬ。引き受けなければ、われらは間違いなく切腹となりましょう。取引相手を信じるしかありませぬ」

「だが」

不安げに揺れる心を、押し留めるように言った。

「すでに動き出しておりまする。引き返すのは、もはや不可能。前に進むしかありませぬ。

対馬藩は朝鮮国や唐国との取引で成り立つ藩、万が一にもあの件が洩れてはなりませぬ。下手をすれば改易、うまくいったとしても所替え、殿にまで類が及びまするは必至、なんとしても隠しとおさねばなりませぬ」

山がちな対馬では、水田は少なく、ほとんどが畑と木庭であった。木庭とは森林原野を焼き、その灰を肥料として耕作する焼畑農業のことで、焼いてから二、三年で麦・蕎麦・アワ・マメなどを作り、また十年ぐらいは放置する原始的な農法である。つまり、土地からの収穫で生きている大名ではない。その代わりに行われてきたのが、朝鮮との貿易だった。対馬藩の貿易額は年平均、五万両、多いときには十万両にものぼっている。十万両は知行の石高に換算すると、二十万石にあたるのだが、すべてにおいて特殊な藩といえた。だが、時代とともに貿易の収入は減少し、家老は吐息をつくことになる。

「昔はよかった」

思いを馳せるように遠い目をした。

「銀の産出も多くてのう。朝鮮国との貿易においても、我が藩で産出した銀でまかなえるほどであったものを、近頃ではとんと量が落ちておる。人参にしても然り、輸入量が大幅に減って、思うように儲からぬわ」

人参は言うまでもなく、朝鮮人参のことで、他の品物も取引していたが、藩のもっとも大

きな収入源が人参だった。しかし、朝鮮人参は無限にあるわけではない。成長するのに時間がかかるうえ、乱作しすぎたことにより、需要は増えるものの、品質を保てない状況になっている。

「仕入れる人参のすべてを、『上』として売ってはいかがでございましょうか」

玄蕃はさらに膝を寄せて言上した。人参は朝鮮から一括して仕入れたものを、対馬藩の方で選別し、『上』と『座売り』に分けている。値段の高い上物の方が、効き目もいいらしく、いつでも品薄状態。『座売り』はかなり品質が落ちる人参なのだが、どうせならそれも高く売ってしまえというわけだ。

「それは江戸の人参座が納得するまい。やつらも商売柄、品質の違いを見る目は持っておる。おそれながらと、お上に訴えられたらなんとする」

人参座は対馬藩が委託している人参問屋のことだ。金座や銀座は幕府の支配によるものだが、仕組みはほとんど同じであり、人参座の主たちは、江戸における人参の販売を請け負うことによって、売上高に応じて一定の口銭を得ている。人参座などといった座を持っているのも、他藩にはない仕組みで、こういったところにも対馬藩の特殊性が表れている。

「儲けを少し増やしてやれば、文句は申しますまい。品薄状態が続き、人参座も四苦八苦の有様、黙って協力いたしまする。このままでは我が藩の存亡にかかわる事態、朝鮮通信使が

訪れたときの費用ですら、幕府から借りなければならない状態が続いております。借金はふくれあがるばかりで、どうにもなりませぬ。せめて人参で儲けなければ、首がまわらなくなりましょう」

朝鮮通信使は、将軍が交代したときや、天皇崩御のときなどに、日本を訪問するならわしになっている。吉宗が八代将軍に就任した際にも、仕方なく接待費用を幕府から借り入れていた。不景気な世相が、そのまま対馬藩の内情なのである。

「仕方あるまい。そちにまかせる」

「ご不満はありましょうが、連中のお陰で、別の儲け口が見つかったのもまた事実。かねてより例の品物も取引しておりましたが、このところ、前よりもずっと高値がつくようになり申した。もっと高値をつけても、買い手はおりまする。われらから見れば、なぜ、あのようなものに大枚を払うのか、理解しかねまするがな。売れれば文句はありませぬ。ゆえに、あの連中ともうまく折り合っていかねばなりますまい」

「うむ」

いちだんと渋面になった家老の目を、探るように玄蕃は覗き見る。

「他にもなにかございましたか」

「上様よ。愛馬が行方不明になったとかでのう。新しい馬が手に入らぬかと、内々にご通達

があった。二年前にも無理だとお断りしたのだが」
「唐国の馬を、とご所望なのでございまするか」
「うむ。今回も手に入れるのはむずかしいと、馬の件については、すでに返答を出しておる。馬については、これ以上の我儘は申されまい」
それだけではないと、次の難問を表情で告げていた。いやな胸騒ぎを覚えつつ、確認する。
「他にもまだなにかございますのか」
「嵐で大坂に漂着した朝鮮船のことよ。調べたき儀があるゆえ、江戸にまわせと言うてきおった。通常は長崎に送って、我が藩に引き渡すものを、いったい、なにを調べたいというのか」
今度は家老が確かめるように聞いた。
「荷の方は片がついておろうな。よもや、船に残っているようなことはあるまいな」
「ご案じなさいますな」
にやりと、玄蕃は薄く嗤う。
「こんなこともあろうかと、大坂の役人には、常日頃より賄賂を充分につかませております。船が漂着した際も、江戸に知らせるより先に、われらのもとに知らせがまいりました。すぐさま大坂に赴き、船の荷を確かめたうえで、大坂の商人に『例の品物』を売り渡しておりま

す。江戸まで運ぶ時間がございませんでしたゆえ、地元でと思い、即、行動に移った次第。あれは江戸でも高値がつきまするが、西国の方がさらに高値で売れまする。大坂商人が大喜びで、引き取り申した。万が一にも露見するようなことはございませぬ。ご安心を」

「そう、か。荷に関しては心配あるまい。しかし、船員たちがなんぞ喋るやもしれぬ。口止めしたとしても、それこそ金でもつかまされれば、ぽろりと真実が口をついて出るやもしれぬ。どうする？」

家老職にはあるものの、なにもかも玄蕃まかせだった。もっとも、その方がこちらとしてはやりやすい。すでに解決法が浮かんでいる。

「拙者におまかせくださいませ。あのお方にご相談いたしまする。さすれば、迅速にことが運びましょう。だれが騒いでいるのか、おおよその見当はついておりますが、あのお方が動いてくだされば……」

突如、天井で女の叫び声が起こった。だれもいるはずのない場所から、甲高い悲鳴が響いている。

「ひっ、ひえぇ～～っ、きゃあぁ～～～～っ」

「お、乙葉っ、どうしたの!?」

蒼生は狼狽して、とっさに唇を押さえた。それでも悲鳴をあげ続けている。目で右手を示していたが、別にこれといった変化はない。

「落ち着いて、乙葉。いったい、なにがあったのよ。怪我でもしたの？」

のんびり話していられなかった。屋敷内は大騒ぎになっている。

「であえっ、曲者ぞっ」

「天井にひそんでおるっ、引きずり出せ！」

「逃げるわよ。いいわね、乙葉。唇を離すわよ。叫ばないでちょうだい」

ようやく絶叫するのをやめた乙葉に、何度も念を押した。小さくうなずき返したその目は、異様に怯えきっている。天井裏を見まわしたが、おかしな邪気は流れていない。蒼生と同じ場所にいて、同じことをしていたのに、乙葉はなにを見たというのだろうか。

「おいで」

とりあえず、今は逃げるしかない。外はまだ明るくて、逃走には適していないが、これまた文句を言っている暇はなかった。なるべく人の気配がしない部屋を探して、下の部屋に降りようとする。が、すぐにだれかが姿を見せた。この分では庭を横切るのは無理かもしれない。

「だめだわ。屋根に出て、逃げ道を探しましょう。こっちよ、乙葉」

乙葉の手を握りしめて、天井裏を移動した。怖れが消えないのか、小さく震えている。屋根に出る小さな穴、空気穴のような出口を見つけ、そこから顔を突き出した。なんとか通りぬけられる。

「早くおいで、気をつけるのよ」

先に屋根に出て、乙葉の手を引っ張った。きょときょとと怯えた目が忙しげに動いている。詳しい話を聞きたかったが我慢した。

「いいわね。あたしのあとについて来て」

子供に言い聞かせるような口調になる。いつもなら無言で逃げるのだが、不安でならなかった。またさっきのように恐慌状態になったら、庭で立ち往生しかねない。人がいないのを充分すぎるほど確かめたあと、蒼生は庭に降り立った。早く、と、手で合図して、乙葉を呼ぶ。

「いたぞっ」

「来いっ、こっちだっ」

藩士たちが、集まって来てしまった。午後の陽ざしの中、今日も小春日和だというのに、平和な光景とは不似合いな黒装束の女が二人である。しかも屋根から降り立ったという、言い訳しようのない状況だ。

「何者だ？」

「手向かいすれば叩っ斬る」

問いかけと警告が発せられたが、むろん、おとなしくお縄になるつもりはない。屋根から降りた乙葉を庇うように、蒼生は藩士たちを睨みつける。腰の後ろに挟んでおいた葵十手を出そうとしたが、使うことにためらいがあった。

玄蕃と家老の会話を聞いた限りでは、単純な盗難事件とは考えにくいわ。どうも裏がありそうな気がする。ここでお上の権威をひけらかすと、よけい厄介なことになるかもしれない。

「乙葉、連中を威嚇して」

小声で命じたが、返ってきたのは弱々しい声。

「で、できませぬ」

今にも座りこみかねない様子だった。蒼生の背中に覆い被さるようにして、やっと立っている。無理となれば、あとは強行突破しかない。じりじりと前に出て、いちばん守りの薄い箇所を探した。

半九郎様。

遅れて駆けつけた半九郎が、驚いて目を丸くしている。吸い寄せられるように蒼生は走った。よろめくような足どりで、乙葉も必死について来る。

「逃げるぞっ、斬りかかれぃっ」
頭らしい男の声と同時に、蒼生は空中高く飛翔する。無理かと思ったが、乙葉も右に倣えでふわりと宙を舞った。
「お、お」
「おおおぉ～～」
ぽかんと仰ぎ見る男たちの頭上を、二人は軽々と飛び越える。あとは塀めざして突っ走った。
乙葉の身にも異常が起きている。お銀は大丈夫だろうか。真琴とともに菩薩像の在処を探っているが、果たして、本当に存在する菩薩像なのか。
菩薩像を見つけ出すのは至難の業。
玄蕃の言葉が繰り返し響いている。消えない疑惑が、蒼生の胸にあった。

五

本当に左甚五郎の菩薩像などがあるのか。
真琴もまた同じ疑問をいだいていた。
「ふう。どういうことであろうか。あれだけ訪ね歩いたというに、そういう菩薩像の存在す

ら知る者がおらぬとは」

上野寛永寺の門前で、お銀を振り返った。真琴は町娘といった髪型に着物姿、お銀は渋い色目の着流し姿で、なるべく目立たないように装っている。この三日間、古物商や盗品を扱う闇市などを探しまわったが、菩薩像の手がかりはなにひとつ得られていない。左甚五郎作という部分で、古物商のだれもが、それは眉唾ものの話ではないかと答えた。さすがに信じられなくなっている。

「これも加納様にお訊ねしてみるしかあるまいな」

情報交換をかねて、覚兵衛とここで待ち合わせていた。重要な話があると言っていたが、あれは池田半九郎のことに決まっている。

「上様も気が気ではないのだろう。しかし、蒼生様のお気持ちが、今ひとつわからぬ状況では……」

ひとりごとのように呟いていたが、お供のお銀はぜんぜん聞いていない。

「真琴様、わたくしは林家に行ってみます。蒼生様はあの渡り小姓が気になっているご様子、林家のことも調べてほしいようですので」

「確かに怪しげであり、妖しげでもある小姓であるゆえ、蒼生様が気になさるのは理解できる。調査せよとの仰せも当然であろう。が、今ひとつわからないのは林家のことだ。どうし

て、あれほどまでに執着なさるのであろうな」

「わたくしは知らなかったのですが、蒼生様によると、幕府大学頭林家は、幕府の朝鮮外交担当者であるとか。対馬藩とも密接な繋がりがあるからと申されておりました。妖術師はそれらのことを考えたうえで、渡り小姓を潜入させたのではないかと」

「う」

そ、そうであった。林家は朝鮮との外交を受け持っているのだったな。わたしとしたことが失念しておったわ。迂闊であった。

内心、あわてふためいていたが、姿は女でも心は侍。お銀の前で醜態をさらせない。知らなかったとも言えない。

「なるほど。さすがは蒼生様、読みが深くていらっしゃる。おそらくはそうであろうと、わたしも思っていたのだ。知らぬふりをして、真実を引き出そうとしたまでのこと。決して気づかなかったわけでは、お銀？」

言い訳を聞いているほど暇ではなかったようだ。お銀の姿はすでにない。ついぶつぶつと愚痴が出た。

「人の話は最後まで聞くものだ。両親からそのように、あ、お銀は妖怪ゆえ、親はおらぬか。これだから妖怪というやつはけしからん」

あたりを念入りに見まわしてみたが、覚兵衛が現れる気配はない。来るまでの間、ついでにお詣りをしようと、境内を進んで行った。

上野寛永寺は天台宗の総本山で、天海が徳川家光の時代に、幕府の援助を受けて建立したとされている。東叡山の山号を持ち、増上寺とともに将軍廟所であり、享保時代までには、四代将軍家綱公と、五代将軍綱吉公の亡骸が納められている。一説には御城を守るために建立された鬼門封じの寺とされているが、これに関しては定かではない。将軍家に仕える真琴にとっては、尊い寺といえた。

「蒼生様をお守りくださいませ。姫君であるのに名乗れないお気持ちを、お察しくださいませ。そして、池田半九郎殿と、うまくいきますように」

む？

不意に良い薫りをとらえた。隣に立った女から、紅梅の芳香が漂っている。年は三十歳前後、裕福な商家の御内儀といった雰囲気を発していた。あかぎれのない綺麗な手が、苦労のない暮らしぶりを示している。思わずじっと見つめた真琴に、女は艶っぽい笑みと会釈を返した。

「どうぞ」

「え」

なにが「どうぞ」なのか。頭ではそう思ったのに、足が勝手に動いてしまう。ふらふらと薫りに導かれるようにして、あとをついて行った。本堂をぐるりとまわって、人気のない場所に向かっている。

行ってはならぬ。

二度目の警告にも足は止まらない。が、頭の中では次々に、謎めいた女についての事柄が甦ってくる。

こやつは怪しい。〈日和見法師〉が操る傀儡のひとりではないのか。そういえば、お銀が蒼生様に報告していたな。蠟燭問屋の『辻屋』だったか。そこの御内儀は死んだはずなのに、息子がそっくりの女を見たと。あれも確か三十歳前後で、紅梅のような薫りを放っていたと聞いた覚えがある。この女はもしや……死人なのか？

などと考えているうちに、静寂の中に立っていた。生い茂る巨木から午後の木洩れ日が伸びて、ゆらゆらと陽炎が立ちのぼっている。穏やかで、あたたかい陽気だった。陽炎に包まれて一瞬、女の姿が見えなくなったように思ったが、

「わたくしは『初音』のお春と申します」

気づいたときには目の前にいた。

「初音のお春？」

「さようでございます。素晴らしい薫りでございましょう。紅梅が咲き誇っているかのように、わたくしの身体が咲いておりまする」

抱きしめて、唇を寄せてくる。濃厚な薫りにふっと意識が遠くなりかけた。が、なんと言っても神聖な将軍家の墓所、淫らな真似はできない。

「や、やめぬか」

腕を振り払い、後ろにさがったものの、ふらりと目眩がした。

「うっ」

「危のうございまする」

支えられて顔が近づき、女の吐息が唇にかかる。だめだ、なにをしている、逃げるのだ。鳴り響いた何度目かの警告が儚く消えた。一本の木に寄りかかるようにして、重ねられた唇を受け入れる。やわらかい感触を味わうように、互いの唇で唇を探り合った。強い薫りが鼻腔をくすぐり、頭がぼんやりしてくる。旨い酒を味わっているかのような、心地よい気分になっていた。

「あぁ、真琴様。ずっとお慕い申しておりました。こうして、抱き合える日を、どれだけ夢見たことか」

物言いは穏やかだが、動きは素早い。いつの間にか着物の裾を割られていた。逃げようと

思えば逃げられるのに、金縛りに遭ったかのように木に寄りかかっている。女は接吻しながら、右手を女陰に伸ばしてきた。

「な、ならぬ、だ、めだ」

最後の抵抗とばかりに訴えたが、目はしっとりと潤み、頬が紅潮している。欲望を隠すのはむずかしい。

「痩せ我慢なさってはいけませぬ」

女の細い指が、女陰をまさぐった。手入れの行き届いている叢を撫でまわして、少しだけ花弁にふれる。

「あ」

さわるか、さわらないかの微妙な刺激に、真琴は震えた。みずから脚を広げて、愛撫を待つような恰好になる。おねだりの仕方が気に入ったのかもしれない。女はその場に跪き、唇と舌による奉仕を始めた。両手の指で花弁の両端を押さえ、花びらを開くように引っ張り気味にする。剝き出しになった花芯が、薄桃色に充血していた。

「ふふ、男根のように勃っておりまする」

嗤って、吐息を吹きかける。

「だ、だめ、や、やめ、て、あぁ！」

ちゅるりと花芯を唇で吸われた。御庭番として房事の訓練を受けている真琴は、やや強めの刺激の方が燃える。それを知っているのかもしれない。舌を押しあてるようにして、小刻みに震わせた。サラシを巻いた巨乳がぐぐっと大きくなる。真琴は大きな乳房がいやでたまらず、常にサラシを巻いて、小さく見せようと努力している。布越しではあったが、こらえきれず自分で揉みあげた。

「ああ〜〜〜、こ、このようなところで、はあはあぁ〜〜〜、な、ならぬぅ〜〜〜〜」

ひとかけらの理性が、せつなげな訴えとなった。とはいえ、逃げる気持ちはない。忙しげに踵をあげたり、さげたりして、快感の高まりを示している。女の舌は蠕動し続け、ときおり唇でちゅうぅっと吸いあげた。

「んんっ、ぅんむむぅ〜〜っ、うんんんぅ〜〜〜っ」

だれかに聞かれるのはまずいと思い、必死に唇を嚙みしめている。声を我慢すればするほど、花芯が充血して、蜜壺が濡れた。着物の上から両手できつく乳房を握りしめ、顔を真っ赤にして「そのとき」を引き寄せる。ひそやかな前戯を見ているのは寺の木々だけ、女の舌が急に速くなる。巧みに舌をそよがせる。

だめ、もう……ああ、達って、しまう。

「あ、く」

きつく歯を噛みしめた刹那、

「真琴っ、真琴はおらぬかっ」

覚えのある叫び声が、本堂の裏手に響き渡った。覚兵衛である。

「あ……」

真琴は惚けたように、眸を宙にさまよわせる。まさに達く寸前だったものを、なぜ、このようなときに現れるのか。

そういえば、前にもこんなことがあったような。

あわてて身支度を整える間に、女は姿を消している。紅梅の残り香が、風に吹かれて漂っていた。

六

「〈日和見法師〉についてじゃが」

しかつめらしい顔で、覚兵衛が説明する。二人は線香の薫りが漂う中堂に入り、住職が現れるのを待っていた。この堂は瑠璃堂とも言い、三十六ヵ院の総本堂で、天井中央には見事な竜が描かれ、後ろの壁にも狩野永叔の手による十六羅漢、そして、左右の天人像は狩野探信と深雪という、錚々たる顔ぶれが製作にあたっている。また中堂の周囲には法華堂、常行

堂、文殊堂、清水観音堂、山王大権現社、雲水塔、輪蔵（りんぞう）、香神堂などが建てられており、まさに天台宗の大伽藍といった広大壮麗な風景が広がっていた。が、真琴は素晴らしい光景など目に入らない。

「は」

無愛想に応じた。その理由を知らない覚兵衛は、不審げに尋ねる。

「具合でも悪いのか。顔が赤いようじゃが」

頭がこのように体調を気遣うことはめったにない。らしくない言葉と、先刻の淫らな場面が混ざり合い、うろたえた。

「い、いえ、なんでもございませぬ。それよりも、日和見法師のことでございますが、なにかわかりましたでしょうか」

急いで話を変える。

「うむ、土人形と呼ばれる傀儡を操るようじゃの。あとは〈初音ノ法〉と呼ばれる秘術を使う由。これは別名〈月影〉とも呼ばれておるようじゃ」

「月影？」

思わず鼻を鳴らしかけたが、相手は頭、馬鹿にしたような態度はできない。

「これは笑止。加納様、月影は秘術の別名ではなく、妖術師の名前でございまする。御庭番

たちはこの陽気に浮かれて、花見でもしているのではありますまいか。とても情報とは言えませぬな」

馬鹿にはしなかったが、かなり手厳しく批判した。覚兵衛はしみじみ顔を見る。

「機嫌が悪いのう。蒼生様となんぞ、あったか」

またしても正直に心が表れてしまい、けんめいに気持ちをしずめる。反抗的な態度に出た自分に、内心、驚いていた。紅梅の薫りが今も鼻先を漂い、心がざわついている。努めて自制しなければならぬと、一度、大きく深呼吸した。

「申しわけございませぬ。思うように情報が集まらぬため、少々、焦っておりまする。他にはいかがでございましょうか。寛永寺に来るようにと、わざわざ文をくださったことには、なにか理由がありまするのか」

「そう、ここに呼んだのには理由がある。じゃが、それはわしよりも、住職より話してもらった方がよかろう。それ以外にも二つ、話しておきたいことがあるのじゃ」

ひとつは大坂に流れ着いた朝鮮国の漂流船について。長崎にまわすのではなく、今日、江戸に到着する予定である。二つ目は家臣たちが続けて亡くなっている件について。ひとつ目は知らせた理由がよくわからなかったが、二つ目は引っかかった。

「胸の病、あるいはかくでも患っておられたのですか」

かくはガンのことで、結核同様、死病であるのは言うまでもない。脚気でも死んでしまう時代だけに、これまたさほど珍しい話ではないように思えた。

「いや、一昨日、昨日と、たて続けに二人、死んでしもうたのじゃが、どちらも頑健そのもの、二十代後半の若侍よ。前の日まで通常どおりにお役目を務めておった。わしも会っておるので間違いない。ところが、翌朝、家人が起こしに行ったところ、布団の中でな。事切れておったそうじゃ」

突然死で思い出すのは、蠟燭問屋『辻屋』の御内儀の話だ。詳しいくだりは覚えていないが、三十歳前後、紅梅の薫り、突然死という点だけは記憶に残っている。

「それはまた……気味の悪い話でございますな」

ああ、そうだったのかと、真琴は別のことでも納得した。覚兵衛がいつになく自分の様子を気にかけたのは、二人の家臣が不審死を遂げていたからにちがいない。頭の心配りに対して、苛立ちで応えたことが、急に恥ずかしくなる。

「朝鮮国の漂着船のことでございますが、お取り調べになるのでございますか」

素直に質問できた。見栄を張って、わかったふりをするのはよくない。覚兵衛は小さくうなずき返した。

「そのつもりじゃ。いささか込み入った事情があってのう。ここで話すのは、ちと憚られる。

明日にでも壽屋に出向いて、例の件と一緒に……」

住職が姿を見せたので、口をつぐんだ。朝鮮国の漂着船、それがいったいどうしたというのか。頭の隅に引っかけて、住職と挨拶をかわした。

「お呼びだてして申しわけござらぬ」

覚兵衛が詫びて、真琴を顎でさした。

「何度も申しわけないのでござるが、先日、拙者にした話をこれにも聞かせてやってほしいのじゃ。とうてい信じがたいことゆえ、ご住職より直々に伺った方がよいと思うてな。ここで話をすることにしたのでござるよ」

「さようでございますか」

住職はこのごろの天気のような人物だった。今日は穏やかな小春日和だが、いつまた厳しい冬の気配を漂わせるかわからない。細い目はいつも笑っているように見えるが、実は気分を害しているのかもしれなかった。厚みのある左手で立ち並ぶ仏像を示し、驚愕の事実を告げる。

「実はどうも夜中にそっと、仏たちが歩いておられるようなのです。朝になると、位置が変わっていることが、何度か起きておりまして」

寛永寺の本尊は、伝教大師作の薬師如来、脇士は慈覚大師作の日月二大士、他にも十二神

将、脇壇に智証大師作の不動明王、定朝作の多聞天を置いている。名前のある人々による高貴な仏像ばかりだが、真琴は自分の耳を疑った。

「仏たち？　つまり、この仏像のことでございますか？」

確認せずにいられない。巨大な仏像が歩くなど、真顔で言うこと自体、信じられなかった。しかも寛永寺の住職が、である。

「はい」

住職はにこにこしている。

「……」

真琴は当惑して、覚兵衛を見やった。どう対応してよいのか、わからない。本当に本当なのでございますか。からかっているのではございませぬか。そんな視線を受けて、覚兵衛は答える。

「だからここに呼んだのじゃと、言うたではないか。わしも初めは信じられなかったわ。ゆえに仏像が動いたら、そのままにしておいてほしい、屋敷にすぐ使いをよこしてほしいと頼んでの。先日、知らせが来たので、早朝に訪れてみたのじゃ。すると」

高い天井に届かんばかりの仏像を仰ぎ見た。

「全部、後ろにさがっておったのじゃよ」

「悪戯でございましょう」

即座に否定する。

「江戸っ子の中には、奇態なことをしでかす輩がおりまする。寛永寺の仏像を動かしたとなれば、自慢話になりまする。むろん、不届き千万な輩でございまするが、世の中には変わった人間がおりまするゆえ」

真琴はあくまでも悪戯説を推したが、この意見には住職から、やんわりと反論があがった。

「拙僧もそう考えましてな。何人かの僧に命じて、この中堂を見張らせたのでございます。中に入るのは気味が悪いと申しましたので、内部を確かめさせたうえ、外に見張りを立てました。加納様がおいでになった前の晩は、そのようにして、だれも入りこめぬようにしておいたのでございます。ところが……翌朝、仏像は動き、後ろに移動しておりました」

案外、その僧たちがやっているのではないか。面白い噂を広めて、寛永寺の参拝客を増やそうとしているのではないか。などと意地の悪いことを考えたりもしたが、そう簡単に動かせる重さではない。なんと言ってよいものやら、言葉に詰まる真琴を、住職は仏像の後ろに案内した。

「さらに奇怪なのは、この『後戸の神』が前に出ていることでございます」

荘厳な仏像たちの背後に、ちんまりと小さな神棚が祀られている。今まで何度も寛永寺を

訪れていたが、このようなものが祀られていたことには気づかなかった。
「知りませんでした。これも仏なのですか」
「はい。天台宗におきましては、阿弥陀仏が観音菩薩を始めとする四菩薩を引き連れて来迎し、臨終を迎えた念仏者を浄土へ引接すると言われております。阿弥陀仏と四菩薩で、五仏でございますが、『後戸の神』は阿弥陀五仏の来迎を調える神。五仏が訪れる前に、念仏者の肝を喰らい、往生させるのでございます」
「肝を喰らう」
真琴はごくりと唾を呑む。
「要するに死神ということでございますか」
問いかけに、住職は大きくうなずいた。
「さよう。ですが、『後戸の神』が人の肝を喰らうのは、自分の欲を満たすためだけではございませぬ。人に臨終の正念を得さしめるためなのです。確かに死神ではございますが、そういった役目があるからこそ、後戸の部分にお祀りするのでございましょう。大黒天や荼枳尼天であろうという説がございますが、定かではありませぬ」
「で、これが前に動いていると？」
ちらっと目をやり、腕を撫でさすった。なんとなく寒気を覚えている。仏像が後ろにさが

り、代わりに死神が前に出る。目出度い話だとは思えない。

「動いておりました。加納様もご覧になられて……」

住職の言葉が不意に途切れた。覚兵衛が真っ青になり、額に脂汗を滲ませている。手を差し延べた真琴に倒れかかってきた。

「加納様!?」

死神に取り憑かれたか、加納久通。

固く目を閉じて、荒い息を吐いている。

七

夜半、蒼生は見舞いのため、覚兵衛の屋敷を訪れた。ここしばらく屋敷に来たことはない。ひさしぶりの来訪が見舞いというのは、我ながら、少しなさけない話だと思った。薄情すぎる。

もっと頻繁に来るべきだったわ。そんなに具合が悪かったなんて、ぜんぜん知らなかった。おとっつぁんもおとっつぁんよ。教えてくれればいいのに。

怨み言は胸に秘めて、覚兵衛が休んでいる部屋を覗いた。行灯(あんどん)に布をかけて明かりを落としているが、夜目の利く蒼生には、やつれた青白い面がよく見える。またまた胸が痛んだ。

蒼生様。

真琴が目礼して、座を譲ろうとしたが、その気配を察したのだろう。覚兵衛がうっすら目を開けた。

「おお、こ、これは蒼生様」

起きあがろうとする覚兵衛を、あわてて止める。

「いいのよ、寝(やす)んでいなさいな。ちょっと顔を見に来ただけなんだから、気にすることないわ。ほら、横になって」

「もったいない。この爺(じい)のために、わざわざおいでになられたとは」

涙ぐむ横顔は、かなりやつれていた。六十歳に手が届こうという高齢でありながら、日々、御庭番の頭として、吉宗の側についている。その心労は察するにあまりあった。布団をかけ直してやり、労(いたわ)りの言葉をかける。

「お役目のことは忘れて、ゆっくり養生しなさいな。たまには休みも必要だわ。爺には長生きしてほしいのよ。あたしの養い親ですもの」

「ありがたきお言葉、嬉しゅうございまする。おっしゃるとおり、長生きしましょうぞ。蒼生様の白無垢姿を見るまでは、死んでも死にきれませぬ。どうか、どうか、一日も早う、良いお方のもとに嫁いでくだされ」

骨ばった手を無言で握り返して、静かに廊下に出る。顔色の悪さが気になった。続いて出て来た真琴に、病状を尋ねようとしたが、廊下で待っていた乙葉が口を開きかける。

「あ、あの、蒼生様」

「待ってちょうだい、乙葉。あんたの話はあとで聞くわ」

「は、い」

うつむいて、離れて行った。いつになく暗い表情が気になったのかもしれない。

「乙葉はどうかいたしましたか」

「ええ。なんだか様子がおかしいのよ。お銀は林家の様子を探っているし、美弥は病みあがりで頼りないでしょう。家に置いておくのは心配だから、連れて来たんだけど」

それよりも、と、話を変えた。

「お医者様はなんと？」

「は。過労であろうとのことでございました。なんといってもご高齢でございます。とうの昔に隠居している年齢、無理をしすぎたのではないでしょうか。近頃、たて続けに若い家臣たちがお亡くなりになられたため、いろいろと調べていたようです。激務が続いていたのかもしれませぬ」

「家臣たちということは、ひとりではないわけね」

「二人と聞き及んでおります。どちらも二十代で、前日まで普通に務めていた由。流行病に罹っていたわけでもないようです。突然、死んでしまったとか」

「気になるわね。なにか共通点がないか、調べてちょうだい。覚兵衛の病状と照らし合わせてみたいの。突然死されるのはいやだわ」

「わたくしも同じ思いでございます。急いで確かめてみましょう。実は加納様が倒れられる前に、いくつか新たな話をお聞きいたしました」

朝鮮の漂着船を江戸に呼んで調べる。寛永寺で奇妙な出来事が起きている。

「漂着船」

そういえば、玄蕃と家老が話していたわね。積んでいた荷はすでに大坂で売ったとか。だから調べられても心配ないだろうが、『あのお方』にお願いして、とも言っていたっけ。乙葉が悲鳴をあげちまったから、途中までしか聞けなかったけど……これはうまくはめられたのかもしれないわね。

「朝鮮の船について、気になることでもございますか」

黙りこんだのを気遣って、真琴が促した。

「まあね。対馬藩の依頼は、おとっつぁんたちの策略かもしれないわ。妖堂を巻きこんで、敵の出方を見ようとしているのかもしれない。癪にさわるけど、覚兵衛があれじゃね。怒る

わけにもいかないわ」

とはいえ、放っておくわけにもいかない。

「その船は江戸に来ているのかしら」

「今日あたり、到着する予定だとおっしゃっておられました。加納様にお願いして、わたくしも立ち会わせていただきます。思えば加納様は、そうしてほしいという口ぶりでございました。対馬藩は朝鮮との取引で成り立つ藩、漂着した朝鮮船とまったく無関係ではありますまい。裏になにか隠されているのかもしれませぬ」

「頼んだわよ。それで、寛永寺の異変というのはなに？」

「はい。ご住職から直々に伺った話でございます」

仏像が動き、朝になると、位置が変わっている。そして、後ろに祀られているはずの『後戸の神』が前に出ている。

「仏像が動く」

蒼生の頭に浮かんだのは、平岡理兵衛の話だった。仏壇の観音扉が開いたり、神棚が落ちたりしたと聞いた覚えがある。関係ないかもしれないが、やはり、少し気になった。

「平岡様の家も、天台宗なのかもしれないわね。詳しく聞いておけばよかったわ」

「あの夫婦も関係あるとお考えなのですか」

「さあ、どうかしらね。関係ないことを祈っているけれど……ただ天台宗には、秘密法門があるはずよ。もしかしたら、今回の妖術師はそれを会得しているのかもしれない。その霊波に感応して、仏像が動いたり、仏壇や神棚に異変が起きたりした」

中世真言宗に立川流という異端が出現したように、天台宗には『玄旨帰命壇』と呼ばれる異端の秘密法門が現れた。この二つの異端法門は、多くの点で双生児のように似通っており、両者はともに愛欲などの煩悩と死を司る異形神を本尊としたのである。立川流が血塗られた神――荼枳尼を本尊としたように、玄旨帰命壇では、血肉を喰らう大黒天と同体の神とされる摩多羅神を本尊とした。蒼生ほどではないが、真琴もそれらの知識は最低限、頭に入っている。

「では、月影という老練な忍びは、摩多羅神をこの地に招こうとしているのでしょうか。悪鬼の霊力を利用して、われらを倒そうとしているのでございましょうか」

「わからないわ。ただ、なにかの強大な霊力を利用しようとしているのは確かでしょうね。密教に通じているからこそ、日和見の力にも長けているんだと思うわ。暦や天気を読む能力で、どうやって戦うのかわからなかったけど、要するに陰陽師ということでしょうね。しかも魔道に通じた能力者なのよ」

「そういえば」

真琴が思い出したように言う。

「加納様は日和見法師のことを、こう申しておりました。土人形と呼ばれる傀儡を操るらしい。さらに〈初音ノ法〉という秘術を操るのだが、その秘術の別名は〈月影〉とも呼ばれている、と」

「でも、月影は妖術師の名前じゃないの。あたしの前に現れて、みずから名乗ったのよ。なんだかよく意味がわからないわね」

「はあ、わたくしも似たような言葉を返しました。そんなものは新情報でもなんでもないと、腹が立ったくらいでございます。おそらく、妖術師の名前だとは知らずに、噂が流布しているのでございましょう。お気になさいますな」

「そう、ね」

気になるのは〈初音ノ法〉だ。香の名前を使っている以上、薫りも重要なのは確かだろう。真琴は紅梅、美弥は蓮の花、乙葉は菊、お銀は土だが、これは関係ないのかもしれない。

「あたしは蜜のような甘い薫り、あんたは紅梅の薫りを、感じるんだったわね」

「え、ええ、まあ、なんと申しますか、その、実はでございますね。寛永寺で奇妙な女子に……」

夜気を切り裂く悲鳴が湧き起こった。庭の奥から響いている。対馬藩の上屋敷を思い出さ

せる不吉な絶叫。

「乙葉だわっ」

庭に駆け降りた蒼生に、真琴も提灯を持って続いた。大名に列したとはいえ、御三家などに比べれば、加納家はさほど広い敷地ではない。叫び続ける主の居所を探りあてるのはむずかしいことではなかった。

「きゃあぁ〜〜〜っ、い、いやあぁ〜〜〜〜〜〜っ」

乙葉が狂ったように悲鳴をあげている。顔を袖で隠して、地面に突っ伏していた。蒼生と真琴は抱き起こそうとするが、顔をあげようとしない。

「どうしたのよ、乙葉。また具合が悪いの？　熱があるんじゃないの？　お願いだから顔を見せてちょうだい」

二人がかりで無理やり顔をこちらに向けさせる。おずおずと蒼生を見やった乙葉の顔は……。

白い虎だった。

花娘であるはずの乙葉が、白虎に変化している。顔ばかりではない。手までも虎のそれになり、招き猫のように手招きしてみせた。

「ガゥ」

「……」

絶句する蒼生の鼻腔に、菊の薫りが流れこむ。呼応するように自分の身体からも、濃密な甘い芳香が立ちのぼる。

二種類の薫りが競い合うように匂い立ち、闇に吸いこまれていった。

第四章　幕府大学頭（だいがくのかみ）

一

甘い蜜の薫りが立ちのぼっている。

「半九郎様」

これは夢だ、と、蒼生は思った。薄闇の中、裸の半九郎と抱き合い、互いの眸をじっと見つめている。匂い立つ濃密な薫りに、酔ってしまいそうだ。頭がぼんやりしてくる。

「ああ、あぁぁ、蒼生殿」

感極まった様子で、半九郎がさらに強く抱きしめた。唇を寄せてきたが、どうやって情熱を表現すればいいのか、わからないような感じだった。蒼生はみずから唇を重ねて、相手の唇をやわらかく刺激する。このようにしてくださいませ、乱暴なのはいやでございます。無言の教えに対して、半九郎は素直に応じる。同じように蒼生の唇を舌先でくすぐってきた。

「優しく」

今度は思いきって舌を差し入れる。優しくと言われても、そう簡単に実行できない。半九郎は貪るように吸い、舌をからめた。接吻をかわしながら、蒼生は彼の右手を左の乳房に導く。はっと一瞬、手を引きかけたが、魅力的な誘いに抗えるわけがない。最初は遠慮がちだった愛撫が、すぐさま激しいものに変化する。股間の逸物は早くも天を向いてそそり立ち、炎のような塊となって、蒼生の下半身にあたっていた。

「こ、ここを」

さわって。濡れた眸で言い、右手を叢に持っていく。おぼつかない手つきで叢を探っていたが、なかなか肝心な部分にはふれない。花弁もまだ固く閉じている。蒼生は決して経験豊富なわけではないが、生娘のふりをするつもりはなかった。

「全部……嘗めて、くださりませ」

唇を離して懇願する。小さくうなずき返した半九郎に、まずは指で首筋を示した。大事な壊れ物にでもふれるような感じで、そぅっと唇をつける。

「舌を」

這わせてくれと言う前に、舌をゆらめかせていた。蒼生は両手の指で、乳首を挟むようにする。次はここをという合図だった。半九郎は赤児がしゃぶるように夢中で吸いつく。唇で

咥える。

「あぁぁ〜〜」

うっとり目を細めて、蒼生は乳房を両掌で揉みあげた。すぐに半九郎が気づき、その役目を代わってくれる。乳首を唇と舌で刺激しながら、やわやわと乳房を揉みしだき始める。さがるように手で軽く肩を押すと、これまた素直に下にさがった。なめらかな腹や脇腹にも、舌技の奉仕を与えてくれる。はしたないと思いつつも、睦み合える悦びを示さずにはいられない。思いきって両脚を大きく広げた。

「な、嘗め、て」

緊張した声の訴えとともに、右手の人さし指と中指で、女陰を広げ気味にする。今度はここをと、お願いしたのである。ごくりと半九郎は喉を鳴らして、探るように舌を伸ばした。

「あ」

思わず尻が震える。驚いて舌を引きかけた相手に、あわてて告げた。

「そ、そのまま、はあはあ、お、お願い」

ここを。

両手の指で花弁を広げ、中心部で充血している花芯をあらわにする。抑えられなかったのだろう、思わず半九郎がちゅうぅっと吸いあげた。

「あ、い、いやぁ」

強すぎるのはだめ、もっと優しくして。

尻を軽くひねると、愛しい娘の願いをかなえるべく舌が蠕動し始めた。こんな前戯はおそらく初めてだろうが、教えられるまま夢中で舌を動かしている。空いてしまった両の乳房に、半九郎の両掌をふたたび導いた。尖った乳首に指先を持っていくと、欲望を正確に読み取って、くりくりと指先でいじる。必死に舌を揺らめかせる。

「はぁぁ〜〜、いいぃ〜〜、そ、そう、そこ、そのまま、あああぁ〜〜〜〜」

羞恥に頬を染めつつも、悦びの高ぶりを知らせた。まだ遠慮がちではあるが、それでも半九郎は乳房を揉みあげ、乳首をさわり、剝き出しになった花芯を嘗める。言われるまま奉仕している。いつになく蒼生は感じてしまい、早くも達きそうになっていた。乳房がぐぐっとひとまわり大きくなる。恥ずかしいほどに花芯が尖って、硬くなる。

「あ、あ、あ」

半九郎様。

ぐぅーっと四肢が突っ張り、背中が反り返った。乳房を愛撫する半九郎の腕を、爪痕が残るほど強く握りしめる。

「い、達くっ、達くううぅ〜〜〜〜〜〜」

喉の奥から歓喜声を放っていた。とそのとき、視野が暗闇に染まる。目を開いているのか閉じているのか、わからないほどの暗黒世界、怖いのに気持ちがいい。怖ろしいのにいつまでも浸りたい。ぶるぶるっ、ぶるぶるっと激しく尻が震え、光が戻った。またたきする蒼生の眸を、半九郎がじっと覗きこんでいる。

「あぁぁ、半九郎様」

達ったばかりの顔を見られるのが恥ずかしくて、逞しい胸に顔を埋めた。右手を股間に伸ばして、はちきれんばかりの逸物にふれる。身体をさげて、お返しをしようとしたが、半九郎はうろたえた。

「な、ならぬ、あ、蒼生殿がそのような真似を、くぅ！」

訴えは耳に入らない。口を大きく開いて、亀頭を呑みこんだ。相当、こらえていたにちがいない。尖端部には透明な液が滲み、ぱんぱんにはりつめている。大きすぎて呑みこみきれない。舌先を小刻みに震わせて、ふくらみきっている亀頭を嘗めた。できる限り奥まで呑みこんでは、先端部に戻して、愛おしげに舌をそよがせる。

「くうっ、うぐうっ、だ、だめですっ、あ、蒼生殿っ」

これだけ感じていては耐えきれない。吐精寸前だ。それでもけんめいに蒼生の唇から引きぬこうとしているのが可愛らしい。口の中を汚してはなるまいとしているのだった。蒼生は

ますます尺八に熱意をこめる。尖端に舌をそよがせ、指で男根の側面部をしごく。どくんっと脈打つように男根が痙攣した。

「ぐぅ――――」

半九郎の裸身が硬直する。歯をくいしばり、こらえにこらえていたが、巧みな舌技に白旗をあげた。どっと口中にあふれ出したそれを、蒼生は喉を鳴らして呑みこむ。甘い蜜のような極上の甘露だった。

「おいしい」

率直な言葉が出たものの、半九郎は半分、失神しかけている。かなり大量に精を放ったが、少し小さくなっただけで、完全に萎えてはいなかった。蒼生は尺八を続けて、もとの硬さに戻そうとする。自分の愛撫で恍惚状態になった半九郎が、愛しくてならない。早くひとつになりたくて、唇と舌と指を使った。

「ふ、ふぅぅ～～、あ、蒼生、殿？」

ようやく声を発した半九郎に跨って、逸物を蜜壺の入口にあてる。ほんの少し亀頭をもぐりこませただけで、奥から蜜があふれ出してきた。それをからめて、潤滑液代わりにする。くちゅくちゅと淫らな音があがり、異様に興奮した。早く奥までつらぬきたい、何度も突いてほしい。そう思いつつ、我慢する。腰をまわしたり、浅く沈めたりして、感激の瞬間を先

送りにした。

「んふうぅ〜〜、は、半九郎様ぁ〜〜〜〜」

喘ぎ声を聞いて、今度こそ半九郎は正気に返る。

「蒼生殿っ」

ずんっと一気につらぬいた。

「ぅく！」

喉で声がつまり、中途半端な叫びになる。上に乗られるのは男として、なさけない体位と思ったのかもしれない。いきおいよく身を起こすや、蒼生を押し倒して、のしかかってきた。大きく両脚を開き、蜜壺の肉襞をこすりあげる。奥でひくつく壺芯を、何度も何度も突きあげる。

「いいっ、ああぁっ、いいぃ〜〜〜〜」

蒼生は両手で太股を持ち、乳房に膝をつけるような姿態を取る。一度、放ったはずなのに、男根は蜜壺内で猛り狂っていた。感応して蜜があふれる、大きな濡音が響き渡る。挿入だけではなかなか達けないのだが、かつてないほどに感じていた。半九郎がぴたりと身体を密着させているため、花芯がこすりあげられて、指による刺激を受けているような感じになっている。

「ああっ、も、もう、あああぁっ、あああぁ〜〜〜っ」

だめ。

「あ――――」

長い歓喜声に、吼えるような叫びが重なった。

「おおぉ〜〜っ、あ、蒼生殿〜〜〜っ」

熔岩のような精が、蜜壺の奥に叩きつけられる。痛いほど抱きしめられて、蒼生は全身を突っ張った。火花が散るような衝撃をとらえた刹那、またしても、ふっと視野が闇に覆われる。

「は、半九郎様！」

堕ちそうになりかけて、しがみついた。それを悦びの表現と受け取った半九郎は、抱きしめる腕に力をこめる。

甘美な蜜の薫りが、互いの身体から放出されていることに、二人は気づいていない。薫りは絡み合い、高め合って、あらたな絶頂を運んでくる。

融けていく。

半九郎様とひとつになって――。

消える。

蒼生は蜜の薫りを、大きく吸いこんでいた。

二

おかしな夢を見てしまった。

蒼生は四日も続けて同じ夢を見たことに、驚きと恥ずかしさを覚えている。池田半九郎と房事を繰り広げる淫靡な光景が、脳裏に焼きついていた。決まって漂う強い薫り、甘美な蜜の芳香とともに甦るのは、吸いこまれそうな暗黒世界。怖い、でも、味わいたい。半九郎と一緒であれば、どこまでも……。

「蒼生様っ」

耳もとで、真琴が叫んだ。二人は香についての教えを乞うため、香道の家元の屋敷を訪ねている。通された客間で呼びに来るのを待ちながら、素晴らしい庭の景色を楽しんでいるところだった。香道は茶の湯と同じぐらいに格式を重んじる。華美は禁じられているが、二人とも手描きの上等な絹の着物姿で、年ごろの娘らしく装っていた。

「あ、びっくりした。どうしたのよ、真琴。そんなに大きな声を出さなくても聞こえるわ」

「なにをおっしゃいますやら。さきほどより何度となく、お名前をお呼びいたしましたのに素知らぬ顔。まるで耳に届いておらぬようでございました。愛しいお方のことでも、考えて

おいでになったのでは？」

図星をさされてしまい、真っ赤になる。

「い、いやね、そ、そんなことないわよ。あたしは別に半九郎様のことなんか、考えていやしないんだから」

みずから心を露呈していた。真琴の苦笑を見て、よけいうろたえる。あわてて話を変えた。

「あ、あたしが考えていたのは、覚兵衛や乙葉のことよ。覚兵衛はまだ床についたままだし、乙葉は花娘なのに、白虎になんか変化しちまって。人間の姿には戻ったけれど、花娘の霊力は使えないみたいだわ。対馬藩の上屋敷に忍びこんだときに、異状が起きたらしいのよね」

天井にもう一ヵ所、覗き穴を開けようとしたのでございます。

青ざめた顔で、乙葉は最初の異状を報告した。

そういたしましたら、突如、右手が猫のような手に変化したのでございます。驚いて左手を木の刃（やいば）に変えようとしたところ、左手も同じような状態になってしまいました。思わず悲鳴をあげまして、逃げ出すはめになりました。わたくしの不始末のせいで、あのような事態になりましたことを、大変申しわけなく思っております。

「覚兵衛の家の庭でも試してみたらしいのよね。簡単には信じられないことだもの。当然だと思うわ」

屋敷の庭で手を木の刃に変化させようとしたが、案の定、結果は同じだった。部分的にではあるものの、花娘ではなく、白虎に変わってしまう。花娘の霊力はまったく使えなかった。

「やはり、月影の仕業でございましょうな。魔道に通じた陰陽師なればこその秘術であるように思われまする」

わかっているようなので、よけいな説明はしなかった。水は火に勝ち、火は金に勝ち、金は木に、木は土に勝ち、土は水に勝つ。これが五行相剋順とされるものだが、乙葉は木の性を持つ花娘、五行相剋順でいけば、金は木に勝つ性であるがゆえに、金で封じこめたのである。金の性を持つ聖獣は白虎、房事を仕掛けられた結果、思いもかけない姿になったわけだ。

「乙葉は菊の薫りを感じると言っていたわ。それも白菊と『白』について、はっきり告げている。金に属する色は白、その幻影を視せることによって、木の性を完全に封印したんでしょうね」

「然り。美弥はどうでございましょうか。確か赤い炎がどうのと言っておりました。美弥は金の性を持つ猫娘、五行相剋順でいきますと、火は金に勝つ、となりまする。熱が出ましたのも、火によって封じこめられたためかもしれませぬな」

「ありえないことじゃないわね。充分、注意するように言ってきたけど、留守番をしているのは、霊力の使えない乙葉と美弥。美弥については、まだはっきりしないけど、二人きりに

しておくのは心配だわ」

「お銀は今日も大学頭の屋敷を、見張っているのでございますか」

「いいえ。なんの用かはわからないけど、室町二丁目の蠟燭問屋『辻屋』の倉太郎さんから、使いが来たのよ。どうしても来てほしいとね。平岡様も呼ばれていると言っていたので、それじゃ様子を見ておいでと送り出したの」

「なるほど。寛永寺で起きている異変と、平岡殿の家の変事が、関係あるかもしれぬとお考えになられたのですな」

わかりが早くて助かる。

「ええ。亡くなった『辻屋』の御内儀についても、いくつか引っかかる点があるわ。紅梅の薫りを漂わせていたというのが、ちょっとね。気になるのよ」

「そのことでございますが……」

廊下から「準備が調いました」という声がかかった。二人は静かに立ちあがり、廊下に出て、案内されるまま進んで行く。ある部屋の直前で、真琴が耳もとに囁いた。

「蒼生様。わたくしはこれにて失礼いたしまする。大坂に漂着した朝鮮船について、ようやく接見できるとのお許しをいただきましたので、これより御城にまいります」

「え？」

問いかける暇もない。振り返ったときには、もう姿を消していた。さすがは御庭番と褒めたいところだが、なんとなく胸がざわめいている。

もしかしたら。

案内された部屋に入ったとき、真琴がいなくなった理由を察した。この屋敷の主、蜂谷宗先と一緒に待っていたのは池田半九郎、目が合ったとたん、二人は同時に頬を染める。主が愉しげに笑った。

「ほっほう、これはこれは」

相思相愛でございますな。あらためて、このような場を設ける必要などなかったのではございますまいか。老翁といった印象を受ける宗先は、見るからに福々しい顔をさらにほころばせる。微笑ましく思っているのだろうが、思われる方はたまったものではない。

真琴っ、覚えてなさい!!

企んだ犯人はすでにおらず、怒りをぶつける相手がいない。蒼生は会釈をして、示された場所に腰を降ろした。半九郎の方は知っていたらしく、特別、驚いた様子はない。が、頬の紅潮が耳にまで広がり、湯気を立てんばかりに赤くなっている。直視すると、熱が伝染しそうだ。うつむいて、なるべく見ないようにする。

「ご紹介の必要はなさそうですので、さっそく、香道についてのご説明を始めることにいた

しましょう。この時代を代表する流儀といたしましては、いくつかございます」

宗先が口火を切った。香道の始祖と言われるのは三条西実隆で、その流れが御家流となった。また実隆に信頼されて、香のことを任された志野宗信が、志野流を興している。さらに東福門院――二代将軍徳川秀忠の娘・和子の信任が厚かったという米川常白の流れが米川流となって伝わっている。

「香道はこの三流儀より成り立っております。わたくしどもは言うまでもなく、志野宗信によって興されました志野流でございますが、さらに遡りますれば、村田珠光も香道をたしなんでいたとされております。珠光は茶の湯を愛し、歌の世界にも通じた数奇者でございました。足利義政、津田宗達、細川幽斎、千利休、今井宗久といった方々と、茶の湯の席を設ける際に香を炷いたのが、おそらくは香道の始まりなのでございましょう。御家流、志野流、米川流といった名称が、いつごろ、だれによって定められたのかということは、はっきりしておりませぬ。まあ、大名家と同じように、かなりいいかげんなものなのでございますよ」

皮肉まじりの言葉だったが、不思議と嫌味に聞こえない。分をわきまえ、己を知り、淡々と日々を生きているのだろう。達観した禅僧のような雰囲気を感じた。

「まずは香道に用いる香木についてでございますが、『六国五味』と申しまして、伽羅、羅国、真那賀、真南蛮、寸門多羅、佐曾羅の六種類に分け、これを『六国』と称しております。

次に五味についてでございますが、甘い、苦い、辛い、酸い、鹹（しおから）いという五つの味覚でございます。この五味は古今無双の香聞きと称されました米川常白、さきほど名前が出ましたので、覚えていらっしゃると思いますが、東福門院の香道指南を務めたと言われる常白が定めたと言われております。伽羅は『その様やさしく位ありて、苦を立てるを上品（じょうぼん）とす。自然とたをやかにして優美なり』、これが伽羅の表現であります。次の羅国は……」

「あの」

長くなりそうな講釈を、悪いと思いつつ遮った。

「失礼とは存じますが、どうしても先に知りたいことがあるのです。初音という名のお香について、教えていただけませんでしょうか。『六国五味』のことは、そのあと、ゆっくりご説明いただければと思います」

「ほう、初音。細川家秘蔵の名香でございますな」

気を悪くした様子もなく、それまで同様、淡々と続ける。

「『聞く度に珍しければ郭公いつも初音の心地すれ』という心で、初音と銘したようでございます。要するに何度、聞いても新しい薫りを感じる、そんな心境でございましょうか。いくつもの薫りを感じるということから、『一木三銘香』、あるいは『一木四銘香』を持っております。初音の名の他に、白菊、紫舟、藤袴、合わせて四つの銘でございまするな。ひとつ

の香木であるのに、四つの銘を持つ名香中の名香と言えましょう」

「一木四銘香」

蒼生は気になった部分だけ繰り返した。一木を月影だとすれば、四人の傀儡がいることになる。美弥の相手になったのは若い娘、乙葉の相手は若衆、お銀と真琴はまだ不明、そして、自分の相手は……。

目をあげると、半九郎が無言で熱い視線を注いでいた。まさか、と思う。半九郎は関係ない。自分の想いが逆って、あんな淫夢を見ただけのこと。邪念を捨てなければ、敵の術に陥ちやすくなる。

黙りこんで見つめ合う二人を、宗先はごく普通に解釈する。

「一炷聞(いっちゅうぎき)を行いましょう。一炷(た)きの香だけを深く鑑賞する聞香でございます。聞香の初歩であり、同時にもっとも高度な境地とされまする。それでは」

ほとんど気配を感じさせずに、香を炷き、そっと部屋を出て行った。蒼生と半九郎は目を逸らすことができない。ただただ見つめ合っている。互いの身体から独特の芳香が立ちのぼり、互いの身体にふれるかふれないかの距離まで近づいた。体臭や感触を確かめるように、匂いを広げて、味わおうとする。

沈黙の秘め事。

手を触れ合うわけではない。唇を重ねるわけでもない。肌にはふれず、薫りだけで、二人は房事の疑似体験をしていた。今日も穏やかで、眠くなるような小春日和、じっとり汗が滲み、その汗によって体臭が強くなった。

半九郎様。

見えない薫りによって蒼生の幻が出現し、半九郎の幻と抱き合っている。裸身を艶(なまめ)かしく絡ませて、かすかに喘いでいた。熱い接吻をかわし、裸身をまさぐる。男にしてはしなやかな半九郎の指が、蒼生の乳房を揉みあげる。唇で乳首を咥えて、やわらかく揉みしだく。指が叢に伸びる……。

「あ」

思わず洩れた声に、宗先の呼びかけが重なった。

「いかがでございましたでしょうか。上質の伽羅を炷きました。香木の佳(よ)さというものは、華麗な中に辛みや毅(つよ)さがあり、わずかの火気で発薫し、しかも終わりまで薫りが変わらぬ香木を上品といたしまする。男女の仲も同じこと、最後まで変わらずに慈しみ合うのが、もっともよき夫婦でございましょうな」

うまく締めくくって、提案する。

「庭を散歩なされましては、いかがでございましょうか。その間に粗茶ではありますが、ご

用意をさせていただきます。頃合いを見計らって、離れの茶室においでくださいますよう」

濃密な空気から解放されると思い、ほっとして、蒼生は立ちあがった。

危険すぎる。

心臓の鼓動が止まらない。

自分は半九郎に惹かれすぎている。

三

半九郎もまた同じ想いにとらわれていた。いや、半九郎の場合は危険だとは考えていない。むしろ嬉しいことだと感じている。

蒼生殿を妻にしたい。想いは日々募るばかりだ。今日、お目にかかれるとわかったときは、どれほど嬉しかったことか。

ほとんど眠れずに過ごしてきたが、うたた寝したときに見るのは、決まってあの淫夢。裸身の蒼生を情熱をこめて愛する〝絵〟だ。おのれの淫らな欲望を知る度に、消え入りそうな気持ちになる。逢えるのは本当に嬉しいのだが、平静でいられるかどうか自信がなかった。

それに、と、半九郎は自問する。

四、五日前、我が藩邸に忍びこんだ賊。あれは女で、しかも……蒼生殿に似ていた。身体

つきや仕草、わたしに向かって来たときに直視した眸。まさかとは思うが、あまりにも似すぎているような。

伊達につきまとっていたわけではない。半九郎の頭には、蒼生の身体つきや顔立ち、声や眸が、刻みこまれている。それがあの日の賊と蒼生を結びつけていた。追いつめられた賊が、ためらいなく半九郎に向かって来たことも引っかかっている。一瞬、怯んだその隙を衝いて、黒装束の二人連れは逃げ去った。

いや、ちがう。まさか、そんなわけがない。蒼生殿が対馬藩の屋敷に忍びこむなど、ありえないことではないか。理由がない。わたしの勘違いだ。女のようではあったが、断じて蒼生殿では、ない。

しかし、と傍らを見やったとき、蒼生の眸とまともに目が合った。どぎまぎして、視線を逸らす。

「き、今日もやけに暑うござるな。十一月になっているのに、近頃の陽気はおかしゅうござる。どうなっているのでござろうか」

半九郎よ、つまらない話をするな。心の中で、もうひとりの自分が責める。天気の話なんぞをしておっては、蒼生殿に呆れられてしまうぞ。もう少し気の利いた話ができぬものか。我ながらいやになるわ。

自分で自分に愛想がつきてしまい、笑みが強張った。

「は、ははは、ははは」

「本当におかしな陽気でございますね」

蒼生は笑わない。またあの美しい眸を、半九郎に向けた。

そうよ、この眸よ。見誤るはずがあるか。賊の黒頭巾から覗いていたのは、まぎれもなくこの眸。蒼みがかった眸の色は、他のだれともちがう。蒼生殿だけの美しさ、ああ、おれは蒼生殿が好きだ。ひとりの女子(おなご)をこんなに好きになったことはない。たとえ、なにが起ころうとも、おれの気持ちは変わらない。

結局、そこに行きついてしまい、話題を失った。さて、なにを話したらいいのであろうか。間違っても、藩邸に潜入した賊のことなどを話すわけにはいかぬ。上様のご落胤(らくいん)という噂が出ているが真実はいかに、などということも聞いてはならぬ。さあて、困った。

めまぐるしく考えるが、なにも浮かばない。蒼生が加納久通の養女であることや、巷に流れているさまざまな噂話については、ほとんど興味がなかった。半九郎が惚れたのは、蒼生という娘であり、それを取り巻くよけいな事柄は関係ないのである。

もう一度、想いを打ち明けてみようか。あのときの返事をまだ聞いていない。夫婦になりたいと、あらためて申しこんでみようか。意を決して口を開いたとき、

「あの」
二人同時に声を発していた。
「あ、半九郎様からどうぞ」
「い、いや、拙者の話など、たいしたものでは、おお、そ、そうであった。良い相手を見つけたのであれば、結納だけでもかわせばよかろうと、御留守居役の方より言われまして、も、もちろん、蒼生殿のお気持ちが大事でございまするから……」
しどろもどろの言葉に、冷静な言葉が続いた。
「御留守居役の方。そのお方が壽屋のことを薦めてくださったのでございますか」
「はい。最初に申しましたように、おまえもそろそろ所帯を持ったらどうだと言われまして」
「そう、でございますか。その方は、半九郎様に特別、目をかけてくださっているのでございますね」
「え」
半九郎はどきりとした。小菅玄蕃とは特に親しいわけではない。だから壽屋のことを薦められたときは、正直なところ、驚いた。かなり熱意がこもっていたことにも、意外さを覚えていた。

そうだ。思えば最初からおかしかったではないか。今まで必要最低限の会話をするだけだった小菅殿が、いきなり嫁がどうの、所帯がどうのと言い始めて、壽屋の話を出した。なんとなく、妙だとは思っていたが、壽屋に行ったとたん、蒼生殿を見て、それらのことは吹き飛んでしまい、忘れていたが。

あのことに関係あるのだろうか？

蒼生殿に似た女の賊が忍びこんだのも、それらの事柄が関係しているのか？

もし、蒼生殿が本当に上様の落とし胤だとしたら？

小菅殿はすべてを読んだうえで、わざと接触させたのではないか？

ずっと頭に引っかかり、棘のように抜けなかったいくつかの疑問が、蒼生の質問で一気に噴き出した。半九郎は馬鹿ではない。小菅玄蕃と家老が中心になって行っている『あること』に気づいていた。今までは見て見ぬふりをしてきたが、黙認するのにも限界がある。遠まわしの質問状を提出して、藩に対する忠誠心を自分なりに示したつもりだが、そんな態度が鼻についたのかもしれない。半九郎を自分たちの仲間に抱きこんで、口を封じようとしているのではないだろうか。

いや、小菅殿はともかくも、ご家老様が押し留めるはず。考えすぎだ。対馬藩はちゃんとお役目をこなしている。隠し立てすることはなにもない。蒼生殿に似た賊も、蒼生殿ではな

いのだ。おれはどうかしている。蒼生殿を想いすぎて、狂いかけているのかも……。

「どうかなさいましたか、半九郎様」

二度目の呼びかけで、はっとする。蒼生が名前を呼んでくれた。池田様ではなく、半九郎様と口にしてくれた。

「蒼生殿」

感激で胸が熱くなる。抱きしめたかったが、激情が止まらなくなるのを怖れた。肩に伸ばしかけた手を宙で握りしめ、さりげなく下にさげる。喉が異様に渇いていた。

「し、仕度ができたか、茶室の様子を見てまいりまする。蒼生殿は今しばらく、ここでお待ちくだされ」

「あっ、半九郎様」

伸ばした右手は、ふれる相手を失って、力なく降ろされる。茶室に急ぐ半九郎を見送っていたのは、蒼生だけではなかった。

「あーあ、なさけない男じゃのう。もうひと押しじゃ。押しが足らぬわ」

植えこみの陰で、舌打ちと小声が響いた。先刻から気配を感じていたので、蒼生は驚かないが、呆れている。

「おとっつぁんっ、そんなところでなにしているんですか！」

できるだけ大声を出さないようにしたが、こらえきれずに迸った。木綿の粗服をまとった吉宗が、まさに悪戯を見つかった童子のような表情で見あげる。

「すまぬ。どうしても気になっての」

城にいるときも似たような恰好だが、こうやって茂みにひそんでいると、下級武士にしか見えない。そろそろ五十歳になろうという年齢なのに、将軍らしい貫禄や威厳に欠けていた。

「まったく、おとっつぁんときたら、いつも、いつも、汚い恰好をして。少しはちゃんとしてくださいな。そんな姿でうろつくから、朝鮮通信使にも、この国の将軍はみすぼらしい恰好をしている、なんて言われちまうんです。蜂谷様にも笑われてしまうじゃありませんか」

「木綿の着物のどこが悪いのじゃ。将軍みずから粗服をまとってこそ、民も従うというもの。蒼生の着ている絹はご禁制の品。まあ、今日は結納ゆえ、特別に許すがの」

「結納？」

かがみこんで、詰問する。

「いつ、だれが、どこで結納をかわすと決めたんですか。あたしはまだ承知していませんよ。半九郎様、じゃない。池田様だって、同じ気持ちです。いきなり結納と言われても、なんというか、その、心の準備が」

語尾がだんだん消えていく。吉宗はにやりと笑いかけたが、蒼生に睨みつけられて、真顔になった。

「怒るでない。覚兵衛が毎日、うわごとのように呟いての。『上様、爺は死ぬ前に蒼生様の白無垢姿が見とうございまするぅ』と、わしにしがみつくのじゃ。棺桶に片足を突っこんでいる爺に頼まれて、否と断るのは鬼の所業。仕方なく訪れたのじゃが、なかなかに良い雰囲気であったわ。池田半九郎と申す藩士、悪くない。蒼生に対する気持ちは本物と、わしは思うた」

「か、勝手なことばかり言わないでください。それよりも、覚兵衛の容態はどうなんですか。まだ伏せっているんですか」

「話を変えおって」

「おとっつぁん！」

「ああ、ああ、わかった、わかった。そのように眉を吊りあげるな。母親譲りの美貌がだいなしじゃぞ」

「へえ。あたしにも、おっかさんがいるんですか。どこのどなたなんでしょう。こうやって見合いのような席を設けたのを機会に、なにもかも話しちゃくれませんか。妖魅だと聞いても、今さら驚きゃしませんよ」

「なにを申す。おまえの母親は妖魅などではない。れっきとした人間の女子じゃが、その話はまたこの次にいたそう」

「話を変えましたね」

やり返して、少しだけ気持ちがすっとする。よく似た親子と言えるかもしれない。

「話を戻そう。覚兵衛はいまだ病床にある。ご典医を遣わしておるが、どうもはっきりせぬ。近頃、流行の突然死などでなければいいのじゃが」

「若い侍が二人、亡くなったあれね。真琴に調べるよう命じたのだけれど、なにか共通点のような事柄はないのかしら。フグを食べてあたったとか、毒キノコを間違って口にしたとか。もしくは大酒飲みだったとか」

「わからぬ。が、二日前に、もうひとり死んでの」

「えっ、それじゃ、すでに三人も⁉」

「そうなるのう。原因がわからぬだけに、みな戦々恐々よ。咳が出ただけで、冷たい目を向けられる有様じゃ。出仕して伝染りでもしたら、まずいと思うのかもしれぬ。休みたいと申し出る者が続出しての。政にも支障が出かねぬ状態じゃ」

謎の突然死。蒼生は内心、穏やかではない。日々月が丸くなっているのに、いっこうに気力も体力も充実してこないからだ。ふだんであれば、満月が近づくにつれて、不死身性が増

し、霊力が強くなる。勘が鋭くなって、遠見のような力も使えるのに、今回はまったくそれがなかった。妖術師の月影が挨拶に現れたとき、満月を思い浮かべた瞬間、いきなり消えたのが気になっている。が、口にはしなかった。

「覚兵衛がますます心配だわ。滋養のつくものを食べさせて、ゆっくり休ませるしかないでしょうね。対馬藩のことなんかで、こき使ってはだめよ、おとっつぁん」

「さあて、なんのことやら」

「また、とぼけて」

「蒼生殿」

半九郎が戻って来た。

「いいこと、おとっつぁん。おとなしく御城に帰ってくださいな。これ以上、つきまとわれるのはご免よ」

「わかっておる。おお、そうじゃ、蒼生、流鏑馬に来るよう、池田半九郎に申し伝えよ。よいな！」

追いかけて来る声には応えず、半九郎のもとに駆け寄る。二人を祝福するかのような明るい陽射しが、蒼生にはなぜか眩しく感じられた。

四

やわらかな陽射しに誘われるのだろう。永代寺門前仲町はいつも以上の賑わいを見せていた。深川にあるこの町は二ヵ所に分かれ、ひとつは八幡宮一の鳥居通りの南側にあり、もうひとつは油堀入堀の西側にある。かつては永代寺の受領地だったのだが、今は町地に解放されて、異常なまでの発展ぶりを見せていた。深川岡場所の総代と言われる遊里仲町が、さまざまな形で町の発展に貢献しているのは言うまでもない。良し悪しは別にして、常に人通りの多い町であるのは確かだ。

「平岡様。その後、例の小姓は現れましたか」

着流し姿のお銀は、一軒の茶店で、深川の私塾――会輔堂の平岡理兵衛に会っている。このあと『辻屋』の倉太郎も来る手筈になっていた。少年に指定された茶店で、二人は団子を食べ、甘酒を啜っている。

「いや、現れぬ。拙者もまさに憑きものがおちたような感じでな。綺麗さっぱりと忘れてしもうたわ。蒼生殿や川村殿には何度も言うたが、もともと衆道の趣味はない。今になってみれば、悪夢としか思えぬ」

旨そうに団子をぱくつく顔には、なんの翳りもない。理兵衛夫婦の件はこれで落着と、お

銀はほっとした。美弥はなんとか床上げしたものの、今度は乙葉が霊力を封印されてしまい、三妖娘の中でまともに動けるのは自分だけ、理兵衛たちのことだけでも片づいてくれれば楽になる。

「ようございました。壽屋としましても、間に入った甲斐があるというもの。花絵様にも宜しくお伝えください。そうそう、ひとつ伺いたいことがございます。主より確認するように仰せつかってまいりました。妙な質問に思えるかもしれませんが、お許しください。平岡様のお家は天台宗でございますか」

「うむ、そうだ。ちょうどいい。そのことでな。こちらも気になることがあるのよ」

なにやら、ごそごそと懐を探り、小さな包みを取り出した。寺のお札に見えるが、いったい、なんなのか。

「これは？」

「花絵が買い求めたという惚薬にな、そのお札もついてきたのよ。かまわぬから、開けてみてくれ」

「はい」

中に入っていたのは、やはり、お札だったが、書かれている文字を見て、首を傾げる。

「明星天子（みょうじょうてんし）」

「そうだ。お銀殿は知らぬかもしれぬが、真言宗に立川流なる密教宗派が現れたように、天台宗にも秘密法門があってな」

「蒼生様にお聞きいたしました。『玄旨帰命壇』のことでございますね」

すかさず、お銀は答えた。常に情報交換しているお陰で、意外に思える話が出ても、すみやかに対応できる。

「おお、さすがは蒼生殿。話が早くて助かるわ。そう、それよ。密教のひとつだが、その宗派において、ご本尊と崇め奉るのが明星天子と言われておるのよ。明星は金星のことだがな。金星が明けの明星として現れるとともに、宵の明星としても現れるところから、日月を繋ぐ星と見なされているらしいのだ。お札にご本尊の名を記して、惚薬の効果を高めようとしたのかもしれぬが、拙者にとってはありがた迷惑な代物よ。同じ天台宗ともなれば、粗略にもできぬ。始末に困ってな。とりあえずは蒼生殿にお渡ししようと決めた次第。厄介物を押しつけるようで申しわけないが、お渡し願えぬか」

「畏まりました。お預かりいたします」

「やれやれ、助かった。花絵には気味悪がられるわ、捨てるのも憚られるわで、難儀しておったのよ。これで枕を高くして眠れるわ。しかし」

と、理兵衛の目が、手をつけないお銀の団子に向いた。さりげなく皿を前に出して勧める。

「どうぞ、お召しあがりください」
「よいのか？　すまぬのう、では馳走になって、ではない。いや、団子はちょうだいするが、話は団子のことではない。『辻屋』の倉太郎のことだ。壽屋に出入りするのは、まだちと早すぎるように思えてな。蒼生殿と個人的にお知り合いなのか」
「ええ、まあ、そんなところです。以前、『辻屋』さんで働いていた奉公人の方に、壽屋がお世話をした縁がございまして」
適当に嘘を捏造して、ごまかした。倉太郎が〈妖堂〉に依頼するべく、『大角』に来たことは教えられない。個人的に知っているのはお銀なのだが、詳しい説明をするつもりはなかった。倉太郎にもその旨、あらためて、口止めしておかなければならない。
「今日はなんの御用で、呼ばれたのでございましょうか。平岡様はなにかお聞きになっていらっしゃいますか」
「それが、どうも、はっきりせぬのよ。今日、この茶店に来てほしいと言われただけでな。よくわからぬ」
話しているうちに、『辻屋』の奉公人が迎えに来た。支払いをすませて、あとに続く。どこに連れて行くのか、そういった話はされないまま、永代寺の門をくぐった。
永代寺は富岡八幡宮の別当である。寛永四年（一六二七）に中興し、遍昭院と称したが、

承応二年（一六五三）、京都仁和寺の末寺となって、天栄山金剛院永代寺と改めた。二人が案内されたのは、由緒正しい寺の墓地。

「お銀さん」

入口で待っていた倉太郎が、走り寄って来たので、耳もとに小声で囁いた。

「いいですか、倉太郎さん。おいらが捜屋と繋がりがあるってことは、平岡先生には内緒ですよ。前にも言いましたが、壽屋の人たちも、裏稼業については知りません。決して口外しないと約束してください。噂にでもなれば、おいらは深川にはいられなくなる。わかりますね」

ここでもうまい嘘を作った。怪訝そうに理兵衛が見てるが、倉太郎もそのあたりのことは心得ている。

「わかっています。よけいなことは申しません。それよりも、おっかさんのことで、なにか新しい話を聞きましたか」

頭にあるのは、おっかさんのことだけだ。あたりまえなのだが、縋(すが)りつくような目を見ると、お銀も辛くなる。

「いいえ、なにも」

「わたしの方はあったんです。四日前、用事があって、おとっつぁんと上野寛永寺の方に行

ったとき、またそっくりの女を見たんですよ。そのときは、おとっつぁんも見たものですから、今日のこの騒ぎになったんです」

早く来てください。手を引っ張られるようにして墓地に進んだ。遅ればせながら、理兵衛もついて来る。

「ちょ、ちょいと待ってください、坊ちゃん。まさか」

まさかの出来事が、墓地で行われていた。葬られた御内儀の墓が、掘り起こされていたのである。住職の渋面に、同席している者たちの心が表れていた。奉公人はもちろんのこと、理兵衛も困惑している。

「これは、また」

神仏を畏れぬ所業と、続けたかったにちがいない。あるいは死者を冒瀆する非道と戒めたかったかもしれない。が、倉太郎の顔を見れば、なにも言えなくなる。確かに許しがたい暴挙だが、倉太郎は二度も母親に似た女を見かけている。仮死状態で葬られた母親が、生き返ったのかもしれない。そう考えたとしても、責められなかった。

「さあさあ、早くお願いしますよ。倉太郎だけでなく、わたしも見たんです。寛永寺の近くで、女房に瓜二つの女を見ました。罰あたりは承知のうえです。確かめてみないことには、気がすみませんよ」

取り仕切っている『辻屋』の主は、見るからに裕福そうな印象を与える男だった。垂れさがりそうな福耳や、樽のような巨体、そして、着ているのは上等な絹の着物と、いかにも大店の主という感じがする。親子ともども期待に満ちた目を、掘り返される墓に注いでいた。このところの妙なあたたかさで、土の臭いがひときわ強くなっている。

この薫り。

お銀は御城の厩舎近くで、妖術師と戦ったときのことを思い出していた。上様の愛馬、亘はいまだに発見されていない。対馬藩に依頼された菩薩像の行方も、まったくつかめていなかった。

あっちもこっちも、わからないことばかりで、ないない尽くしだよ。そのうえ、墓を暴く場面に立ち会うはめになっちまうとはね。怨まないでおくれよ。あたしたちが悪いわけじゃないんだからさ。

「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」

六字名号を唱えながら、薄目を開けて盗み見る。御内儀の棺が掘り出され、今まさに棺の蓋を開けようとしていた。その場にいた全員が、息を詰めて、見守っている。蓋の釘が抜かれて、蓋が開けられたそのとき。

「うっ、うわあぁ〜〜〜〜〜〜っ」

でっぷり太った『辻屋』の主が、弾き飛ばされるように尻もちをついた。だれかに押されたわけではない。驚愕のあまり、倒れるようにすっ飛んだのだ。急いで覗きこんだお銀は、叫ぶこともできない。

「……」

全員が息を呑み、棺に目が釘付けになっている。ひいひいと引き攣るように泣き叫ぶ主の声が、なまあたたかい風に乗って流れて行く。

気温は高いはずなのに、みな氷をまとったような寒気を覚えていた。

五

同じころ、いつもどおりの着物と袴に着替えた川村真琴は、御船手方の頭、向井将監（むかいしょうげん）の屋敷にいた。いったんは御城に行ったものの、朝鮮船は御船手方の屋敷にまわされたと聞いて、訪れたのである。将軍の御城に朝鮮船を入れるわけにはいかないと、老中たちが反対したらしい。普通とは異なる命令に、あちこちで不満があがっていた。

「ここだけの話でございますが、扱いに困っておりまする」

真琴の案内役になった御船手方の役人が、廊下で足を止めて振り返る。

「御船手方の屋敷で、朝鮮船の人夫を調べるのなど、めったにない出来事。罪人扱いするわ

けにもいかず、さりとて、屋敷内を自由に歩きまわられるのも迷惑な話。また勝手に外に出られでもすれば、一大事でございまする。こちらの首が飛びまするからな。言葉がわからないのに困り果てて、対馬藩より朝鮮語のできる男をまわしてもらいましたが、食べ物も、あれはだめだの、酒をくれだの、我儘ばかり申しております。上様はいったい、なにをお調べになるおつもりなのでございましょうか。いつまで、かかりますのか」

困惑しきっていた。通常の場合、漂着した朝鮮船は、漂着地の藩主のお預けとなったうえで、なるべく早いうちに長崎に戻される。そこで型どおりの取り調べをしたあと、対馬藩に引き渡されるのが常だった。わざわざ面倒なことをするのはなぜなのか。加納久通こと覚兵衛が動ければ、滞りなく進んだであろう取り調べが、思わぬ病でいまだに終わっていない。真琴を見たとき、御船手方の役人たちが、ほっとしたような顔になったのも無理からぬこと。異国の船と人は、さっさといなくなってほしいというのが正直な気持ちであろう。しかし、真琴は言わずにいられない。

「いつまで留めおくかは、上様次第。わたくしごときが決められることではございませぬ。本当はわたくしも、加納様のお供をするはずでございましたが、とにもかくにもお役目を進めなければと思い、参上つかまつりましてございまする。結果は上様にご報告いたしますゆえ、まずはご案内くださいませ」

「承知いたしております」

やや憮然とした面持ちで、男はふたたび廊下を歩き始める。喉まで反論が出かけたが、ぐっとこらえて従った。短期間、世話をするだけであるものを、なぜ、それができないのか。上様のご命令ではないか。いつもとは違う手順をふんでいるのは、なにか理由があってのことにちがいない。黙って従うのが、われらの役目ではないか。女ながらも侍気質の真琴は、くどくどと文句を言うのが許せない。追い越すようないきおいで、廊下を進んだ。

「あ、川村殿、こちらでござる」

追い越してしまい、渋々戻る。渡り廊下の先に離れのような造りの一角があった。堅固な建物の中には、座敷牢が設けられている。冷たい土牢ではないが、要するに監禁状態だった。ふん。罪人扱いするわけにはいかず、とな。よく言うものだ。だれが見ても罪人の扱いではないか。

三つある座敷牢に何人かずつ分けられて、朝鮮船の人夫たちが押しこめられていた。牢屋内には大徳利や花札が散らばっている。閉じこめられてはいるものの、かなり自由がきくようだ。男たちの顔色はよく、表情も暗くない。

「頭は前に出よ」

役人の命令で、年かさの男が進み出て来る。通訳の男が真琴の隣に貼りつき、いちいち訳

すのだから面倒くさい。しかも対馬藩からまわされた男となれば、どこまで信用してよいものやら、疑問が残る。

本当は御城の役人に通訳をしてほしかったが……仕方あるまい。可能な限り話を引き出すしかない。

真琴は質問状を出して読みあげた。

「船はなぜ漂着したのか。嵐に出くわしたのか」

そのとおり、と短い答えが返ってくる。むろん、通訳による言葉だ。嵐に出くわしたのが、真実か偽りか。それを確認する方法はない。次の質問に移った。

「荷はなんだったのか。正直に答えよ」

正直に答えるわけがないと、真琴は思っている。今回の騒ぎの裏に隠された真実、それは対馬藩にとっては、死んでも口にできない事柄であろう。わかったうえで聞いていた。相手もわかったうえで答えている。

「仏像だそうにございます」

いささか意表を衝かれる返答だった。いやでも〈妖堂〉にきた依頼が甦る。では盗まれたという話は本当なのだろうか。われらを攪乱するための企てだと思っていたが、ちがうのか。

「仏像とは菩薩像か」

「菩薩像もあった由。二尺程度の大きさの菩薩像や観音像だけでなく、もっと大きな仏像類も運んで来たとか。嵐に遭ったとき、船を軽くするために、全部、海に投げ捨てたそうにございます」

「そう、か」

投げ捨てた菩薩像が、盗まれるわけはない。対馬藩の依頼については、曖昧なままだった。さらに通訳が対馬藩の役人とあっては、あたりさわりのない話しかできない。言葉がわかれば、歯がみする思いだった。

「では、これぐらいで」

通訳は早くも打ちきろうとする。

「いや、待て。船はいつごろ遭難したのか。時期について、答えていないようだが、それを確かめたい」

早口で訊ねた。今回の取り調べは対馬藩に対する威嚇の意味があるのではないか。真琴は吉宗と覚兵衛の真意を、そのように推理していた。真実があきらかになれば上出来だが、無理な場合は脅しだけでもいい。隠れてこそこそと悪事を働くのはよせ、われらは気づいておるぞ、やめないようであれば次は……目的はそれなのかもしれなかった。真琴はもちろんだが、蒼生も察している。

対馬藩は密貿易を行っているのではないか？
幕府には内密で、朝鮮国と取引しているのではないか？
だれもが考えているのに、口にできない問いかけ。対馬藩も吉宗も〈妖堂〉を使って、互いの腹を探ろうとしているような気がする。
「時期につきましては、はっきりわからぬと申しております。話を聞いた折りの記録が藩邸にございますので、そちらを調べたうえで、後日、お知らせいたしまする。本日のところはこれで」
「いや、まだでござる。荷は本当に仏像だけだったのか。他にも……」
食いさがる真琴の言葉を、嗤い声が遮った。
「フォッ、フォッ、フォッ」
ぞっとするような響きを、そのまま体現化したような老人が、頼りない足取りでこちらに近づいて来る。皺だらけの顔には無数の老人斑が浮かびあがり、両眼は糸のように細められていて、心を読み取るのは不可能だ。極端に曲がった腰の動きを補うため、太い杖を頼りにして、よちよちと歩いてくる。
「こ、これは鳳岡様」
真琴は心の中で舌打ちしながらも、その場に跪いて、臣下の礼を取る。林鳳岡は齢八十

歳を超える幕府の重鎮で、幕府大学頭林家の知恵袋。林家というのは言うまでもなく、家康の時代に政治や外交の頭脳だった林羅山（らざん）の家だ。新井白石が覇権を握っていたときは、対馬藩とも疎遠になっていたようだが、吉宗の時代になると、その権威を復活させるため精力的に動き、外交問題においては、かなりの権力を持つようになっている。石高は千三百十石であるが、格式は大名並みだ。現在は息子に家督を譲り、隠居しているはずなのだが……老齢を押して現れた理由はひとつしかない。

「おてやわらかにの」

短いひと言には、ずしんとくる重みがあった。手心を加えてほしい、このあたりでやめてもらおうか。これ以上の詮索は無用、さもなければ上様に直々言上しようぞ。言葉にはされていないが、あきらかにそう告げていた。

噂どおり、食えぬお方よ。

真琴は苦々しい思いを味わっている。

まぎれもなく妖怪爺、このお方とやり合えるのは、加納様しかおらぬ。わたしでは役不足、これが限界か。上様の狙いが対馬藩に対する威嚇であるのなら、ある程度はかなえられたはず。仕方あるまい。

「ははっ」

よけいな言葉は返さずに頭をたれた。負けたわけではないと、ひそかに唇を噛みしめている。年寄りの顔を立てただけだ。加納様さえお元気ならば、もっと追及できただろう。無念でならぬが、今日はこれで退くしかあるまい。

「失礼つかまつりまする」

立ちあがったその背に、鳳岡のしわがれた声がとぶ。

「『もののけ姫』によろしゅうの。これにて一件落着と、お伝えくだされ。今日も良い日和じゃ。明日も良い日和でありますように、とな」

無事に明日を迎えたければ、おとなしく引っこんでおれ。次はどうなるかわからぬぞ。わかっておろうな。

威嚇には威嚇を以て制す。

不気味な老翁が、背後から巨大な冷気となってのしかかってくる。真琴は冷や汗を滲ませて離れを出た。陽射しは眩しく、あたたかいはずなのに、強い寒気に襲われている。妖怪爺の魔手が、身体に絡みついてくるかのようだった。

壽屋に帰ろう。

小鳩がねぐらを恋しがるような気持ちになっていた。

六

さて、こちらは不気味さとは無縁の壽屋。

「ふにゃぁぁ～～～～」

美弥は大きく伸びをして、目を開けようとしたが、またまたとろーんと瞼が垂れさがってきた。原因不明の風邪はとっくに完治しているのに、「大事になさい」という蒼生の言葉をこういうときだけ守っている。日毎夜毎、食べては眠り、眠っては食べ、だらしなく一日を終える生活が続いていた。

「美弥」

襖を開けて、乙葉が顔を覗かせる。白虎に変化してしまったとかで、一緒に留守番役を仰せつかっていた。

「あに？」

好物の煮干しを口に放りこむが、今ひとつ美味しさを感じない。やはり、病みあがりのせいなのだと、都合よく解釈した。対する乙葉といえば、淀んだ邪気を放ち、見るからに暗い表情をしている。

「わたくし、少し休みます。考えれば考えるほど、滅入ってしまって」

同じ妖娘であっても、性格はまったく異なる。蒼生の役に立てないことを悔やみ、自分を責める乙葉とちがって、美弥はあっけらかんとしていた。

「わかった。けど、あんまり気にしない方がいいよ。なるようにしかならないんだからさ」

とうてい慰めにならない言葉に、乙葉はそっと微笑を返して、足音もなく自室に向かった。

「乙葉ってば、幽霊みたいだけど、大丈夫かな」

と思ったが面倒くさいので立ちあがらない。いつものように食べたいものを思い浮かべて、ひとりの時間を楽しみ始める。

「なんか、今はドジョウとか食べたいなあ。それも生のやつを、頭からちゅるりと呑みこむんだよね。川で泳いでいる活きのいいドジョウをさ。素早く捕まえて、さっと……あぁ、また眠くなってきちゃった」

ふたたび瞼が重くなり、うとうとし始めたとき、玄関に人の気配を感じた。さすがに警戒心が働き、意識を集中する。挨拶はない。訪問客は無言で廊下にあがり、忍びやかに近づいてきた。

だれだろう。ま、だれでもいいや。襖を開けて顔を出したら引っ掻いてやる。

お得意の爪をにゅっと出そうとしたが出ない。

「あれ？」

首を傾げるのと同時に、襖が開いた。

「うふふふふ」

林鳳岡とは別の意味で、妖怪と言える女が出現する。美しい絵柄の着物をまとい、髪を綺麗な島田に結って、お洒落に着飾っていた。部屋に入ってきたとたん、艶やかな牡丹が咲いたような華やいだ雰囲気に包まれる。

「雛子さん」

脳天気な猫娘も、警戒心を解かなかった。常磐津の師匠をしている雛子は、これまで七回も結婚したが、亭主はみな早死にし、今は未亡人のひとり暮らしを楽しんでいる。だれがつけたのか『ぽっくり観音』の異名を持つ強者で、壽屋に異様な関心を持ち、足繁く訪れるようになっていた。

「美弥ちゃん、お加減はいかが？　風邪をひいたのですって？　わたくし、もう、心配で心配で気が気じゃありませんでしたわ。早くお見舞いに伺おうと思っていたのですけれど、隙がなくて、じゃありませんわね。お客様が多かったようなので、ご遠慮していたのです。美弥ちゃんはもてますこと、男衆の噂になっていましてよ」

喋り終わる間に、美弥の帯を外して、着物を脱がせにかかっていた。ずっとご無沙汰のうえに、妙な陽気のお陰で、いつでも発情期状態。

「ぁむぅ」

接吻されると、とろけるように全身が痺れた。押しのけるつもりだったのに力が入らない。そのまま押し倒されて、のしかかられた。雛子は手早く長襦袢の紐も解き、素肌をあらわにさせる。美弥は腰巻きなど着けない質なので、長襦袢の紐を外されると、そこはもう雛子にとっては桃源郷、なめらかな肌が剝き出される。

「美弥ちゃん、お魚くさいですわね」

唇を離して、眉をひそめた。

「あぁ、煮干し」

物憂げに答える。甘い痺れが広がって、豊かな乳房がふっくら張りつめていた。乳首はまだ埋もれているが、どうにでもして、という無抵抗な姿態を見れば、魚くさいだのなんだの言っていられない。

「お魚好きなのも噂どおり、ふふふ、気にしていられませんわ」

雛子は耳朶を軽く咬み、左の乳房をやわらかく揉みしだき始める。いつの間に脱いだのであろう。染みひとつない裸身を惜しげなく曝していた。結婚歴は七回あるが、子を産んだ経験はない。形のくずれていない巨乳を、美弥の乳房に密着させた。

「ふふ、ふふふふ、どっちが大きいかしら」

囁きはもう耳に入らない。

「ああぁ〜〜、は、早くぅ、早く、早くぅ〜〜〜」

うっとり目を閉じて、おねだりする。いともたやすく火が点いていた。いつもであればおかしいと思ったかもしれないが、美弥はすでに敵の術に陥ちている。さらにふっくらした雛子の女体は、想像以上に魅力的だった。まるで餅のように、ぴたりと美肌が肌に吸いつく。巨乳をぷるぷる振るようにして、美弥の乳房を刺激した。

「はあぁ〜ン、はあはあぁ、もっと、もっとぉ」

自分で乳房を持ちあげるようにして、尻をくねらせる。焦らしているのだろう。なかなか下半身に移ろうとしない。埋もれていた乳首をくすぐるように指先で愛撫した。乳首が目覚めたかのごとく、むくりと頭をもたげる。かすかに迫り出したそれを、唇に含み、舌先で嘗める。揉みしだく手も止まらない。熟女の前戯にぬかりはなかった。

「んんんぅ〜〜〜、ぅふうふう〜〜〜〜」

美弥は顔を真っ赤にして喘いでいる。大きく広げた両脚を、雛子の背中に絡めるようにして、次のご褒美をねだった。早く下にさがって、あそこを嘗めてよぉ、焦らさないで早くぅ。せつなげに尻をもじもじさせるが、雛子の唇は乳首を咥えたままだった。それでもやっと腹のあたりにさがり、臍のくぼみに舌先を入れる。

「あんぅ〜、いやいやいやぁ〜〜」

不満だと訴えた。はあはあと喘ぐ度に、大きな乳房が揺れる。尖った桜色の乳首を、雛子は指先でいじりながら、少しずつ身体をさげていった。叢はわずかにあるだけで、ほとんど無毛に近い。

「乙葉さんもそうでしたけれど、美弥ちゃんもここの毛が薄いんですのね」

雛子は余裕たっぷりに感想を述べた。なにを隠そうこの魔物は、乙葉とお銀をすでに味見しているのである。最初に仕掛けられた乙葉は、美弥ともそういう関係にあると、匂わされただけで陥落した。人間のように嘘がつけない妖娘は分が悪い。

「そ、そんなこと、はぁぁ〜、ど、どうでもいいから」

早く嘗めてよお。ねえ、早くったらぁ。

想像上の尻尾を振り立て、雛子の頭を下に押した。渋々といった感じで、女陰に顔をもぐりこませる。しみじみ観察しているのは、乙葉のそれと比べているからだろう。花蕾がついているような花弁から見れば、毛が薄いだけで平凡きわまりない。

「ここは普通と変わりありませんわ」

つまらないと言いたげだったが、そのせいで舌技が鈍くなったりはしない。まだ開いていない花弁を、そろりと舌先で割った。

「んん！」

美弥はのけぞり、開いた両脚を引き攣らせる。剝き出しになった花芯を、雛子はちゅっと吸いあげ、やわらかく舌をゆらめかせた。乳房に残したままの両手は、休みなく動いている。乳房全体を揉みしだいたり、硬く尖った乳首を入念にこすりあげたりする。呼応するように花芯を嘗める舌の動きも速まった。

「うんんぅ〜〜、い、いいぃ〜〜、ふうぅぅ〜〜〜」

動いてはなるまいと、美弥はけんめいに尻を動かさないようにしている。そろそろ尻尾が現れそうな気配があったが、別にどうでもよかった。猫娘である事実を知られてもかまわない。この快楽に溺れたい。蜜壺がひくつき、とろぅりと蜜があふれてくる。すぐに気づいた雛子が、乳房から蜜壺に右手を移した。細い二本の指に愛液をからめるや、じゅぼっと挿入させる。

「あぴぃ！」

あにゃあっとなるはずの喘ぎ声が、変な響きになった。が、気持ちよさはいつもどおり、重めの濡音が響き渡る。乳房を揉みしだく左手がしなやかに動く、花芯を嘗める舌が小刻みに揺れる、蜜壺に挿入された指が忙しなく出入りする。

「ひ――――」

美弥は笛が鳴るような歓喜声を放った。

「ぴぃっ、ぴゃぁ〜〜っ、んぴゅうぅ〜〜〜〜〜〜っ」

と同時に赤い炎の幻像が視野を染める。一瞬、裸身を硬直させたが、びくっ、びくびくっと痙攣し始めた。耳には尖った猫耳が現れ、長い尻尾が生え、肌には白と黒と茶色の三毛がところどころに生えるはずなのだが……。

七

「まあぁ！」

雛子の口が驚きで丸くなる。美弥の裸身には鳥のような羽根が生え、頭にも産毛を思わせる毛が生えていた。色は鮮やかな朱色だが、薄い色合いの羽根や、白っぽい羽根も混ざって、美しいグラデーションになっている。顔立ちはさほど変わらず、いまだ変化しない白い乳房を、朱色の羽根が艶(なま)めかしく彩っていた。背中には翼らしきものが現れているが、まだ小さくてとても飛べそうにない。

「そうでしたの。乙葉さんは花娘、お銀さんは竜娘、そして、美弥ちゃんは鳥娘(とりのこ)でしたのね。驚きましたわ」

口ではそう言っているが、さほど吃驚(びっくり)していない。どうやって責めようかしら、などと考

えている。本人の方があわてていた。

「ぴゅっ、鳥娘？　ち、ちがう、あたしは、か、鏡っ、鏡は⁉」

「はい、どうぞ」

差し出した手鏡を見て、今度は美弥が目をみひらいた。

「……朱い鳥」

「見たことはありませんけれど、絵で見た朱雀のようですこと。綺麗な羽根の色ですわ。とても挑発的でしてよ」

「ぴ？」

当惑する美弥など、おかまいなしだ。欲望に燃える魔物は、だれにも止められない。朱い羽根で装った鳥娘を、もう一度、押し倒して女陰を覗きこむ。ここも目立った変化はない。が、完全変態した暁には、どのようになるのか。

見てみたいですわ。ああ、わくわくしますことね。

指先で花弁を広げ、充血した花芯をあらわにする。ためらうことなく唇をつけ、舌先を濃やかに震わせた。姿に気を取られて気づくのが遅れたが、蜜壺からは涼やかな蓮の花を思わせる芳香が立ちのぼっている。魚の臭いよりはずっといい。蜜壺にも指を差し挿れて、肉襞や壺芯の様子を探った。肉襞は淫らに蠢き、連動して壺芯もひくついている。

「ぴょぉ〜〜〜〜、ぴひぃぃ〜〜〜〜、あひゃあぁ〜〜〜〜〜〜」

美弥は鳥っぽい喘ぎ声をあげていた。最後の声は普通に叫ぼうと努力した結果だろう。とまどいつつも、乙葉のように悩みぬくタイプではない。愛撫され始めると、素直に感じていた。雛子の舌と指には、いちだんと力がこもる。完全変態した姿を一刻も早く見てみたい。乳房や女陰はどうなるのか。蜜壺は？　あふれ出る疑問を解決するべく、熱心に花芯を嘗め、蜜壺内を撫でこすった。

「ぴゃあぁ〜〜、ひぃぃ〜〜〜〜、ぴゅうぅぅ〜〜〜〜」

喘ぎ声をあげながら、美弥は座位を取っていた。背中に生えた翼が、感じるにつれて羽ばたき、横たわっていられなくなったからだ。女陰に顔を埋める雛子を抱えこむような姿で、ぴぃぴぃと喘いでいる。多少、尻が宙に浮いていたが、その方が嘗めやすいし、蜜壺にも指を挿れやすい。まったく気にしていなかった。

「可愛らしいわ、美弥ちゃん」

本心からそう告げる雛子こそ妖魅。羽根の中で波打つ美弥の白い乳房を、左手で揉みしだき、乳首をつまむ。興奮してふくらんだ花芯を舌で嘗めあげる。差し挿れた二本の指を、震わせるようにしながら、壺芯を突いた。

「ぴぴゅっ」

達く！

羽根の生えた頤をのけぞらせて、美弥は絶頂に包まれる。二度目の鳥風歓喜声は、笛を吹いているように長く伸びた。翼も一瞬、止まり、浮かびあがっていた尻が、すとんと落下する。反動で蜜壺内の指が、とどめとばかりにまた壺芯を突きあげた。

「ひゅ――――」

雛子の頭を抱えこみ、また両脚を突っ張らせる。小刻みに尻が揺れて、痙攣が伝わっていった。まばらだった朱い羽根が全身を覆い、翼がいちだんと大きくなる。乳房のまわりにも羽根が生えたものの、豊かな巨乳は雪のような白さを保っていた。見るからに淫靡で、好色心をそそられる。

「美弥ちゃん、わたくしもお願い」

頬を火照らせて、雛子は座りこんでいる美弥の眼前に立ち、堂々と両脚を広げた。唇が嘴に変わってしまうと、唇と舌による奉仕は受けられなくなる。それならば早いうちにと思い、積極的に出ていた。もっとも、ふだんも決して消極的ではない。鳥の姿に欲情して、さらに熱く燃えているだけの話だ。

「あ、そこ、ですわ」

立った状態で、雛子は羽毛で埋まった美弥の頭をさわる。なんという手触りであろうか。

まさに純毛、生えたばかりのせいか、とても柔らかい。羽毛で撫でるように掌や腕を動かしてみる。こと房事にかけては、他の追随を許さない貪欲さを見せる女。羽毛タッチを存分に味わいながら、女陰を美弥の唇に押しつけた。

「ぴ、ぴゅ、ぴょぴょぅ」

時折、奇妙な声を洩らしつつ、けんめいに舌を使っている。熟女の花弁は淫らに咲き誇り、花芯は痛いほど屹立していた。美弥は柔らかい唇でそれをくるみ、巧みに舌を震わせる。蜜壺がきゅきゅーっと収縮し、あふれ出た蜜が、白い太股を伝って流れ落ちた。

「うふぅ、ああぁ〜〜、み、美弥ちゃ、ん、いい、いいわぁ〜〜〜」

壁に寄りかかっているわけではないので、不安定な立姿の前戯になっている。よろめかないように美弥の頭に摑まっているが、羽根の生えた腕を用いて、大きな乳房を刺激していた。どのようなものでも、利用するのが雛子の信条、ましてや極上の羽根となれば、いかようにも使える。小さな美弥の手を乳首に導き、つまみあげるように示して、絶頂を引き寄せようとする。

「は、速く、して、ああっ、し、舌を、くううぅ〜〜〜〜っ」

要望に応えて、舌の動きが速くなる。やや強めの舌技になる。これこそが好み、美弥への前戯で、蜜壺は濡れそぼっている。もっと濡らして、次の愉しみにそなえるのだ。踵を持ち

あげて、尻を前に突き出す。さらに舌技が強くなり、花芯がふくらみきった。
「わ、わたくし」
我慢できませぬ。
「達くうううぅ〜〜〜〜ぅ〜〜〜〜〜っ」
長い歓喜声が洩れた。踵がぴんとあがって、背中が反り返る。一瞬、裸身が硬直したあと、ぶるっ、ぶるぶるっと白い尻が痙攣した。蜜壺からゆるやかに、蜜が流れて、太股を這い降りる。腰をぬかすような感じで、雛子は座りこんだが、これぐらいで腰くだけになるわけがない。脱ぎ捨てた着物の袖から、隠し持っていた両首の張り形を取り出した。二つの張り形の根元を繋ぎ、女性同士で愛し合えるように造られた大人の玩具である。外して単品でも使えるが、今は繋いだままにしておいた。
「ほうら、これを」
妖しく眸をきらめかせて、雛子は片方の張り形を蜜壺の入口にあてる。美弥はごくりと唾を呑み、真剣なまなざしを注いでいた。すぐに挿れたかったが、自分自身を焦らすのもまたオツな趣向、雛子は雪隠で座るような姿になり、張り形で入口をくちゅくちゅとまさぐった。蜜の量がもともと多い質ゆえ、流れるかのごとく、愛液があふれ出してくる。尖端部をわずかに挿れては引き、また浅く沈めた。

「ぴぴっ、あ、あたしもぉっ」

興奮して鳥のように羽ばたいたせいで、美弥の身体が浮かびあがる。

「あら、まあ」

雛子は少しもあわてず、なおかつ欲望を維持しつつ、じゅぶっと張り形を蜜壺の奥深く挿しこんだ。

「おぅ！」

思わず裸身を震わせる。いきおいよく出し入れさせたかったが、まだまだと我慢した。蜜壺を締め気味にして立ちあがり、浮かびあがった美弥の裸身を引き寄せる。股間には挿入されていない片方の張り形が、本物の男根のように天を向いていた。飛び方のうまくない美弥を、慎重にさげて、跨らせるような恰好にさせる。その状態を保って、再度、座りこんだ。

「これに、ね？」

雛子は美弥の蜜壺に、もう片方の張り形を添える。産毛が女陰のまわりにも生えていたが、花弁と蜜壺の入口は無毛地帯、肉色の部分がよけいに強調されて、濡れ光っている。くちゅっと音をたてて、張り形の尖端部を少しだけ挿入させた。

「んふぅ、ぴぴゅぅ」

気持ちよさげに美弥が目を閉じた刹那、

「あぴぃ！」

奥まで思いきりつらぬいた。飛びそうになった美弥を抱きしめ、花芯と花芯をこすりつける。大きな乳房と巨乳を密着させる。腕にも脚にも羽毛の感触があり、わずかに身体を動かすだけで、強い刺激を味わえた。なんと言っても美弥は全身が羽毛なのだ。抱き心地も最高に素晴らしい。ふわふわして、くすぐったくて、ふれている部分から快感が広がる。それが子宮に伝わって大量の蜜が流れ出た。雛子は夢中で腰を突きあげる、美弥も負けじと尻を前後させる。上下運動と前後運動が相まって、絶妙の快感を運んできた。

「あううっ、み、美弥ちゃんっ、いいわっ、いいわぁ～～～」

「ぴゅううぅ～～～～っ」

二人、いや、ひとりと一羽であろうか。固く抱き合い、密着しているせいで、宙に浮いていたが気づいていない。空中交尾となって、雛子は汗を飛び散らせた。美弥は羽毛があるので汗が出ないが、乳房や女陰が朱色に染まっている。ぐちゅびちゅという重い濡音をあげて、絶頂のときを迎えた。

「あ」

わたくし、また。

「んふううっ、ふうふうぅっ、いくううぅ～～～～～っ」

雛子の歓喜声に、鳥の歓喜鳴（よがりなき）が続く。

「ぴっ、ぴっ、ぴぴぴぴぴゅぅ～～～～っ」

ひとりと一羽は同時に硬直し、同時に尻を震わせた。美弥の背中で通常の大きさになった翼も動きを止める。とたんに落下していたが、たいした高さではないので、怪我などしない。そのまま転がるようにして、二回戦に進もうとしたが、だれかの視線を感じて、雛子はふと目をあげた。

「……」

蒼生と乙葉が、呆れ顔で見つめている。

「ぴぃ？」

ここで美弥もやっと正気づいた。蒼生の怖い顔を見て焦ったのか、張り形を引き抜こうとしたが、蜜壺が締まってしまい抜けない。

「ま、あわててはいけませんことよ」

どんな場合も雛子は我が道だけを行く女。美弥の女陰を撫でこすり、「ぴゅぅ」とまた気持ちよくさせたところで、張り形を抜いてやる。それから、おもむろに自分の張り形も抜いたが、ほかほかと湯気があがっていた。

「ほほほ、はしたないこと。お粗末さまでございました」

三つ指ついて挨拶する。

「……」

深くなる沈黙の中で、美弥の蜜壺から、蓮の花の芳香が強く立ちのぼっていた。

第五章　陰陽封じ

一

朱雀もどきに変化した美弥、金の性を封じこめるために用いられたのは火だ。五行相剋順でいくと、水は火に勝ち、火は金に勝ち、金は木に、木は土に勝ち、土は水に勝つとなる。火に属するものとしては、色は赤、方位は南、聖獣は朱雀、季節は夏などとなるため、美弥は房事を仕掛けられたときに、赤い炎の幻影を視たわけだ。薫りも夏に咲く爽やかな蓮の花を感じ取っている。

乙葉は木の性を持つ花娘、だから、金で封じこめられた。

蒼生は黒装束に身を包み、さる大名家の屋根で庭の様子を眺めながら、自分たちに起きている異変について考えている。満月前夜だというのに、曇っているのか、夜空に円い月の姿は見えない。不安を覚えつつ、五行相剋の配当図を頭に思い描いた。

金に属するものとしては、色は白、方位は西、聖獣は白虎、季節は秋、乙葉が感じていた薫りは菊だったわ。しかも白菊とはっきり告げていた。白虎にも変化しかけたけれど、美弥と同じように、中途半端な変化しかできない。ほとんど役に立たない状態にされちまって。

「異状はないか」

「うむ。今のところはな」

庭を見廻っている藩士たちが、低い声で言葉をかわしている。あちこちに松明をあかあかと灯して、弓を打ち鳴らしたりしていた。死者に物の怪が寄りつかないように警戒しているのだろう。いささか大仰と言えなくもないが、巷で流れる噂話を耳にすれば、当然の警備状態にも思える。

一昨日にまたひとり、死んだ。幕府家臣の中では四人目の突然死。昨夜、この屋の主が亡くなって、五人目となった。

わずかな間に、五人もの死者が出ている。しかも前日まで御城に出仕して、頑健ぶりを見せていた男ばかりだ。若くて、これといった持病もなく、大酒飲みでもない。みな共通していたが、他にも不気味な一致があった。それは……。

「蒼生様」

屋根の上にひょっこりと、お銀が姿を見せる。蒼生同様、黒覆面に黒装束で、全身を覆っ

ていた。幕府大学頭林家を見張っていたはずだが、なにか動きがあったのだろうか。屋敷の周囲に目を配りつつ、小声で確認した。

「なにかあったの」

「今まで姿を現さなかったあの小姓、菊之助がついさっき林家を出立いたしました。向かったのは御城の方角でございますが、もしかすると、わたくしの見張りに気づいて、わざと御城に向かったのかもしれません。いずれにしても、流鏑馬が行われる高田馬場に行くと思いますが、いかがいたしましょうか。御城には確か美弥と乙葉がいるはずでございましたね」

夜明けとともに決行されることになった流鏑馬、林家の屋敷は高田馬場近くの八代洲河岸にある。お銀は菊之助の動きを、陽動作戦なのではないかと睨んでいた。

「ええ。あたしの読みがあたっているとすれば、上様の愛馬が見つかるはずだわ。美弥は朱雀になっちまったせいで鼻が利かないけれど、乙葉は白虎もどき、半分猫娘のようなものでしょう。もしかしたら、臭いを追えるんじゃないかと思ってね。上様の御側に行かせたのよ」

頼りないから二人で、という気持ちもある。今の美弥と乙葉は二人でやっと一人前だ。吉宗の警護役にはなれないが、愛馬の亘さえ見つけられれば、吉宗の命は助かるにちがいない

と、蒼生は確信していた。お銀は考えながら、慎重に言葉を選んで、進言する。

「菊之助の目的は乙葉なのかもしれません。乙葉の相手でございますゆえ、とどめをさすつもりなのではないでしょうか」

「あるいは、あたしたちの目を引きつけておくために、わざと派手な動きをするつもりなのかもしれないわ。他の傀儡は一緒じゃなかったの？　美弥の相手はお夏と名乗った娘のはずだけれど、菊之助に同道していなかった？」

「いえ、ひとりでございました。月影はもちろんのこと、お春と名乗った女の姿も見てはおりません」

月影が操る四人の傀儡、お夏とお春、菊之助と……蒼生は残るひとりのことが気になっている。お銀を御城に行かせるか、そちらに行かせるか。しばし逡巡したあと、決定した。

「あんたは対馬藩の上屋敷に行ってちょうだい。流鏑馬に向かうはずだけど、狙われている可能性もあるわ。御側について、守ってほしいの」

だれが狙われているのか、だれを守るのか、敢えて名前を口にしなかった。が、お銀は心得たもの、微笑を滲ませて、うなずき返した。

「畏まりました。そうそう、対馬藩で思い出しましたが、例の菩薩像のことはどういたしましょうか。闇市を取り仕切っている元締めや古物商には、それらしい品物が見つかったらす

ぐに、連絡をくれるようにと話をつけてあります。いまだになにも言ってこないところを見ると、あれも〈妖堂〉を攪乱するための罠なのかもしれませんね」

「左甚五郎の菩薩像なんか、初めからないのかもしれないわ。はなから胡散臭い依頼だったものね。万が一、本当に本物があると仮定した場合、いったい、どこにあるのか」

投げられた質問に、お銀はにやりと笑って答えた。

「対馬藩邸の蔵とか」

「当たり。少なくとも何日間かは振りまわされたし、ばらばらに行動せざるをえなくて、狙われやすくなった。悔しいけれど、敵にとっては思う壺だったでしょうね。まあ、将軍家にとっては、多少なりとも益があったようだから、あれはあれでよしとしなければならないのかもしれないわ」

対馬藩の密貿易に対して睨みをきかせる。〈妖堂〉は利用された形になるが、裏の仕事をまわしてもらう以上、持ちつ持たれつの部分ができるのも仕方がない。気持ちを切り替えて、いい方向に持っていくしかなかった。

「薫りについてだけれど」

話を戻して、お銀を見た。

「あんたは土の臭いを感じたと言っていたでしょう。最初は薫りに関係ないと思って気に留

めなかったけれど、もしかすると、あんたに与えられた薫りは土の臭いなのかもしれない。つまり、相手は月影ということになるわね。充分、注意するのよ」

自分も行くべきだと、心の裡でもうひとりが叫んでいる。吉宗よりも、池田半九郎の身が危うい。月影は最後のひとりを得るために、間違いなく現れる。お銀とともに急いで対馬藩邸に行くべきだ。こんなところにいる場合ではないのに、どうしても、踏ん切りがつかない。私的な事柄を優先させるのに抵抗感があった。

あたしには役目がある。〈妖堂〉の主として、それを遂行しなければならない。半九郎様だって、同じことを考えるはずだわ。なにもかも放り出して、あたしのところに来たりしない。それに月影は動きを読んで、待ち構えている危険性もある。わざわざ罠が仕掛けられている場所に行く馬鹿はいないわよ。

あれこれ理由をつけては、「行けないのだ」と言い聞かせていた。吉宗も突然死するかもしれない。三妖娘たちのこともある。想いにとらわれて、半九郎のもとに行くのは、裏切り行為のように思えた。

そうよ、行けないわ。行きたいけれど、行けない。あぁ、心が千切れてしまいそう。本当はこのままお銀と一緒に……。

「あぅっ」

突如、蒼生は強い光を感じた。視野が黄金色に染まり、全身の力がぬけてしまう。危うく屋根から落ちかけたものの、お銀が素早く支えた。

「蒼生様！」

つい出た大声に、庭を警護している藩士たちが色めきたつ。

「今の声はなんだ」

「屋根が光ったように見えたが」

「雷か？」

集まって来て、屋根を見あげている。蒼生はお銀に支えられて、後ろにさがった。身体にまったく力が入らない。先刻の光はなんだったのか。妖術師の邪気を探ったが、ざわつく気配に邪魔されて、集中できない。

「大丈夫でございますか」

心配そうなお銀に、弱々しくうなずき返した。

「たいしたことないわ。じきに真琴が来ると思うから大丈夫よ。あんたは対馬藩邸に行ってちょうだい」

「真琴様がおいでになるまで、お側におります。滑り落ちてしまうのではないかと気が気ではありません。一瞬にして霊気が失われてしまったような……」

と言いかけたが、途中で内容の重大さに気づいたのだろう。不意に口をつぐんだ。蒼生もまた妖術師に霊力を封じこめられたのではないか。もうひとりの存在が現れないように、封印されてしまったのではないのか。

「考えすぎよ、お銀」

同じことを考えていたが、わざと明るく言った。

「それよりもね。この邸を出る前に、ひとつやってほしいことがあるのよ」

物の怪を警戒している屋敷なればこそ、大騒ぎになりやすい。その隙に必要なことを調べられる。蒼生の命を受けて、お銀は不承不承という感じで従った。音もなく庭に降り立ち、人気のない方に進む。突然死した主の屋敷は、七千坪を超える広さ、なるべく離れた場所で怪異を起こせば、藩士たちがそちらに集まるだろう。

「派手に頼むわよ」

その呟きが終わらないうちに、忍び装束をまとった真琴が、屋根にあがって来た。

二

「今、お銀の姿を見たように思いましたが」

「林家の動きを報告に来たのよ。対馬藩邸に行かせたわ。それよりも、縁の下の様子はどう

だった？　呪物らしきものは仕込まれていた？」

先刻の奇怪な光のことは口にしない。また半九郎の話をするのは、できるだけ避けたい。そんな思いが短い報告と、話を変えたことに表れている。真琴は気づいただろうが、よけいな質問はしなかった。

「仲間の御庭番たちにも手伝ってもらい、縁の下から天井裏まで探しましたが、それらしき呪物は見当たりませぬ。念のための捜索でございますゆえ、見つからなくても仕方ありませぬが、やはり、月影は蒼生様がおっしゃった秘術を用いたのでございましょうか」

「たぶん、ね。この屋敷の主については、確証を得られていないけれど、亡くなった家臣たちは全員、可愛がっていた犬や猫、あるいは鳥などが盗まれていたのでしょう？」

「はい。お見舞いがてら、加納様の屋敷に赴き、お話を伺いましたうえで、各大名家をもう一度、調べましたので間違いございませぬ。四人とも動物を飼っており、似たような時期にいなくなっておりました。猫に関しましては、自由に外を出歩く生き物でございますゆえ、家人もさほど気にかけておりませんでしたが、犬を飼っておりました家は、大枚を払って唐より手に入れた犬だとかで、屋敷内で大切に飼育していたとか。逃げるはずはないと申しておりました。また鳥は鳥籠ごと盗まれております。亡くなった主たちは、それらの動物をことさら可愛がっていた由。盗まれたに相違ないと騒ぎ立て、中には〈妖堂〉に依頼しようと

いう話が出た大名家もあったとのことでございました」

苦笑を滲ませる。いくつかある共通点の中で、もっとも引っかかる共通点がこれだった。犬猫盗難事件が起きたあと、頑健な若い主が突然死。蒼生はそこに妖術師の忌まわしい秘術を感じ取ったのである。

「呪死術」

ぽつりと言った。真琴がすぐさま質問する。

「本当にそのような秘術が存在するのでございますか。お話を伺ったときも、『まさか』という思いが浮かびました。今でも信じられませぬ」

「唐国の妖術師が使うと、聞いたことがあるわ。月影は異国の血が混ざっているのかもしれないわね。あるいは唐人なのか」

月の出ない夜空を、不安げに見あげた。蒼生の胸にはもうひとつ、『まさか』という不吉な予感がある。つられたように空を見て、真琴が聞いた。

「どうかなさいましたか。天に不吉な予兆でも顕れておりますのか」

「この四日間というもの、月が出ないのよ。曇って見えないのだろうと、思うようにしてきたんだけれど」

「まさか」

次の言葉を先取りして、真琴は否定する。

「よもや月を操るなど、できるはずがございませぬ。単に曇っているだけのこと、今宵は十四夜、明日は満月でございまする。つまらぬことをお考えなさいますな。蒼生様らしくありませぬぞ」

「でも」

美弥や乙葉の霊力を封じたのは、〈陰陽封じ〉とも呼ぶべき力だ。金の性を火で封じ、火の性に変化させたり、木の性を金で封じて、金の性に変化させたりしている。蒼生は吉宗の愛馬、亘にも、同じ力を用いたのではないかと推理していた。月影は陰陽を操れる特別な妖術師、暦や天気を読むだけの平凡な日和見法師ではない。

「明星天子（みょうじょうてんし）」

「お銀が持ち帰ったお札に、記されていた名でございますな。惚薬と一緒に、平岡花絵殿が手に入れたと申しておりましたが……これはわたしの想像でございますが、惚薬は傀儡にしやすい人間を選別するための手段だったのかもしれませぬな。月影は暗示にかかりやすくて、操りやすい人間を、探していたのかもしれませぬ。〈初音ノ法〉が名香にあやかって名付けられた秘術だとすれば、必要な人間は四人、手札はすべて揃ったのでございましょうか」

池田半九郎が危ないのではないかと、暗にほのめかしていた。言われるまでもない。こう

やって話している間も、心が疼き、いてもたってもいられなくなる。死に物狂いで抑えこみ、できるだけ平静さを装った。

「わからないわ。まだ、なのかもしれない」

「では……」

「あたしにはやらなければならないことがある」

よけいなことは喋らせなかった。

「もし、月影の目的が明星天子を降臨させることだとしたら、それを防ぐのがあたしの役目。普通の人間じゃ、とうてい相手にできないもの。あんただって、話ぐらいは聞いたことがあるでしょう？」

「は、い。『明星天子は寅の一点に出て終わり日輪と成る。申の時に出て終わり月天子と成るなり。されば字にも日月並べて書くなり』と、ある書物に記されておりました。言うなれば日と月と星の力を集めた存在でありましょう。人格神の姿をとって現れる場合には、観音、勢至、阿弥陀の『弥陀三仏』になると考えられているとか」

「そのとおりよ。凄まじい力を放つでしょうね」

「なれど、仏が悪に力添えいたしましょうか。左甚五郎の菩薩像同様、眉唾ものの話のように思えまする。邪悪な妖術師ごときに、明星天子は降臨させられませぬ」

「真琴。仏が悪に力添えをするんじゃないわ。悪が仏のお力を悪いことに利用するのよ。どう使うかはその人間次第、すべてはあたしたちにかかっている。方法さえわかれば、明星天子を降ろすのも不可能ではないんじゃないかしら。月影が行っている〈陰陽封じ〉は、明星天子を招ぶための準備のように思えてならないのよ」

「しかし……納得できませぬ。月影など、たかが人間、仏を招ぶような秘術が使えましょうか。だいたいが、わたくしは挨拶に現れたこと自体、気に入らなかったのでございます。驕りと申しますか、傲慢さが鼻についておりまする。とらわれすぎぬことが肝要、買いかぶりすぎてはなりませぬ」

いかにも不満げだった。

「蒼生様は裡にひそむお方が、並外れた霊力をお持ちであるだけに、相手にもそういう力があると、思いこみがちなように感じられまする。月が出ないのは曇っているだけのこと、明星天子につきましても、はったりでございまするゆえ、ご案じなさいますな。相手が日和見法師であることを、忘れてはなりませぬ。天気や暦を読むと申しますが、的中率がどの程度であるのか、だれも確かめた者はおりませぬゆえ」

必死とも思える口調は、蒼生の心細げな眸を見ているからだろう。口もとは隠せても、覆面から覗く両眼は隠せない。

「そう、ね」

声にも力がなかった。

「ただ、あたしは上野の寛永寺で起きた異変も、関係あるような気がするのよ。尊い仏像たちが後ろにさがり、いつもは後ろに祀られている『後戸の神』が前に出ていた。『後戸の神』は摩多羅神という説があるけど、それよりも怖ろしい存在と言えば明星天子、どうしても結びつけてしまうわ」

月も星も出ていない暗い夜空に、たったひとつだけ煌々と輝いている星があった。空はまだ暗いが、そろそろ夜明けが近い。あれはまぎれもなく金星、明星だ。

「昼と夜と繋ぐ星、やけに明るく輝いておりますが……」

真琴はあわてて言葉を切った。さっきのお銀と同じように、失言に気づいたのである。励ますつもりが、逆に意気消沈させてしまっては話にならない。

「申しわけございませぬ」

「いいのよ。わかっていると思うけど、あんたの前に現れた『初音のお春』は、木の性を持つ土人形、方位は東、色は青で聖獣は青竜。たぶん蠟燭問屋『辻屋』の御内儀の姿をしている女なんでしょうね。紅梅の薫りに気をつけるのよ」

上野寛永寺でお春に出会ったことを、蒼生は先日、真琴から告白された。あわやの場面だ

ったようだが、自分たちはすでに半分、術に陥ちているような気がする。防げるかどうか、はなはだ心もとなかった。

「わかっております。今は紅梅が薫る季節ではございませぬ。すぐに気がつきましょう」

「気づいたときには遅いかもしれないけど……呪死術に話を戻すわね。覚兵衛のことよ。犬や猫や鳥といった動物は、飼っていなかったはずよね。それとも、あたしが知らないだけかしら。なにか飼っていたの？」

六人目の突然死になりかねない状態の加納久通。真琴のもとに御庭番が、定例報告をしに来る度に、蒼生はどきりとする。気のぬけない状態が続いていた。

「いいえ、わたしは聞いておりませぬ。加納様にもお聞きいたしましたが、動物を飼う暇などないというお返事でございました。お忙しゅうございますからな。まあ、馬だけはそこそこ手入れをしておられるようでございますが、盗まれてはおりませぬ」

「覚兵衛は関係ないのかもしれないわね。ただの疲れよ、きっと」

「そうであれば、よろしいのでございますが」

語尾に残った不吉な余韻を、藩士たちの大声が掻き消した。

「狐火だぞっ」

「いや、女の幽霊だっ、物の怪だっ」

「急げっ、西の門ぞ！」

母屋から一番遠い門の近くで、お銀が怪異を起こしたらしい。蒼生と真琴はその隙に忍び入った。屋敷内も騒然としている。

三

凄い死臭だわ。

屋敷内に足を踏み入れたとたん、蒼生にはそれがとらえられた。もともと鼻はきく方だが、ここにきて、いちだんと嗅覚が鋭くなったように思える。加えて春のごとき気候も影響していた。死体は腐りやすく、かつ臭いやすくなる。深く吸いこみすぎると、吐き気を催しそうだった。

蒼生様、こちらです。

真琴が先導して、廊下を進んで行く。庭で起きている怪異に気を取られているものの、すべての藩士が飛び出したわけではない。主の亡骸（なきがら）がある部屋の周囲は、がっちり守られている。藩の中でも腕に覚えがあると思われる屈強な身体つきの六人が立っていた。

どういたしまするか。

視線の問いかけに、蒼生は行動で応える。するすると近づくや、腰から葵十手を引き抜き、

見張り役に襲いかかった。真琴も無言でそれに従う。
「く、曲、うぐっ」
「であ、ぐぐっ」
仲間たちを呼ぶこともできず、二人が廊下に沈んだ。残る四人を二人ずつ相手をして、すみやかに気絶させる。音もなく障子戸を開けたが、部屋の中にも見張りの藩士が待っていた。飛び出して来た二人を、蒼生は目にも止まらぬ速さでかわし、背後にまわって後頭部を打つ。普通であれば縛りあげるところだが、無駄な時間はかけられない。
「何者じゃ!?」
殿様の亡骸に付き添っていた奥方と数人の女中が警戒心をあらわにする。奥方は若いながらも気丈に護身用の短刀を抜き、身構えていた。早く話を終わらせなければならない。蒼生は真琴に葵十手を渡して、跪いた。握りの部分に葵の御紋が透かし彫りのような感じで描かれている。これを持つことを許された人物は、御府内でもたった一人。真琴が渡した十手を見た瞬間、奥方は驚きをこめて問いかけた。
「十手小町、か?」
「はい。調べたき儀がございまして、まいりました。非礼はお詫びいたしまする。殿様のお顔を拝見いたしたく存じまする」

「それは町に流れている噂話と関係あるのか」

二度目の質問の意味を、蒼生は即座に理解した。蠟燭問屋『辻屋』の御内儀の墓を掘り返したとき、発覚した異常事態。お銀の報告によって、状況は把握できていたが、江戸中に噂が広まってしまった。この屋敷がこれほどまでに警戒厳重なのはそのためなのである。十手小町の出現もまた噂に真実味を与えたのかもしれない。

奇怪な事件が起きるところに十手小町あり。

奥方や女中たちの眸には、強い怯えが浮かびあがっていた。

「それもございます」

知りたいことはひとつではないと、言外に匂わせた。察しのいい奥方は、覚悟を決めたように座る。亡骸の顔を覆っていた布を外して、告げた。

「どうぞ」

蒼生はにじり寄って、仏の顔を確認する。傷跡もなく、苦しんだ様子もない。これまた他の家臣たちと同じように、眠るがごとき死顔だった。返された葵十手を受け取りながら確かめる。

「お身体はいかがでございましたか。傷跡や打撲の跡などはございましたか」

「いいえ」

奥方は最低限の答えしか返さない。死神を見るような目つきをしていた。早々にお引き取り願いたい。そうしないと本当に『辻屋』の御内儀のようになってしまうのではないか。突然、死なれただけでも痛手であるのに、このうえ、物の怪に変化でもされたら、どのような噂になることか。奥方や女中の顔には、そういう言葉が浮かびあがっている。蒼生も長居をするつもりはなかった。

「では、最後にひとつだけ、こちらのお屋敷では犬や猫、あるいは鳥といった動物を飼っておられましたか。亡くなられたお殿様が大切にしていらっしゃった動物が、盗まれたりはしませんでしたか」

「なぜ、それを」

はっと小さく息を呑む。蒼生の心を探るように、美しい眸が向けられた。応えなければと感じたらしく、事実だけを言葉にする。

「犬がおりました。殿様がそれはそれは可愛がっておられたのですが、十日ほど前にいなくなってしまったのです。八方、手をつくして探しましたが、見つかりませんでした」

きつかった口調が微妙に変わっていた。真実を告げれば、振りかかる災厄から逃れられるかもしれない。十手小町が物の怪を退治してくれるかもしれない。不可解な主の突然死を解明してくれるのかもしれない。そんな期待と、さまざまな問いかけの入り混じった目だった

が、奥方はそれ以上、口にしなかった。蒼生たちが無言で頭をさげ、音もなく廊下にさがったからである。

「これにて失礼つかまつりまする」

庭に降りたそのとき、地面から突然、二本の腕が現れた。蒼生の両足首を摑み、引きずりこもうとする。

「ぐっ」

「曲者っ、そやつこそ殿様の命を奪った下手人でございます！」

真琴は地面に刃を突き立てて、叫んだ。一瞬、呪縛の力が弱まった隙に、蒼生は素早く離れる。ずずずず、と、いやな音をあげながら、月影が徐々に迫り出してきた。脅威を与えるには充分すぎる〝絵〟だったにちがいない。集まって来た藩士たちは、度肝を抜かれたように目をみひらき、立ちつくしている。

「臆したかっ、殿の仇ぞっ」

奥方の絶叫の方が、真琴の叫びよりも効果があった。次々に刀を突き立て、斬りつける。弓矢を持っている者もいたが、藩士や奥方たちに当たりかねない。刀を振りあげて、叩きつけた。

「無駄なことよ」

月影が片手を広げると、驚いたことに木の盾が現れる。右腕が大きな板と化して、刃を簡単に受け止めた。左側から迫ったひとりには、猫娘に変化した左腕が相手をする。半人半猫の美弥そっくりの娘が、牙を剝いて躍りかかった。蒼生は茫然自失、しばし無言で凝視する。

「……」

そんなことが……月影は乙葉と美弥の霊力を使っている。奪い取った力をそのまま使えるなんて信じられない。人間よね？　人間なのに……なぜ!?

「危ないっ」

真琴の声と同時に、木の刃が伸びて来る。間一髪、横にすっとんで避けた。第二撃、第三撃と、容赦なく鋭い攻撃が襲いかかる。喋るのは遅いが、攻撃するのは素早い乙葉そのままの動きだった。藩士たちも果敢に反撃するが、分厚い木の盾に阻まれている。すでに三、四人、血まみれになって地面に倒れていた。変化した左腕の化け猫に、のしかかられた藩士もいる。

「月影を！」

蒼生は空高く飛翔した。囮役を買って出たのだが、以心伝心、真琴は即座に反応する。上に意識が向いた月影めがけて刃を繰り出した。

「哈！」

がつっと鈍い音がして、木の盾に刃が突き立った。躍りかかった蒼生も、鉄壁の守りを刺しつらぬけない。木の盾に着地するような恰好になったが、殺気を感知して、すみやかに離れる。木の盾を蹴って飛びあがった刹那、盾だった木板が、大きな針山に変化した。逃げるのが遅れていたら、両足が穴だらけになっていただろう。乙葉の能力を最大限に活かしている。下手をすると本人よりも、有効に使っているかもしれない。

「もう一度！」

蒼生は葵十手を構えて、身体ごと体当たりするように叩きつけた。分厚い木の盾に穴が開き、焦げつくような臭いが立ちのぼる。白銀色の光輝が広がり、穴がだんだん大きくなっていく。十手にこめた霊力が、花娘から奪った力を打ち破ったのだ。

「今だっ、かかれっ」

真琴の言葉で、いっせいに藩士たちが刃を突き出した。化け猫に変化していた左腕も、斬りつけられたとたん、しゅうぅっと萎縮する。ちょうど美弥が怒られてしゅんとする姿に似ていた。

「殿の仇っ」

「死ねぃっ、化け物！」

口々に叫びながら、藩士たちは取り憑かれたように刃を突き立てている。だんだん木の盾

が小さくなっていき、やがて、地面に吸いこまれて、消えた。あとにはなにも残っていないように思えたが……紅梅、蓮の花、菊、蜜の芳香、そして、強い土の臭いが不意に漂った。

半九郎様。

嘲笑うかのような五つの香りに、蒼生は胸を衝かれる。

「あんたは御城に行って」

小声で命じて、庭を突っ走った。半九郎様が危ない。月影は時間稼ぎをしたのだ。狙いは……。

月も星もない夜空に、ひときわ明るく金星が輝いている。

四

「あれはなんの星かなあ」

主の心も知らず、のんびり呟いているのは美弥だ。乙葉とともに忍び装束姿で御城の厩舎に来ている。行方不明になった吉宗の愛馬、亘の手がかりを探しているのだが、夜明けが近づくにつれて、厩舎への出入りが多くなり、あわただしさに包まれていた。流鏑馬が行われる高田馬場に出発する時刻が迫っている。

「金星でしてよ。そんなことよりも、美弥。あなたも臭いを追ってくださいな。力を封印さ

れたとはいえ元は猫娘、多少は鼻が利きますでしょう」
「ううん、ぜんぜん。だって、あたし、鳥だもん」
平然と答えて、川に行く隙を狙った。活きのいいドジョウを頭から、ちゅるりと呑みこむ。それを想像しては、喉を鳴らしている。
ドジョウが食べたくなったのは、朱雀もどきに変わってたからなんだよねえ。猫娘のときもドジョウは好きだけどさ。どっちかと言えば、柳川鍋の方が美味しかったもの。でも、今は生で食べたい。ああぁ、ドジョウが食べたい。
「うふふ」
自分が笑ったのかと思い、一瞬、どきりとした。乙葉が厩舎の隅にあるネズミの穴に鼻面を突っこみ、尻を振り立てている。
「いたの？」
頬をくっつけんばかりにして尋ねた。
「いえ、ネズミがちらっと見えましたの。美味しそうですわねえ。ずいぶん、たくさんいるようでしてよ」
舌なめずりして、眸を輝かせている。あふれ出た涎を啜り、また穴に鼻面を突っこんでいた。おそらくはこの前のとき、自分もまったく同じ姿をしていたにちがいない。脳天気な

美弥も、さすがにお銀の気持ちを理解する。

「……」

あたしもこんな風に涎を垂らしていたのかあ。お銀が怒るのも無理ないな。真面目に仕事してないもん。

そう思いつつ、「待てよ」とも思った。

亘の臭いを追うと、どういうわけか、ネズミの穴に鼻が行っちゃったんだよね。あれって、なぜなんだろう？

考えたがひらめかなくて、すぐに諦めた。その疑問を乙葉にぶつけてみる。

「乙葉。あんたは亘の臭いを追って、それがどこに向かっているのか、調べるのが仕事でしょ。なんで、ネズミの穴ばっか探しているのよ」

「まあ、美弥ったら、蒼生様のお話を、なにも聞いていなかったんですのね。わたくしたちに教えてくださったではありませんか。月影が用いているのは〈陰陽封じ〉、ゆえに馬の亘もまた別の姿にされて、連れ去られたのかもしれない。あるいは自分で逃げ出した可能性もある。だからこそ、こうやってネズミの穴を探しているんじゃありませんの」

「だから、なんで？」

「ああ、もう邪魔ばかりして」

面倒くさげに、乙葉は顔を向けた。
「繰り返しになりますけれど、上様の愛馬、亘は言うまでもなく馬。馬の反対と考えた場合、なにを思い浮かべまして？」
「うーんとね、『まう』」
「……」
今度は乙葉が唖然とする。間違いではないが、正解でもない。世話がやけますこと、これだから美弥と組むのはいやなんですわ。あきらかに気分を害していたが、乙葉は辛抱強い性格、気を取り直して説明する。
「質問の仕方が悪かったのかもしれませんわね。いいこと、馬は午の文字でも表されます。午の刻と申しますでしょう。その反対と言えばなんですかしら」
「子の刻」
ちゃんと答えたのに、まだ答えは見えない。きょとんと首を傾げた。
「だから？」
「だ、だから、南の方位を示す『午』の反対は、北の方位を示す『子』。午というのは強力な男性神であり、逆に南は強力な女性神とされています。わかりますわね、陰陽ですわ。男の象徴である午から、女の象徴である子に移った。ちなみに唐国では子方は北極星と考えら

れておりますの。北極星は天極にあって、天空の中心、太極としてとらえられております。さらに申しませば、子月は我が国においては霜月、つまり、今月のことですわね。霜月は陰陽交替に適した月というわけです。妖術師は事を起こしやすい月を選んで、戦いを仕掛けてきたのですわ」

「……それ、意味わかって、言ってる？」

蒼生の受け売りだから、どうも要領をえない。最後の陰陽交替に適した月だけはわかったが、あとは理解不能だった。

「も、もちろんですわ。『午』から『子』に変化させる、そう言ったじゃありませんの。見張りがいたにもかかわらず、上様の愛馬が逃げ出したのはなぜか。答えがここにあります。妖術師はわたくしたちの霊力を封じたように、亘を変化させたんですわ。足音もなく、姿も見られずに、いなくなった理由はひとつ」

「くさい」

不意に悪臭を感じて、美弥は鼻を塞いだ。風に乗って不快な臭いが流れてくる。乙葉も右に倣えで鼻をひくつかせたが、まったく逆の意見が出た。

「良い薫りですわ。菊の花のよう、もしや、また菊様がおいでになっているのではないかしら」

ふらふらと、厩舎を出て行きかける。美弥はあわてて腕を摑んだ。

「だめ、乙葉。ちっともいい臭いじゃないよ。なんだか死人の臭いみたい。あんたの言う菊様は、ただの土人形だって、蒼生様が言っていたじゃないさ。薫りにも気をつけろと、何度も言われたでしょ。亘の臭いだけに気持ちを集中して……」

「蒼生っ、おるかっ」

吉宗の大声が、厩舎の中にわんわんと響き渡った。脳天気な美弥も、さすがにあわてふためく。

「上様！」

跪く前に、もう側に来ていた。声もでかいが、歩幅も広い。なんにつけても並み外れている。加えて、将軍様がみずから厩舎へ来るのも普通ではありえないこと、家臣たちはまだ追いつけないのか、吉宗ひとりだった。むろん、警護の御庭番たちが目につかない場所で見張っている。ひとりであるように見えても、ひとりではなかった。

「御庭番たちから、おまえたちが来ているという報告を受けての。蒼生も一緒だろうと思うたに、なんじゃ、おらぬのか」

つまらなさげに厩舎を一瞥する。美弥はちらちら振り返ったが、乙葉の姿が見えない。死臭のような臭いは、だんだん強くなってくる。嗅覚の鋭い者でなくても、感じ取れるほど臭

かった。

「は、はい。蒼生様は他の件を調べておいでになります。流鏑馬はご覧になるとのことでしたので、そろそろ高田馬場に向かわれているころではないかと思います」

せいいっぱい丁重に答える。慣れない言葉づかいで、舌を噛みそうだった。

「そうか。では、わしも行くかのう。亘がおらぬゆえ、今ひとつ気は乗らぬが、今さらやめるわけにもいかぬ。乗り慣れぬ馬で、どれだけ鋭い矢を射ることができるか。それを見せるのも将軍の務めよ。しかし、亘さえおれば、わしの思いどおりに動いてくれるものを、おう、チュー助」

吉宗の懐から、ひょっこり白いネズミが顔を出した。猫娘のときであれば、美味しそうと舌なめずりするものを、今はまったく食欲を刺激されない。

「まずそうな、ではなくて、それはどうしたのでございますか」

「うむ、十日ほど前ごろから現れるようになっての。なにが気に入ったのか、わしの側を離れぬのじゃ。今日も懐にもぐりこみ、おとなしゅうしておるゆえ、一緒に行きたいのであろうと、む？」

くんくんと、吉宗も鼻をうごめかせる。

「妙な臭いがするのう。死臭のようじゃが、どうしたのであろうか。巷では奇怪な噂が広が

っておるが、まさか、亘が死んでおるわけではなかろうな」
「そのことでございますが」
「きゃあああぁ〜〜〜〜〜っ」
会話を遮ったのは、乙葉の悲鳴。また白虎にでも変化して、衝撃を受けたのではないだろうか。吉宗に目障りなものを見せてはならない。
「上様はここでお待ちを、あ、あの、上様っ」
止める暇があればこそ、好奇心旺盛で、足も速い将軍様は、美弥よりも早く現場に到着していた。乙葉が激しく震えて、森のような林を指さしている。
「あ、あ、あ、そこ、き、菊、き、き、菊様が」
「乙葉ではないか。どうしたのじゃ」
相手が妖怪であるにもかかわらず、抱え起こした。身分を気にしない蒼生の性格は、吉宗譲りなのであろう。覚兵衛がいれば即座に「もったいない」となる場面だが、乙葉はそれどころではない。
「き、き、菊」
まともに喋れなかった。美弥はさっきよりも、さらに強い死臭をとらえている。乙葉の着物に滲みついているような感じだった。吉宗の鼻にも、いちだんと深い皺が寄る。

「なにやら、やけに臭うが」

再度、懐から白ネズミが顔を突き出した。主の動きを真似ているようで可愛らしい。と思った刹那、空気を切る異音が響き渡った。樹上から放たれた手裏剣が、吉宗に向かって飛来したのである。

「上様!?」

美弥はとっさに覆い被さった。背中が手裏剣の山になると覚悟したが、いち早く黒装束の御庭番たちが出現する。何人かが刀で弾き返し、何人かが樹上に飛んだ。あっという間に、吉宗の周囲には御庭番の堅固な盾ができる。その中のひとりが、美弥の耳もとに囁いた。

「蒼生様をお守りせよ。敵の狙いは上様だけではない」

「え」

どこかで聞いた覚えのある声だったが、確かめる前に御庭番ともども、吉宗は厩舎に移動していた。襲われても流鏑馬を中止する気持ちはないらしい。すぐさま何頭かの馬が引き出される。

「亘には及ばぬが、我慢するしかなかろう」

文句を言いながら、吉宗は懐の白ネズミと一緒に騎乗する。

「美弥、乙葉、早う乗るがよい。蒼生が待っておるぞ」

別の馬を顎で示したが、短気な性格ゆえ、乗るのを待っていたりはしない。掛け声も高らかに馬の尻を叩き、御城の門に向かった。御庭番部隊のうちから、ひとりだけ馬に飛び乗って、そのあとを追いかける。

「み、美弥、あ、あれ、あれ、あれあれあれ！」

乙葉が震える指で、吉宗をさしている。

「もう、乙葉ってばやめてよね。人を指さすのはいけないって、いつも蒼生様に言われてるでしょ」

「ち、ちが、ちがいます。あれ、あれあれ、あ、あの白ネズミ」

ごくりと唾を呑んで言った。

「あれが亘ですわ!!」

「へ？」

亘の臭いを追うと、なぜか、ネズミの穴に鼻面を突っこんでいた。その答えは馬がネズミに変化していたからなのである。午から子への変化、子の力が高まる霜月に行われた陰陽封じ、妖術師の狙いは……。

「蒼生様っ」

夜明けを迎えた空に、明けの明星が煌めいている。

五

明けの明星をふと見あげて、池田半九郎は対馬藩邸の政務に使われている部屋に入った。昼間、自分たちはここで、調べものをしたり、命じられた文書を清書したりしている。同僚たちに気づかれないよう、慎重すぎるほどに人が来ないのを確かめてから、障子戸を静かに閉めた。紙燭を置いて、棚を次々に開けていく。

どうしても調べなければならぬ。小菅殿を疑うわけではないが、朝鮮国との取引について、わたしは合点がいかぬ。

半九郎は三ヵ月ほど前から、買い入れた品物を個人的に記しておいた。売りさばく際の控えの写しも取ってある。これらの書きつけと帳簿を比べれば、わかるはずだ。我が藩で行われている『あること』について――。

密貿易。

考えるだけでも、おぞましい事柄だった。まさかと今でも思っている。対馬藩は清廉潔白、そのような事実があるわけがない。ただの勘違いだ。そうに決まっている。書類を出して、紙燭に近づけ、自分の書きつけと比べ始めた。

対馬藩で行われている貿易は、公に行われている官営貿易と、対馬藩が朝鮮の商人と直接

行う私貿易の二つに分けられる。官営貿易にも二種類あって、進上貿易と公貿易があるのだが、この場合の公貿易は、私貿易とは異なり、対馬藩と朝鮮政府が行う貿易だ。いずれにしても、抜荷や密貿易はご法度、いや、表向きはと言うべきかもしれない。取り締まりを厳しくしても、抜荷が横行しているのが現実だった。

悪徳商人さながらに、対馬藩が密貿易を行っているなど考えられぬが。

書類を繰る手が止まった。遡ること三ヵ月前、何度か訪れた朝鮮貨物船の一隻が、多くの仏像を運んで来ている。すべて買い取ることにしたはずなのだが、どこに売ったのか、帳簿には記されていない。半九郎の書きつけには、大小合わせて二十二体の仏像と、間違いなく書かれている。二体だけは肥後熊本藩細川家に売ったと、帳簿にも載っているが、残りの二十体については、どこに売られたのかはっきりしなかった。

二ヵ月前は仏像を買い入れていない。ひと月前は……二十五体。これも売った先が判明しているのは三体だけだ。やはり、裏帳簿がある。

推測はもはや隠しようのない事実となっていた。それにしても、と、半九郎は考えずにいられない。

我が国にも優れた仏師がいる。わざわざ唐国や朝鮮国から、仏像を買い入れる必要があるだろうか。それほど価値のあるものであれば、朝鮮側も簡単には手放すまい。以前、上様が

朝鮮国を通じて、唐国より馬を買い入れられないかと打診されたときも、朝鮮側は良い返事をしなかった。価値のあるものに関しては、どの国も渋くなるのが当然であろう。このように大量の仏像を、売り渡すその真意は？

仏像の中にご禁制の品を隠している。

それしか考えられなかった。人参か、はたまたそれに見合う高価な品か。

「熊本藩細川家」

名前が載っている大名家を思い浮かべたとき、おぼろげに答えが見えたように思えた。細川家は大大名、金には困っていない。藩主が茶の湯などの優雅な趣味を持っているのは有名な話だ。数ある趣味のうちでも、輸入しなければ手に入らない品物とは……。

「このような時間に調べものか、半九郎」

障子戸が少しだけ開き、小菅玄蕃が顔を覗かせた。ここで動揺すると、却って怪しまれる。半九郎は姿勢をただして、まっすぐ見据えた。

「はい。書き損じがございまして、それを探しておりました。同僚たちにまた笑われてしまうと思い、このような刻限になった次第でございます。近頃、拙者のことを恋に狂うてお役目がおろそかになっておると、申す者がおりますもので」

昼間、犯した失態を、同僚たちに知られないうちに直しておく。嘘の苦手な自分にしては、

うまい言い訳だと思った。さりげなく書きつけを懐に戻して、目につかないようにする。信じたのかどうか、玄蕃は紙燭を掲げて、入って来た。

「なるほど、書き損じか。帳簿まで引っ張り出して、間違いがなかったか、確認したというわけだな？」

帳簿を戻す時間までは、とうていなかった。ごまかすよりも認めた方がいい。

「は。申しわけございませぬ」

素直に詫びて、次の言葉を待つ。長い、長い時間に感じられた。嘘に気づいているだろうし、真実を悟ってもいるだろう。目を伏せたまま、畳に手を着いて、同じ姿勢を保っていたが、徐々に身体が強張ってくる。永遠にも続くと思われた沈黙のあと、

「貴公の腹は読めておる」

玄蕃はかがみこみ、小声で告げた。

「これが本当に見たいものであろう。存分に確かめるがよいわ」

懐から分厚い帳簿を取り出して、無造作に投げる。どさっと重い音がして、半九郎の眼前に帳簿が落ちた。なにを考えているのか。仲間に引き入れたいのか。金で口封じしたいのか。それとも……始末するつもりなのか。いくつかの未来が浮かんだが、残ったのは最後のひとつ、殺意まじりの視線が注がれている。

「どうする？」

短い質問には、反論を許さない響きがあった。自分の運命は自分で選べと告げている。答えはわかっているのだろうが、武士のなさけで念のために確認しているのだとも言いたげだった。

「ひとつお訊ねしたき儀がござる」

答えではなく質問を返したことに、玄蕃は眉を寄せて、不愉快さをあらわにする。

「聞いているのはこちらだが」

「武士のなさけ、ではござらぬのか？」

二度目の反論で、折れた。

「言うてみよ」

「三年前の抜船事件でござる。肥前佐賀領の者と、平戸領の者が申し合わせて、享保八年以来、四度も抜船を朝鮮国に遣わして、人参を買い取っており申した。下手人は無事、捕まりましたが、幕府より、処罰についての先例を尋ねられたとき、『厳罰に処して両国の見せしめにするべし』と我が藩は答えて、下手人は極刑。あのときは四度も抜船が出たことに、だれもが不審を抱いたものの、死人に口なし、対馬藩はまったく無関係となり申したが……」

「知らぬ」

強い口調で遮った。

「そんな昔のことを、あれこれ言われても思い出せぬわ。抜船事件は商人たちが、示し合わせて行った悪事。だれかの助けがなければ不可能という噂も出たが、はてさて、手助けしたのはだれであろうか。意外な人間が関わっておるやもしれぬ」

じろりと、半九郎を睨みつける。無駄口を叩けば、三年前の事件にも、おまえが関わっていたことにして、葬り去ってくれるわ。よけいな勘ぐりは無用、差し出口も不要。生きていたいと思うのであれば、おとなしくするがよい。

「壽屋を薦めたのも、拙者が女子に現(うつつ)をぬかして、お役目をおろそかにすればよいと、考えたうえでのことでござるか」

間接的にではあるが、蒼生を巻きこんだことに、強い怒りを覚えていた。許せない。なんという卑劣な男なのか。拳を握りしめて、睨み返したが、玄蕃は涼しい顔をしている。

「ま、どのようにでも取ればよいわ。どちらにせよ、貴公が選べる答えはひとつしかないのだからな。協力か、否か。これを見たうえで、決めるがよい」

唇をゆがめて、隣室に続く襖を開ける。玄蕃の手下になっている藩士が、腕を縄でくくった若い娘を前に押し出した。

「は、半九郎様っ」

「蒼生殿！」

立ちあがった半九郎を、玄蕃が刀で制した。

「協力すれば、すぐさま結納、そして、祝言と目出度い日々よ。断ったとしても、二人揃って仲良う墓の下、それはそれで悪くないかもしれぬな。離ればなれにはせぬゆえ、安心せい」

「勝手なことを……蒼生殿は関係ござらぬ。お許し願いたい」

「貴公に選ぶ権利はない。そう言うたはずだが」

玄蕃は蒼生を引っ張り寄せ、乱暴に押しやった。倒れかかった蒼生を、半九郎はあわてて受け止める。

「蒼生殿」

「半刻、時間をやろう。末期の語らいをするもよし、未来について話すもよし、一度きりの機会よ。つまらぬ考えは捨てることだ。見張りがついておるゆえ、逃げようとすれば斬る。密貿易の下手人として、な」

ぴしゃりと襖を閉められたが、和気藹々とはいかない。急いで縄を解き、青ざめた顔を見おろした。

「拙者のためにこのようなことになり、まことにもって申しわけなく……」

「よいのです」
蒼生は小さく首を振る。
「こうして、半九郎様のお側にいられるのが、わたくしは本当に嬉しいのです。怖くはありません。二人一緒なのですから」
潤んだ眸が間近に迫り、半九郎の胸も高鳴った。きつく抱きしめて、何度も謝る。いくらいいと言ってくれても、命が懸かっているのだ。我が身は無理でも蒼生だけは助けたい。なにか方法はないものか。
「せめて、蒼生殿だけでも」
口に出た呟きに、蒼生が続いた。
「お話は小菅様より伺いました。半九郎様、藩に協力なさればよいではありませんか。密貿易など、たいした罪ではございませぬ。露見すれば大事になりましょうが、みなわかっていることでございます。正論をふりかざして、騒ぎ立てるのは愚かであるように思いまする」
「え？」
半九郎は自分の耳を疑った。腕の中の娘をまじまじと凝視する。蒼い眸に昏い翳が浮かんでいた。半九郎が知っている澄みきった美しい眸ではない。だれかの眼に似ている。そう、まるで玄蕃を思わせるような、濁った眼だった。

「だれ、だ？」

無意識のうちに後退っていた。美しい姿は蒼生なのに、身体が拒絶していた。眸がちがう、手の感触がちがう、考え方がちがう。姿も声も蒼生なのに、蒼生ではない！

「どうしたのです、なにをおっしゃるのです。よくご覧になってくださいまし。加納蒼生でございます、半九郎様」

「ちがう、ちがう、おまえは、ちがう。蒼生殿が悪事に加担しろと言うわけがない。密貿易に協力しろなどと言うわけがない。おまえは……だれだ？」

じりじりとさがって、壁際に追いつめられた。素早く逃げ道を探すが、廊下にも隣室にも見張りがいる。逃げられない。

「ハハ、ハハハハハ、そうか、騙されぬか」

蒼生そっくりの娘は、不意に笑い出した。両眼に凄みが増して、妖しい輝きを放っている。じっと睨み据えながら、おかしな言葉を口にした。

「では、もうごまかす必要はあるまい。おまえの顔をいただくとしよう。〈初音ノ法〉のひとり、水の性を持つ土人形に生まれ変わるのじゃ。水の性が持つ色は黒、方位は北、季節は冬。暗く凍えるような冬を、おまえに与えてやろうぞ。薫りが移るように姿が移る。この土人形におまえの姿がな」

小柄だった身体が、ぐぐっと大きくなる。半九郎と同じぐらいの身長になり、顔立ちが少しずつ変化していった。ほとんど同時に甘い蜜のような薫りが立ちのぼる。蒼生との淫夢を見たとき、必ず感じた濃密な芳香。自分そっくりの顔と身体つきを持つ土人形が、片手を伸ばして近づいて来た。

「う……」

叫び声を振り絞った瞬間、目も眩むような黄金の光が炸裂する。

六

浅葱色の空に突如、現れた黄金の球体は、対馬藩邸にまっすぐ落下した。眩い光輝が放射されて、お銀は思わず目を細める。

「うっ、な、なんだ？」

池田半九郎の警護を命じられて、藩邸に忍びこみ、様子を探っていたところだった。ついさっき、小菅玄蕃が部屋に入ったのを確認している。近づいてみようと歩き出した矢先、奇怪な黄金の球体が藩邸を直撃したのだ。

「まさか」

さっき蒼生様といたときに、見た光と同じだ。明星天子ではないのか。半九郎を四人目の

土人形にするべく、襲いかかったのではないか。廊下には四人の見張りが立ち、庭に油断なく目を向けている。小菅玄蕃が引き連れて来た男たちだ。屋敷内でなにかあったのは間違いない。

ちっ、あたしとしたことが。

舌打ちしながらも、迷うことなく強行突破を決めた。足音をたてずに近づいて、見張りのひとりを引きずり倒そうとしたが、

「……」

ぎくりとして立ち止まった。地面から二本の腕が生え、足首を握りしめている。土色の両手が、万力のようにがっちり食いこんでいた。お銀は素早く反撃に出る。懐から取り出した匕首（あいくち）で、相手の両手首を切りつけながら、後ろに飛びすさった。

「うわっ」

が、そこに開いていたのは泥土の穴、逃げる暇はない。ずぶっと腰まで泥に沈んだ。もがくほどに沈みこむのは、蒼生から聞いた話でわかっている。覚悟を決めて腕を組み、目を閉じたうえで沈むのにまかせた。隙を見て反撃すれば、きっと逃げられる。

「ほう、妖怪にしては肝が据わっておるのう」

地面の中から月影の上半身が、迫り出してきた。やつの周囲だけは泥が反対の動きをして

いる。お銀は泥土に引きずりこまれているのに、上に押しあげているのだ。無駄かもしれないと思いつつ飛びついてみる。

「くっ」

「わしに惚れたか」

ふざけたことを言い、月影はお銀を抱きしめた。押しあげていたはずの泥が、またしても引きずりこむ力に変わる。突き飛ばし、蹴りつけ、暴れたが、どんどん身体が沈みこんで行く。

「や、やめろっ、うぷっ、ぐっ、ぐぐぅ〜〜」

とうとう頭までずっぽりと、泥土の中にもぐる。なまあたたかい泥は、月影の化身。生き物のように動いて、まとっている着物を脱がせにかかった。苦しいはずなのだが、なぜか呼吸ができる。泥で造られた部屋にいるような、狭い空間の中にいた。四方八方から泥が、蛇のように伸びてくる。

「いや、だ、やめろ、あぁ、だめ」

肌の上を這いまわる泥が、くすぐるように刺激している。それでも必死に両膝を着け、唇を噛みしめて、抵抗していた。負けてはならない。池田半九郎も危機に曝されている。蒼生の想い人を助けなければ、泥土の中で立った姿勢のまま、裸身を強張らせていた。

「相手がわしでは不満かもしれぬが」

月影が唇を重ねてくる。舌先を震わせて、唇をやわらかく愛撫する。背中や尻のあたりにも、月影そっくりの頭部が出現し、唇と舌を使い始めた。泥の小部屋は真っ暗なのだが、夜目が利くせいか、ぼんやりと顔の輪郭がわかる。不意に月影が、ぎゅっと両の乳房を握りしめた。

「あ」

つい唇を開いてしまった。思いのほか優しい刺激を受けて、我慢できなくなった部分もある。いけない、逃げなければ、池田様を助けなければ、蒼生様にお知らせしなければ……次々に浮かんだ警告は、儚く消え失せた。差し入れられた舌を、甘く吸いあげる。無意識のうちに固く閉じていた両脚を開いていた。

「そうじゃ、素直になるがよい。極楽浄土を味わわせてやろうぞ」

接吻していた月影が、乳房に唇を移し、乳首を咥える。両手で揉みしだきながら、飴玉を転がすように、コロコロと舌で味わっていた。背中係の唇も、なめらかな皮膚を存分に味わっている。尻係の唇もまた、尻の割れ目に舌をもぐりこませて、後ろの菊花をちろりと嘗めたりした。

「ふぅ」

思わずのけぞって、尻を震わせる。まっすぐに伸ばしていた両脚を、手の形になった泥が抱えこみ、大きく広げさせた。童女にお小水をさせるときのような、恥ずかしい恰好にさせる。さらにお銀の両腕にも泥手が食いこみ、呪縛した。これでもう動けない。月影は両掌を乳房に残して、さらに舌をさげていった。忙しげに上下する腹を嘗めて、女陰を覗きこんだとき、「ほう」と小さな声が洩れる。

「おまえは異体なのか」

股間に屹立している男根があった。異体とは両性具有のことで、乳房は女性同様、ふくらんでいるし、蜜壺の入口もしきりにひくついている。しなやかな女体にはやや不似合いの男根が、かなり大きくなっていた。まだ完全勃起にはいたっていないが、感じているのを隠しきれない。思うさま弄ばれているのが悔しくてならなかった。

「だ、だから、どうしたと、くう！」

反論の途中で、お銀は背中を反らせる。月影が亀頭を口に含んだのだ。両掌は休みなく乳房を揉みしだき、尖った乳首を指先でいじっている。いやでも男根が硬くなり、ぐぐっと膨張した。

「うふうぅ〜〜っ、い、いや、やめ、て、ふうふうぅ〜〜っ」

言葉とは反対に、尻の肉が何度も痙攣している。ぷるぷるっ、ぷるぷるっと震える度に、

泥土が波を起こした。呼応しているのだろう。背中や尻に貼りついた唇が、舌の動きを速める。菊花を広げて舌先をもぐりこませ、菊穴に少しだけ舌を差し入れた。

「んふううっ」

大きく下半身が揺れる。尺八を続ける月影の唇と舌は、絶妙の動きを見せている。亀頭を嘗めては、ぐぅーっと喉の奥まで呑みこみ、亀頭にまた舌を戻した。蜜壺が物足りなげに、入口をひくつかせているが、そこにはふれようとしない。感じやすい妖娘としては不満が残る。

「も、もっとぉ〜、はあはあ〜〜、もっと、い、挿れておくれよぉ〜〜〜」

蒼生のことも、半九郎の救出も、はるか彼方に吹き飛んでいた。考えられるのは快楽のことだけ、もっと深く感じたい。男と女、両方を責められたい。焦れて尻を振ったのが、気に入ったのかもしれない。

「おうぅっ」

じゅぷっと蜜壺に指が挿入された。月影の口の中で、男根は爆発しそうなほど張りつめている。空いた両の乳房には、すぐさま泥手がくっついて、やわやわと揉みしだき始める。乳房、男根、蜜壺、菊穴と、すべての性感帯を責められてはたまらない。

「ううっ、いいっ、いいぃ〜〜〜〜っ」

素直な喘ぎ声を発するしかなかった。快感が高まる。乳房がふくらみ、男根もいちだんと大きくなる。絶頂が近いのを察して、月影の愛撫にも熱がこもった。舌を揺らめかせて、亀頭を嘗める。側面に左手の指を添えて、まさに尺八を吹くかのごとく、しごいた。右手の指は蜜壺の肉襞をこすり、奥で息づく壺芯を撫であげる。

「いいぃ〜〜〜ぃ〜〜〜〜」

こらえきれない。

「い、達く……」

吐精寸前、月影は無情にも尺八を中断させた。男根の根元を押さえつけて、精が洩れないようにしている。お銀はもう狂いそうだ。額には二本の触角が飛び出し、皮膚の一部に銀色の鱗が現れている。絶頂を迎えかけて、竜娘の本性が顕れていたが、悦楽の瞬間は与えられない。

「はや、早くぅっ、はあはあ、だ、出させておくれよぉっ」

頬を染めて嘆願した。つい手淫をしそうになったが、両手は泥手によって呪縛されている。裸身をくねらせて身悶えた。

「ね、ねえ、後生だから、ああぁ〜〜、は、早くぅ〜〜」

「くくく、こらえればこらえるほど、より深い悦びが味わえる。前の『男』の相手には、娘

の方がよかろうて」

月影が背後にまわると、お銀の前に若い娘が現れた。むろん、これも泥が変化した異形の娘、精を放つ寸前で止められている男根を、蜜壺の入口にあてがう。くちゅくちゅと淫らな音をたてて、亀頭だけ挿入させた。が、相変わらず男根の根元には、輪のようなものがはめられている。出したくても、それができない。

「だ、だめ、はあぁ、はず、して」

かすれた声でお願いするが、月影は許さなかった。

「ふん！」

と一気に蜜壺をつらぬく。

「あぐうぅぅっ」

お銀は頤をあげ、背中を反り返らせる。背後から蜜壺の奥深く、月影の男根が挿入されていた。『女』の部分を責められれば、当然、前の『男』が悲鳴をあげる。尖端から透明な液があふれ出し、痛いほど張りつめた。泥娘がこれでもかと言うように、ずんっと腰を沈める。

「おおおお～～～～っ」

雄叫びのような喘ぎ声があがった。娘は腰を上下させ、吐精できない男根を蹂躙する。背後の月影も連動するように、お銀の蜜壺内を責めたてた。肉襞をこすりあげては、壺芯を

突く。男根をまわすようにして、壺芯をぐりぐりと苛める。あとから、あとから、愛液があふれ出した。重い濡音が響き渡り、泥娘の蜜壺も応えるように淫らな音をたてる。ふうふうと、お銀は激しく喘いだ。

「は、外してっ、うふうふうっ、は、早くっ、早くっ、早くうぅぅ〜〜〜ぅ〜〜〜」

額では二本の触角が忙しなく動き、銀色の鱗が腕や背中に浮かびあがっている。肉体は達った状態に変化しているのに、精はいまだに放たれていない。苦しくてならない、辛くて死にそうだ。出させてくれるなら、なんでもするよ。竜娘の霊力もなにもかも、あげるからさ。ああぁ、早く出させておくれ。

「い、達きそ、う、ぐふうぅぅっ、で、出るよぉ〜〜〜っ」

「よかろう」

冷ややかな許しが降りた。男根の根元を締めつけていた輪が外れる。泥娘の尻がさらに熱っぽく上下した。月影の男根がとどめとばかりに蜜壺の奥を突く。こらえにこらえていた精が、どっと迸った。

「ぅくぅ――――」

お銀は失神しかけている。視野を染めるのは黄色い光、土の臭いが裸身に滲みるように広がる。大量の精を放つと同時に、竜娘の霊力のほとんどを泥娘に吸い取られていたが、むろ

ん、気づくはずもない。がくっ、がくがくっと尻を痙攣させ、最後の一滴まで精を絞り出した。

「あ、あ、あぁ〜〜」

惚けたように視線を彷徨わせるが、月影は甘美な拷問をやめようとはしない。

七

「まだじゃ。まだ霊力が身体に残っておる」

身体を前に倒されて、後背位を取る。お銀の男根を蜜壺に呑みこんでいた泥娘は、そのまま下にもぐりこむ。つまり、お銀は後ろから月影につらぬかれており、下にいる泥娘と正常位で繋がっているわけだ。たっぷり精を放出したはずなのに、男根はほとんど萎えていない。淫らに蠢く泥娘の蜜壺によって、徐々に硬さを取り戻していく。早くも甦り始めていた。

「はぅっ、うふぅっ、ぅふぅうふぅ〜〜っ」

お銀は尻を高く掲げて、獣のように喘いでいる。自分自身はまったく動いていない。月影が蜜壺奥の壺芯を突く度に、下の泥娘が男根をきゅきゅーっと締めあげる。自動責め具に捕らわれたようなものだった。完全に霊力を失うまで、解放するつもりはないのだろう。月影が男根で肉襞を刺激する、泥娘の蜜壺がやわやわと収縮する。

「ぅくうぅ〜〜ぅ〜〜」

もっとさわって、とでも言うように、いっそう尻を突きあげた。菊花に貼りついていた唇が、小さな男根に変わって、菊穴にもぐりこむ。

「ああっ」

狭くなった蜜壺を、月影が入念にこすりあげた。泥娘の蜜壺は自在に形を変えて、お銀の男根に吸いついている。内部に無数の小さな唇と舌が出現し、文字どおり、むしゃぶりついていた。亀頭を小さな舌が這いまわり、側面部を別の舌が嘗めあげる。蜜壺内部がふるふると震えて、男根全体を刺激する。

「ふうっ、ふうっ、ぅふうっ」

ふたたび硬くなってくる。次に絶頂を迎えたら、竜娘の霊力を失うのは間違いない。危険、逃げろ、これは眩惑。窮地に陥ったとき、発せられる警告が、ふたたび鳴り響いた。蒼生が近くに来ているのかもしれない。額の触角が微かな気配を感知している。だからこそ、警告が響いたのだ。

「くっ、ぐぐぅ」

唯一、動かせる触角を使って、下にいる泥娘を押しやろうとする。

「ならぬ！」

厳しい声のあと、いきなり座位になった。月影はお銀の尻を抱えこみ、ずんっと奥までつらぬく。

「あぐうぅっ」

後ろにのけぞった身体を、きつく抱きしめる。いつの間にか泥娘は消え失せていた。お銀の股間では相手をなくした男根が、腹にくっつかんばかりに反り返っている。月影が右手を伸ばして、しごき始めた。乳房にも両手が貼りつき、乳首をいじりながら、揉みしだいている。男根には右手、さらに尻を両手で抱えていた。泥手が手伝っているのだろうと思ったが、どの腕も背後の月影自身から生えているように思える。

「明星天子よ」

心を読んで、囁いた。

「おまえも先刻、視たであろう。不可解な黄金の光、あれは明星天子が降臨した証よ。我が身に無敵の天子が降り立ったのじゃ。十手小町を喰らうためにな」

「そ、その前に……」

あたしが始末してやる！

勇ましい言葉は、途中で立ち消えた。月影が三組の手を操り、後ろからの座位で、弄び始めたのである。男根を愛撫する右手が、妖しい動きを見せた。やわらかく、しなやかにしご

いたかと思えば、亀頭を掌でまわすように刺激する。掌に唇があるのか、ちゅうっと吸いついたりもした。

「ふっ、ふぅ〜っ、くふう〜〜っ」

感じまいとしても、こらえきれず快感が高まる。自然にみずから尻を上下させていた。じゅぶっ、ちゅぶじゅぶっと、はしたない濡音があがる。蒼生の顔がちらついているのだが、どうしても意識を集中できない。この悦びに溺れてしまう。もう一度、達きたくて、尻を振ってしまう。

「んんんぅっ、うくうぅ〜〜っ、ぅふうふうぅ〜〜〜〜っ」

「そうじゃ。今一度、達くがよい。さすれば他の妖娘同様、おまえも明星天子の下僕となろう。なにもかも、わしにゆだねるのじゃ」

月影の声が、遠くの方で聞こえている。視野が黄色い光に染まりかける。土の臭いが強くなる。男根をしごく手が速さを増した。

「あ――――」

後座位のあられもない姿態で、裸身を硬直させる。すぐさまそれは大きな痙攣となって広がった。脳裏を染めているのは黄色い光、勃起した男根から二度目の精が放出される。月影は掌をあてがって、竜娘の貴重な精気を吸いこんだ。急に力がぬけてしまい、お銀はその場

にくずおれる。

「は、あぁ〜〜〜〜」

銀色の鱗が浮かびあがっていた皮膚に、信じられない変化が始まっていた。鱗が消え失せて、鹿のような毛が生えてきたのである。額の触角も引っこみ、その代わりに一本の角が飛び出した。顔は狼のような獰猛な感じになり、四本の足は馬、尾は牛という竜とは似ても似つかぬ姿、月影は鹿のごとき毛を撫でさすって告げる。

「水の性を持つ竜娘を封じるには、土の性。つまりは、麒麟に変化させ、霊力を使えぬようにした。麒麟の『麒』は雄を、そして、『麟』は雌だと言う説もあるが、雌雄同体のおまえには相応しい変化と言えようぞ」

「き、りん？」

お銀はまだ歓喜の世界を漂っている。鹿に似た毛の中に、形の良い乳房が存在を主張するように、雪白の美しさを放っていた。蜜壺と男根も肉色のまま、妙に生々しく濡れ光っている。

「そそられるのう」

月影は呟き、繋がった状態で、くるりとお銀を反転させた。向かい合わせの座位になり、三度、精を吸い取ろうとする。妖術師の上半身には、三組の手が蠢き、伸びたり、縮んだり

していた。お銀も異形だが、相手も負けていない。ひと組の両手で乳房を揉みあげ、もうひと組で男根を握りしめ、残るひと組の両手をお銀の尻にまわして、菊花や尻の割れ目を探った。

こいつは本当に人間なのか。明星天子のような凄まじい霊力を宿しても平気なんだろうか。疑問が浮かぶと、それを忘れさせるように手の動きが激しくなる。乳首をクリクリといじり、硬くなりかけている男根に指を滑らせた。

「うくぅ〜〜、あ、あ、も、もう、はああぁ〜〜〜」

やめて。

頭にちらつく蒼生の面影が、危険な房事の中止を訴えている。が、その警告は長続きしない。三度目だというのに、お銀の男根はむくむくと頭をもたげていた。まるで回春剤でも服んだかのよう、そこではっとした。平岡理兵衛が服んだ惚薬にも、そんな作用があるのではなかったか？

「そうじゃ」

またしても心を読む。

「それぞれの薫りに、回春作用のある薬を調合してあるが、精が強くなるだけではない。わしの命令どおりに動くようにもなるのじゃ。土人形ほどではないがな。たやすく操れるよう

になる」

「で、では、あぁ！」

罰するように蜜壺の奥を突かれた。質問など許さないと示したのだろう。訊ねるのは月影の方、もっとも聞かれたくない問いかけが発せられた。

「答えよ。加納蒼生の正体は？　十手小町は何者なのか？」

「う、く」

強い制止がかかった。血が滲むほど強く唇を嚙みしめる。これだけは死んでも答えられない。殺したければ殺せ、蒼生様の秘密を洩らすぐらいなら死ぬ。覚悟を感じ取り、艶技による拷問を再開させた。お銀の男根を愛撫していた手に、唇と舌が出現する。亀頭をあむっと呑みこみ、尺八を始めた。

「い、や、あああ、だ、だめ、だよぉ、くふうぅぅ～～」

はねのけようとしたが、両腕は伸びてきた泥手に握りしめられる。万歳をする恰好で呪縛されてしまった。蜜壺に挿入されている男根も、くねくねと淫らに動き、感じる部分をこすりあげる。手と同じように、尖端に唇と舌が現れているらしい。ふくらみきった壺芯を、舌で軽く突ついたり、唇で挟んだりした。

「あ、あ、あ」

動かすつもりはないのに尻が自然に揺れる。蜜壺がはしたない音をあげ、男根がいきり立ってくる。次に吐精したらどうなるか。意識を失えば、隠していることまで読まれる可能性があった。

「加納蒼生の正体は？」

呪文のように問いかけが響く。

「答えよ、お銀。十手小町の正体は？」

「ふうぅ～～～、そ、それは、あああぁ～～～」

「お銀！」

蒼生の澄んだ声が、邪気を打ち破った。葵十手の輝きを感じた刹那、爆ぜるような衝撃が湧き起こる。泥の小部屋が破壊されて、夜明けの太陽が目に飛びこんできた。あまりの眩しさに、ふらりとよろめく。

「あ、おい、さま」

近づいて来る蒼生に向かって、お銀は馬そっくりの手を伸ばした。姿は麒麟になっているが、声までは変わっていない。

「お銀、なの？」

驚いて足を止めた蒼生に、小さくうなずき返した。倒れかかったお銀を受け止め、悲痛な

声で尋ねる。

「しっかりして、お銀。半九郎様はどこ？　どこにいるの!?」

藩邸の庭に池田半九郎はいない。

屋敷も不気味に静まり返っていた。

第六章　明星天子（みょうじょうてんし）

一

降臨してしまった明星天子。

二度、輝いた黄金の光が、その証なのだろう。確かに蒼生は身体の力がぬけたのを感じている。霊力の高まりが、まったく実感できない。葵十手の霊光も、いつもよりずっと弱まっていた。

半九郎様はどこにいるのかしら。あれだけ探したのに、見つからなかった。やはり、四人目の土人形にされてしまった可能性が……。

「申しわけありません、蒼生様。わたしがなかなかヒトの姿に戻れなかったせいで、思いのほか、遅くなってしまいました。上様はご無事でしょうか」

隣を歩いているお銀が、小声で囁いた。二人は着物に袴姿という凛々しい姿になっている。

流鏑馬が行われている高田馬場に来ていたが、なにしろ人が多い。馬場周辺には大名家の家紋が入った幔幕が張りめぐらされて、飾槍や纏などが立てかけられている。時折、わーっとあがる歓声は、見事に的を射貫いた武士への賛辞、馬場の中は凄い熱気に包まれていた。

「あんたのせいじゃないわ。あたしのせいよ。半九郎様の行方を、どうしてもつかみたかったから」

太陽はとうの昔に頭上を通り過ぎて、早くも傾き始めている。時刻は昼の八つ半（午後三時前後）になっていた。蒼生は半九郎を探し求めるあまり、対馬藩邸から離れることができなかったのである。屋敷内に忍びこみ、隈無く探したが見つからなかった。敵の罠にまんまと陥ちていると、わかっているのに気持ちを抑えられない。

無事でいてくださいませ、半九郎様。きっと助けます。たとえこの命を捧げても、あなたを月影から取り戻します。

「顔色がよくありません。少しお休みになられた方が……」

「そんな暇はないわ。あんたも言っていたじゃないの。月影は信じられない姿をしていたんでしょう。三組の手は弥陀三仏を示す御手、相手は明星天子なのよ。のんびり休んでなんかいられないわ」

きつい口調になった。自分に向けたものだったのだが、お銀はしゅんとうなだれる。

「わたしが月影を倒していれば」
「い、いいのよ。怪我をしなかっただけで充分だわ。ごめんなさい。八つ当たりしちまって」
「蒼生様」
着物に袴姿の真琴が駆け寄って来る。
「ずいぶんと遅うございましたな。なにかあったのでございますか」
「ええ」
不機嫌に応じたのを見て、それ以上は質問しなかった。
「あとで詳しくお聞かせくださいませ。まずはこちらの状況をお話しいたしますが、実は蒼生様がおっしゃったとおり、白ネズミがいたのでございます。乙葉と美弥が見たとのこと、亘かどうかはわからぬのですが、まるでそれを狙うように〈忍非人衆〉らしき忍軍が現れた由。おそらくは亘であろうと思われまする」
「えっ、それで？」
「はっきりしないのでございますが、どうも行方不明になったようでございまする。馬場に来るまでは上様の懐で、おとなしゅうしていたらしいのです。ところが、花火があがったとたん、吃驚して懐から飛び出したとか。乙葉と美弥に命じて、探させておりますが、小さい

ので見つかるかどうか」
「あたしも探してみます」
「あ、お銀。気をつけるのよ。乙葉と美弥にも……」
言い終わる前に、姿が見えなくなっていた。対馬藩邸での失態を気にしているのかもしれない。気が逸るのは、蒼生も同じだった。
「上様は？」
「ご案内いたします。こちらへ」
各大名家の幔幕が張られた後ろに、人ひとり通れるぐらいの通路があった。射的に続く道であり、その側には吉宗の観覧席が設けられているにちがいない。歩きながら、蒼生は対馬藩邸での事柄を簡潔に説明する。
「明星天子が降臨」
真琴は懐疑的だった。
「前にも申しましたが、生身の人間に、強大な霊力を宿すことが可能なのでございましょうか。わたくしは信じられませぬ。月影は眩惑を使っているのでございましょう。〈日和見法師〉と言えば聞こえはいいですが、でっちあげや、たまたま当たるといったことが珍しくありませぬ。なさけない話でございますが、薫りによって術に陥ちやすくなっている部分も

ありまする。鵜呑みにしてはなりませぬ」

「でも」

半九郎は消えた。それはまぎれもない事実、眩惑ではない。連れ去られて、どうなるのか。ここに来ているのか。逢ったら自分はどうするだろう。もし、半九郎が月影の傀儡になっていたとしたら？

蒼生の憂悶に気づいているのだろうが、真琴はわざと別の言葉を口にした。

「妖術師が用いている〈初音ノ法〉は、別名、〈月影〉とも呼ばれている。以前、蒼生様にそうご報告いたしました。加納様からお聞きした内容でございますが、覚えておいでになりまするか」

「ええ。月影は妖術師の名前でしょうと、あたしは言い返したわ」

「そう、わたくしも同じ言葉を、加納様に申しました。なぜか、これがずっと引っかかっているのです。ひとつの術に、二つの名があるのは、どうしてなのか」

「〈初音ノ法〉は四人の傀儡を示し、〈月影〉は月が水に映るように、姿が移ることを示しているのではないかしら。あるいはそういう噂を流して、あたしたちを混乱させる企みかもしれないわね」

「ありえますな。これも申しあげたかもしれませぬが、思えば月影なる妖術師、初めから奇

妙な出現の仕方でございました。わざとらしく姿を見せ、みずから名を名乗り……」

「だからなんだって言うの？」

苛立ちが、また強い質問になった。真琴はなにも言い返さない。ただ黙って静かに見つめている。

お心をお鎮めなされませ。蒼生様らしくありませぬぞ。

お銀のときもそうだったが、人は人を映す鏡。きつい口調で言えば、そのまま自分に跳ね返ってくる。

「悪かったわ、つい苛々しちまって。ただ……気になるのよ。あたしはやっぱり、上野の寛永寺で起きた怪異も関係あるような気がするの。尊い仏像が後ろにさがり、『後戸の神』が前に出ていたのは、明星天子が降臨するという予兆だったんじゃないのかしら。それにこの奇妙なあたたかさ、十一月もなかばになろうってのに、春のような陽気が続いているわ。月だって、ずっと現れていない。まさかとは思うけど」

「寛永寺の怪異については、わたくしにもよくわかりませぬ。月影がひそかに忍びこみ、傀儡を使って仏像を動かしたとも考えられますが、断定はできませぬ。ですが、この陽気はたまたまそうなっているだけのこと。月影が冬を追いやって、春を招んだわけではございませぬ。月に関しましても、曇り空が続いているだけのことでございましょう。思いこみすぎる

のは危険でございまする。どうか、平常心を保ち続けてくださいませ」
「わかっているわ」
あとわずかで、空には円い月が出る。それなのに、不安が消えない。蒼生の裡に宿る分身の霊気が高まってこない。あまりにも暗い表情だったのだろう。真琴が遠慮がちに言葉を発した。
「お銀になにかございましたか。蒼生様もそうでございますが、お銀も浮かない表情をしておりました。もしや、月影の妖術に？」
右腕だけのことはある。よけいな説明は必要ない。
「ご推察どおりよ。対馬藩の屋敷に行ったら、麒麟に変化していたので驚いたわ。月影が言っていたらしいけど、薫りで人を操ることもできるらしいの。土人形のような強い呪縛力はないようだけどね。気をつけないと、家臣たちを操られてしまうかもしれない」
「これはまた、わざわざご丁寧に」
皮肉たっぷりの笑みが滲んだ。むろん、蒼生に対するものではない。月影の言動が気に入らないのだと告げていた。
「さっきの続きになるかもしれませぬが、月影は自分の手の内を明かす傾向がございます。顔を曝して、自分の名を教え、明星天子の存在まで、それとなく知らせた。わたくしには暗

示の一種のように思えてなりませぬ。家臣たちの動きを気にするあまり、〈忍非人衆〉の邪気に気づかないといったような事態を招く恐れもございまする。ここは山のごとく悠然と構えて、臨機応変に対処するのが肝要ではないかと」

説教くさい言いまわしが、覚兵衛を思い出させる。蒼生は幔幕を出入りする侍たちに、つい目を走らせていた。

「覚兵衛が来ているの？　もう良くなったの？」

「い、いえ、まだ伏せっておられまする。わたくしとしたことが、差し出口でございました。警護を厳重にするよう、今一度、御庭番たちに伝えておきまする。とにかく、上様にお目どおりなさいませ。『呪死術』につきましては、蒼生様より詳しくお話しいただきたいと思い、まだご説明しておりませぬ。上様も先刻より、首を長くして、お待ちでございます」

話しているうちに、御簾で囲まれた小さな部屋の後ろに来ていた。射的を見るための特等席で、ここが吉宗の観覧席になっている。真琴が中に入って蒼生の到着を知らせると、蜂の巣を突ついたような騒ぎになった。

「早うせぬか。ええい、なにをしておるのじゃ。おまえたちは外に出ておれ。邪魔をするでない。通せ、早う通せ」

吉宗の大声と、物が倒れる音が続き、静かになったところで、中に入るのを許された。公

の場で会うときは、あくまでも赤の他人。蒼生は加納家の小姓というような感じで接見する。
「上様にお知らせしたき儀がございます。白ネズミのことはお聞き及びのことであろうと思いますが」
「聞こえぬ。近う寄れ」
「は」
膝でずって側に行く。吉宗はしかつめらしい顔を造っていたが、急にニヤニヤし始めた。
蒼生の耳もとに小声で告げる。
「先刻、池田半九郎が見事な技を披露したぞ。どの的にも外れることなく、鏑矢を命中させたのじゃ。ど真ん中とはいかなんだがな。なかなかに見応えのある弓術であったわ。良い腕をしておる」
「えっ」
半九郎様が来ている、蒼生の心は弾んだ。うまく月影から逃れられたのかもしれない。お銀が引きつけてくれていたお陰で、藩邸から脱出できたのかもしれない。ああ、よかった。無事なお顔を拝見したい。早く逢いたい。
すぐさま探しに行きたかったが、役目を遂行する。相変わらず他人行儀な口調で報告した。
「唐国の妖術師が使う技に、呪死術と申すものがございます。木や紙に呪う相手の姓名年齢

を書いて、羊に食べさせるという術でございますが、羊が死ぬ、ありていに申しませば、殺しまするとと、呪った相手も死にまする」

「ふむふむ、羊とな」

ぴんとこないらしく、とぼけた応えを返している。これだもの、覚兵衛が倒れるはずよね。鈍いわけじゃないんだけど、ちょいとずれてるのよ。喉まで出かかった文句を呑みこんで、怖ろしい事実を告げた。

「殺す動物は別に羊でなくてもよいのです。呪う相手が可愛がっている動物でも代用できるのでございます。よくお考えになってくださいませ。最近、続いておりまする突然死事件。亡くなった家臣の方々は、例外なく、犬や猫、鳥といった動物を飼っておられました。それらが行方不明になったあと、急にお亡くなりになられております」

おわかりになりますね。そんな目で、吉宗を見あげた。ひそかに行われた呪死術、効き目を試していたのか、脅しの意味があるのか、あるいはその両方か。蒼生の頭にはさまざまな事柄が浮かんでいるが、吉宗はまだ話を理解していない。

「うむ、子細は真琴より聞いておる。亘はあの白ネズミに変化させられたのだとな。白ネズミ、いや、チュー助は確かに姿を見せたときから、余になついておった。あれが亘だと言うのであれば、足音もさせずに厩舎から消えたのも合点がいく。妖術師によって変化させられ

たのであろう。とうてい信じられぬが、蒼生が申すのであれば、本当なのであろうが……いや、しかし、待てよ。羊が可愛がっている動物だとすれば、余の場合は亘か。で、亘が行方不明になり、それがチュー助になったわけじゃな。で、もしも、亘になにかあれば、他の家臣同様、つまり、ええっ、わ、亘が死ぬと余も、むぐぅっ」

あわてて口を塞いだ。家臣たちに聞かれたら、大変な騒ぎになる。

「やっとわかりましたか。そうなんですよ。亘が死ぬと、おとっつぁんも死んじまうんです。それが呪死術という技の怖ろしさ、おとっつぁんは知らないうちに、自分の命をその懐から逃がしちまったんですよ」

「……」

吉宗の命運は、白ネズミが握っている。死に物狂いの捜索が始まった。

二

「はあ」

早くも探すのに疲れて、乙葉は吐息をついている。

「こんな広い場所で、小さなネズミを探すのなど、とうてい無理なことですわ。厩舎で上様をお見かけいたしましたときに、進言するべきでした。わたくしはそのつもりでしたのに、

上様はさっさと馬に乗って、走り去ってしまわれて」

上様ならずとも走り去りたくなるだろう。一緒にいた美弥は、おにぎりを二個、食べ終えて、のんびり茶を啜ることができた。二人とも絹の小袖をまとい、見た目だけは奥女中といった感じに装っている。各大名家の幔幕が張られた場所で、乙葉の鼻を頼りに白ネズミを探していた。吉宗の観覧席から、さほど離れていない。

「さあて、本腰を入れて探そうかなっと……うーん、あぁ、なんか、いい匂い。蓮の花の薫りがする」

美弥はふらりと、違う方向に歩き始めた。今日もぽかぽかと気持ちのいい小春日和、ネズミ探しよりも、ひなたぼっこに心は向いている。今は猫娘ではないのだが、そう簡単に性癖は変えられない。

「美弥、いけませんわ。真琴様に言われたではありませんか。二人一緒に行動するようにと、あら、どこからともなく菊の薫りが」

乙葉もまた頼りない足取りで、美弥とは反対方向に進んで行った。色とりどりの幔幕が、華やかさを競い合うように、ずらりと並んでいる。射的が始まったのかもしれない。裏手の通路を忙しげに出入りしていた家臣たちが、ほとんどいなくなっていた。

「乙葉様」

不意に名前を呼ばれて足を止める。

「え、あ、あの」

幔幕の裏から手が伸びて、中に引きずりこまれた。陽射しを避けるためだろう。上には天幕も張られているので、内部は少し薄暗く感じられる。充満している菊の芳香に、ついうっとりしかけたが、待ち構えていた菊之助を見て、頬が引き攣った。

「……菊様」

大名家の小姓らしく、華美に装って、いつも以上に輝いている。抱きしめようとしていたが、乙葉は身を固くして後ろにさがった。

「どうなさったのでございますか。わたくしです、乙葉様。菊之助でございます」

「は、はい、わ、わかっております。菊様であるのはわかっているのでございますが、で、でも、あの、本当に菊之助様なのでございますか？」

「なにをおっしゃるのです。よくご覧になってくださいませ。わたくし以外に、菊之助がおりましょうか」

「ですが」

乾いた唇を舌で湿らせてから、せいいっぱいの早口で説明する。

「さ、さきほど、御城の厩舎でお目にかかった菊様は、菊様であって、そうではないような

感じでございました。覚えがございますでしょう。あれは貴方様ではなかったのでございますか」

「御城の厩舎」

遠い目をして考えこむ。いつまた『あれ』に変わるのではないかと思い、乙葉は気が気ではない。すぐに逃げられるように身構えていた。そんな様子を察知したにちがいない。菊之助がぐっと接近する。

「他人の空似でございましょう。わたくしは御城などには行っておりませぬ。それよりも」

鼻腔いっぱいに広がった菊の芳香に、乙葉はとうてい逆らえない。

「あぁぁ～～」

しなだれかかるようにして、菊之助に寄りかかる。抱き止められてうっとりと、頬を染めかけたが、

「な、なりませぬっ、わたくしにさわらないでくださいまし！」

我に返って、はねのけた。幔幕の外に飛び出そうとしたが、それより早く菊之助に腕を摑まれる。握りしめた乙葉の手を、自分の胸に持って行った。

「つれないことを申されますな。乙葉様にお目にかかりたかったのです。ほら、このように胸が鳴っておりまする。乙葉様を恋い焦がれて、呼吸をするのが苦しゅうございまする」

間近に迫った美貌を、こわごわと見つめていたが、ようやく緊張が解けた。そうですわ。この方こそが、菊之助様。厩舎の近くで会った化け物ではない。

「あぁ、菊様。わたくしもお逢いしとうございました」

「乙葉様」

「菊様」

熱い抱擁をかわそうと目を閉じた瞬間、

「うわっ、ぐぶっ」

奇妙な叫び声が起きる。菊之助に抱きつこうとしていた乙葉の両手が空を切った。体勢をくずして、前のめりになる。足もとにいやな震動を感じたが、接吻の機会をのがしたくない。しばし両目を閉じて、そのときを待っていた。

どうしたのでしょうか。ぜんぜん菊様の気配がありませんわ。

「あのぅ」

片目をそっと開けて、様子を窺った。ここに至るまで、普通の人間の何倍も時間がかかっている。目の前に立っていたはずの菊之助はいなくなっていた。

「おかしいですわね。出て行かれたのでしょうか。わたくし、なにか気に障ることでも言ってしまったでしょうか」

足もとの地面の色が、他の場所と違っていることに、乙葉は気づかない。菊の薫りを押しのけるようにして、異臭が立ちのぼっていた。

この臭い。

別の幔幕に引きずりこまれた美弥もまた異臭をとらえている。蓮の花の匂いに混ざって、死臭を思わせる臭いが漂っていた。

「どうしたのさ。変な顔して」

お夏を名乗る妖しげな少女が、いぶかしげに目を覗きこむ。膝までの短い着物や、唐輪(からわ)に結いあげた髪が、蠱惑的な風貌をいっそう強調していた。美弥は彼女に腕を摑まれて、ここに引っ張りこまれたのだ。

「ほら、おいで」

誘うように開かれた赤い唇から、蓮の花の爽やかな薫りが流れていた。それを感じた瞬間、自分の意志にかかわりなく身体が動いてしまう。美弥はふらふらと歩み寄り、お夏に抱きついていた。

「あぁ〜ン」

「ふふ、いい娘(こ)だね。たんと可愛がったげるよ」

首筋に唇を這わせながら、右手で小袖の裾を割る。肉付きのいい美弥の太股を、細い指で撫でさすった。立ちのぼる蓮花の芳香に、鼻腔を刺激されると、みずから両脚を広げたくなる。

「うふぅ〜〜ぅん」

鼻を鳴らして、美弥はお夏の唇に唇を重ねた。差し入れられたお夏の舌を吸い、舌に舌を絡める。重い小袖を脱ぎ捨てたかったが、気が急いてしまい、帯を解く余裕がない。お夏の指の動きだけに気持ちが向いている。

「もう濡れてる」

耳朶を嚙むようにして囁いた。細い指は正確に女陰を探りあて、蜜壺の入口を彷徨(さまよ)っている。言葉どおり、そこはすでに濡れそぼって、挿入のときを待っていた。薫りによる刺激が、思いのほか強い影響を与えている。

「んんんぅ〜〜、まだ、まだぁ〜〜」

たっぷり前戯をしてほしいと、尻を振って、おねだりした。お夏は小さく嗤(わら)い、指で花弁のまわりをさわろうとしたが、

「きゃあぁっ」

不意に悲鳴をあげた。あわて気味に美弥の太股を摑む。ぎゅっと食いこんだ手の痛さに、

不快感を覚えて目を開けた。

「ん？」

早く続きをしてほしいのに、なにやってんのかな。

薫りが与える陶酔感と、房事の期待感で、ちょっと頭がぼんやりしていた。お夏は着物の上から美弥の両太股を、悲痛な顔で握りしめている。腰のあたりまで地面に沈んでいるように見えるが、目がおかしくなったのだろうか。

「沈むっ、ど、どうしてっ、なぜ!?」

二度目の叫び声で、ようやく異常事態を察した。お夏は地面に沈みかけている。放たれた疑問は、そのまま美弥の疑問だった。

「ひっ、ひえぇっ」

真っ青になって、後ろにさがろうとする。一蓮托生とばかりに、死に物狂いで太股を摑んでいるお夏を、振り払おうと必死だった。が、相手も手を放せば沈むのがわかっている。いっそう力をこめて命綱に縋った。爪が着物に食いこみ、自慢の太股にも血が滲む。

「い、いやっ、離してっ、離してよぉっ」

お夏もろとも自分を引きずりこむつもりなのか。月影は傀儡を犠牲にして、始末しようとしているのだろうか。お夏の動転ぶりが伝わり、美弥も恐慌状態に陥る。なりふり構ってい

られない。

「助けてっ、乙葉っ、お銀っ」

大声で助けを求め、必死に足を踏ん張った。が、お夏の重さに負けて、尻もちを突くように座りこむ。土人形のくせに死にたくないのだろうか。目の色が変わっていた。今度は美弥の腰にしがみつき、自分だけでも這いあがって、助かろうとしている。

「あ、あんたはただの傀儡でしょっ、あたしまで巻きこまないでよっ」

「うるさいっ、黙ってな！」

お夏はもう胸もとまで地面にもぐっている。足袋を穿いた美弥の足も、やわらかくなった土に吸いこまれかけていた。お夏のまわりの土だけ、生き物のように動いている。なまあたたかい地面が、蟻地獄のごとく崩れて、地中深く引きずりこもうとしていた。美弥は叫ぶことしかできない。

「だれか来てっ、助けてぇっ」

「美弥？」

幔幕をあげて、お銀が覗きこむ。

「あっ、は、早くっ、早く引っ張ってっ」

手を伸ばした美弥に、素早く駆け寄った。抱えこんで引っ張ろうとしたが、邪魔な重石に

気づき、匕首で切りつける。

「こいつ！」

「くっ」

お夏は左手を離して避け、すかさずお銀の手首を摑んだ。右手で美弥の太股、左手にお銀の手首、二人分の支えを利用して、気合いもろとも脱出をはかる。てやぁっと叫んだ刹那、地面から飛び出していた。二人の頭上を軽々と飛び越えて、幔幕の外に逃げる。

「待てっ」

追いかけようとしたが、まずは美弥を助けるのが先だ。お夏がもぐりこんでいた地面の跡から、まずは両足を引っ張り出した。腰がぬけたようになっている美弥は立つことができない。

「く、くさい」

蟻地獄から立ちのぼる異臭に眉を寄せた。でんと座りこんでいる美弥を、運び出すお銀の方が大変である。

「文句を言うんじゃないよ。命があるだけましと、あれ？」

右の足袋の先に、白ネズミがぶらさがっていた。つつつ、と美弥の脚を伝って、頭にちょこんと載る。二人はさっと緊張した。

「動くんじゃないよ、美弥。驚かせると、また逃げちまうからね」
「う、うん」
「いいね。そっと、そう、動かないで」
一、二の三で、お銀は白ネズミを両掌に包みこむ。吉宗の命を握りしめているようなものだ。思わず歓声をあげそうになったが、互いに顔を見合わせて、そろそろと幔幕の外に出る。陽が傾いた瑠璃色の空に、美しい満月が浮かびあがっていた。お銀がほっとしたように呟く。
「よかった。これで蒼生様が変化できる。あたしたちも元の姿に戻れるよ」
今宵ほど満月が待ち遠しいときはなかった。蒼生の不安にお銀も気づいている。明星天子を降臨させた月影は、陰陽を封じるだけでなく、月も操るのではないか。途方もない推測など天空の月は知らない。
ただ静かに青白い光を投げていた。

三

満月の光を受けているのに——。
変化できない。
人のいない幔幕の中で、蒼生は祈るように満月を見あげていた。一刻も早く変化して、妖

娘たちの霊力を取り戻し、吉宗の護衛にあたろうと、この一角を空けてもらったのである。だが、分身に変わろうと思っても、蒼生のままだった。握りしめている葵十手も霊力の輝きが感じられない。焦って何度も念をこめるが、変化は訪れなかった。

「どうかなさいましたか」

あまりにも遅いので、不審を覚えたのだろう。真琴が幕越しに声をかけてくる。変化した蒼生は、その両眼から凄まじい霊気を発するため、中に入って来ようとはしない。震える声で訴えた。

「だめなのよ、真琴」

「え？」

その声や雰囲気で、ただならぬ事態を察知したのだろう。飛びこむように入って来た。いつもと変わらない蒼生の姿を見て、当惑を隠しきれない。

「どうしたのでございますか。満月が出ておりますものを」

「変われないのよっ、妖姫になれないの!!」

狼狽し、涙声になって、真琴に縋りついた。

「ど、どうしようっ、ねえっ、どうすればいいのっ」

「お、落ち着いてくださいませ。今一度、心を鎮めて集中するのです。ここは人が多くて気

が散りますゆえ、思うようにいかないのでございましょう。さあ、落ち着いて」

「え、ええ」

波立つ気持ちを抑えて、天空の月に波長を合わせる。いつもなら合わせる必要などないのだが、今は意識して黄金色の輝きを頭に広げた。目を閉じても脳裏には、円い月が浮かんでいる。それなのに……。

「あぁぁっ、だめ！」

激しい絶望感と敗北感で、倒れそうになった。抱きしめる真琴も、真っ青になっていたが、けんめいに平静さを装っている。

「考えれば、そう、考えれば良い案が浮かびまする。ご、ご案じなさいますな。単に体調が悪いだけで、もう一度、試してご覧になれば、きっと力が戻りまする。大丈夫でございまする、きっと戻りまする」

自分に言い聞かせているような口調だった。やはり、月影には明星天子が降りているにちがいない。強大な霊力を使って、蒼生の裡に宿る分身――妖姫を封印したのだ。三妖娘たちと同じように、〈陰陽封じ〉を使って封じこめた。

「なれど、蒼生様。御身はまだ最後の秘術はかけられておりますまい。お銀たちには、月影自身や、彼が操る傀儡を遣わして、悩ましい房事を仕掛けておりまする。そのときに霊力を

封印されてしまいました。蒼生様の身には、そのような事態は生じていないように見受けられまするが」

「夢を見たわ」

そうだ、あの淫夢だ。

「半九郎様と愛し合う夢。あれがきっとそうだったのよ。どうしよう、真琴。これじゃ、月影とまともに戦うことなんかできな……」

突如、馬場で異様な叫び声があがる。

「上様っ、御簾の中にご避難を！」

「曲者でござるっ」

「お逃げくだされっ、早うっ、早、うわあっ」

外には戦場さながらの光景が広がっていた。黒い馬に乗った鎧兜の男たちが、吉宗たちに向かって矢を射ている。総勢二十騎といったところだろうか。顔には黒い面をつけており、素顔がわからないようにしていた。煌々と照り映える満月の下、射的代わりにされた吉宗たちは右往左往している。

「上様っ」

蒼生は頭巾を被り、真琴と一緒に飛び出した。御庭番たちもすぐに現れて、主君を守るべ

く包囲陣を組む。家臣たちも、ある者は馬に乗り、ある者は弓矢を構えて応戦する。競技だった流鏑馬が、本物の戦になっていた。刺客軍団は吉宗たちを中心に据えて、周囲をまわっている。徐々に包囲網を縮めてくるのは間違いない。

「いったん御簾の中に避難を！」

叫びながら、蒼生は近くに来た一騎に躍りかかった。頭上を飛び越えざま、葵十手を顔面に叩きつける。黒い面は弾け飛んだが、怪我をさせることさえできない。しなやかに着地して、吉宗たちに合流する。

「早くお逃げくださいませっ」

右手に葵十手、左手に短剣を持ち、飛来する矢を叩き落とした。御庭番たちも躊躇することなく、人間の盾になっている。吉宗は命からがら御簾の中に逃げこんだが、安心できる状況ではない。火矢を射られれば、燃えあがる危険性があった。なんとしても血路を拓かなければならない。

「くっ、妖娘たちの霊力が戻れば」

再度、月を仰ぎ見たが、霊力は湧いてこなかった。封じられてしまったのであれば、取り返すのみ、月影の姿を探して、馬場に目を走らせる。

「危ないっ」

後ろから伸びた矢を、真琴が弾き返した。勘が鈍くなっているのだろうか。思うように動けなかった。

「集中なさいませ。いつもの蒼生様らしくありませぬぞ」

「その言葉、そっくり返すわ」

今度は真琴に伸びた矢を、弾き返して、五分と五分。互いに笑みをかわし合い、飛来する矢と格闘する。御庭番たちが吉宗のいる避難所の周囲に、幔幕を張りめぐらせて、矢の貫通を防ごうとしていた。御簾だけでは避けきれないと考えたのだろう。蒼生も近づこうとするが、矢に阻まれて、思うように進めない。それでも少しずつ避難所に近づいて行った。

「お相手を」

いきなり眼前に月影が出現する。蒼生はぎくりと足を止めた。忍び装束の老忍は、まるで亡霊のように現れたのである。月光を浴びて佇む姿は、無敵の戦士という感じがした。すでに気迫で呑まれている。

「望むところだ！」

自分を鼓舞するように叫び、蒼生は走った。

「ご油断めさるなっ」

真琴が影のように背後を守り、矢を防いでくれる。月影は動かない。光る目を蒼生に据え

て、ゆっくり忍び刀を抜いた。

勝負!!

葵十手を水平に薙ぎ払う。がつっと鈍い音がして、月影の忍び刀と激突した。二人同時に離れて距離を取る。すみやかに次の攻撃に移った。地を蹴って跳び、空中で交差した刹那、ふたたび十手と刃がぶつかる。妖術を仕掛けて来ないのが、逆に薄気味悪かった。着地するとき、どうしても地面に目が行ってしまう。

「ご案じめさるな」

月影が言い、刀を突き出した。妖術は使わないと言っているらしいが、信じられるはずもない。十手に意識を集中しつつ、地面にも気を向けた。迫って来た一騎に、真琴が短刀を投げつける。見事に当たったが、敵の騎馬隊はまだ半分近く残っている。思っていたとおり、だんだん包囲網を縮めて来た。

「真琴っ、上様を!」

逃がさないと危ない。が、蒼生も吉宗を助ける暇はなかった。月影が深く踏みこみ、刃を叩きつける。紙一重でかわして、後ろにまわりこもうとしたが、いち早く背後にまわられた。

「くっ」

真上に飛びあがって、どうにか刺されるのは防いだ。動きが怖ろしく速い。降り立とうと

したその場所で、月影は先に待ち構えている。真琴が忍びやかに近づき、一撃を繰り出した。

「哈！」

刃は虚しく空を切る。老忍は年齢をまったく感じさせない速さで、幽霊のように移動した。幻ではないのかと思うほど気配がない。目でとらえていては間に合わないのだが、得意の勘でも感知できない。けんめいに戦意を奮い立たせてきたが、すでに限界を感じていた。

月影には明星天子が降りている。生身で勝てるわけがない。なんとかして、妖姫に変化しないと……。

「無理でござる」

背後で響いた渋い声。またしても、一瞬のうちに後ろを取られていた。はっとして、蒼生は振り返る。間に合うまいと思ったが、身体は反応していた。葵十手をいきおいよく繰り出す。

「ぐ」

短い呻き声が、月影の喉から洩れた。葵十手が胸に突き刺さっている。ちょうど心ノ臓あたりの急所だった。避けられたはずなのに、なぜ、避けなかったのか。戦いが終わる喜びよりも、疑問の方が勝っている。

「ど、う、して」

血が流れないの？　葵十手をわざと受けたのは、なぜ？

「やった！」

代わりに真琴が声をあげた。

「なにが明星天子だっ、月を操る不死身の存在だっ。しょせんはただの人間、思い知った……」

唐突にそれが途切れる。月影の胸に突き刺さった葵十手が、ぐぐっ、ぐぐっと押し出されていた。相変わらず血は一滴も流れていない。筋肉に押されるようにして、十手が迫り出して来る。敗北を認めるように、ぽとり、と地面に落ちた。

「……」

蒼生は昏い恐怖につかまれる。こいつは人間じゃない、明星天子だ、不死身なのだ。いくら刃を突き立てても無駄なこと、平然と甦って、反撃して来る。

身体が動かない。怖いのに逃げられない。顔面蒼白、金縛りに遭ったように立ち竦んでいる。まわりでは吉宗軍と敵軍の攻防戦が続いているのに、不思議なぐらい静かだった。怒濤のような叫び声も、馬の蹄の音も風景も、なにもかも消えて、静寂に包まれている。見えているのは妖術師の姿だけ、聞こえてくるのは……月影の右手がゆっくり動いて、天を指した。

「見よ」

抗いがたい強さを秘めた言葉だった。蒼生と真琴は夜空に目を向けて、また絶句する。満月がふっと消滅したのだ。だれかが手で摑み取ったかのように、天空から失くなっていた。訪れた暗黒世界は、淫夢のときに視た漆黒の闇に似ている。以前、満月が消え失せる幻像を視たが、あれは予知だったにちがいない。

「あ……」

全身から力がぬける、膝が震えて座りこむ。もう十手小町は戦えない。妖姫を封じこめられたうえ、満月まで消滅してしまった。

「く、雲でございまするっ」

真琴がかろうじて声を発する。

「騙されてはなりませぬっ、月が消えたわけではございませぬっ、あれは、あれは単に月が雲に隠れただけ、うっ、うわあっ」

ざっと足もとの土がくずれた。蒼生ともども蟻地獄のような泥土に引きずりこまれる。抵抗する術はない。もがけばもがくほど、地中深く沈んで行った。

四

「ふふ、ふふふふ、真琴様。おいでをお待ちいたしておりました」

真琴の耳もとで、女が囁いている。目を開けているはずなのに、真っ暗でなにも見えない。ゆるやかに流れる暖かい泥が、手の形になって、素早く袴と着物を脱がせた。白い長襦袢の紐もゆるめようとしたが、とっさにはねのける。かすかに理性が残っていた。

「怖いお顔をなさってはいや」

二度目の声で、うっすら周囲が見えた。そこは土壁に囲まれた狭い空間、紅梅の素晴らしい薫りがあふれている。いやでも吸いこんでしまい、真琴は小さく喘いだ。

「あぁぁ〜」

ふらりとよろめいたところを、裸身の女に抱き止められる。寄せられた赤い唇に、なんのためらいもなく唇を重ねた。ついさっきまで戦場と化した馬場にいたのだが、見事に忘れ去っている。ただ……蒼生の昏い表情がちらつき、それが歯止めになっていた。長襦袢の紐を外されないよう、しっかり押さえつけている。

「わたくしはお春、お逢いしとうございました。ずっとこうしたかったのでございます」

女は長襦袢の胸もとに右手を滑りこませたが、巨乳を気にしている真琴は、いつもきっちりとサラシを巻いている。簡単にはほどけないはずなのだが、

「無粋な」

ひと言、告げたあと、はらりとサラシが融けた。解けたのではない。空気に融合するよう

に、胸から消えてしまったのだ。窮屈そうに縮こまっていた乳房が、縛めを解かれて、本来の豊かさを見せる。ふっくらとふくらんだそれを、女は愛おしげに揉みしだき始めた。長襦袢の胸もとを広げて、左の乳房だけ、あらわにする。女忍者として特別な房事の訓練を受けているため、感度は蒼生よりもずっといい。

「んふうぅ～～、あぁぁ～～」

乳首が尖って、さわられるのを待っていた。いちだんと強く紅梅の薫りが広がり、真琴は立っていられなくなる。長襦袢の裾を乱して、くずれるように座りこんだ。すかさず女の手が、裾を割って忍びこみかける。

「だ、だめ」

喘ぎながらも、どうにか止めた。しかし、両の眸はすでに潤み、頬が桜色に火照っている。女は嗤い、裾を割って右手を滑りこませたが、ここでも無意識の抵抗が働いていた。真琴は横座りして膝をつけ、さわらせないようにしている。本人は愛撫されたいのだが、時折ちらつく蒼生の顔によって、御庭番の理性をなんとか保っていた。立たせようにも、薫りに酔いしれているので、ふらついてしまう。

「これに」

座れと、女は床几を置いた。なにもなかった小部屋に、突如として床几が現れること自

体、奇妙なのだが、それを気にするだけの判断力は残っていない。長襦袢の裾を広げられて、直に座るよう示された。すとんと腰を落として、真琴は座る。片方だけはみ出ている乳房の白さが、やけに艶めかしい。女はすぐさま広げた裾に顔をもぐりこませた。

「うふふ、花が開いておりまする」

嗤ったその息が、花弁をくすぐる。

「あ」

真琴は目を閉じて、小さな声をあげた。飛び出ている左の乳房を、左手で思わず握りしめる。ついでに右の乳房も解放してやった。外にあふれ出た乳房が、大きく深呼吸するように、ぷるるんっと揺れる。熟した乳房同様、お春が言ったとおり、花弁も淫らに開いている。綺麗に整えられた陰毛に彩られて、肉色の花弁が花を広げ、中心部に充血した花芯が勃っていた。存在を示すようにひくつき、嘗められる瞬間を心待ちにしている。

「もうこのように」

女はちゅうぅっと、きつく吸いあげた。長襦袢を脱がない真琴に対する罰だったのかもしれない。

「ああっ」

頤をあげ、足袋を穿いた両足に、ぐっと力をこめる。反動で乳房を握る手にも、力がこも

った。尖った乳首をクリクリといじり、胸もとから飛び出ている巨乳を感じるまま揉みしだく。積極的な態度にお春も応える。大きく膨張している花芯を、舌を震わせて、嘗めあげた。指で蜜壺の入口を探る気配を感じて、真琴はさらに両太股を広げる。

「んふうぅ〜〜ン、いい、いいぃ〜〜〜、はあぁぁ〜〜〜」

お春は花芯を嘗めながら、指をほんの少しだけ蜜壺の入口に入れた。わずかに開いただけなのに、つつーっと蜜が滴り落ちる。年は若いが、熟女並みの濡れ方だった。早く奥に挿れてほしくて、みずから腰を浮かせる。床几から尻を浮かせた非常にきつい姿勢だったが、鍛えぬいた御庭番ゆえ、なんの苦にもならない。花芯を嘗めると同時に、蜜壺の内部も思いきり刺激してほしかった。

「は、早くぅ〜〜ぅ〜〜〜」

巨乳をせつなげに握りしめて、おねだりする。はだけた白い長襦袢の胸もとから、桜色に染まった豊乳が飛び出し、乱れた裾が広がって、むっちりした太股が覗いている。なまじ素裸になるよりも恥ずかしい〝絵〟かもしれない。蜜壺からあふれ出る蜜が、刺激を求めていると訴えているのに、女はなかなか応じない。

「だめ」

さっきのお返しとばかりに同じ言葉を告げた。意地悪をするように、花芯を嘗める舌の動

きを速める。蜜壺の入口で、くちゅくちゅと音をたてる。達きたいのだが今ひとつ物足りない。真琴は浮かせ気味の尻を、焦れったげに揺さぶった。

「んんんんぅ〜〜ぅん、はあはあ、あはあぁ〜〜〜〜〜」

狙いすまして、お春の指を蜜壺に導こうとしている。だが、細い指は揺れ動き、後ろの菊花に移動してしまった。たっぷり蜜を絡めた指で、今度は菊花をまさぐる。ますます不満が高まり、花芯だけが膨張する。

「ああっ、は、早くっ、も、もう、もう」

我慢できないと身悶えた。あふれ出る蜜が、床几をぐっしょり濡らしている。早く挿れて、指で突いて、こすりあげて。湯気が出そうな蜜壺に、お春は苦笑を滲ませた。

「しようのない女(ひと)」

細い指を二本、疑似男根に見立てて、床几の上に載せた。ほしければ自分で挿れろと言っているのだ。もたもたしていると、また気が変わってしまうかもしれない。

「んふぅ、ふうふう」

真琴は焦り、顔を真っ赤にして、蜜壺の入口を二本の指先にあてがう。ずんっと深く尻を沈めた。

「ひぅ！」

あまりの気持ちよさに、意識が遠くなりかける。細い指なのが、いささか不満ではあるものの、きゅーっと肉襞を収縮させて、疑似男根を味わう。お春も心得たもの、奥でぱんぱんに張りつめている壺芯を指先で強くこすりあげる。肉襞を撫であげては、突く。花芯の舌技も再開させ、舌を小刻みに蠕動させた。

「ぅふうっ、あ、いいっ、くぅっ、いいぃ〜〜〜〜〜っ」

真琴は狂ったように尻を振る、上下に揺さぶって快感を貪る。お春の舌が花芯から離れるのではないかと思ったが、吸盤のように吸いついていた。豊乳をぎゅっと握りしめ、もっと、もっとと声をあげる。花芯を嘗める舌が揺れる、蜜壺の奥でふくらむ壺芯を疑似男根が突きあげる。指先で壺芯をつまみあげられた刹那、

「あ」

我慢できませぬ。

「くうっ、いくうぅ〜〜〜っ、達きまするうぅ〜〜〜〜〜〜っ」

歓喜声を迸らせていた。中途半端な姿勢で硬直したあと、がくっ、がくがくっと尻が震える。視野が青い光に染まって、長襦袢の裾が妖しげに揺れる。あふれ出した蜜が、お春の指をしとどに濡らした。ふうっ、ふうふうっと喘いで、真琴は両の乳房を握りしめている。ゆっくり床几に腰を降ろそうとしたが、

「あぉっ」

背後から男根につらぬかれた。いつの間に現れたのか、月影が長襦袢の裾をまくりあげて、白い尻を抱えこんでいる。細いお春の指よりはずっといい。蜜壺内に充満した男根を、真琴はたっぷり味わった。

「ああ〜〜ぁ〜〜〜〜〜」

後座位で、うっとり目を細める。お春の両手が乳房に伸び、もう一度、花芯を嘗め始めた。乳首をつまみあげるように刺激し、充血しきっている花芯に舌をそよがせる。蜜壺に挿入された男根も、肉襞をこすりあげては、壺芯を突いた。尻を抱えこまれた真琴の身体は、宙に浮き気味の状態である。壺芯を突かれる度にぶらぶらと、両足の先で白い足袋が揺れた。

「ううっ、ぐふぅっ、うううっ」

早くも二度目の絶頂が訪れかけていた。一度目よりも多少、強い刺激の方が感じる。月影もお春も言葉にされない欲望を読み取っていた。花芯を唇で挟むようにしながら、舌を濃やかに震わせる。ちゅうっと吸いあげたりもする。男根はまさに射的を狙う矢のごとく、まっすぐ壺芯をつらぬいた。ずずんっと、痺れるような快感が走る。

「おおおぅっ」

獣のような声をあげて、尻を痙攣させた。下半身が震え出している。もう達く寸前だ。乳

房を揉みしだくお春の手に、自分の手を重ねたとき、

「きゃあっ」

不意に絶叫が轟いた。乳房を愛撫していた両手と、花芯を嘗めていた舌の感触がなくなる。

真琴はぼんやり目をしばたたかせた。

「な、に？」

長襦袢の裾を割って、もぐりこんでいたお春の姿が見えない。

「む」

月影が退く気配を見せる。逃げられてはたまらない、途中でやめられるのは困る。真琴は急いで半回転すると、騎乗位になって、のしかかった。花芯をこすりつけるようにしながら、回転技を披露する。次の瞬間には尻を上下させて、大きな濡音を響かせる。重たげに桜色の巨乳が揺れ、蜜壺もまた重い音をあげた。

「おうっ、おうぅっ、おおおぉ～～～っ」

あ、だめ。

「達くぅ――――」

背中を反り返らせて、硬直する。一度目よりも深い絶頂に包まれた瞬間、またしても青い光が広がり……ちらっと蒼生の顔がよぎった。

「あ、おい、さ、ま」

絞り出すような言葉は、押し寄せる快楽によって中断される。真琴は取り憑かれたように、尻を揺さぶっていた。

五

蒼生は愛しい男、半九郎に抱かれている。

「あ、半九郎様、そこ、そこを」

脱ぎ捨てた袴を敷物代わりにして座り、濃紺の着物の裾をしどけなく広げていた。土壁に囲まれた狭い空間に入りこんだとたん、月影に負けた絶望感や虚無感は消え失せている。戦っていたことさえ、記憶に残っていなかった。半九郎の無骨な手が秘部に忍びこみ、叢のあたりを探っている。淫夢なのか、現実なのか。どちらかわからないが、どちらでもよかった。ただひたすら、この房事に溺れたい。

「こ、こに」

右手の中指を、花弁に導いた。が、慣れていないので、うまく花びらを広げられない。焦れた半九郎は、「お立ちくだされ」と蒼生を立たせた。着物と長襦袢の裾を広げ、女陰を剝き出させる。着物をまとった姿で、その部分だけ曝すのは、とても恥ずかしいことに思えた。

生娘ではないのに頬を染める。

「……は、半九郎様」

両手で顔を覆ったが、半九郎は熱っぽい視線を注いでいた。

「生人形のように美しゅうござる」

両脚を少し広げさせて、女陰に唇を近づける。ふうふうと興奮して息がかかる。蒼生も踵をわずかにあげた。

「ぁあ」

「まだ花びらが固く閉じておりまする」

ぎこちなく両手の指が動き、花弁の両脇に添えられる。そっと割り開いて、淡い花芯を露出させた。真琴に比べると、あきらかに膨張の度合いが違う。薄桃色に充血していたが、ぽっちりとふくらみを帯びているだけだった。ともすれば、見のがしてしまうほどに小さい。

「これ、でございまするか」

ちろり、と、半九郎が舌を伸ばした。

「あ！」

蒼生は背伸びをするように踵を持ちあげる。やわやわと舌が蠢き、着物の上からではあるが、乳房にも手が伸びた。どちらかと言えば大柄な半九郎が、裸でうずくまり、身を屈めて

奉仕している姿は、恋する乙女の胸を熱くさせる。蒼生は彼の肩に両手を置いて均衡を取りながら、舌がもたらす悦びに陶酔する。

「あ、はあぁ〜、いい、は、半九郎様ぁ〜〜」

ゆらゆらと頭が揺れ、着物の袖も揺れる。不意に土壁から両腕が出現し、固く結んでいる帯を解いた。半九郎の手伝いをするように、着物を留めている紐もゆるめる。後ろからぐっと胸もとを広げて、形の良い乳房を出した。桜色の乳首は埋もれていて在処がわからない。土色の手は指先で乳首をこすり、ヤワヤワと刺激する。少しずつ乳首が硬くなり、尖ってきた。

「んんんんんぅ、はあはあ、あはあぁ〜〜」

蒼生は忙しげに、踵をあげたり、さげたりしている。半九郎の舌は花芯に貼りついて離れない。小刻みに震えて、刺激している。小さなふくらみだった花芯も、乳首と同じように、はっきりそれとわかるぐらいになっていた。舌先に引っかかるほどの大きさになっている。嘗めることにだけ意識が向いていた半九郎だったが、ここでようやく蜜壺の入口を指で探った。

「そこ、も、はあぁ〜〜、さわって、くださりませ」

かすれた声で、蒼生は訴える。さらに両脚を広げ、尻をやや下げ気味にして、愛撫しやす

い恰好になった。半九郎の指が、遠慮がちに蜜壺に忍びこむ。内部はしっとりと濡れていたが、蜜があふれ出るほどではない。肉襞の感触を味わうように、ぐにゅぐにゅと動かして、奥の壺芯にふれる。思いがけない動きを見せる指に、蒼生は声をあげた。

「あっ、あぁっ」

反り返って前に出た乳房には、後ろから伸びた腕が貼りついている。尖った乳首を指先で挟むようにして、クリクリといじった。半九郎の舌は変わりなく蠕動している。愛おしげに花芯を嘗め、指で蜜壺の肉襞をまさぐっていた。だんだん蜜があふれてくる、濡音が大きくなってくる。

「もっと、あはあぁぁ〜〜、いいっ、いいぃ〜〜〜っ」

蒼生は喘ぎ、両脚を突っ張る。絶頂のときを感じ取って、舌の動きが速くなる。小刻みに揺動（ヴァイブ）する。

「あ、あ」

半九郎様。

「いくぅ――――」

踵をあげて、背中を反らせた。一瞬、全身を硬直させたが、それはすぐさま下半身の痙攣に変わる。ほとんど同時に視野が暗闇に染まった。半九郎との淫夢を見る度に、いつも訪れ

ていた不気味な闇。魂を吸いこまれそうなほどの暗黒世界だったが……ふと光が射しこむ。

「はぁっ」

深呼吸するように、蒼生は息をついた。

「あ、蒼生殿っ」

そのまま半九郎に抱きしめられて、仰向けに横たえられる。知らぬ間に着物と長襦袢の紐を解かれていた。着物の前を大きく広げて、半九郎が裸身をぴたりと密着させる。左の乳首を唇で咥えながら、股間で屹立する男根を、濡れそぼる蜜壺の入口にあてがった。前戯に時間をかけたので、若い半九郎はこらえきれない。

「く！」

一気に奥まで挿入させた。

「あぐぅっ」

蒼生は両脚を広げて、のけぞる。気持ちよいのだが、さほど房事の経験が多くないため、蜜壺を責められるだけでは、なかなか達けない。自分の指を花芯に持って行き、手淫のような指戯を始めた。半九郎が腰を使いながら、意外そうな面持ちで見る。

「は、はあはあ、な、なぜ？」

そのような真似をするのかと尋ねていた。蒼生よりずっとおくてで、秘め事の回数も少な

い。挿入すれば女は感じるものと思いこんでいる。

「こ、うした方が、あぁぁ〜〜、わたくしは感じ、あっ、ああっ、奥を！」

詳しい説明はできなかったが通じたのだろう。両脚を抱えこむようにして、律動的（リズミカル）に腰を動かした。肉襞をこすりあげては、奥でふくらむ壺芯を突く。まわすようにして、ぐりっと壺芯を刺激する。蒼生は細い指を花芯にあてて、小刻みに指先を震わせていた。愛する娘が大きく脚を広げ、自分の指で自慰まがいの行為をしている。その姿を間近に見て、興奮しないわけがない。

「ううっ、あ、蒼生殿っ」

感極まって、半九郎は絶叫する。

「い、一緒に、あぅっ、一緒に、半九郎様ぁっ」

蒼生もまた叫ぶように声をあげた。花芯に添えた指が、いっそう濃やかに震える。半九郎の男根が蜜壺の奥を責める。男根が張りつめ、蜜壺がきゅきゅーっと収縮した。

「ぅふうっ」

一瞬、動きを止めた半九郎に、蒼生も同調する。

「達くうぅっ」

両脚をぴんと伸ばした刹那、絶頂を迎えていた。すぐに尻が震え出し、硬直していた両脚

も激しく揺れる。視野が黄金の光に染まって、たとえようのない幸福感に包まれた。
「あぁぁ〜〜ぁ〜〜〜〜」
半九郎様。
吐息まじりの呼びかけに、半九郎は裏切りで応える。
「ぐっ、ぐぐぐぅっ」
突如、蒼生の首を絞めたのだ。
「あ、ぐぅ、や、やめ、うぐぐぐぅ〜」
喉に食いこんだ指をほどこうとするが離れない。凄い力で絞めあげる。苦しい、息ができない。
黄金の光を凝視(みつ)めながら、蒼生は動かなくなった。

六

「十手小町、拙者が仕留めて候」
月影がむくりと身を起こした。裸身に褌(したおび)を着けた姿で立ちあがる。あられもない姿態で横たわる蒼生は身じろぎもしない。虚ろな目を見開いたまま、仰向けに横たわっていた。
正気づいた真琴が、あわてて駆け寄る。

「あ、蒼生様!?」

それを横目で見ながら月影は、吉宗が砦にしている避難所に近づいて行った。いくつかの人影が従っている。お夏、菊之助、お春、そして、半九郎を含めた四人の土人形だった。黒い騎馬隊も円陣を縮めて、観覧席に迫っている。御庭番たちがまわりを固めているが、どこまで防ぎきれるか。

「次は八代将軍吉宗公のお命、ちょうだいつかまつる」

月影の合図で、四人の傀儡たちが動いた。騎馬隊も馬を降りて戦列に加わる。流鏑馬を観覧するために設けられた場所が、いまや唯一の避難所。飛びかかって来た御庭番を、お夏が匕首で斬り捨てる。騎馬隊と御庭番たちも、鋭く刃をかわしていた。馬場のあちこちで血まみれの戦いが始まっている。

「上様っ」

真琴は落ちていた葵十手を拾い、吉宗の砦に近づこうとする。長襦袢姿だったが気にしていられない。斬りつけて来る騎馬隊を葵十手で防ぎながら、隙を縫って進み、御庭番たちの側に行った。

「上様をお守りせよ！」

ひとりが背中を押しやって、真琴を砦の中に押しこむ。吉宗が二人の小姓と刀を抜いて身

構えていた。握りしめている葵十手に、ちらっと目が向けられる。
「蒼生はどうしたっ、無事であろうなっ」
「それが……」
会話は最後まで続けられない。幔幕で覆っていた一部が破かれて、菊之助が侵入しかける。葵十手を突き出して、これを防いだ。霊力は衰えているものの、やはり、連中は葵十手が苦手らしい。何人かの御庭番が中に入って、吉宗の周囲を固める。
「わたくしが血路を拓きまする」
真琴は幔幕の隙間から、外の様子を窺い、守りの薄い場所を見つけた。二人の御庭番とともに飛び出そうとしたが、菊之助とお春が立ち塞がる。匕首を握りしめて、襲いかかって来た。
「ちっ」
だめだ。これでは逃げられぬ。蒼生様、いや、妖姫は本当に死んでしまわれたのだろうか。妖姫がおいでになれば……。
不意に裏手で爆発音が轟く。
「上様っ、蒼生様っ」
お銀の声が響き、再度、大地を揺るがすような轟音が響いた。敵に向かって宝録火を投げ

つけたようだが、下手をするとここが燃えあがりかねない。宝録火は手投げ弾のようなもので、鉛玉の中に焔硝（えんしょう）と鉄粒子、古釘や小石を詰めて、導火線を伸ばした非常に殺傷能力の高い爆弾である。案の定、並んでいた大名家の休息所に火が燃え移り、炎が広がり始めた。

「こちらへっ、上様！」

燃え死ぬか、斬り殺されるか。悩んでいる暇があったら逃げた方がいい。真琴が先頭に立って、馬場を走り抜ける。吉宗と小姓の両側を、御庭番たちが守って、馬場の正門めざして突き進んだ。

「逃がしはせぬ」

ぬうっと前方に、月影が出現する。四人の傀儡たちも、匕首を手にして、真琴たちの背後を取り囲んだ。

「われらが引きつける」

「真琴は上様を」

二人の御庭番が、手強い月影に向かって行った。しかし、相手は並外れた霊力の持ち主、忍びたちが飛びかかる直前、両手が鋭い木の刃となって伸びた。乙葉の力を使って、二人の胸を刺しつらぬく。空中で串刺しになり、鮮血を噴き出して絶命する。月影は芋でも転がすように、二人の死骸を地面に放り投げた。

「きさま！」

真琴は吉宗を背中に庇い、前に出る。月影と傀儡たちは、じりじりと間合いを詰めて来る。背後では火が嘗めるように広がり、黒い煙と紅蓮の炎を噴きあげていた。強い風が湧き起こって、呼吸が苦しくなってくる。早く逃げないと吉宗が危ない。

「きえぇっ」

葵十手を繰り出した真琴に倣い、吉宗と小姓も刀を叩きつける。月影は木の刃に変化させた両腕で刀を弾き返すや、鋭く踏みこんで反撃して来る。武器と化した両手を巧みに操り翻弄した。そのうちの一撃が、吉宗の腕を斬りつける。

「むぅっ」

怯んでわずかに体勢がくずれた。

「もらった！」

木の刃が、急所を狙って伸びる。心ノ臓へとまっすぐに、尖った刃が迫った。真琴はお夏に攻撃されて動けない。小姓たちも、それぞれの相手を防ぐだけでせいいっぱいだ。

「上様っ」

まさに胸をつらぬこうとしたそのとき、がつっと横から匕首が突き出される。木の刃を受け止めていたのは、なんと、半九郎だった!!

「おまえが……どうして？」

今度は月影の方が怯み、無防備になる。半九郎はなにも答えない。代わりにがらあきになった胸もとへ、匕首を一閃させた。見事に刺しつらぬいていたが、老忍は平然としている。突き立った匕首を抜き放ち、陰にこもった嗤い声をあげた。

「くく、くくくく、吾（われ）は不死身の明星天子なり。どのような武器も役に立たぬ。吉宗公。お覚悟めされい！」

右手を木の刃に変え、左手に匕首を握りしめて、月影は躍りかかる。ふたたび半九郎が忍びやかに動いた。両手を広げ、仁王立ちになって、吉宗を守る人間の盾になったのである。木の刃が胸に突き刺さり、匕首が左腕を肩の付け根から断ち切った。が、土人形をいくら斬っても無駄なこと、月影は己の術に阻まれているようなものだった。

「くっ、なぜ？」

同じ質問が発せられる。半九郎は黙して語らない。ただ吉宗の盾となって、月影や三人の傀儡による攻撃を受け続けていた。真琴はその間に吉宗の側に寄り、少しずつ反対方向へ誘導している。しかし、月影が見のがすはずがない。

「狂うたか、半九郎。なれば、吾が始末してくれよう」

静かとも言える口調で告げ、刃に変化させた右手を突き出した……が、鋭利な刃にならな

い。花娘である乙葉の霊力を、簡単に使えていたのに、変化させようとしても変わらなかった。

「むっ、むむぅ」

今度は左手で試してみる。だが、結果は同じだった。両足にも念を集めてみるが、これも木の刃にはならない。

「月影様」

緊張したお夏の声で、燃えさかる射的場に目を向ける。やけに静まり返っていた。聞こえるのは炎があがる音や、幔幕を張るために立ててあった柱が倒れる音ばかり、御庭番と騎馬隊はなにをしているのか。刃を交える音や、怒号が飛び交っていたはずなのに、どうなったのか。

「菊之助、様子を……」

命じる声が、唐突に途絶えた。轟々とあがる炎の中に、長身の人影が現れたのである。その登場を祝福するかのように、見えなくなっていた満月が天空に出現した。火事のときに起こる暴風を受けながら、紅蓮の炎を背にして、さらに人影が近づいて来る。金色に輝く長い髪が、風に煽られて舞いあがり、たてがみのように広がっていた。満月と炎によって昼間のごとく明るくなった大地を、その女はゆっくり進んで来る。

「あ、妖姫様」
真琴の呟きに、月影は信じられないという表情をした。
「まさか」
仕留めた御庭番の手から、素早く忍び刀を奪い取る。近づいて来るにつれて、異形の風貌があきらかになってきた。髪はまぎれもなく黄金色、なぜか両目を閉じていたが、足取りはしっかりしている。まるで見えているかのように、まっすぐ月影たちの方に歩いて来た。身長は六尺（約百八十センチ）ほどもあって、まとっている着物の丈は膝までしかない。
「仕留めそこねたか、もののけ姫」
月影は冷静に命令を発した。
「ゆけ」
菊之助とお春が走りかけたものの、突然、足を止めた。注ぎこまれていた精気が、いきなり失くなったように動かなくなる。
「な、ぜ？」
問いかけた月影も、反応が鈍くなっていた。手足がうまく動かないのだろうか。膝からくずれ落ちるように座りこむ。

七

「さすがは〈日和見法師〉、見事に騙されちまったよ」

妖姫は苦笑を滲ませて言った。

「真琴の言葉どおり、おまえはただの大法螺吹き、はったりのうまい妖術師もどきだよ。たまたま春のような暖かさになっているのを利用しただけのこと、上野寛永寺で怪異を起こして、明星天子が降臨するような雰囲気を造りあげた。三妖娘たちの霊力を奪い取ったのも、あたしに信じこませるためだったんだろ？　妖娘から霊力を奪い、〈陰陽封じ〉なる技を使うのは、さほどむずかしいことじゃない。お銀たちの力を月影に移して、おまえはひとり、忍び嗤っていたんだろうさ」

至近距離に近づいたが、まだ目は開けていない。月影や傀儡たちは凍りついたように動けなくなっているが、真琴は吉宗の近くに行き、この場を離れようという合図を送っている。傀儡のひとりがそれに気づいて、そろそろと忍び寄っていた。妖姫はさりげなく真琴の手にあった葵十手を、念で自分の手に引き寄せる。素知らぬ顔で淡々と続けた。

「春のような暖かさ、上野寛永寺での怪異、満月が消えたように信じこませるやり方は、暦や天気を読む〈日和見法師〉なればこそ、さすがと言うしかないね。素顔を曝して、名前を

名乗ったときに、あたしは術に陥とされていた。老忍が月影だと、思いこまされちまったんだ。迂闊だったよ。〈初音ノ法〉に与えられたもうひとつの異名が、月影だということをもっと考えるべきだった」

はぁっと気合いをこめて、葵十手を投じた。気取られないように吉宗の背後に迫ったお夏が、今まさに匕首を叩きつけようとしている。投げられた十手はお夏自身ではなく、地面を刺しつらぬいていた。満月の青白い光によって生み出される影、それを縫い留められた瞬間、硬直する。

「う……」

匕首を構えた姿で、お夏は彫像のように固まっていた。真琴が吉宗と小姓たちの背中を押したとき、それを待っていたように、前方に白い馬が出現する。白ネズミだった愛馬の亘が、もとの姿に戻ったのだろう。

「亘！」

吉宗が飛び乗り、「はいっ」と号令をかける。走り出した亘を、小姓たちが追いかけた。目を閉じていても妖姫には、逃げて行く将軍たちの姿が視えている。動けなくなったお夏の前に立った。

「おまえこそが月」

かっと両眼を見開いた。

「……」

お夏はその美しい蒼に、心を吸い寄せられる。澄みきった空の色であり、海の色でもあった。脳裏が空のような蒼に染まって、完全に呪縛されてしまう。右の腰のあたりに匕首を握りしめ、刺す姿勢になったまま固まっている。微動もできない。穏やかとも言える妖姫の声が響いていた。

「そして、老忍は影。おまえが人間で、月影を名乗った忍びは土人形。菊之助やお春と同じ土人形だったんだろ。天空で輝く月がおまえで、老忍は水に映る月の影。だから何度、刺されても平気だった。血も出なかった。妖娘たちの霊力を宿すことができたのは、土人形だったからさ。わざとらしく葵十手に刺されて、不死身性を示すとは、おまえも役者だねえ」

ひやりとした手で、お夏の頬を撫でる。囁き声で告げた。

「明星天子なんざ、降臨していないのさ。いや、降ろせるわけがない。おまえはただの人間なんだから」

後ろにさがると、菊之助とお春の土人形が前に出る。お夏はふたたび絶句した。声だけはどうにか出せるのだが、驚きのあまり喉で言葉が止まっている。

のっぺらぼうだった。

菊之助とお春には、目も鼻も口もない。土色の全身が、徐々に溶けくずれて、真実の姿を現し始めている。〈初音ノ法〉は薫りが移るように、その姿を土人形に移す術。顔を奪われた二人は、妖姫の目覚めによって、墓から甦ったのである。

「おまえも知っているように、女の方は室町二丁目の蠟燭問屋『辻屋』の御内儀だよ。御内儀そっくりの土人形を見かけた主と倉太郎さんが、墓を掘り返して大変な騒ぎになった。そりゃそうさね。死体には顔がなかったんだからさ」

乙葉と美弥のもとにいた贋の菊之助とお夏を、地中深く引きずりこもうとしたのはかれらだ。乙葉は御城の厩舎近くで、本物の『のっぺらぼう菊之助』に遭遇したため、腰を抜かさんばかりに驚いたのである。贋菊之助と贋御内儀は消え去ったが、二人の怨念は簡単には晴れない。

「顔を返しておくれ」

もごもごとこもった声で、御内儀が告げる。

「なにも見えぬし、喋れませぬ。これでは成仏できませぬ」

と、菊之助が雪のように冷たい両手をお夏の顔にあてた。

「う、あ……な、なぜ？」

震えながらも必死に、質問を発する。加納蒼生はあたしの術に陥ちていたはず、妖姫の霊

力も確かに消え失せていた。それなのに、どうして、現れたのか？

「いいとも、死出の旅路の土産話に教えてやるさ。あたしはね。術に陥ちたふりをしたんだよ。蒼生の姿のとき、半九郎様のことが心配で、この身が二つになればいいのにと思った。その強い想いを利用して、あたしは蒼生の肉体から離れたのさ」

二度、輝いた黄金の光。一度目は蒼生の肉体から離れたときの光輝であり、二度目は半九郎の顔を奪おうとした土人形に移ったときに輝いた光だった。

「ま、さか」

先刻の月影と、同じ言葉を呟いた。当の老忍は虚ろな目を宙に向け、まったく表情を失った顔で座りこんでいる。無造作に蹴りつけて倒したあと、妖姫は答えた。

「半九郎様のふりをして、おまえに従っていたのさ。敵を騙すには、まず自分からってね。蒼生は本当に知らなかった。だから、おまえも騙された。あたしの演技にね。房事の真似事をしながら、蒼生の肉体に移ったんだよ。で、そのあとは半九郎様の土人形を念で操っていた。ああ、そうそう、半九郎様は死んじゃいないよ。仮死状態になって、対馬藩邸の庭に埋もれている。蒼生に見つけられないようにするのに苦労したよ」

戦場と化していた馬場の上空には、霊力を取り戻したお銀が、銀色の竜になって飛びまわっている。雨を降らして、燃えあがる炎を消し止めていた。乙葉と美弥も加わり、火が広が

らないように、火柱をあげる休息所を倒している。消火されるのは時間の問題だろう。

「妖姫様」

吉宗を安全地帯に送り届けた真琴が戻って来た。跪き、妖姫と目を合わせないようにしている。

「土にお還り」

踵を返したとたん、菊之助と御内儀が、お夏の全身に泥を塗りたくり始めた。腐って骨が見えかけている手で、泥を掬いあげては、手足や太股、腹や首筋に泥を塗りこめる。お夏は悲痛な声で叫んだ。

「ま、待ってっ、な、なにを、あぐっ」

その口にも泥が詰めこまれる。二人の憎悪と怨念がこもった泥は、くっついたが最後、二度と離れない。丹念に顔に塗りつけ、両目を塞ぎ、最後に鼻を塞いだ。吉宗を突き刺そうとした姿で、お夏は土人形になる。

菊之助と御内儀の、つるりとした顔に、目鼻や口が戻った。それは妖術師が命を落とした証、二人の死人はようやく満足げな笑みを浮かべて、土中に吸いこまれていった。

土人形と化したお夏の亡骸も、少しずつ土中にもぐり、やがて、完全に姿を消す。

高田馬場に風が吹き荒れる。

妖姫――蒼生の乱れた心を示すような激しい風だった。

八

対馬藩の江戸家老と御留守居役の小菅玄蕃は、密貿易の責任を取って、みずから切腹。二人が独自に企てた犯行となって、藩主、及び、他の藩士にはお咎めなしの通告がなされた。これにて一件落着と相成ったのだが――。

「林大学頭はどうなるの。お咎めなしということなの」

十日後、深川八幡にお詣りした帰り道、蒼生は不満げに唇を尖らせた。今朝も冷えこみが強く、昼になっても気温はあまりあがっていない。凍えそうに寒くて、吐く息が白かった。

「そういうことでございましょうな。幕府大学頭として、それなりに貢献してまいりましたゆえ、密貿易ぐらいのことで、処罰はできますまい。それに、林家は知らぬ存ぜぬと答えるに決まっております。責任を取って二人が切腹、納得はできませぬが、仕方ありませぬ」

結局、対馬藩から〈妖堂〉に依頼された左甚五郎作の菩薩像については、真偽がわからないままだ。本当に盗まれたのか、あるいは嘘の依頼だったのか。蒼生は後者だと思っているが、複雑な気持ちだった。

「聞きたい相手は墓の下、あんたの言うとおり、仕方ないのかもしれないけど……密貿易の

品物は、香木だったとか。仏像に隠して、伽羅や白檀といった高価な香木を運びこんでいたらしいわね」

「はい。細川家などに売ったという記録もございましたが、ほとんどは右から左、闇の世界による売買だったようでございます。人参が思うように買い入れられなくなっておりますので、対馬藩も厳しいのでございましょう。まあ、気持ちはわからなくもありませぬが、密貿易は許せませぬ」

「おそらく、その香木を、玄蕃は月影に横流ししていたんだと思うわ。もしかすると、密貿易を嗅ぎつけられて、口止め料として渡したのかもしれない。それだけでは足りずに、月影は嘘の依頼をしろと言って、玄蕃を脅かした。いいように利用された挙げ句、切腹となったわけだから、可哀相と言えば可哀相かもしれないわねえ」

「可哀相な人間は他にもいるように思えまするが」

喉まで出かかっている言葉を、真琴は呑みこんだ。蒼生は不機嫌そうに目を投げる。

「なによ。言いたいことがあるなら言いなさいな」

「はあ、池田殿のことでございまする。本当にあれでよろしかったのでございますか。記憶を消す必要はなかったのではないかと、わたくしは……」

「いいのよ」

覆い被せるように言う。

「あたしなんかと付き合うと、また狙われちまうわ。もうたくさんなの。他人を巻きこむのはいやよ」

今回はどうにか助けられた。半九郎は仮死状態から無事、蘇生して、何事もなく右筆の役に就いている。対馬藩の内部はまだ落ち着いていないだろうが、これといった大きな変化はないはずだ。しかし、次はどうなるかわからない。巻きこんで、死なせてしまうかもしれない。蒼生はそれが怖かった。

「忘れればいいことよ。きっと、時間が解決してくれる」

深川八幡の庭に咲いていた寒椿の赤い花が、鮮やかに浮かんでいる。求婚するとき、半九郎が持って来た鉢植えの寒椿も、美しく花開いていた。開かぬままに終わった自分の恋、いや、見事に咲いたのだと思う。大輪になるはずだったのだが……そう、散るのが早かっただけの話だ。

「大丈夫、きっとすぐに忘れちまうわ」

言い聞かせるような言葉に、真琴はすぐさま異論を唱える。

「そうでございましょうか。時間が経っても、解決できぬことがあるのではないでしょうか。簡単には忘れられませぬ」

歩きながら、ついとそっぽを向いた。小耳に挟んだ話によると、愛する人を失ったことがあるらしい。死別か生別かわからないが、辛い想いを味わった経験者なのだ。

「そういえば」

暗くなった話を変えようと、蒼生は覚兵衛の噂話を口にする。

「覚兵衛は腰を痛めて、寝こんでいるそうね。仮病を使った罰だわ。あたしを騙すから、本当に寝こむようなはめになるのよ」

単なる食あたりだったのに、覚兵衛は嘘をついて、重病だと喧伝させた。死ぬかもしれないと思わせれば、蒼生が半九郎との祝言を早く行うかもしれないと考えたのだろう。真琴は頭を庇わずにいられない。

「罰があたるとは、少し言いすぎではございませぬか。加納様は上様のために、現役時代そのままの黒装束に身を包み、御庭番たちに加わっていたのでございまする。そのせいで、腰を痛めたのは、まあ、事実でございまするが」

「いい年をして無理をするからよ」

「蒼生様」

説教が始まりそうなのを感じて、またまた話を変える。

「理兵衛様たちご夫婦には、ひと足、早く春が訪れたらしいわね」

「は？」
「おめでたなんですって」
「えっ、本当でございますか。それはよろしゅうございました。縁を取り持って丸二年、これでますます夫婦円満となりましょう」
「そうね。慶びついでに、覚兵衛のところにも、お見舞いに……」
蒼生はどきりとして足を止めた。壽屋の前に池田半九郎が立っている。それとなく中の様子を窺うような素振りを見せていた。
どういうこと？　まさか、忘れていないとか？　いいえ、確かに記憶を消したはずよ。壽屋のことも、あたしのことも、覚えていないはずなのに……どうして？
「蒼生様」
どうなさいますか。と聞いた真琴を、手で制した。なにげない足取りで、壽屋に歩いて行く。ふと気づいて、半九郎が顔を向けた。
「あ」
小さな声が洩れる。蒼生の顔をじっと見つめ、なにか考えているような感じだった。覚えているわけではないと、その表情を見て安堵する。
「わたくしの家になにか御用でございますか」

白々しいと思いつつ、他人行儀に尋ねた。

「い、いえ、散歩がてら、ふらりと深川八幡にお詣りをしたのですが、咲いている寒椿を見たとたん、なぜか、足が勝手にこちらへ向いたのでござる。妙に懐かしい気持ちになり申した」

壽屋の佇まいを、しみじみ眺めている。間近に迫った横顔に、蒼生の胸はきゅんと熱くなった。そうですとも、半九郎様。貴方様は何度も、この家に来ているのです。記憶の隅に残っているのですね。妖姫の霊力をもってしても、貴方の想いを、完全に消すことはできなかった。

嬉しい。もう、それで充分です。

「ここは壽屋と申しまして、わたくしが主でございます。仲人かかを務めておりますので、もし、よろしければおいでくださいませ」

「それはどうもご丁寧なご挨拶を」

深々と頭をさげた半九郎に、蒼生も頭をさげる。では、と、何事もなかったように二人は別れた。

出会いと別れは仲人かかの常、あふれ出そうになる涙をこらえて、蒼生は肩越しにそっと振り返る。半九郎の後ろ姿を隠すように、真琴が肩を抱きかかえた。

「いかがでございますか、蒼生様。たまには飲みにまいりませぬか。流鏑馬が無事、終わったお祝いに、一献傾けましょうぞ」

「え、ええ、そうね。いいかもしれないわね」

さようなら、半九郎様。

愛しい男の姿が涙でかすんでいる。

思い出を胸に、蒼生はあらたな一歩を踏み出した。

あとがき

十手小町も三冊目となりました。キャラクターたちの持ち味が出てきて、面白さが増してきたと思いますが、単なる自己満足でありましょうか。そうでないことを祈るばかりです。

蒼生のおとっつぁん——吉宗公は、ご存じのように六尺（百八十センチ前後）の大男。それで蒼生が変化する妖姫も、父親譲りの身長になるわけですが、歴代の将軍たちの体格はどのようなものだったのでしょうか。

ある本によりますと、家康は百五十九センチ、江戸初期にしては、がっちりした立派な体格だったといえましょう。二代将軍の秀忠（ひでただ）は父親に似たのか、百六十センチと、やはり、比較的大柄だったようです。将軍たちの中で一番小柄だったのは、犬公方（いぬくぼう）と呼ばれた五代将軍綱吉（つなよし）。彼はなんと、百二十四センチしかなかったとか。こちらの数値は昭和三十年に行われたときの遺体調査や、大樹寺（だいじゅじ）（愛知県岡崎市）に祀（まつ）られた歴代将軍の身長を示す位牌から、割り出されているそうです。間違いだとは思えませんが、それにしても、百二十四センチと

は……現代の小学生並みではありませんか。小さい人だったんですねえ。ちょっと驚きですが、当時は吉宗のような大男こそ珍しかった時代。それほど目を引く体格ではなかったのかもしれません。

対する吉宗公は、家臣に囲まれていても、頭ひとつ分、飛び出していて、どこにいても目立ったとか。刺客にとっては、狙いやすい標的だったかもしれませんね（笑）。でも、準備万端怠りなく御庭番を配していたお陰で、無事、将軍職をまっとうして隠居しました。ところが、そのとたん、脳梗塞のような病に罹ってしまったようです。やはり、人間というのは生涯現役が理想なんでしょう。隠退してほっと気を抜いたのがいけなかったのかもしれません。足もともおぼつかない状態になってしまったのですが、介護する家臣たちの苦労が並大抵ではなかった由。三人がかりでも支えきれず、萎えた身体の吉宗公を、移動させるだけで大騒ぎだったそうです。文中に登場する加納久通こと通称覚兵衛は、実在の人物なのですが、吉宗が隠退後も当然のことながら、お側に付いていたらしいので、さぞかし大変だったことでしょう。御庭番のお頭というのは、隠退しても苦労が耐えない職務だったんですね。ご苦労さまです。

さて、虚実入り乱れての十手小町シリーズ。

次はどのような騒ぎが起きますことやら、ご期待ください。

〈主な参考文献〉

「香道の歴史事典」神保博行　柏書房
「香と茶の湯」太田清史　淡交社
「享保改革と社会変容（日本の時代史16）」大石学・編　吉川弘文館
「大江戸魔方陣」加門七海　河出書房新社
「対馬藩江戸家老」山本博文　講談社学術文庫
「陰陽五行思想からみた日本の祭」吉野裕子　人文書院
「年中行事を体験する（江戸東京歴史探検1）」東京都江戸東京博物館・監修
「日本秘教全書」藤巻一保　学習研究社
「幻想世界の住人たちⅢ（中国編）」篠田耕一　新紀元社
「江戸の性談　男は死ぬまで恋をする」氏家幹人　講談社



光文社文庫

文庫書下ろし／新感覚時代小説
ひよりみ法師　十手小町事件帳
著者　六道慧

2004年2月20日　初版1刷発行

発行者　八木沢一寿
印刷　萩原印刷
製本　関川製本

発行所　株式会社 光文社
〒112-8011　東京都文京区音羽1-16-6
電話（03）5395-8149　編集部
8114　販売部
8125　業務部
振替　00160-3-115347

© Kei Rikudō 2004
落丁本・乱丁本は業務部にご連絡くだされば、お取替えいたします。
ISBN4-334-73642-4　Printed in Japan

㊒本書の全部または一部を無断で複写複製（コピー）することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター（03-3401-2382）にご連絡ください。

お願い　光文社文庫をお読みになって、いかがでございましたか。「読後の感想」を編集部あてに、ぜひお送りください。

このほか光文社文庫では、どんな本をお読みになりましたか。これから、どういう本をご希望ですか。

どの本も、誤植がないようつとめていますが、もしお気づきの点がございましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえいただければ幸いです。

光文社文庫編集部

隠密目付疾る　宮城賢秀
伊豆惨殺剣　宮城賢秀
幕末水滸伝　三好徹
人形佐七捕物帳（新装版）　横溝正史
修羅裁き　吉田雄亮
夜叉裁き　吉田雄亮
おぼろ隠密記　六道慧
おぼろ隠密記　大奥騒乱ノ巻　六道慧
おぼろ隠密記　振袖御霊ノ巻　六道慧
おぼろ隠密記　夢歌舞伎ノ巻　六道慧
おぼろ隠密記　歌比丘尼ノ巻　六道慧
十手小町事件帳　六道慧
まろばし牡丹　六道慧
駆込寺蔭始末　隆慶一郎
風の呪殺陣　隆慶一郎
英米超短編ミステリー選　EQ編集部編
コラテラル・ダメージ　D&Pクリフィス脚本　岡山徹訳・著

殺人プログラミング　ディーン・R・クーンツ　中井京子訳
闇の眼　ディーン・R・クーンツ　松本みどり訳
闇の囁き　ディーン・R・クーンツ　柴田都志子訳
闇の殺戮　ディーン・R・クーンツ　大久保寛訳
ネコ好きに捧げるミステリー　ドロシー・L・セイヤーズほか
小説孫子の兵法（上・下）　鄭飛石　李石銀沢訳
小説三国志（全三巻）　鄭飛石　町田富男訳
密偵ファルコ　白銀の誓い　リンゼイ・デイヴィス　伊藤和子訳
密偵ファルコ　青銅の翳り　リンゼイ・デイヴィス　酒井邦秀訳
密偵ファルコ　錆色の女神　リンゼイ・デイヴィス　矢沢聖子訳
密偵ファルコ　鋼鉄の軍神　リンゼイ・デイヴィス　田代泰子訳
密偵ファルコ　海神の黄金　リンゼイ・デイヴィス　矢沢聖子訳
密偵ファルコ　砂漠の守護神　リンゼイ・デイヴィス　田代泰子訳
密偵ファルコ　新たな旅立ち　リンゼイ・デイヴィス　矢沢聖子訳
探偵稼業はやめられない　サラ・パレツキー他　山本やよい他訳
聖女の遺骨求む　エリス・ピーターズ　大出健訳
死体が多すぎる　エリス・ピーターズ　大出健訳

山田風太郎ミステリー傑作選 全10巻

1 眼中の悪魔 本格篇

2 十三角関係 名探偵篇

3 夜よりほかに聴くものもなし サスペンス篇

4 棺の中の悦楽 凄愴篇

5 戦艦陸奥 戦争篇

6 天国荘奇譚 ユーモア篇

7 男性週期律 セックス&ナンセンス篇

8 怪談部屋 怪奇篇

9 笑う肉仮面 少年篇

10 達磨峠の事件 補遺篇



光文社文庫

ミステリー文学資料館編 傑作群

幻の探偵雑誌シリーズ

1. 「ぷろふいる」傑作選
2. 「探偵趣味」傑作選
3. 「シュピオ」傑作選
4. 「探偵春秋」傑作選
5. 「探偵文藝」傑作選
6. 「猟奇」傑作選
7. 「新趣味」傑作選
8. 「探偵クラブ」傑作選
9. 「探偵」傑作選
10. 「新青年」傑作選

甦る推理雑誌シリーズ

1. 「ロック」傑作選
2. 「黒猫」傑作選
3. 「X（エックス）」傑作選
4. 「妖奇」傑作選
5. 「密室」傑作選
6. 「探偵実話」傑作選
7. 「探偵倶楽部」傑作選
8. 「エロティック・ミステリー」傑作選
9. 「別冊宝石」傑作選
10. 「宝石」傑作選

土屋隆夫コレクション 新装版

影の告発
危険な童話
天狗の面
針の誘い
天国は遠すぎる
赤の組曲
妻に捧げる犯罪
盲目の鴉
不安な産声

鮎川哲也コレクション 鬼貫警部事件簿

ペトロフ事件
人それを情死と呼ぶ
準急ながら
戌神（いぬがみ）はなにを見たか
黒いトランク
死びとの座
鍵孔のない扉 新装版
王を探せ
偽りの墳墓
沈黙の函（はこ） 新装版

ISBN978-4-334-73642-2

C0193 ¥590E





定価（本体590円＋税）

ひよりみ法師　十手小町事件帳　**六道慧**

浮気調査を依頼された〈壽屋〉の蒼生。それを邪魔するように現れた老忍者は、大胆にも素顔と名前を明かして宣戦布告した。彼の真意は何か？　そして、御城の家臣たちを次々に襲う不気味な突然死。五種類の薫りを操る〈日和見法師〉とは、三仏の力を持つ明星天子とは何者なのか？　葵十手に迫る危険な罠。艶やかな薫りに彩られて、華麗な技が炸裂する！